

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 15 年度 (2003年度)

平成 16年 (2004年) 3月

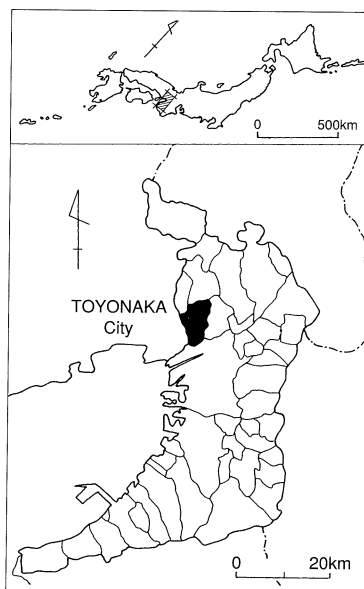
豊中市教育委員会

『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成15年度（2003年度）』 正誤表

ページ	行	誤	正
ii	10	第7章	第Ⅶ章
iii	8	2. 調査の概要	3. 調査の成果
iii	12	3. まとめ	4. まとめ
iii	23	(2) 検出した遺構と遺物	(2) 検出した遺構と出土遺物
iii	26	1. 調査の成果	1. 調査の経緯
iii	30	98	97
v	17	(1:25)	(1:40)
v	24	柱穴列12	柱穴列2
v	31	(1:20)	(1:40)
v	33	(1:20)	(1:40)
vi	17	(1:20)	(1:40)
vi	19	土坑1出土遺物	建物1・土坑1出土遺物
vi	42	トレンチ断面図	トレンチ平面・断面図
vii	23	トレンチ断面図	トレンチ平面・断面図
viii	15	(北から)	(南東から)
viii	22	(3) 土坑1-1断面	(3) 調査区南部遺構掘削状況
viii	23	(4) 調査区南部遺構掘削状況	(4) 土坑1-1断面
11	11	第2層4面上面出土遺物	第2層4面上層包含層出土遺物
15	第12図	(35の下にある) 36	39
16	第13図	1区北部第3層上面 出土遺物	1区北部第3層上面包含層出土遺物
19	第16図	8	9
19	第16図	9	8
36	13	青磁椀	青磁碗
43	17	青磁椀	青磁碗
47	第50図	1	29
47	第50図	2	30
47	第50図	3	31
47	第50図	4	32
47	第50図	5	33
50	第54図	柱穴列12	柱穴列2
65	28	S P - 334	S P - 423
71	5	青磁椀	青磁碗
71	第77図	26	28
71	第77図	27	29
71	第77図	28	30
71	第77図	29	31
71	第77図	30	32
71	第77図	31	33
71	第77図	32	34
71	第77図	33	35
89	1	新免遺跡第57次調査の概要	新免遺跡第57次調査

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 15 年度 (2003年度)



平成 16 年 (2004年) 3 月

豊中市教育委員会

序 文

西部では兵庫県との県境を流れる猪名川、そして南部の古大阪湾からもたらされる豊かな水資源と、北方の千里丘陵に広大な森林資源をひかえた豊中市では、古くから人々の生活の場が生まれ、多くの歴史的遺産が受け継がれてきました。一方、都心部に近く、早くから近郊のベッドタウンとしての開発が進み、埋蔵文化財の保護を緊急に進める必要がありました。しかし、近年、大規模開発がやや減少したものの、逆に個人住宅の建築など小規模開発が急増し、埋蔵文化財の保護について従来とは異なる意味で、より迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国ならびに大阪府の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。本書は、平成15年度に調査を実施した新免遺跡、本町遺跡、および各遺跡における確認調査に加え、平成14年度後期に調査を実施した庄本遺跡、新免遺跡および各遺跡における確認調査の成果の一部も合わせて掲載しました。庄本遺跡では神崎川河口域においてはじめて中世集落を確認し、近世に至るまでの豊中最南端の港湾集落の実態に新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来づくりに役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、工事関係者、近隣の住民の皆様には、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げる次第です。

平成16年(2004年)3月31日

豊中市教育委員会
教育長 浅利 敬一郎

例 言

1. 本書は、平成15年度国庫補助事業（総額8,500,000円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また、平成14年度国庫補助事業として実施した庄本遺跡第1次調査、新免遺跡第56～57次調査の成果を併せて収録するものである。
2. 平成15年度事業として、平成15年4月11日から平成16年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会地域教育振興課文化財保護係が実施した。詳細は下表に掲げるとおりである。
4. 本書の作成にあたり、各章の執筆は各調査担当者が実施した。また、第Ⅶ章は各調査担当者の見解をもとに、浅田尚子が執筆した。なお、全体の編集を清水が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N. は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、略北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。
7. 挿図に掲載した出土遺物の縮尺は原則的に1：4とする。
8. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただいた。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成14年度（平成14年10月以降）発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
庄本遺跡	第1次	庄本町3丁目163-1他6筆	400m ²	橘田正徳	2002年10月15日 ～12月18日
新免遺跡	第56次	玉井町2丁目6・7・8	164m ²	清水 篤	2002年12月24日 ～2003年2月28日
新免遺跡	第57次	玉井町3丁目13-1	16.5m ²	橘田正徳	2003年3月25日 ～2003年4月4日

平成15年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	第58次	末広町1丁目73	107m ²	陣内高志	2003年5月26日 ～6月6日
本町遺跡	第28次	本町3丁目170の一部	40m ²	清水 篤	2003年9月16日 ～10月10日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(清水)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 庄本遺跡第1次調査	(橘田)
1. 調査の経緯	5
2. 遺跡の環境と性格	6
3. 調査の概要	
(1) 調査区内の微地形と基本層序	7
(2) 1区の調査	25
(3) 2区の調査	68
4. まとめ	80
第Ⅲ章 新免遺跡第56次調査	(清水)
1. 調査の経緯	83
2. 調査の成果	
(1) 地質環境	83
(2) 検出した遺構と遺物	84
3. まとめ	88
第Ⅳ章 新免遺跡第57次調査	(橘田)
1. 調査の経緯	89
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	89
(2) 検出した遺構と遺物	90
3. まとめ	94
第Ⅴ章 新免遺跡第58次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	95
2. 調査の概要	
(1) 基本層序	95
(2) 検出した遺構と遺物	97
3. まとめ	97
第Ⅵ章 本町遺跡第28次調査	(清水)
1. 調査の経緯	99
2. 調査の成果	
(1) 基本層序	99

(2) 検出した遺構	100
3. まとめ	100
第Ⅶ章 確認調査の成果	101

挿 図 ・ 表 目 次

(第Ⅰ章)	
第1図	市内遺跡分布図 (1:50,000)2
第2図	調査地点と周辺の地形 (1:50,000)4
(第Ⅱ章)	
第3図	調査範囲図 (1:400)5
第4図	調査地位置図 (1:5,000)5
第5図	調査区基本層序模式図 (1/40:1/60)7
第6図	1区北部第1層出土遺物 (1:3)8
第7図	1区北部第2層2～3面上層包含層 出土遺物8 (1～11 1:3、12・13 1:4、14・15 1:2)
第8図	調査区平面・断面図 (1:100)9・10
第9図	1区第2層4面上層包含層 出土遺物11 (1～6 1:3、7・8 1:4)
第10図	1区南部第2層5面 出土遺物12 (1～6 1:3、10 1:4、11 1:2)
第11図	1区第2層 出土遺物1 (1:3)14
第12図	1区第2層 出土遺物215 (27～34 1:2、35～45 1:4)
第13図	1区北部第3層上面包含層出土遺物 (1:3)16
第14図	1区北部第3層 出土遺物16 (1～6 1:3、7・8 1:4)
第15図	1区南部第4層直上(第38層)出土遺物 (1:3)17
第16図	2区第1-1層 出土遺物19 (1～10 1:3、11～16 1:4、17 1:2)
第17図	2区第1-2層 出土遺物 (1～12 1:3、13～19 1:4)20
第18図	2区第1-3層 出土遺物 (1～6 1:3、7・8 1:4)21
第19図	2区第2層 出土遺物23 (1～13 1:3、14～20 1:4、22・23 1:2)
第20図	2区第3層 出土遺物 (1～12 1:3、13～18 1:4)24
第21図	2区第3層下層 出土遺物 (1:3)25
第22図	建物1平面図 (1:40)26
第23図	建物群1 建物出土遺物26 (1～4・6～9 1:3、5・10 1:4) 1・2:建物2 3～5:建物7 6～8:建物8 9:柱穴列1 10:建物4
第24図	建物2平面図 (1:50)27
第25図	建物3平面図 (1:50)27
第26図	建物4・5平面図 (1:40)28
第27図	建物6・8平面図 (1:50)29
第28図	建物7平面図 (1:50)30
第29図	建物9・柱穴列1平面図 (1:50)30
第30図	井戸1 出土遺物 (1～7 1:3、8 1:4)31

第31図	井戸1平面・断面図 (1:25)	32
第32図	土器集積遺構遺物出土状況 (1:20)	33
第33図	土器集積遺構 出土遺物1 (1:3)	34
第34図	土器集積遺構 出土遺物2 (37~42 1:2、43~50 1:4)	35
第35図	土坑1平面・断面図 (1:20)	36
第36図	土坑1 出土遺物 (1~8 1:3、9~11 1:4)	37
第37図	土坑2平面・断面図 (1:20)	38
第38図	土坑2 出土遺物 (1:3)	38
第39図	土坑3平面・断面図 (1:20)	39
第40図	土坑3 出土遺物 (1~9 1:3、10・11 1:4)	39
第41図	土坑4・5・15平面・断面図 (1:40)	40
第42図	土坑4 出土遺物1 (1:3)	41
第43図	土坑4 出土遺物2 (1:4)	42
第44図	土坑5 出土遺物 (1~5 1:3、6 1:2、7 1:4)	43
第45図	土坑6遺物出土状況 (1:10)	43
第46図	土坑6 出土遺物 (1:3)	44
第47図	土坑7平面・断面図 (1:40)	44
第48図	土坑7遺物出土状況 (1:20)	45
第49図	土坑7 出土遺物1 (1~25 1:3、26~28 1:2)	46
第50図	土坑7 出土遺物2 (1:4)	47
第51図	土坑15 出土遺物 (1~6 1:3、7 1:4)	48
第52図	建物11平面図 (1:50)	49
第53図	建物12平面図 (1:50)	49
第54図	柱穴列12 出土遺物 (1:3)	50
第55図	井戸2平面・断面図 (1:25)	50
第56図	井戸2 出土遺物 (1~20 1:3、21・22 1:4)	51
第57図	土坑8・9平面図 (1:20)	52
第58図	土坑8 出土遺物 (1~21 1:3、22・23 1:4)	53
第59図	土坑10平面・断面図 (1:20)	54
第60図	土坑10出土遺物 (1:3)	54
第61図	土坑11平面・断面図 (1:40)	55
第62図	土坑11 出土遺物 (1~7 1:3、8~10 1:4)	55
第63図	区画溝1・2平面・断面図 (1:40)	56
第64図	区画溝1遺物出土状況 (1:25)	56
第65図	区画溝1 出土遺物 (1:3)	57
第66図	区画溝2西 出土遺物 (1:3)	59
第67図	区画溝2東 出土遺物 (1~10 1:3、11 1:4)	60
第68図	区画溝3遺物出土状況 (1:20)	61
第69図	区画溝3 出土遺物1 (1:3)	62
第70図	区画溝3 出土遺物2 (1:4)	63
第71図	そのほかの土坑 出土遺物 (1~7 1:3、8・9 1:2)	64
第72図	そのほかの柱穴 出土遺物1 (1:3)	66
第73図	そのほかの柱穴 出土遺物2 (33~38 1:3、39 1:2、40~48 1:4)	67
第74図	水路1東壁面断面図 (1:50)	68
第75図	水路1上~中層 出土遺物1 (1:3)	69
第76図	水路1上~中層 出土遺物2 (1:4)	70
第77図	水路1上~中層 出土遺物3 (1:4)	71
第78図	水路1最下層 出土遺物1 (1:3)	73
第79図	水路1最下層 出土遺物2 (23~32 1:4、33・34 1:2)	74
第80図	水路2・4平面・断面図 (1:50)	75

第81図	水路2 出土遺物 (1~6 1:3、7~11 1:4)	76
第82図	水路3 平面断面図 (1:20)	77
第83図	水路3 出土遺物 (1~20 1:3、21~25 1:4)	78
第84図	水路4 出土遺物 (1~7 1:3、8・9 1:2)	79
(第III章)		
第85図	調査範囲図 (1:400)	83
第86図	調査地位置図 (1:5000)	83
第87図	竪穴住居 出土遺物 (1:4)	84
第88図	調査区平面・断面図 (1:60)	85・86
第89図	溝3 出土遺物 (1:4)	87
第90図	包含層・溝2 出土遺物 (1:4)	88
(第IV章)		
第91図	調査範囲図 (1:200)	89
第92図	調査地位置図 (1:5,000)	89
第93図	調査区平面・断面図 (1:50)	90
第94図	建物1 平面・立面図 (1:40)	91
第95図	土坑1 平面・断面図 (1:40)	92
第96図	そのほかの遺構出土遺物 (1:4)	92
第97図	建物1・土坑1 出土遺物 (1:4)	93
(第V章)		
第98図	調査範囲図 (1:300)	95
第99図	調査地位置図 (1:5,000)	95
第100図	調査区平面・断面図 (1:80)	96
第101図	新免古墳群位置図	98
第1表	新免古墳群 各古墳の概要	98
(第VI章)		
第102図	調査範囲図 (1:150)	99
第103図	調査地位置図 (1:5,000)	99
第104図	調査区平面・断面図 (1:60)	100
(第VII章)		
第2表	確認調査一覧	101
第105図	確認調査地点位置図 (1:50,000)	102
第106図	トレンチ掘削状況	103
第107図	トレンチ断面図	103
第108図	トレンチ掘削状況	103
第109図	トレンチ断面図	103
第110図	トレンチ掘削状況	103
第111図	トレンチ断面図	103
第112図	トレンチ掘削状況	103
第113図	トレンチ断面図	103
第114図	トレンチ掘削状況	104
第115図	トレンチ平面・断面図	104
第116図	トレンチ掘削状況	104
第117図	トレンチ断面図	104
第118図	トレンチ掘削状況	104
第119図	トレンチ断面図	104
第120図	トレンチ掘削状況	104
第121図	トレンチ断面図	104
第122図	トレンチ掘削状況	105
第123図	トレンチ断面図	105
第124図	トレンチ掘削状況	105

第125図	トレンチ断面図	105
第126図	トレンチ掘削状況	105
第127図	トレンチ断面図	105
第128図	トレンチ掘削状況	105
第129図	トレンチ断面図	105
第130図	トレンチ掘削状況	106
第131図	トレンチ断面図	106
第132図	トレンチ掘削状況	106
第133図	トレンチ断面図	106
第134図	トレンチ掘削状況	106
第135図	トレンチ断面図	106
第136図	トレンチ掘削状況	106
第137図	トレンチ断面図	106
第138図	トレンチ掘削状況	107
第139図	トレンチ断面図	107
第140図	トレンチ掘削状況	107
第141図	トレンチ断面図	107
第142図	トレンチ掘削状況	107
第143図	トレンチ断面図	107
第144図	トレンチ掘削状況	107
第145図	トレンチ断面図	107
第146図	トレンチ掘削状況	108
第147図	トレンチ平面・断面図	108
第148図	トレンチ掘削状況	108
第149図	トレンチ断面図	108
第150図	トレンチ掘削状況	108
第151図	トレンチ断面図	108
第152図	トレンチ掘削状況	108
第153図	トレンチ断面図	108

図 版 目 次

図版 1 庄本遺跡第 1 次調査

- (1) 1区全景(北から)
- (2) 井戸 1 断面
- (3) 井戸 2 断面
- (4) 区画溝 3 遺物出土状況
- (5) 区画溝 1 断面

図版 2 庄本遺跡第 1 次調査

- (1) 土坑 6 遺物出土状況
- (2) 土坑 10 断面
- (3) 土坑 8 遺物出土状況
- (4) 土坑 8 遺物出土状況(部分)

- 図版3 庄本遺跡第1次調査
(1) 土器集積遺構全景
(2) 土器集積遺構(部分)
- 図版4 庄本遺跡第1次調査
(1) 2区全景(南から)
(2) 水路2断面
- 図版5 庄本遺跡第1次調査
(1) 水路1全景
(2) 水路1断面
- 図版6 庄本遺跡第1次調査
(1) 水路3遺物出土状況
(2) 水路3全景
- 図版7 新免遺跡第56次調査
(1) 調査区西半部全景(南から)
(2) 調査区東半部全景(南東から)
- 図版8 新免遺跡第56次調査
(1) 調査区南壁断面(東半部)
(2) 竪穴住居6炉跡断面(東から)
- 図版9 新免遺跡第57次調査
(1) 調査区全景(北から)
(2) 調査区南部全景
(3) 調査区南部遺構掘削状況
(4) 土坑1-1断面
(5) 土坑1-3断面
- 図版10 新免遺跡第57次調査
(1) 建物1全景
(2) 柱穴1断面
(3) 柱穴2断面
- 図版11 新免遺跡第58次調査
(1) 遺構検出状況(南から)
(2) 溝1検出状況(北東から)
- 図版12 本町遺跡第28次調査
(1) 調査区北半部全景(南から)
(2) 調査区南半部全景(北から)

第I章 位置と環境

1. 地理的環境

豊中市は明治43年の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に、大都市近郊の農村から典型的な衛星住宅都市へと発展し、現在では約37km²の市域に約40万人もの市民が生活を営むベッドタウンとなっている。市域は地理的に大阪から西国・北国への玄関口として交通の要衝を占める位置にあり、古くは猪名川や千里川、天竺川など市域を南北に流れる河川や、南部の神崎川が瀬戸内海や淀川河口からの主たる交通路として利用されてきた。また、大坂天神橋を起点として市域を南北に貫く能勢街道（吉野嶺道）など、幹線道路としての陸路も縦横に配され、大阪国際空港や名神高速道路をはじめとする様々な交通機関が整備された現在の豊中市の原型をここに見出すことができる。

一方、都市化が進む過程で、鉄道や道路、河川に沿って開発が先行した結果、そうした場所から徐々に旧地形が損なわれ、最終的には市域全体に及ぶ開削と埋立によって外見上の地形変化が均されていった。しかしながら、市域で最も標高の高い島熊山付近は海拔100m以上を測り、最も低い大島町付近では海拔1m以下となっていることからわかるように、北から南へあるいは東から西へと傾斜する地形変化を現在でもよく観察することができる。このような地形変化は、巨視的に見れば、箕面以北の丹波山地から断層帯による地溝状の低地をはさみ、その南に広がる千里・刀根山などの丘陵地帯（高～中位段丘）、丘陵に連なる平坦な台地と斜面（中～低位段丘）、そして猪名川の氾濫原、大阪平野へと続く沖積低地に区分される。千里丘陵は大阪層群の模式地として詳細な地質調査がなされ、層群中のMa8（海成粘土層）直下からマチカネワニの全身骨格が出土したことで著名である。

人類の生活痕跡が見出されるのは主として段丘堆積層上であり、千里川上流域の中～低位段丘、台地上に多くの遺跡が分布している。乾燥した台地上から湿潤な沖積低地に本格的に進出するのは弥生終末期以降で、猪名川や天竺川などによって形成された自然堤防上をその生活域とし、河川の埋積作用によって海岸線が後退するにつれてその活動領域を南方へ拡大させていった。やがて古大阪湾が完全に陸化すると、猪名川河口の発達したデルタや複雑に流路が交錯した神崎川河口付近は、中・近世段階の水上交通の要衝として盛んに利用されるようになる。

2. 歴史的環境

今回、第II章で報告する庄本遺跡は、猪名川河口デルタの左翼側で神崎川と接する部分の砂堆上に立地し、第III～VI章の新免・本町遺跡は、千里川左岸の中～低位段丘上に立地する。ここでは、各々の立地する環境・時期に限定して、集落の動向を中心に述べていく。

新免・本町遺跡 勝部遺跡（猪名川・千里川水系）や小曾根遺跡（天竺川水系）などの低湿

2. 歴史的環境



- | | | | | | | |
|--------------|----------------|----------------|---------------|--------------|--------------|--------------|
| 1. 太鼓塚古墳群 | 12. 柴原遺跡 | 24. 熊野田遺跡 | 36. 岡町遺跡 | 47. 原田城跡(北城) | 58. 石蓮寺廃寺 | 70. 北条遺跡 |
| 2. 野畑春日町古墳群 | 13. 北刀根山遺跡 | 25. 金寺山廃寺 | 37. 岡町南遺跡 | 原田城跡(南城) | 59. 寺内遺跡 | 71. 小曾根南遺跡 |
| 3. 野畑遺跡 | 14. 桜井谷窪跡群 | 26. 新免宮山古墳群 | 38. 桜塚古墳群 | 48. 原田遺跡 | 60. 利倉北遺跡 | 72. 上総国飯野藩 |
| 4. 野畑春日町遺跡 | 15. 蛭池北(宮の前)遺跡 | 27. 金寺山廃寺塔刹柱礎石 | 39. 下原築跡群 | 49. 曾根遺跡 | 61. 利倉遺跡 | 保科氏浜陣屋跡 |
| 5. 少路遺跡 | 16. 蛭池東遺跡 | 28. 本町遺跡 | 40. 長興寺遺跡 | 50. 曾根東遺跡 | 62. 利倉南遺跡 | 73. 上津島川床遺跡 |
| 6. 武藏国岡部藩安部氏 | 17. 蛭池西遺跡 | 29. 新免遺跡 | 41. 梅塚古墳 | 51. 原田中町遺跡 | 63. 利倉西遺跡 | 74. 上津島遺跡 |
| 桜井谷陣屋跡 | 18. 蛭池遺跡 | 30. 箕輪東遺跡 | 42. 埴輪散布地 | 52. 曾根埴輪窯跡 | 64. 推堂の前遺跡 | 75. 上津島南遺跡 |
| 7. 桜井谷石器散布地 | 19. 麻田藩陣屋跡 | 31. 箕輪西遺跡 | 43. 大坂城鉄砲奉行支配 | 53. 豊島北遺跡 | 65. 服部西遺跡 | 76. 穂積ポンプ場遺跡 |
| 8. 羽鷹下池南遺跡 | 20. 南刀根山遺跡 | 32. 山ノ上遺跡 | 埴硝蔵跡 | 54. 曾根南遺跡 | 66. 穂積遺跡 | 77. 烏田遺跡 |
| 9. 待兼山古墳 | 21. 御神山古墳 | 33. 勝部北遺跡 | 44. 原田西遺跡 | 55. 城山遺跡 | 67. 穂積村囲堤 | 78. 庄内遺跡 |
| 10. 待兼山遺跡 | 22. 上野遺跡 | 34. 走井遺跡 | 45. 服部遺跡 | 56. 服部遺跡 | 68. 小曾根遺跡 | 79. 島江遺跡 |
| 11. 内田遺跡 | 23. 青池古墳 | 35. 岡町北遺跡 | 46. 勝部東遺跡 | 57. 若竹町遺跡 | 69. 春日大社南郷目代 | 80. 庄本遺跡 |
| | | | | | 今西氏屋敷 | |

第1図 市内遺跡分布図(1:50,000)

地に営まれた前期の拠点集落では、人口増加など集落が内包する課題を発展的に解消させるため、中期前半になると新たに段丘上へも進出をはかる。新免遺跡はその動向の中で発生した集落のうち、箕面川水系の蛍池北遺跡とともに中核的な存在であり、中期の中葉から後半段階に最盛期を迎えた集落である。現在までの調査において、中期段階では大形の円形住居を含む竪穴住居が15棟、方形周溝墓が15基検出されていて、墓域はほぼ2か所に集約されることも判明しつつある。ただし、埋没地形から見ても居住域との境界は不鮮明で、蛍池北遺跡同様に竪穴住居と方形周溝墓がいくつかまとまって群を構成していた可能性も現時点では否定できない。新免遺跡では後期まで集落の規模は維持され、周辺に山ノ上遺跡や本町遺跡などの分村が派生する一方で、庄内期から布留期にかけて、集落の規模は一旦衰退する。これは庄内期に勝部遺跡や小曾根遺跡は集落が再び活性化し、穂積遺跡、上津島川床遺跡などをはじめとする南部の低湿地で新たな大規模集落が発生すると同時期に見られる現象で、低湿地の乾燥化や河内潟沿岸地域を中心とした流通システムへの移行などがその原因と考えられる。古墳後期になると千里川上流に桜井谷窯跡群が形成され、その流通拠点として隣接する本町遺跡と同様、新免遺跡の集落は再び活性化する。当該期にはかなり大規模な開発が行なわれたようで、掘立柱建物やカマドを伴う方形竪穴住居が遺跡内の各所で検出され、同時に溝や土坑から夥しい焼成不良の須恵器が出土することから、集荷・選別・出荷の機能を果たしていたものと考えられる。

庄本遺跡 市内の中世段階の集落としては、段丘上では蛍池東遺跡、麻田藩陣屋跡、山ノ上遺跡、本町遺跡、新免遺跡などがあるが、その実態は明らかでない。平安後期以降、市内でも文献史上では撰関家領垂水西牧をはじめ、豊嶋庄、六車御稲田、椋橋庄などの荘園が知られ、実際に市内南部の低地部にあたる穂積遺跡、小曾根遺跡で確認された平安後期～室町時代の集落では、名主の屋敷跡など垂水西牧関連の遺構が確認されている。これらの遺跡群よりさらに南方、神崎川河口付近に立地する庄本遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったため、文献に登場する椋橋庄や椋橋城の推定地であったにもかかわらず、現在に至るまで考古学的な知見は得られていなかった。今回はじめて遺構の存在が確認され、椋橋庄の一部の状況が明らかにされたことは、周辺に点在したであろう河川交通・交易と密接な関係を持った中世集落の歴史を考える上で、非常に有意な資料となった。詳細は第II章の記述に委ねるが、今後、周辺での調査が進展すれば、尼崎市の大物遺跡などの港湾集落とはやや性格の異なる、市内最南部の河口域に位置する集落の中・近世における実態が明らかにされるであろう。

2. 歴史的環境



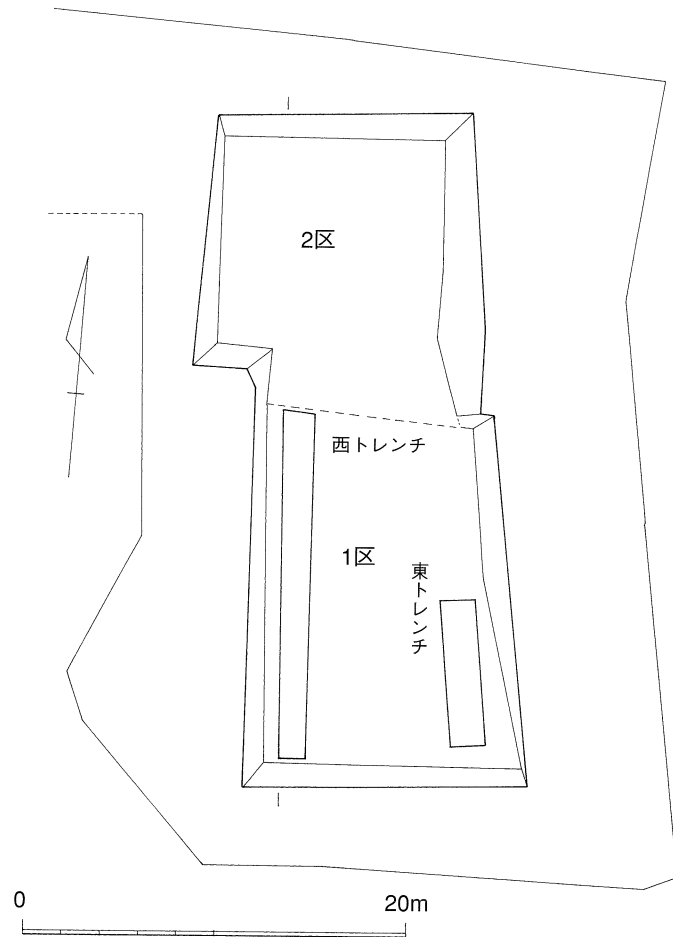
第2図 調査地点と周辺の地形 (1 : 50,000)

第Ⅱ章 庄本遺跡第1次調査

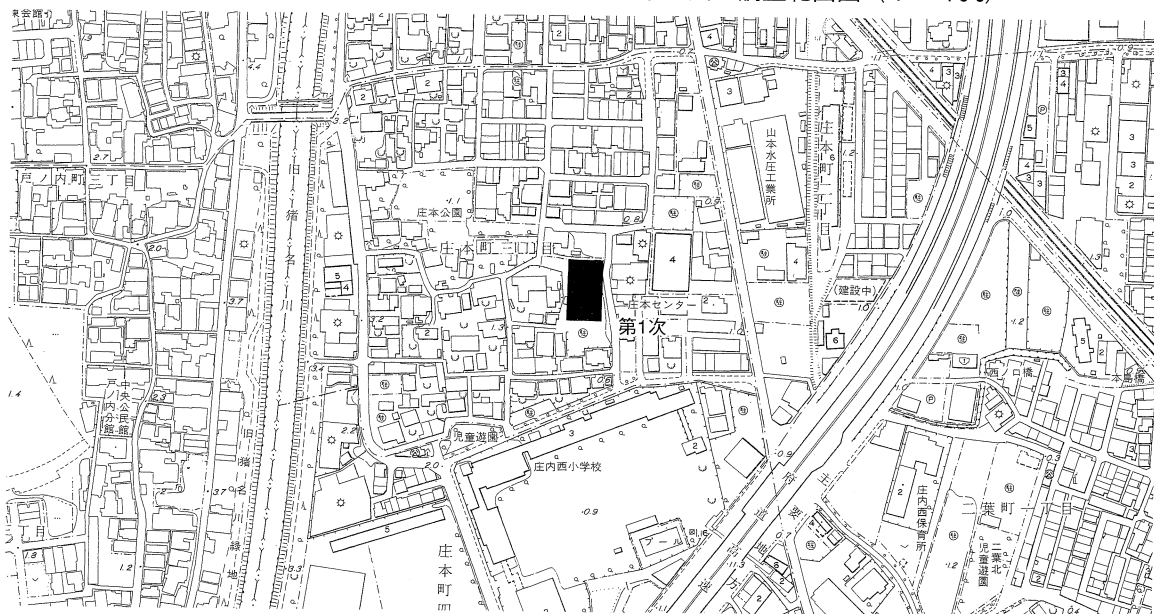
1. 調査の経緯

2002年10月4日、豊中市庄本町3丁目163-1他6筆において、私設老人ホームの建設に先立ち試掘調査を行ったところ、地表下130cmのところでも量の遺物を含む遺構および遺物包含層を検出し、鎌倉時代の集落跡と考えられる遺跡の存在が確認された。このため、施主・業者に急遽工事の延期と遺跡発見に関する手続きを申し入れ、10月7日に大阪府教育委員会へ遺跡発見の届け出が提出されたことを受けて、庄本遺跡として本調査を行うことになった。

調査は、平成14年（2002年）10月15日より400m²を対象に行い、12月18日に終了した。



第3図 調査範囲図（1：400）



第4図 調査地位置図（1：5,000）

2. 遺跡の環境と性格

庄本遺跡は、今回不時発見により周知された遺跡であり、その詳細は明確ではない。ここでは、立地環境や既存史料をもとに推定した遺跡の環境と性格について述べる。

遺跡は庄本町3・4丁目に所在し、(旧)猪名川と神崎川合流地点付近に位置する。集落の西側は、旧猪名川に接し、その対岸は兵庫県(旧河辺郡)となる。一方、庄本町東方には現在新豊島川として整備された水路が南へ流れている。このような河川の位置関係から、遺跡は猪名川・神崎川合流点付近に形成した砂堆上に立地することが考えられる。しかし、『撰陽群談』から新豊島川が猪名川あるいは天竺川の旧流路となる可能性が高く、また「庄本村地籍図」からは神崎川の旧流路や河川氾濫原も推定でき、地形の形成要因はかなり複雑であることが指摘できる。

一方、庄本集落の東側から洲到止村、島江村にかけては、(仮称)「庄本村絵図」などから、江戸時代以前は、内湖状の入り江や低湿地、微高地が複雑に入り組む環境が推定でき、十分な陸化が想定できる地域は、庄本・島江集落以北に限定される。

庄本については、地名が庄の中心を意味すること、また『撰津国大絵図』(1605年)では東椋橋村と表記されていることや椋橋神社から、(東)椋橋庄の中心部となる集落と予測されてきた。

その椋橋庄の初見は、『御堂関白高野山参詣記』(1048年)で、11世紀中頃までに撰関家の荘園となっていたことがわかる。また、藤原頼通が高野山へ参詣した際、椋橋庄から水夫30人が供出されたことから椋橋庄が水運に関わる荘園と想定された。

また『吾妻鏡』では、1219年に白拍子亀菊の要請により後鳥羽上皇が北条義時に対し、倉橋・長江両庄の地頭改補を要求し、その2年後にこの問題が発端となって、承久の乱が起ったとされている。事件の発端が椋橋庄にあった点において、瀬戸内流通の要衝で政治・軍事的にも重要な荘園として朝廷および鎌倉幕府に認識されていたことが指摘されてきた(三浦圭一『大阪府史第四巻』大阪府 1985)。なお、『承久記』から地頭を北条義時とするとの説もあり興味深い。

承久の乱とほぼ同じころの史料として、「蔵人所牒」『弁官補任紙背文書』(1223年)がある。同文書は散在檜物師との衝突を契機に檜物座の営業範囲を保証したもので、その内容から檜物座が椋橋庄に拠点をおき、摂津北西部および河内北部一帯で活動したことが考えられた。

さらに時代は下り、「放生会神訴目録」『石清水八幡宮文書』では石清水八幡宮の間職であった椋橋問丸高橋又次郎の存在が知られる。問丸の存在からも椋橋と港湾との関係が推定される。

以上の史料から、椋橋庄が商工業者の拠点、また水運と関わる荘園、さらに承久の乱の発端となるほど重要視された荘園と推測されたが、これらの推測を裏付ける関連史料はなく、実態は解明されずにいた。なお、当調査区は旧庄本集落の南部、字「秋永」東端部に位置し、その西方50mほどのところに、旧庄本南悪水路水門跡が存在する。水門跡の記念碑には水門周辺が、船溜まりとして機能し、その周囲で生鮮食料品などの売買が行われたことが記されている。調査をはじめにあたって、同碑文が当遺跡の性格の一端を知る手がかりとなったことを記しておきたい。

3. 調査の成果

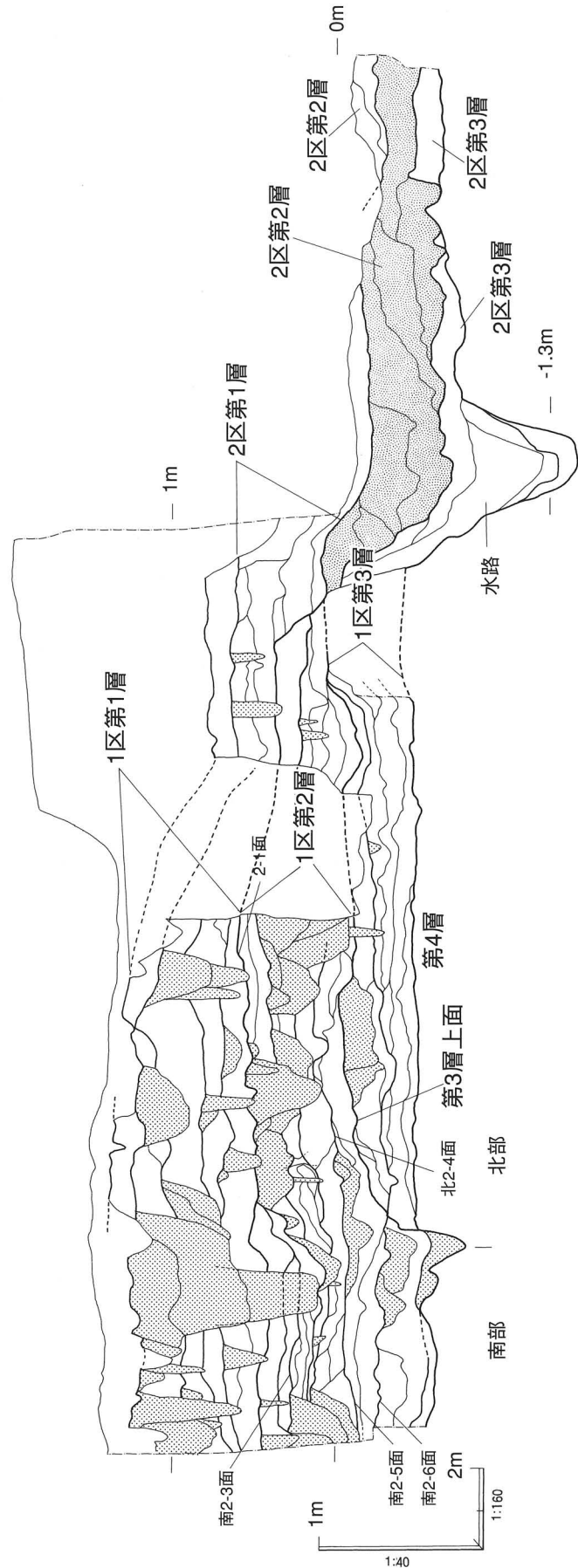
(1) 調査区内の微地形と基本層序

今回の調査では、1区で微高地上に立地する集落を、2区では入り江を検出した。これらは地形的に全く異なるものであり、各調査区の基本層も変化に富む。よって、ここでは1区と2区にわけて、基本層序の様相を述べる。

ア. 1区の基本層序

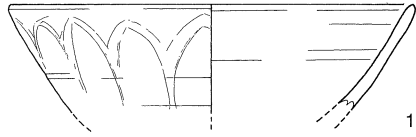
1区では、表土以下に黄褐色細粒砂を主体とする水成層（第1層）、褐色極細粒砂などを主体に多様な堆積土からなる第2層、主に灰白色粘土からなる第3層、灰色粗粒砂からなる第4層の順で堆積する。

第1層 概ね黄灰色細粒砂を主体とする堆積層で、鎌倉時代末期～江戸時代にかけて猪名川・神崎川の河川氾濫によって、断続的に堆積したものと考えられる。第1層内は4～5層程度に細分でき、各細分層の上には室町時代～江戸時代の各遺構が存在する。しかし、これらの遺構面については、壁面の土層観察から状況確認しただけにとどまる。また、調査後に各層から遺物を採取したが、すべて細片であったため、それぞれの時期を明確にできなかった。なお、第1層に帰属する可能性がある遺物として、第6図の龍泉窯系蓮弁文碗があげられる。碗の口径は16.0cm前後で、体部外面に蓮弁を彫り込む。15世紀以降と考えられる。

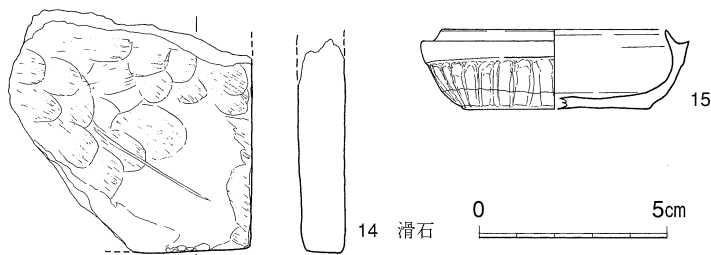
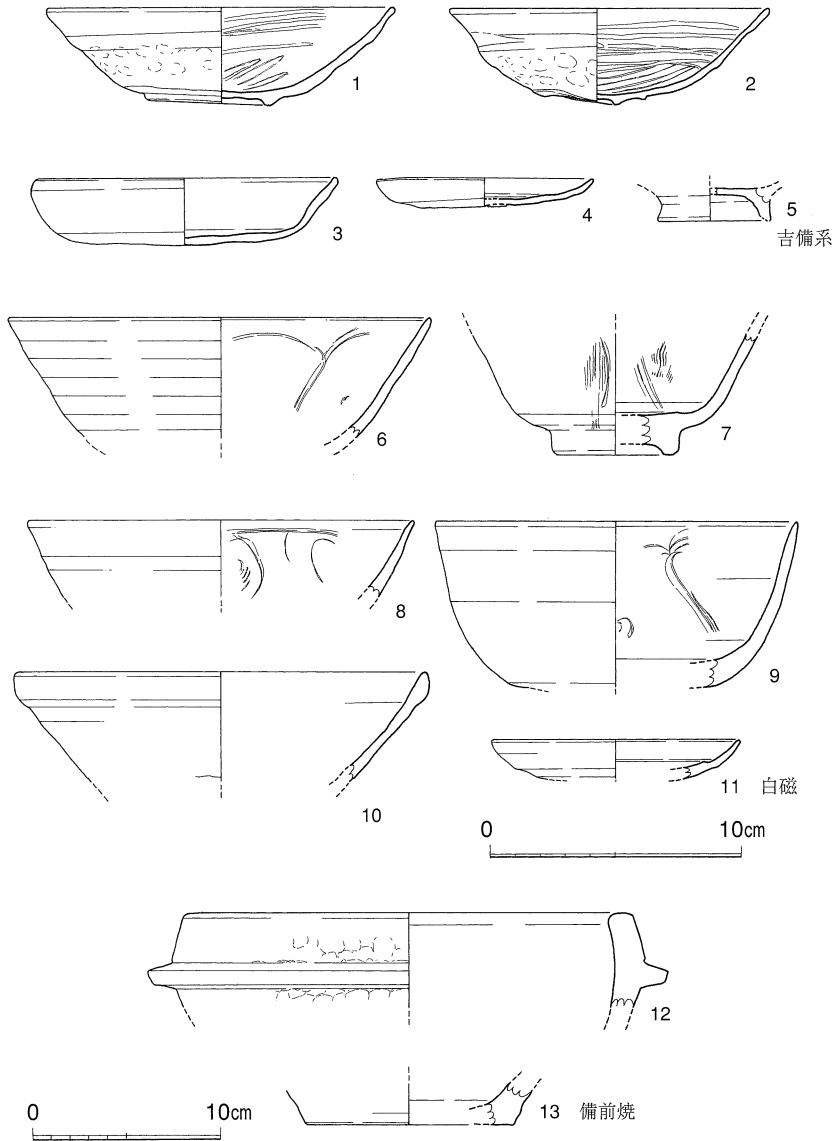


第5図 調査区基本層序模式図 (1/40: 1/160)

3. 調査の成果



第6図 1区北部第1層 出土遺物 (1:3)



第7図 1区北部第2層2～3面上層包含層 出土遺物
(1～11 1:3、12・13 1:4、14・15 1:2)

第2層 平安時代後期～鎌倉時代後期にかけて人工的な埋め立てや整地、複数回の洪水によって堆積したものと考えられる。さらに、この時期は遺跡が立地する微高地はまだ形成過程にあったらしく、第1区の南側は区画溝を境に北側より約30cmほど低くなっている。このため、区画溝を境に北側と南側では、堆積土の様相が異なる。また、段差付近は特に水成層の堆積が著しい上に、区画溝の掘削が断続的に行われており、調査段階で南北間における層位の対応できなかった。

なお第2層内において、北側で4面の遺構面を、南側で7面の遺構面を確認した。このうち、北部第2層2～3面直上(第7図)と4面直上(第9図)から多数の遺物が出土した。

第2層2～3面出土遺物

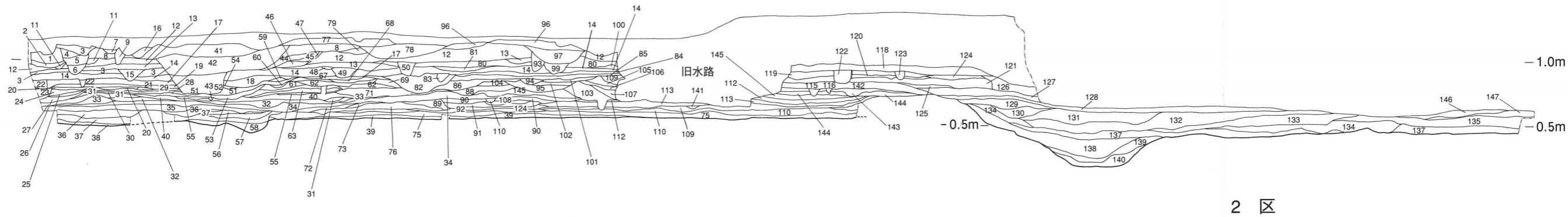
1・2は和泉型瓦器碗で、1は器高3.6～3.9cm、口径13.8～14.6cmをはかる。見込みに6条の平行線状暗文を施す。2は器高3.4～3.8cm、口径12.8～13.5cmをはかる。見込みに7条の平行線状暗文を施す。1は

1. 明黄褐色 (2.5Y5/6) 細～極細粒砂 近世耕作土ブロック少量含む。
2. にぶい黄褐色 (2.5Y6/4) 細～極細粒砂 同シルトブロック多く含む。
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細～細粒砂 耕作土・シルトブロックを含む。
4. 褐色 (10YR4/4) 細～極細粒砂 近世耕作土ブロックを含む。
5. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細粒砂 (耕作土)
6. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細～細粒砂 シルトブロックを含む。
7. 灰色 (5Y4/1) 極細～細粒砂 獣骨含む (ベット墓埋土)
8. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 (中粒砂を含む。)
9. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂
10. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細粒砂
11. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂
12. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト～細粒砂 灰色 (5Y4/1) シルトブロックを少量含む。
13. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細～極細粒砂 土器細片を極少量含む。
14. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細～細粒砂 礫～石を極少量含む。
15. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細～極細粒砂 同色シルトブロックを少量含む。土器片極少量含む。
16. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細～細粒砂 層下部にシルトブロックを少量含む。
17. 褐色 (10YR4/6) シルト～極細粒砂 土器小片を極少量含む。
18. 褐色 (10YR4/6) シルト～極細粒砂 土器片を含む。
19. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細粒砂 (中粒砂を含む。)
20. 明黄褐色 (10YR6/6) シルトに同色極細～細粒砂ブロックを含む。
21. 明黄褐色 (10YR6/6) シルトに同色極細～細粒砂ブロックを含む。
22. 黄褐色 (10YR5/6) シルト 23. 褐色 (10YR4/4) 細～極細粒砂

24. 褐色 (7.5YR4/1.5) 極細～細粒砂
25. 褐色 (7.5YR3.5/1) 極細～細粒砂 土器小片多く含む。
26. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト～細粒砂 土器大型片多く含む。
27. 褐色 (10YR4/1) シルト～細粒砂 (中粒砂を含む。)
28. 褐色 (7.5YR4/2) 細～中粒砂 土器片・炭を少量含む。
29. 褐色 (10YR4/1) 極細～細粒砂 土器片を含む。(遺物包含層)
30. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 土器小片・炭を少量含む。
31. 褐色 (10YR4/1) 細～極細粒砂 中粒砂を含む。
32. 褐色 (10YR5/1) 細～極細粒砂 土器大型片を少量含む。
33. 黒褐色 (10YR3/2) 細～極細粒砂 土器小片を少量含む。
34. 明黄褐色 (10YR7/4) 極細粒砂～灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂 灰白色 (10Y7/1) シルトブロックを含む。炭を極少量含む。
35. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 (細粒砂を含む。)
36. 灰黄色 (10YR6/2) 極細粒砂～シルト
37. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂 (シルト) 土器片・炭を多く含む。
38. 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂～シルト 土器小片を極少量含む。
39. 褐色 (10YR5/1) ～灰色 (N6/0) 粘土 層上部に粗粒砂層(薄層)が堆積する。
40. 褐色 (10YR4/1) 極細粒砂 細粒砂を含む。土器片を含む。
41. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂
42. 灰色 (N6/0) シルト～細粒砂 (粗粒砂を含む) 層中に瓦を多く含む。
43. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂 灰色 (N4/0) 粘土塊を多く含む。
44. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂 (中～粗粒砂を含む。)
45. 灰黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂

46. 褐色 (10YR4/4) 極細～細粒砂
47. 褐色 (10YR4/6) 極細～細粒砂 同色シルトブロックを少量含む。
48. 褐色 (10YR4/4) 細～極細粒砂 (中粒砂を含む。)
49. 褐色 (10YR4/4) 細～極細粒砂 (中粒砂を含む) 土器片を極少量含む
50. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 (中～粗粒砂を含む。)
51. 明黄褐色 (10YR6/6) 均質なシルト～粘土
52. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂 炭を少量含む。
53. 褐色 (10YR5/1) 極細粒砂に細粒砂を含む。遺構上部・下部に暗灰黄色 (10YR5/2) 均質な細粒砂が堆積する。
54. 褐色 (10YR4/6) シルト～極細粒砂 炭・土器片を含む。
55. 灰白色 (10YR7/1) 均質な極細粒砂
56. 褐色 (10YR6/1) 細～極細粒砂
57. 明オリブ灰色 (5GY7/1) シルト～極細粒砂 炭を含む。
58. 明オリブ黒色 (7.5Y3/2) シルト 灰色 (7.5Y5/1) 粘土ブロックを多く含む。土器大型片を多く含む。
59. 褐色 (10YR5/1) 極細粒砂 土器片・炭を少量含む。
60. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細粒砂 土器片・炭を含む。
61. 灰白色 (2.5Y7/1) 均質な細粒砂
62. 黄褐色 (2.5Y7/2) 均質な細粒砂
63. 灰黄色 (2.5Y6/1) 比較的均質な細～中粒砂
64. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細粒砂
65. 灰白色 (10YR7/1) 均質なシルト
66. 褐色 (10YR4/1～5/1) 極細粒砂 同色シルトブロックを少量含む。層中に灰白色 (10YR7/1) 中粒砂が層状に堆積する。
67. 褐色 (10YR5/1) 極細粒砂 同色シルトブロックを少量含む。
68. 灰白色 (10YR7/1) 均質なシルト
69. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト
70. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト～極細粒砂 (土埋埋土)
71. 黒色 (N2/0) 炭層 (中粒砂を含む。)
72. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂
73. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂
74. 灰白色 (5Y7/1) 粘土
75. 灰オリブ色 (7.5Y6/1) 粘土～シルト 土器細片を極少量含む。
76. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂～極細粒砂
77. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂 (耕作土)
78. にぶい黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 層下部に黄褐色 (10YR5/6) シルトが堆積する。
79. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂～シルト
80. 灰白色 (10YR7/1) 細～極細粒砂 土器小片を極少量含む。
81. 黄褐色 (10YR5/6) 中～細粒砂 土器片を含む。
82. 灰黄色 (2.5Y4/1) 細～極細粒砂 同色シルトブロックを多く含む。土器大型片を含む。
83. 黄褐色 (2.5Y4/1) 細～極細粒砂 炭を含む。
84. 灰黄色 (2.5Y4/1) 極細粒砂 土器大型片を多く含む。
85. 黄褐色 (2.5Y7/2) 均質な細粒砂 土器大型片・炭が層内の過半を占める。(土器集積遺構埋土)
86. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト～極細粒砂 土器片を含む。
87. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト～極細粒砂 土器片を多く含む。
88. 黄褐色 (2.5Y5/1) シルト～極細粒砂 土器片・炭を含む。
89. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂 土器小片片を含む。

90. 灰白色 (10YR8/2) シルト 炭を少量含む。
91. 黒褐色 (10YR3/1) 細～極細粒砂 シルトブロックを含む。土器小片を少量含む。
92. 明黄褐色 (2.5Y6/2) 極細粒砂～シルト
93. 黄褐色 (2.5Y4/1) 極細粒砂 炭・土器小片を極少量含む。
94. 灰黄色 (2.5Y4/1) 極細粒砂
95. 黄褐色 (2.5Y5/1) シルト～極細粒砂 炭・土器細片を少量含む。
96. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂
97. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細粒砂 層下部にシルトブロックを含む。炭を含む。
98. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂 シルトブロックを少量含む。炭を含む。
99. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂 (シルト含) 土器細片を少量含む。
100. 灰白色 (5Y7/1) 粘土～シルトブロック層
101. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細粒砂 炭・土器大型片を多く含む。
102. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細粒砂 土器片・炭を含む。
103. 褐色 (10YR5/1) 極細粒砂 炭・土器大型片を含む。
104. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細粒砂 (細粒砂を含む) 土器片を多く含む。
105. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 炭・土器大型片を多く含む。
106. 褐色 (10YR5/1) 極細粒砂 炭・土器大型片を多く含む。
107. 褐色 (10YR3/1) 極細粒砂 炭・土器片を少量含む。
108. にぶい黄褐色 (10YR7/3) 極細粒砂 同色シルトブロックを含む。
109. 灰白色 (N7/0) 極細粒砂 (シルト含) 土器小片を少量含む。
110. 灰色 (N6/0) シルト (極細粒砂を含む。)
111. 浅黄褐色 (10YR8/3) シルト
112. 灰オリブ色 (7.5Y5/2) 極細粒砂～シルト 炭を極少量含む。
113. 灰オリブ色 (7.5Y6/2) 極細粒砂 土器小片片を含む。
114. 灰白～灰色 (N7～6/0) 細～中粒砂
115. 灰オリブ色 (5Y5/3) 極細粒砂
116. 灰オリブ色 (5Y5/3) 極細粒砂 シルトブロックを少量含む。
117. 灰白色 (N7/0) 極細粒砂 同色シルトブロックを含む。
118. 褐色 (10YR4/1) 極細粒砂 (耕作土)
119. 灰色 (7.5Y6/1) 細～極細粒砂 土器小片を極少量含む。
120. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂 (シルトを含む。)
121. 青灰色 (10BG5/1) 細粒砂 土器小片・礫を極少量含む。
122. 灰色 (7.5Y6/1) 細粒砂 土器小片を少量含む。
123. 灰色 (7.5Y5/1) 細～極細粒砂
124. 灰色 (10Y5/1) 極細粒砂 (中粒砂を含む。)
125. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂 (シルト含む。)
126. 灰色 (5Y4/1) 極細粒砂 (耕作土)
127. 明オリブ灰色 (2.5GY7/1) 極細粒砂～シルト
128. 灰白色 (N7/0) 細～極細粒砂 著しく堅緻 (陸地化後の堆積土)
129. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂 同色シルトが南岸から下層方向に堆積する。(埋めて後の斜面堆積)
130. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト (ブロック?) 埋立時の踏込で不鮮明。
131. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂ブロック ブロック間に灰白色 (N7/0) シルトなどを含む。土器・陶磁器・植物遺体などを少量含む。
132. 灰白色 (N7/0) 細～極細粒砂 同色シルトブロックを少量含む。
133. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂ブロック ブロック間に灰白色 (N7/0) シルトなどを含む。土器・陶磁器・植物遺体などを少量含む。
134. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂ブロック ブロック間に灰白 (N7/0) シルトを含む。
135. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂ブロック ブロック間に灰白色 (N7/0) シルトなどを含む。土器・陶磁器・植物遺体などを少量含む。
136. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト 南岸から下層に向かい、灰白色 (N7/0) シルトブロックが層状に堆積する。(137層腐植土層に対応)
137. 暗オリブ色 (5Y4/2) シルト 一部に灰白色 (N7/0) シルトなど層状に堆積する。植物遺体・獣骨・土器・陶磁器片を少量含む。
138. 暗オリブ色 (5Y4/2) シルト 南岸から下層へ灰白色 (N7/0) シルトなどが層状に堆積する。植物遺体を含む。土器・陶磁器片を少量含む。
139. 暗オリブ色 (5Y4/2) シルト 植物遺体、および腐息状態にある貝化石を含む。土器・陶磁器片および瓦等の寺院関連遺物を多く含む。138層とは、水路西方の青灰色シルト層(洪水堆積)により区分される。
140. オリブ黒色 (5Y3/1) 細粒砂 土器片を含む。(鎌倉期の堆積で、138・139層とは明確に区分される。)
141. 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂 シルトブロックを少量含む。土器小片を極少量含む。
142. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂 (シルトを含む。)
143. オリブ色 (5Y4/1) 極細粒砂 (シルトを含む。)
144. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂～シルト
145. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂 礫を含む。
146. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂ブロック (埋めて立土)
147. 褐色 (10YR6/1) 極細粒砂 褐色 (10YR5/1) シルトが層状に堆積する。植物遺体・土器・陶磁器を含む。



1 区



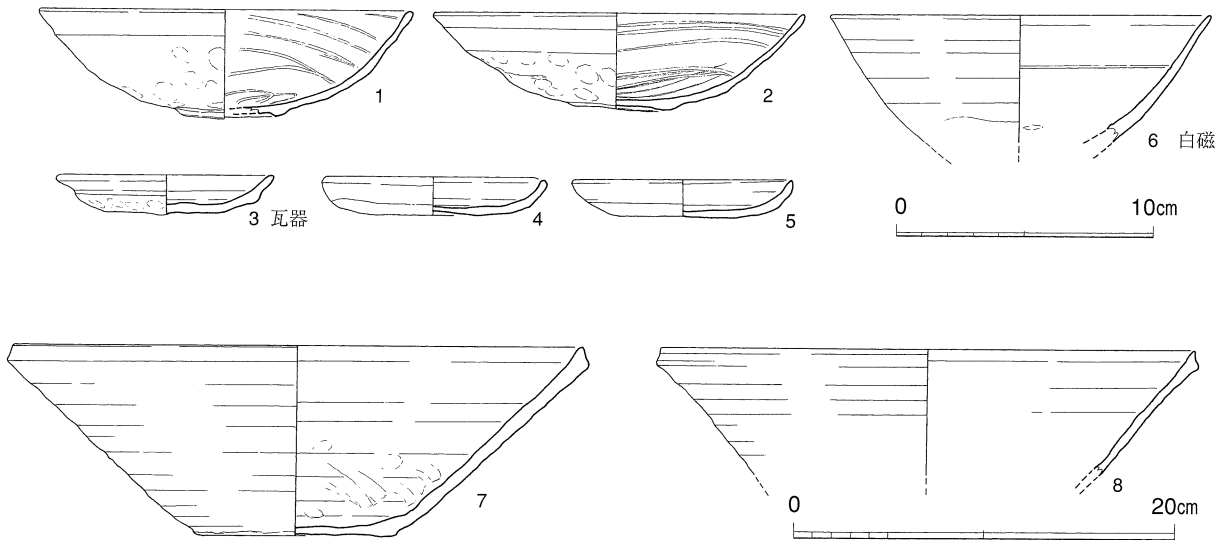
第8図 調査区平面・断面図 (1:100) -9・10-

Ⅲ-3期、2はⅣ-1期となる。3の土師器大皿は器高2.7cm、口径は12.0~12.8cmをはかる。口縁部をややつまみ上げ、面取りを行う。4の土師器小皿は器高1.2cm、口径8.7~8.8cmをはかる。口縁部を面取りにするが、やや明確ではない。5は吉備系土師器碗の高台で、高台径4.5cm前後をはかる。6~9は龍泉窯系劃花文碗である。7が高台径4.6cmほどの小型の碗になる以外は、一般的な製品である。10は白磁碗Ⅳ類で、口径は16.0cmをはかる。11は白磁小皿で器高1.55cm以上、口径9.8cm前後をはかる。12の石鍋は、口径23.8cm前後をはかる。破断部に2次加工痕および切断痕はみられない。13の備前焼壺は、底部径11.4cm前後をはかるが、細片のため底部径の復元には検討の余地を残す。14の石鍋再加工品は縦6.5cm、横6.5cm、厚さ1.3cmをはかる。板状に2次加工した破片であるが、未製品となるかは判断できない。15の青白磁合子身は器高2.1cm、口径6.0cmをはかる。

第2層4面上層包含層出土遺物 1・2は和泉型瓦器碗で、1は器高4.1~4.2cm、口径14.8cmをはかる。見込みに連結輪状暗文を施す。Ⅲ-2期である。2は器高3.8cm、口径14.6cmをはかる。見込みに5条ほどの平行線状暗文を施す。Ⅲ-3期である。3の瓦器小皿は器高1.6cm、口径8.4~8.6cmをはかる。見込みにはナデが施されるだけで、暗文などはみられない。4・5の土師器小皿は器高1.6cm前後、口径8.6cmをはかり、口縁部に面取りを行う。6の白磁碗は口径15.0cmをはかり、内面中位に沈線1条を施す。7・8は東播系須恵器こね鉢で、7は口径30.0cm、器高10.2cmをはかり、内面下部に板ナデを施す。8は口径28.0cm前後をはかる。内面に板ナデを施すが、摩耗しており明瞭ではない。

以上、2~3面直上出土遺物をみると、13世紀前半~中頃にかけて、また4面直上出土遺物は、13世紀初~前半と言える。また、第3層直上からは、第13図にあげるⅡ-3期の和泉型瓦器碗が出土しており、第4面の下限は和泉型Ⅲ-1期と判断できる。

一方、南部では第5面付近において第10図に掲載した遺物が出土している。



第9図 1区第2層4面上層包含層出土遺物 (1~6 1:3、7・8 1:4)

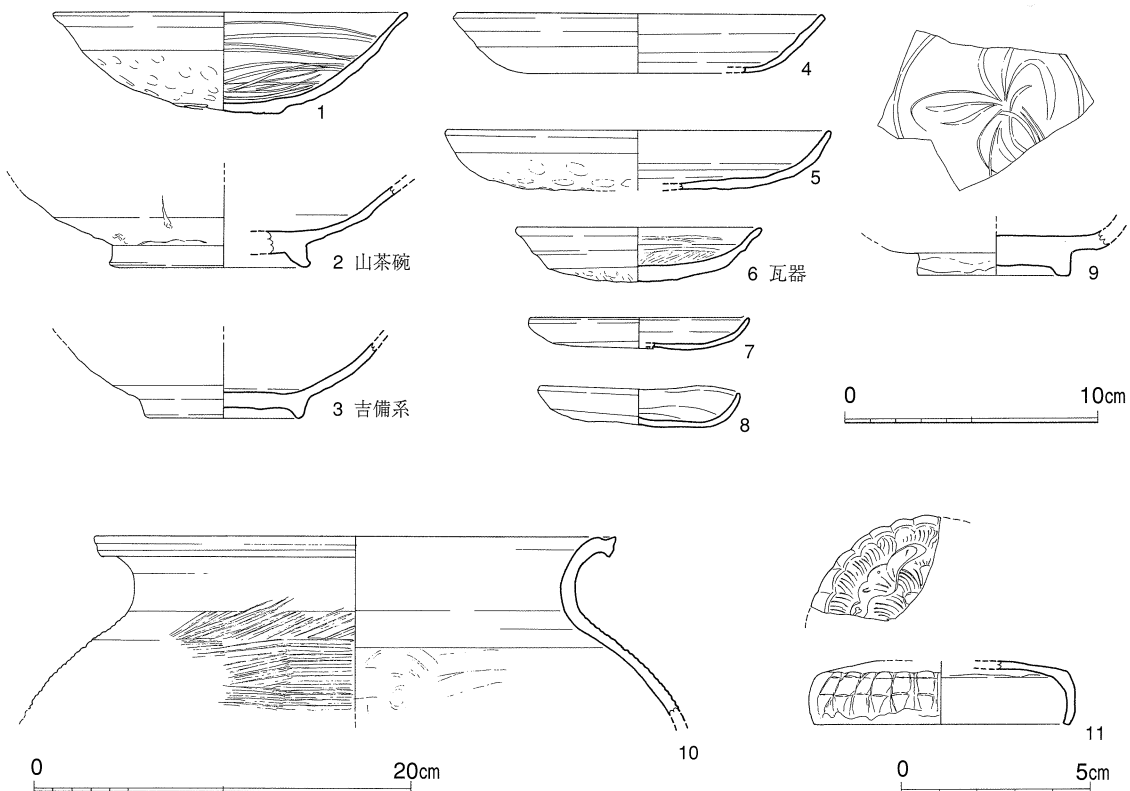
3. 調査の成果

南部第2層5面 出土遺物 1の和泉型瓦器碗は器高3.7~4.0cm、口径14.0cmをはかる。見込みに6条以上の平行線状暗文を施す。Ⅲ-3期である。2の山茶碗は残存高3.3cm、高台径6.1cmをはかる。尾張型3型式である。3の吉備系土師碗は残存高3.0cm、高台径6.1cmをはかる。4・5は土師器大皿である。このうち4は器高2.4cm、口径14.6cmをはかり、口縁部に2段ナデを施す。胎土が精良で器壁が薄いことから、京都産の可能性はある。5は器高2.4cm、口径15.4cmをはかり、口縁部には1段ナデを施す。6の瓦器小皿は器高2.2cm、口径9.6~9.8cmをはかる。見込みに平行線状のヘラミガキを施す。7・8は土師器小皿である。このうち7は器高1.3cm、口径8.4~8.8cmをはかる。8は器高1.4~1.7cm、口径8.0cmをはかる。ともに、口縁端部に面取りを行う。9は龍泉窯系劃花文碗の底部で、高台径6.1cm前後をはかる。見込みにヘラ状工具で施文する。10の東播系須恵器甕は口径27.6cmをはかる。外面にタタキ痕、内面には板ナデを施すが一部当て具痕の痕跡が残る。11は青白磁合子の蓋で器高1.7cm以上、口径7.0cm前後をはかる。

これら南部5面付近の出土遺物をみると、11世紀末以降に帰属する遺物などもあるが、最新の遺物として和泉型瓦器碗Ⅲ-3期が含まれることから、北部4面前後との対応が想定できる。

以上、これら出土遺物および堆積層の関係をみると、南部第2層第1・2面については北部第1・2面と、第5面は北部第4面に、南部第6面が北部第3層に対応することが想定できる。第2層の堆積時期は12世紀前半に遡らないは、3層上面の時期から言える。

なお、第2層からは遺構面精査時に多量の遺物が出土している。出土遺物のうち、特に遺跡の

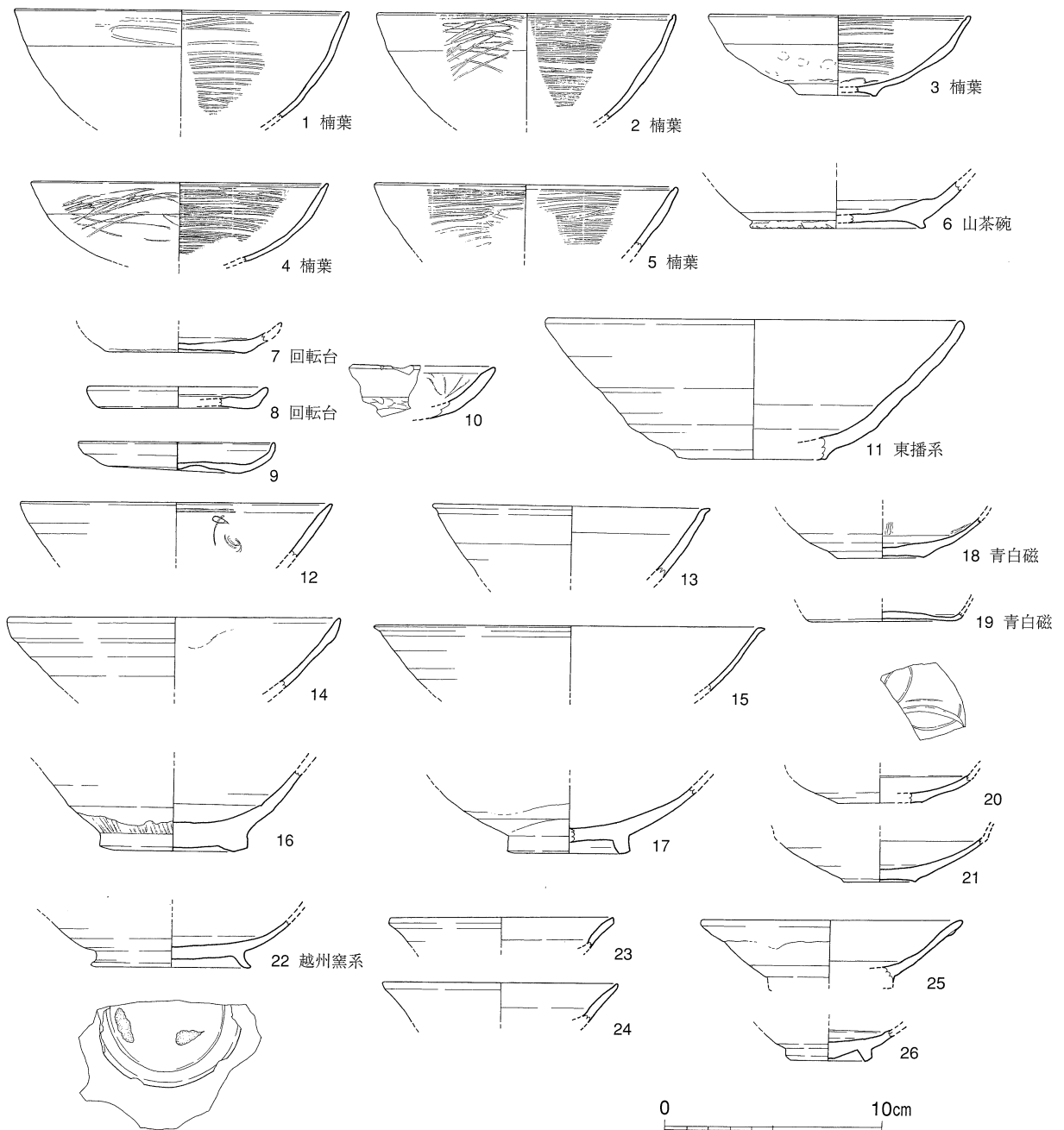


第10図 1区南部第2層5面 出土遺物 (1~6 1:3、10 1:4、11 1:2)

特徴を示すものについて、その一部を第11・12図に掲載した。

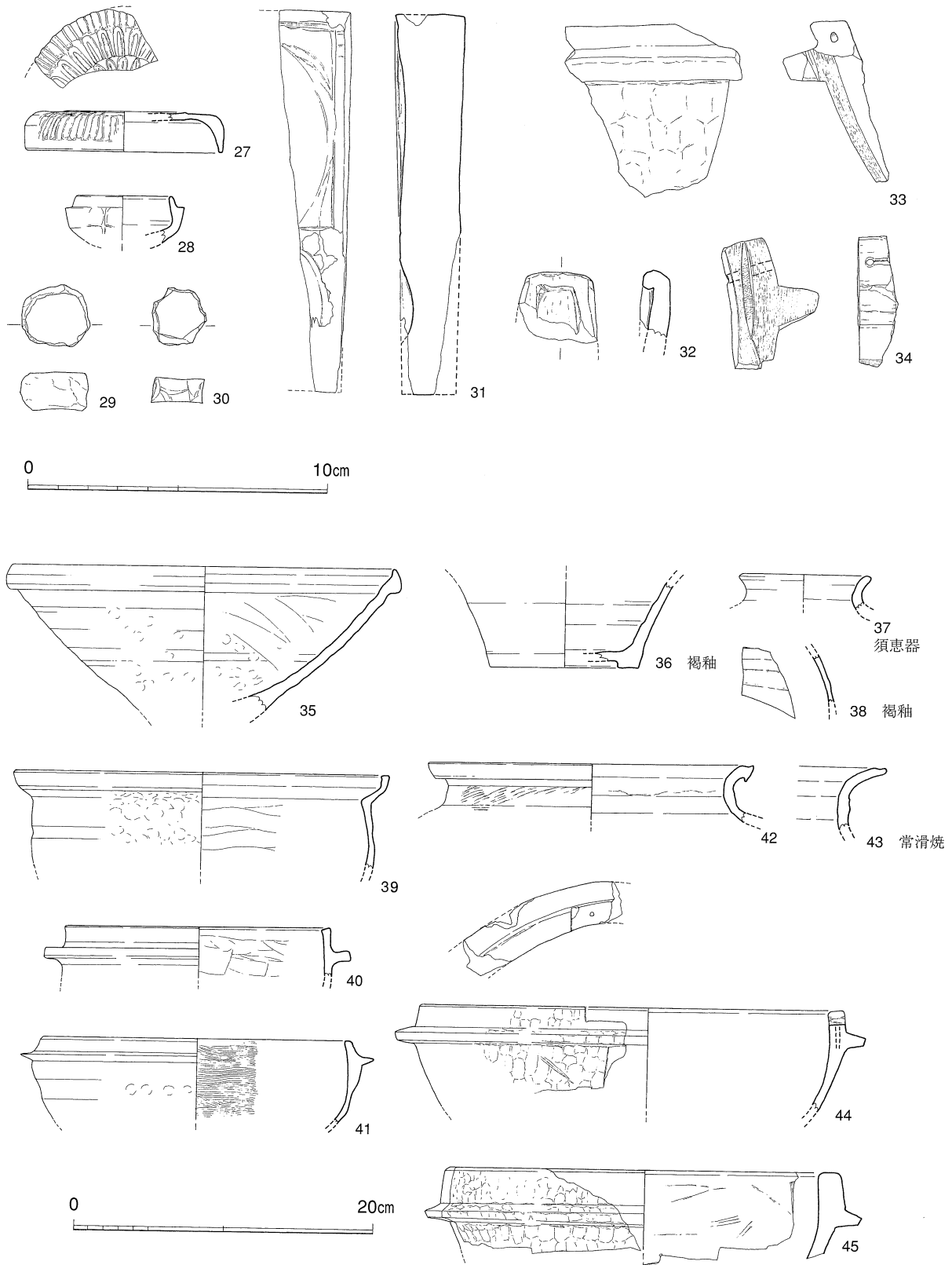
第2層 出土遺物 1～5は楠葉型瓦器碗である。1は器高5.0cm以上、口径15.0cm前後をはかる。2は器高4.9cm以上、口径は13.4cm前後をはかる。口径の復元には検討の余地を残す。3は器高3.6cm、口径13.0cm前後をはかる。口径の復元には検討の余地を残す。4は器高3.6cm以上、口径13.4cm前後、5は口径14.0cm前後をはかるが、口縁部がひずんでおり、口径の復元には検討の余地を残す。なお、1は口縁部付近だけに分割ヘラミガキが施され、内面のヘラミガキに隙間がみられることから、II-3期前後である。また2・4は体部外面上半にやや粗雑な分割ヘラミガキが、5は体部上半にやや密な分割ヘラミガキが施され、II-2期の所産と考えられる。一方、3は外面にミガキはなく、内面のミガキも隙間が大きく、III-3期と考えられる。6の山茶碗は器高2.2cm以上、高台径は8.0cm前後をはかる。VI～VII型式と考えられる。7・8は回転台土師器の小皿である。7は器高1.0cm以上、底部径6.4cm前後をはかる。8は器高1.0cm前後、口径9.2cm前後をはかる。ともに、底部に回転糸切り痕を有する。9の土師器小皿は器高1.4cm、口径9.0cmをはかる。口縁端部をつまみ上げるようにして、外側面を面取りする。10の土師器皿は器高2.4cm以上をはかる。残存部が限られ口径は復元できなかった。口縁部にはナデ、体部下半にミガキ状のケズリを施す。肥後方面からの搬入品の可能性がある。11は東播系須恵器の小型鉢で、器高6.4cm以上、口径18.2cm前後をはかる。内面は使用により摩耗している。12の龍泉窯系劃花文碗は口径14.2cm前後をはかる。口縁部はあまり残存していないため、復元にはやや疑問を残す。13の白磁碗は口径12.6cm前後をはかるが、復元にはやや疑問を残す。13は15とともに、口縁端部を外反させ、上面を水平にするもので、VまたはVIII類と言える。14の白磁IV類碗は、口径15.0cm前後をはかる。15は口径17.8cm前後をはかるが、復元には検討の余地を残す。16は白磁IV類碗の底部で、器高3.7cm以上、高台径6.8cm以上をはかる。17の白磁碗は、高台径5.5cm前後をはかる。18の青白磁皿は、底部径3.7cm前後をはかる。体部内面に白堆線がみられ、輪花状の口縁形態が推定できる。19の青白磁皿は、底部径6.4cm前後をはかる。見込みは指ナデ状の調整を行う。20の白磁VI類皿は、底部径3.8cm前後をはかる。21の白磁V類皿は底部径3.4cmをはかる。22は越州窯系青磁皿類の皿である。器高2.2cm以上、高台径7.0cmをはかる。内外面ともに全面を施釉し、高台内面には白色耐火土が2カ所付着する。当調査区における遺構の時期は12世紀以前に遡らないこと、また11世紀の遺物は極少量にとどまることから、同製品は伝世品の可能性がある。23・24は同安窯系青磁皿で、口径10.0cm前後をはかる。25・26は白磁III類皿である。25は器高2.9cm以上、口径12.0cm前後をはかる。26は高台径4.0cm前後をはかる。ともに、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。27は青白磁合子の蓋で器高1.3cm、口径6.4cm前後をはかる。28は青白磁合子の身で器高1.5cm以上、口径3.0cm前後をはかるが、口径の復元は検討の余地を残す。29・30は碟で、29は直径2.3cm前後、厚さ1.3cmを、30は直径1.7cm前後、厚さ0.9cmをはかる。共に、常滑焼の破片を母材とする。31の硯は長さ12.9cm以上、幅2.5cm以上、厚さ2.4cm前後をはかる。母材を板状に面取りし、平滑に仕上げた上製品である。32は滑石製の小型硯で、全長2.0cm以上、幅2.4cm前後をはかる。今回の報

3. 調査の成果



第11図 1区第2層 出土遺物1 (1:3)

告では硯として扱ったが、小型でしかも残存部が少ないことから、別の器種になる可能性も残る。33・34は石鍋2次加工品である。33は縦6.7cm、横6.0cmをはかり、口縁部の2カ所に穿孔を施す。34は長さ4.4cm、幅1.3cm、厚さ1.2cmをはかる。破断面に石鋸状の加工痕が確認できる。また、口縁部外面に穿孔が施される。いずれも未製品か、加工時の破片か、判断できない。35の東播系須恵器こね鉢は、口径26.0cm前後をはかる。体部内面に粗雑な板ナデが施される。36の褐釉陶器壺底部は、高台径10.0cmをはかり、中型品と考えられる。内外面とも丁寧なナデを施す。外面のほぼ全面に施釉されるが、被熱し白色化している。37は東播系須恵器の壺口縁と考えられる。口径



第12図 1区第2層 出土遺物2 (27~34 1:2、35~45 1:4)

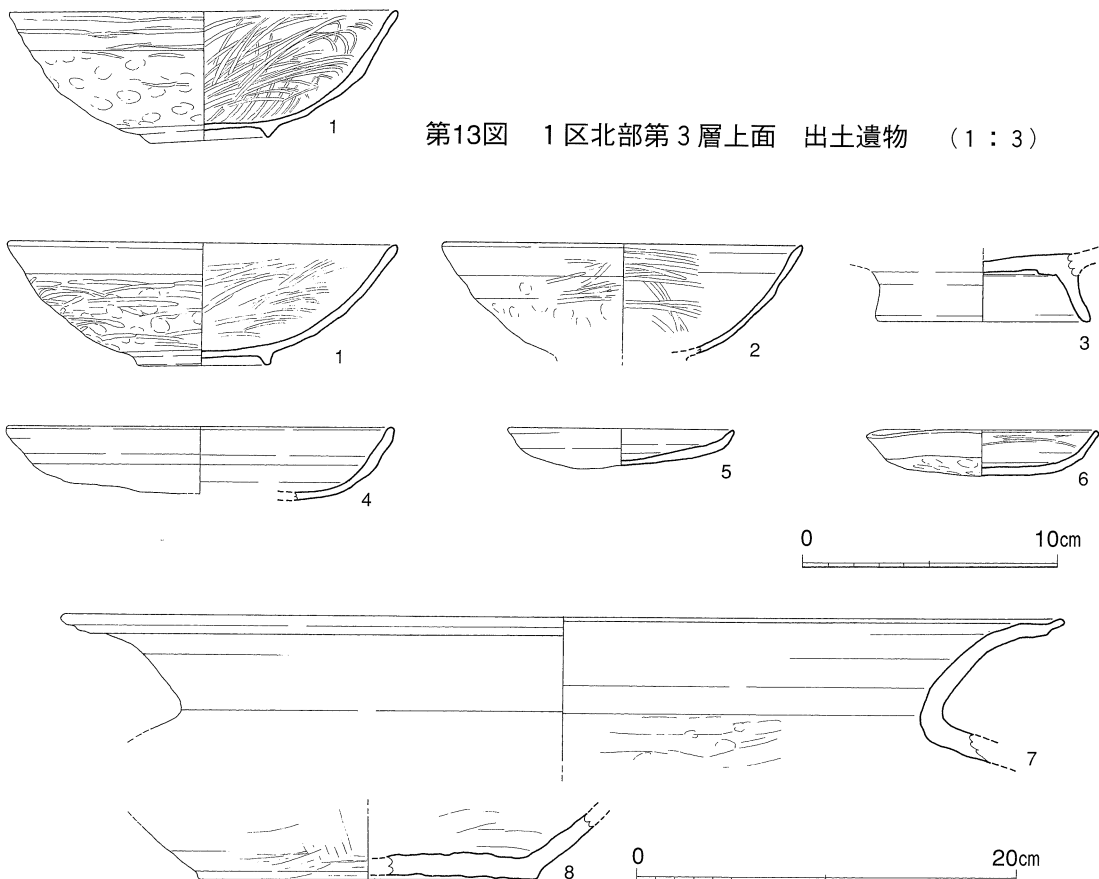
3. 調査の成果

は8.4cm前後と小型品となる。38は褐釉陶器壺頸部と考えられる。釉のたれ具合から上下関係を確認しただけにとどまる。39の瓦質土器鍋は、口径24.4cmをはかる。口縁端部を屈曲させ受部とする。内面は板ナデを施す。40・41は瓦質土器羽釜である。40は口径17.8cm前後、41は口径は20.0cm前後をはかる。42の東播系須恵器甕は、口径21.8cm前後をはかる。口縁部付近は横ナデを施すが、頸部はタタキ痕が残る。43は常滑焼甕の口縁部で、大型製品の可能性がある。44・45は石鍋2次加工品である。44は長さ10.4cm、幅6.8cmをはかる。破断面の一部に切断痕、穿孔1カ所がある。45は長さ5.8cm、幅14.0cmをはかる。破断面の一部に加工痕が残る。

以上、第2層上面掘削時に出土した特徴的な遺物を集成した。楠葉型瓦器碗などの搬入品や越Ⅲ類皿といった輸入陶磁器、石鍋2次加工品、硯など建物群の性格の一端が示されている。

第3層 当調査区一帯における基盤層の一部となる可能性が高いが、入り江内や1区南側では同層は堆積していないことから、主に自然堤防上に堆積した水成層と考えられる。同層から出土した第14図の遺物から、第3層上面に遺構面が形成されたのは和泉型Ⅱ-2期であり、第3層の形成はそれ以前となる。また、第3層内細分層からも、ピット1基がトレンチ断面で確認されているが、集落の本格的な形成を示すものとは考えにくい。よって、建物群の本格的な展開は第3層以後と考える。

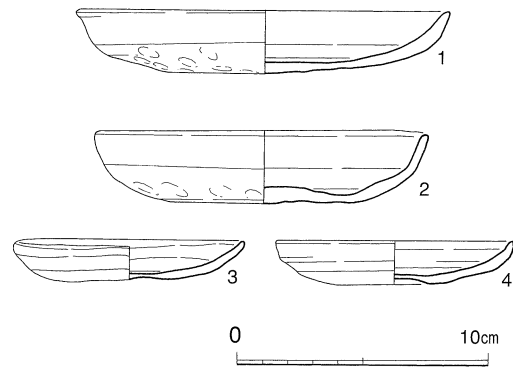
北部第3層 出土遺物 1・2は和泉型瓦器碗で、1は器高4.8~4.9cm、口径15.2~15.9cmをは



第13図 1区北部第3層上面 出土遺物 (1:3)

第14図 1区北部第3層 出土遺物 (1~6 1:3、7・8 1:4)

かる。2は器高4.4cm以上、口径14.2cm前後をはかる。内面に粗雑な不整方向のヘラミガキ、外面に粗雑なミガキを施す。II-2期である。3は土師器脚付き皿で、残存高は2.7cm以上、高台径8.2cm前後をはかる。4の土師器大皿は器高2.6~2.9cm、口径15.6cmをはかる。口縁端部を内反気味につまみ上げ、2段ナデを施す。5の土師器小皿は器高1.6cm、口径8.6~8.8cmをはかる。口縁部は1段ナデを施す。6の瓦器小皿は器高1.8cm、口径9.1cmをはかる。器壁は風化しており、調整等は不明瞭である。7は常滑焼甕の口頸部で、口径52.2cm前後に復元される大型品である。端部は外方向に屈曲する。8は常滑焼甕の底部で、底部径17.6cm前後をはかるが、底部径の復元には検討の余地を残す。



第15図 1区南部第4層直上(第38層)出土遺物(1:3)

一方、第3層ではないが、南部第2層4面基盤層~第4層直上にかけての堆積土(断面図第38層)から、第15図に挙げる遺物が出土した。

南部第4層直上(第38層) 出土遺物 1・2は土師器大皿で、とも1段ナデである。1は器高2.5cm、口径14.8cmをはかる。2は器高2.9cm、口径は13.0~13.6cmをはかる。3・4は土師器小皿で、ともに端部をつまみ上げ、外側面を面取りする。3は器高1.3~1.6cm、口径9.0~9.4cmをはかる。4は器高1.7cm、口径9.6cmをはかる。

土師器皿類について明確な時期を比定することは困難であるが、法量から概ね12世紀後半から13世紀前半に比定できる。断面図第37・38層は湿地状の堆積土であり、南部では第3層が堆積しなかったことを示す。

第4層 灰色中粒砂を主体とする比較的緻密な水成層で、調査区一帯の基盤層となる。同層以下には、植物遺体を多く含むようになり、次第に腐植土と砂層の交互層に変化する。同層からは遺物が出土していないため、堆積時期は明確ではない。

イ、2区の基本層序

2区では宅地造成時の埋立土以下、水田耕作土(第1-1~3層)、入り江埋立土(第2層)、腐植土層(第3層)、そして第1区と同じ第4層(灰色中粒砂層)の順に堆積する。なお、2区では入り江埋立土上面の標高はT.P.+0.5mであり、1区よりも1mほど低くなっている。

第1-1~3層 江戸時代前期~近現代にかけての水田耕作土である。このうち第1-3層は、極めて堅緻であり、入り江埋め立て後の陸化を示す。いずれの層も、集落寄りの南側斜面に近づくにつれ、遺物の出土量が増える。なお、調査区北端には第1-3層はなく、代わりに腐植土層が堆積することから、この段階でも十分に陸地化していなかった可能性がある。

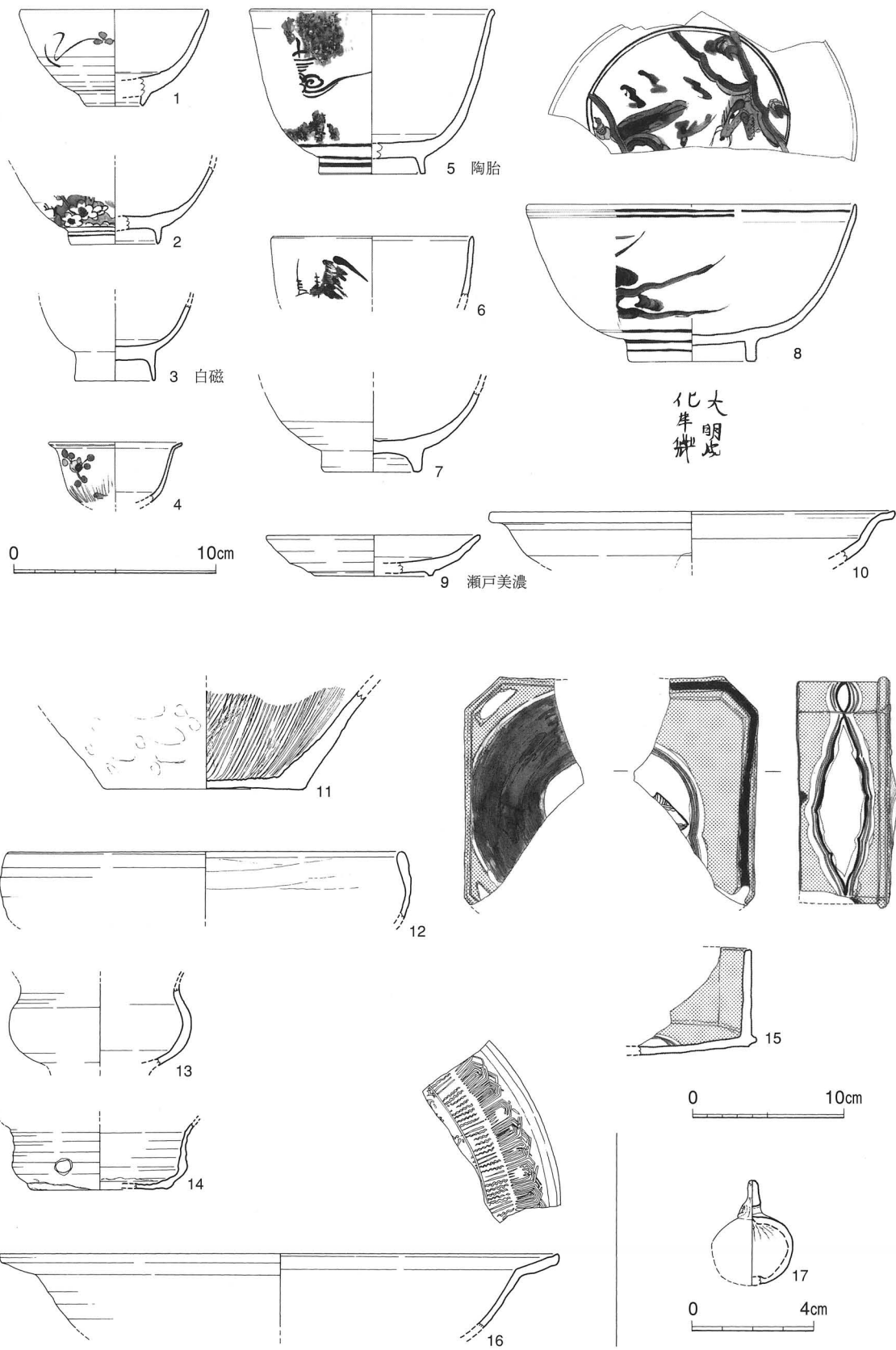
第1-1層 出土遺物 1の肥前系磁器碗は器高4.75cm、口径9.3cmをはかる。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、高台付近は露胎する。IV期・17世紀末前後の所産と言える。2の肥前系磁器碗は、

3. 調査の成果

高台径4.4cm前後をはかる。3は肥前系白磁小杯で、残存高3.8cm以上、高台径4.0cm前後をはかる。高台付近は露胎する。17世紀後半と考えられる。4の肥前系磁器小杯は、口径6.6cm前後をはかる。5は肥前系陶胎染付碗で器高8.1cm、口径12.2cm前後をはかる。17世紀後半頃の所産となる。6・7は肥前系京焼風陶器碗である。7は口径10.0cm前後、高台径4.8cmをはかり、外面に山水文らしき意匠が描かれている。豊付け以外に施釉される。Ⅲ期と考えられる。8の肥前系磁器鉢は器高7.7cm、口径16.6cm前後をはかる。見込みに龍の意匠を描く。外面にも施文するが意匠は不明である。高台内には、「大明戊化年製」の銘を入れる。17世紀後半頃と考えられる。9の瀬戸美濃焼灰釉皿は器高2.0cm、口径10.6cm前後をはかる。10は肥前系陶器皿で、口径20.0cm前後をはかるが、口径の復元には検討の余地を残す。11の丹波焼播鉢は底部径13.2cm前後をはかる。内面全体に8条以上を単位とする櫛書きの播り目を施す。体部外面には、押圧痕を残す。12の土師器炮烙は口径26cm前後をはかる。内面は板ナデ、外面は横ナデを施す。下半部は剥離し不明である。13は瀬戸焼花瓶と考えられる。体部径12.2cm前後をはかり、内外面に施釉されている。14の丹波焼火入れは、底部径9.0cm前後をはかる。体部中位に粘土塊が突起状に張り付けられている。15の磁器向付？は縦13.0cm以上、横8.2cm以上をはかる。内面に型押しで草花文の陽刻を施すが、図上に表現できなかった。産地は特定できないが、18世紀以降と考えられる。16の肥前系陶器皿は口径36.8cm前後をはかる。18世紀以降と考えられる。17の土鈴は調査区北部で出土したもので、器高3.5cm以上、体部径は2.8cm前後をはかる。

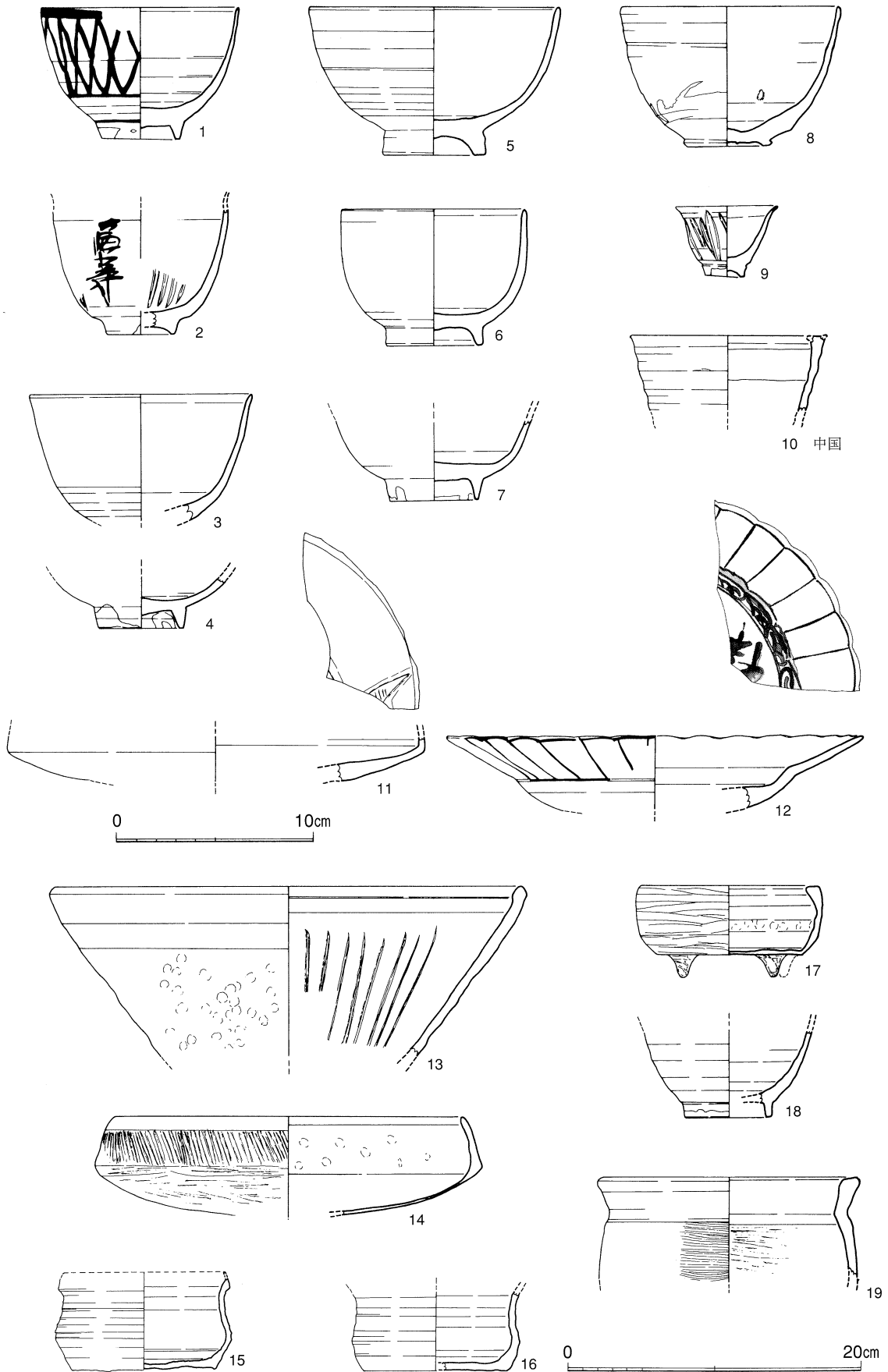
以上、第1－1層から出土した遺物をみると、同層が概ね17世紀後半以降に堆積したものと判断できる。次いで、第1－2層出土遺物を第17図に掲載した。

第1－2層 出土遺物 1の肥前系磁器碗は器高6.7cm、口径10.1cmをはかる。体部外面に網目文を描き、高台付近は露胎する。Ⅱ－2期、17世紀前半の所産となる。2も肥前系磁器碗で残存高6.3cm以上、高台径3.6cm前後をはかる。体部外面に「福寿」を書き、体部にはヘラ状工具で縞状に彫り込む。高台付近は露胎する。3・4は、肥前系青磁碗である。3は器高7.4cm以上、口径11.2cm前後をはかる。4は高台径4.4cm前後をはかる。高台付近は露胎する。5・6は、肥前系京焼風陶器碗である。5は器高7.5cm、口径12.2cm前後をはかる。豊付けは露胎する。6は器高6.9cm、口径9.4cm前後をはかる。豊付けは露胎する。7の肥前系陶器碗は、高台径4.6cm前後をはかる。磁器写しの陶器碗で、高台付近は露胎する。17世紀前半と考えられる。8の肥前系陶器碗は器高6.9cm、口径11.0cmをはかる。体部外面下半は露胎し、高台も低く成形されている。9の肥前系磁器小杯は器高3.6cm、口径5.2cmをはかる。体部外面にヘラ状工具で縞状の彫り込みを入れる。高台付近は露胎する。10の中国製陶器碗は、口径10.0cm前後をはかる。内面中位付近を帯状に施釉する。口縁端部を内外面に拡張し、端部に面を形成する。11の肥前系青磁皿は器高2.3cm以上、体部径21.6cm前後をはかる。17世紀中頃の三股産である。12の肥前系磁器皿は、口径21.2cm前後をはかる。体部下半で屈曲し、口縁部は直線的に外方へ伸びる。口縁端部は輪花状に成形する。13は丹波焼播鉢で、口径32.6cmをはかる。内面には、一本書きの播り目を施す。14の土師器炮烙は器高



第16図 2区第1-1層 出土遺物 (1~10 1:3、11~16 1:4、17 1:2)

3. 調査の成果



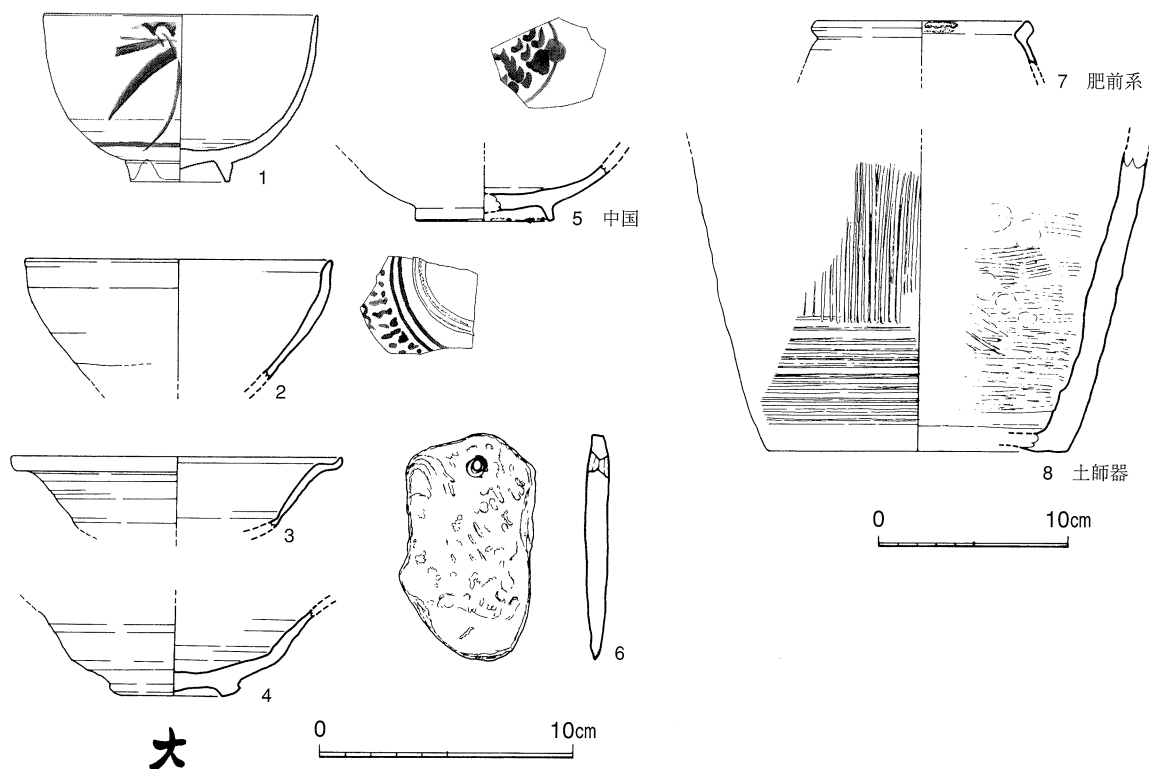
第17図 2区第1-2層 出土遺物 (1~12 1:3、13~19 1:4)

7.8cm以上、口径23.8cm前後をはかる。15・16は、丹波焼の火入である。15は残存高6.2cm、底部径11.0cm前後を、16は残存高5.2cm、底部径10.0cm前後をはかる。体部上半部に鉄釉をかける。17の瓦質土器小型火鉢は器高6.2cm、口径11.0cm前後をはかる。4本脚である。体部外面には粗いミガキを、内面には横ナデを施すが、一部押圧痕が残る。18の肥前系磁器徳利は、残存高5.8cm以上、高台径6.0cm前後をはかる。高台付近のみ露胎する。19の土師器甕は、口径17.4cm前後をはかる。口縁部にはナデを、外面には横ハケ、内面には板ナデを施す。

以上、第1-2層出土遺物のうち、肥前系陶磁器はⅡ-2期~Ⅲ期の幅で収まるものであり、17世紀前半以降に堆積したことが言える。

第1-3層は、第2層の埋め立てにより陸化した直後の堆積土である。極めて堅緻な堆積土で、掘削時の所見として上下層のように遺物を含むものではなかった。第18図に掲載した遺物は、1のように第1-2層の掘り残し、3-5のように第2層の遺物が混入したものと考えられる。

第1-3層出土遺物 1の肥前系磁器碗は器高6.6cm、口径10.8cm前後をはかる。高台付近は露胎する。Ⅱ-2期である。2の瀬戸美濃焼天目茶碗は器高4.8cm以上、口径12.0cm前後をはかる。3・4は肥前系陶器皿である。3は、口径13.0cm前後をはかる。器形から、Ⅰ-2期前後と考えられる。4は器高3.6cm以上、高台径5.2cm前後をはかる。高台内に「大」または「十八」とも読める墨書がある。Ⅰ期と考えられる。5の中国製染付碗は、残存高2.3cm、高台径5.2cm前後をはかる。6は滑石製の温石で、縦9.0cm、横5.2cm前後、厚さ1.0cmをはかる。7は肥前系陶器甕の口縁部で、口径11.4cm前後をはかる小型品である。8の土師器甕は残存高15.9cm以上、底部径



第18図 2区第1-3層 出土遺物 (1~6 1:3、7・8 1:4)

3. 調査の成果

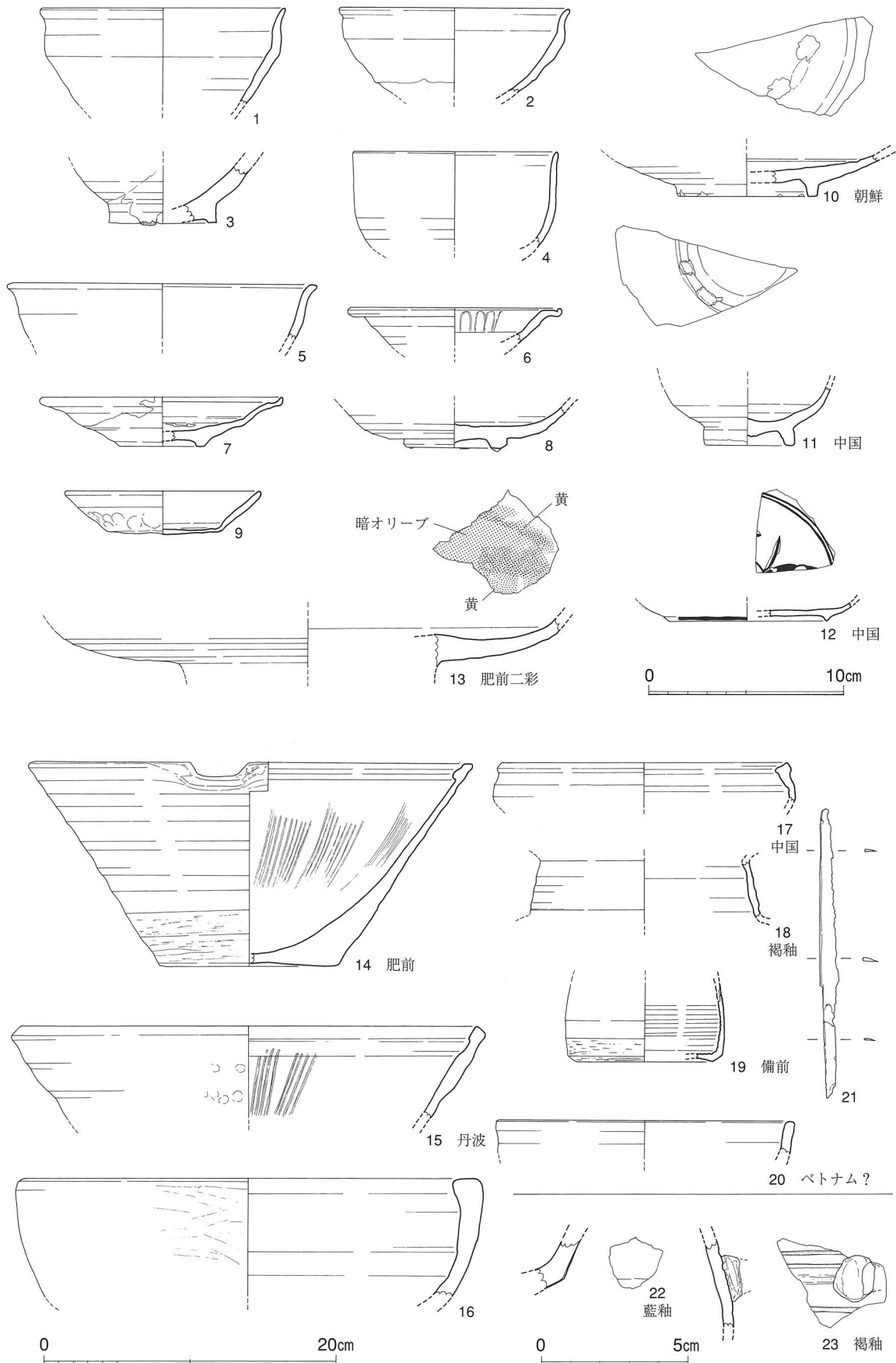
16.0cm前後をはかる。底部周辺は粗い横ハケを、体部外面には縦ハケを、その内面は粗雑なヘラケズリを施す。

第2層 入り江埋め立て時の造成土で、灰色シルトブロックなどからなる。造成土の搬入元は判然としないが、第1区北部・東部一帯が著しく削平を受けている状況から、集落周辺を切り崩し、その土砂で埋め立てた可能性も考えられる。同層からは、第19図に挙げる遺物のほか、舟材の一部と考えられる板材が出土した。

第2層 出土遺物 1・2は瀬戸美濃焼天目茶碗である。1は器高4.9cm以上、口径12.6cm前後をはかるが、口径の復元には検討の余地を残す。2は器高4.3cm以上、口径11.8cm前後をはかる。3・4は肥前系陶器碗である。3は器高3.0cm以上、高台径5.6cm前後をはかる。4は器高4.8cm以上、口径10.4cm前後をはかる。5の中国製青磁碗は、口径15.4cm前後をはかるが、口径の復元は検討の余地を残す。6の瀬戸美濃焼灰釉折縁皿は、口径11.0cm前後をはかる。7・8は肥前系陶器皿である。7は器高2.5cm、口径12.6cmをはかる。見込みに砂目痕がある。8は高台径5.0cm前後をはかる。見込みに胎土目痕がある。9の在地産土師器皿は器高2.2cm、口径10.2cm前後をはかる。10の朝鮮製白磁皿は高台から2.2cm以上、高台径7.2cm前後をはかる。内底面に胎土目がある。11の中国製施釉陶器碗は、高台径4.4cm前後をはかる。ケズリ出し高台で、畳付付近は露胎する。12は中国製染付皿で、底部径8.4cm前後をはかる。13の肥前系陶器二彩皿は器高3.0cm以上、高台径13.4cm前後をはかる。内面は白下地に透明釉をかける。体部外面下半は露胎する。体部外面には丁寧な回転ヘラケズリが施される。14の肥前系陶器播鉢は器高13.8cm、口径30.6cm前後をはかる。内面には9条の櫛書きで播り目を、体部外面下半に回転ヘラケズリを施す。15の丹波焼播鉢は、口径31.6cm前後をはかる。内面に櫛書で4条単位の播り目を施す。16の瓦質土器火鉢は、残存部から器高8.0cm以上、口径36.0cm前後をはかる。体部外面に粗いミガキが施される。17の中国製陶器の器種は明確ではないが、鉢または甕となる可能性がある。口径は、19.4cm前後に復元される。18の褐釉陶器壺頸部は、頸部径14.4cm前後（上端）をはかる。鎌倉時代頃のものと考えられ、混入品である。19の備前焼茶入は器高5.3cm以上、底部径9.2cm前後をはかる。外面下半部は回転ヘラケズリ、上半はナデを施す。20の陶器口縁部の器種は明確ではないが、壺の可能性はある。口径は、20.2cm前後をはかる。胎土等の特徴から、ヴェトナム産の可能性が指摘されている。21の小刀は全長19.7cm、幅1.3cm、厚さ2mm前後、刃渡り12cmをはかる。22は、外面に藍釉を施釉した陶器の細片である。器種などの詳細は不明である。器壁の厚さ7～8mmをはかる。胎土は赤褐色で、砂粒を含まず粘土質である。釉はガラス質で、ある程度の厚みを有する。23は褐釉陶器壺の把手付近の破片である。18と同じく、混入品と考えられる。

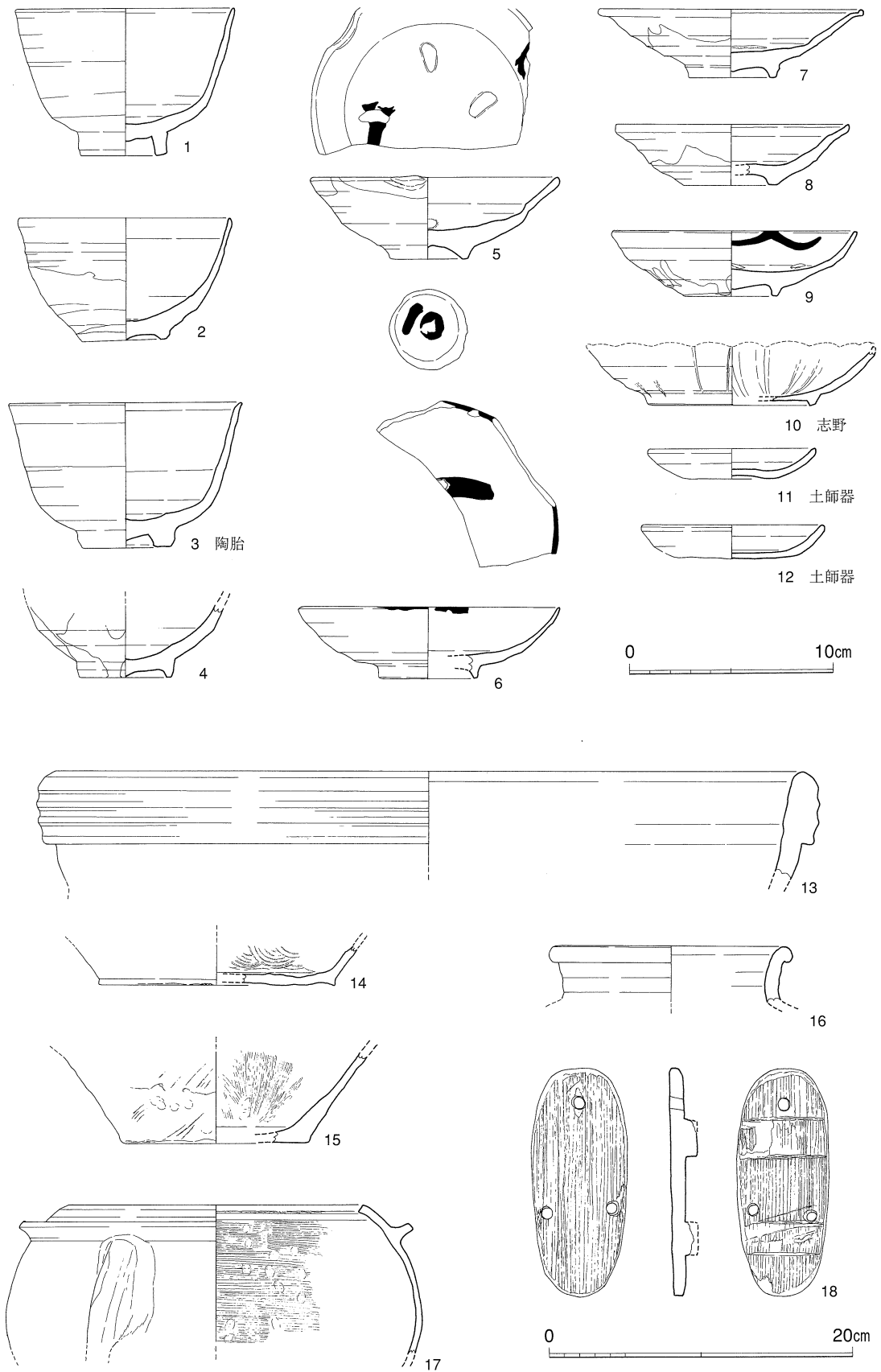
以上、第2層出土遺物をみると、肥前系陶器でⅠ期～Ⅱ-1期にかけての遺物がある。また第1-2層は、肥前系陶磁器でⅡ-2期を下限とすることから、入り江の埋め立ては、17世紀第2四半期前後となる可能性が考えられる。

第3層 第3層は、湖沼の底など止水環境のもとで堆積する特徴的な腐植土層である。同層の



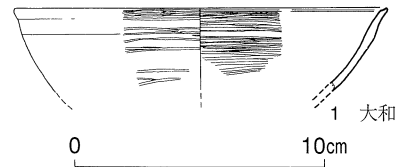
第19図 2区第2層 出土遺物 (1~13 1:3、14~20 1:4、22・23 1:2)

3. 調査の成果



第20図 2区第3層 出土遺物 (1~12 1:3、13~18 1:4)

堆積状況から、入り江が滞水し、平均水位が標高0.5m付近であった可能性がある。同層からは、第20図にあげる遺物が出土した。このうち、11・12・15・17や第3層下層に対応する斜面堆積土から出土した第21図1など、12～13世紀の遺物も含むことは、同層の長期にわたって堆積したことを示す。また、層上部付近からは、図に挙げた遺物のほかに和猫、ニワトリ、幼齢の日本ジカなどの獣骨や、漆器碗などが出土した。



第21図 2区第3層下層
出土遺物(1:3)

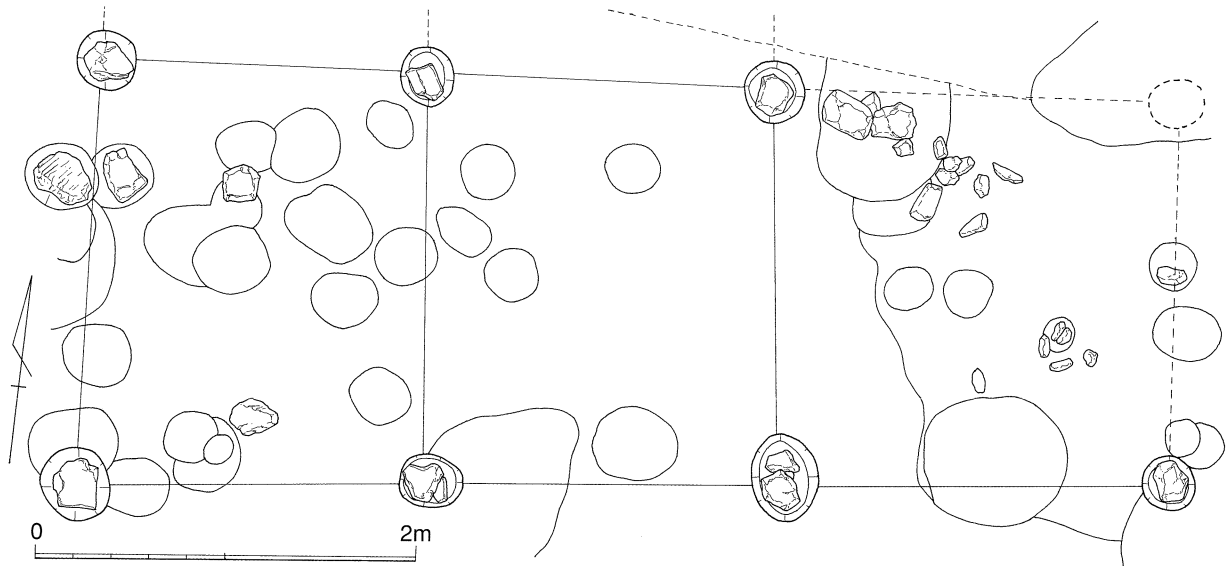
第3層 出土遺物 1～4は肥前系陶器碗である。1は器高7.2cm程度、口径11.0cmをはかる。高台付近は露胎する。2は器高6.1cm、口径10.4cm前後をはかる。体部外面下半は露胎する。3は器高7.1cm、口径11.6cm前後をはかる。畳付付近は露胎する。4は器高3.5cm以上、高台径は4.6cm前後をはかる。体部下半部の釉掛かりが悪い。高台畳付に胎土目痕がある。5～9は肥前系陶器皿である。5は器高4.0cm、口径12.4cm前後をはかる。見込みに胎土目痕がある。高台内に「○」の墨書が書かれている。6は器高3.6cm、口径12.2cm前後をはかる。見込みに胎土目痕がある。7は器高3.4cm、口径13.2cm前後をはかる。見込みに砂目痕がある。8は器高3.1cm、口径11.6cm前後をはかる。目跡は確認できないが、I期と考えられる。9は器高3.2cm、口径12.2cmをはかる。鉄釉をかける。見込みに胎土目痕がある。10の志野焼輪花皿は、器高2.7cm以上、口径14.4cm前後をはかる。釉は分厚く、ピンホールが多い。11・12は土師器小皿である。11は器高1.5cm、口径8.2cm前後をはかる。口縁部に一段ナデを施す。12は器高1.65cm、口径8.9cmをはかる。口縁部に一段ナデを施す。13の備前焼大型甕は、口径49.8cm前後をはかるが、復元には検討の余地を残す。口縁部側面に2条の凹線を施す。14の肥前系陶器甕は、底部径15.4cm前後をはかる。底部外面に貝目痕がある。体部外面は鉄釉がかかる。内面のタタキはナデで擦り消される。15の常滑焼甕は底部径12.4cmをはかる。内面は不整方向の板ナデ、外面は押圧痕、板状工具による調整痕がみられる。16の備前焼壺は、口径15.0cmをはかる。口縁部は玉縁状に形成され、胎土は灰色を呈する。IV期以前と考えられる。17の瓦質土器羽釜は器高10.0cm以上、口径20.0cm前後をはかる。鏝下部から体部中位に脚を取り付ける。18の下駄は全長15.0cm、幅6.1cm、厚さ1.8cmをはかる。指・かかとの痕跡が不明瞭ながら認められる。小児用と言える。

以上、第2区における基本層序をみると、入り江最下層となる止水性堆積層である第3層からの出土遺物が、鎌倉時代前後・戦国時代末期～江戸初期まで、また造成土である第2層の最新の遺物も肥前系Ⅱ-1期で、第1層の遺物に肥前系Ⅱ-2期以前ものがないことから、17世紀初頭の段階で入り江は埋め立てられ、その後水田とされたことが言える。

(2) 1区の調査

1区では、南北2区画の建物群を検出した。以下、北側の建物群を建物群1、南側の建物群を建物群2とし、それぞれの建物群から検出した遺構について報告する。

3. 調査の成果

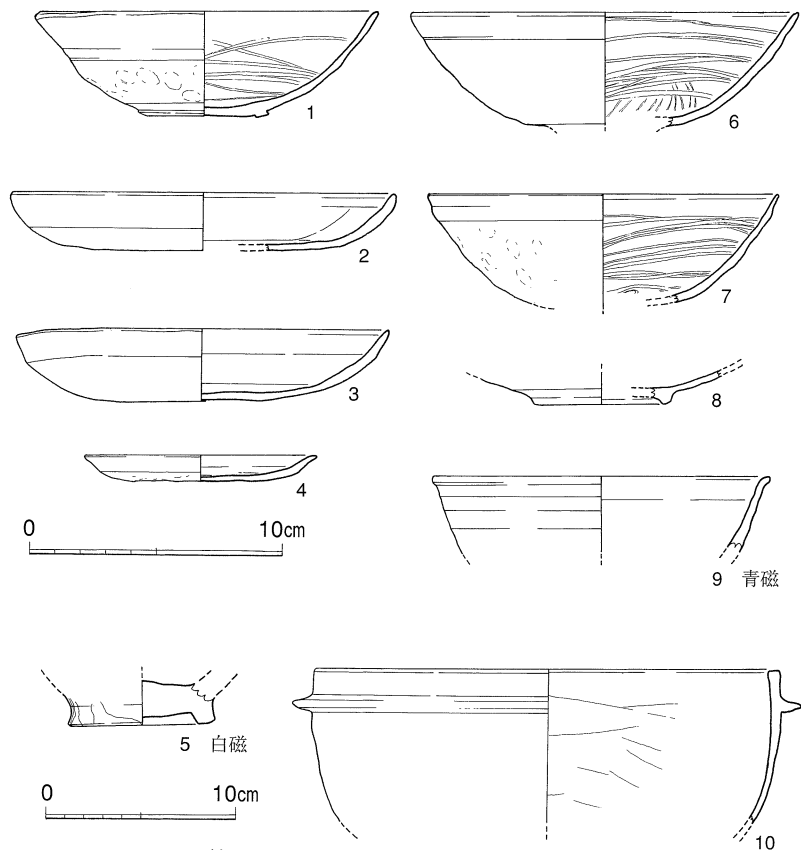


第22図 建物1平面図 (1 : 40)

ア. 建物群1

建物群1は、敷地は東西17m以上、南北15m前後をはかり、255m²以上の規模を有する。一般集落における屋敷の規模でみると、小規模の部類に属する。敷地内からは、多数の柱穴および礎石が検出されたが、復元できた建物は9棟に限られる。このうち、主屋級の建物は建物1・2・6～8の5棟で、建物3・5は副屋、建物4・9は簡易な小屋となる可能性が考えられる。

建物1 区画中央付近で検出した、総柱の礎石建物である。建物1はその北半分が旧水路によって破壊されていることなどから、明確な規模は不明である。ただし、残存する部分から、少なくとも東西3間(5.8m)×南北1間(2.25m)以上の規模となる。柱穴の間隔は

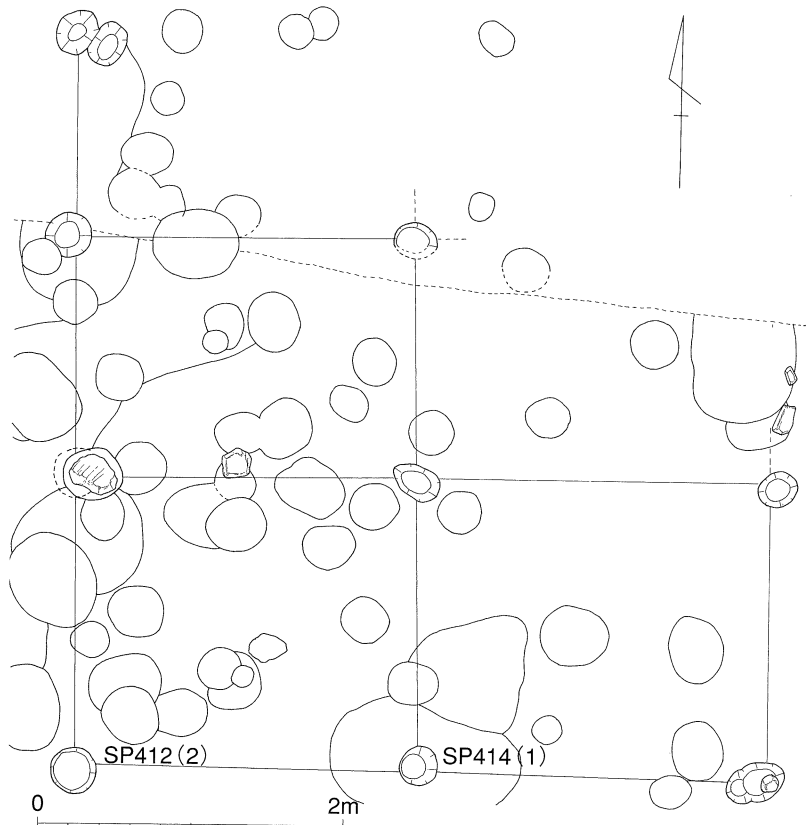


第23図 建物群1 建物出土遺物

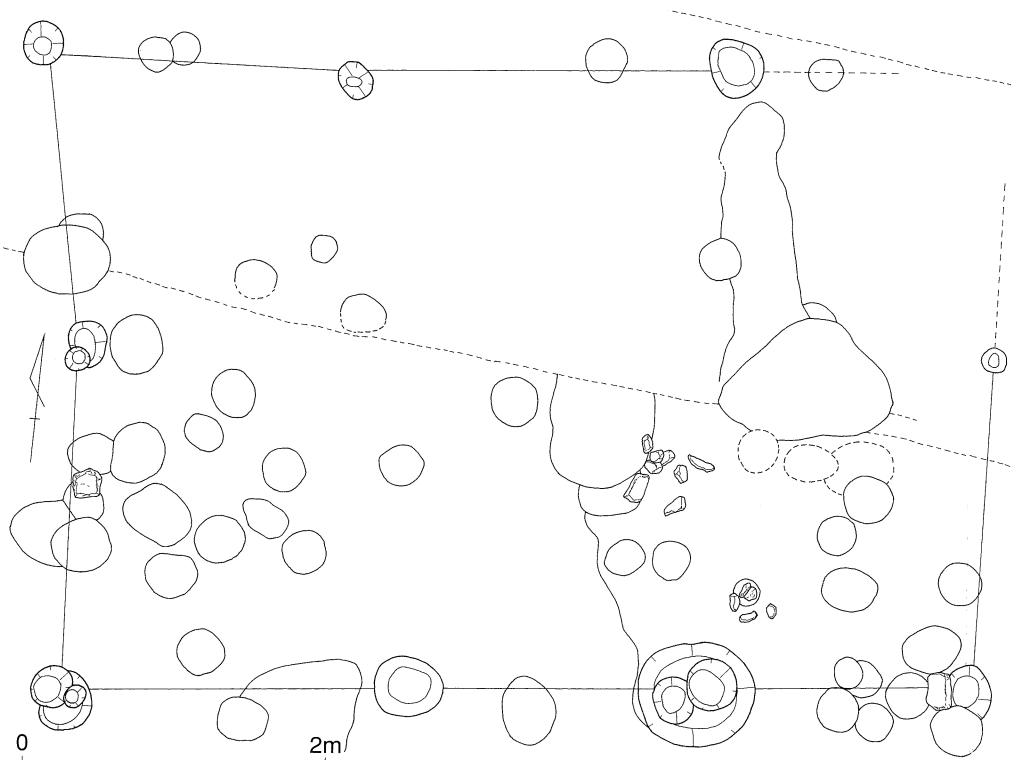
(1～4・6～9 1 : 3、5・10 1 : 4)

1・2 : 建物2 3～5 : 建物7 6～8 : 建物8 9 : 柱穴列1 10 : 建物4

東西1.8~2.0m、南北2.25mをはかり、比較的均等である。建物の主軸方向は、 $N-83^{\circ}-E$ となる。礎石は、直径30cmのピットに、15~20cmの自然石2~3個を敷き、その上に20~30cmの自然石または割石を置く。礎石の上面は、本来水平に設置されていたものと考えられるが、検出されたものは家屋の加重をうけたためか、すべて傾いていた。建物1の時期は、土器集積土坑との重複関係などから13世紀前半と考えられる。なお、この他にも多数の礎



第24図 建物2平面図 (1:50)



第25図 建物3平面図 (1:50)

3. 調査の成果

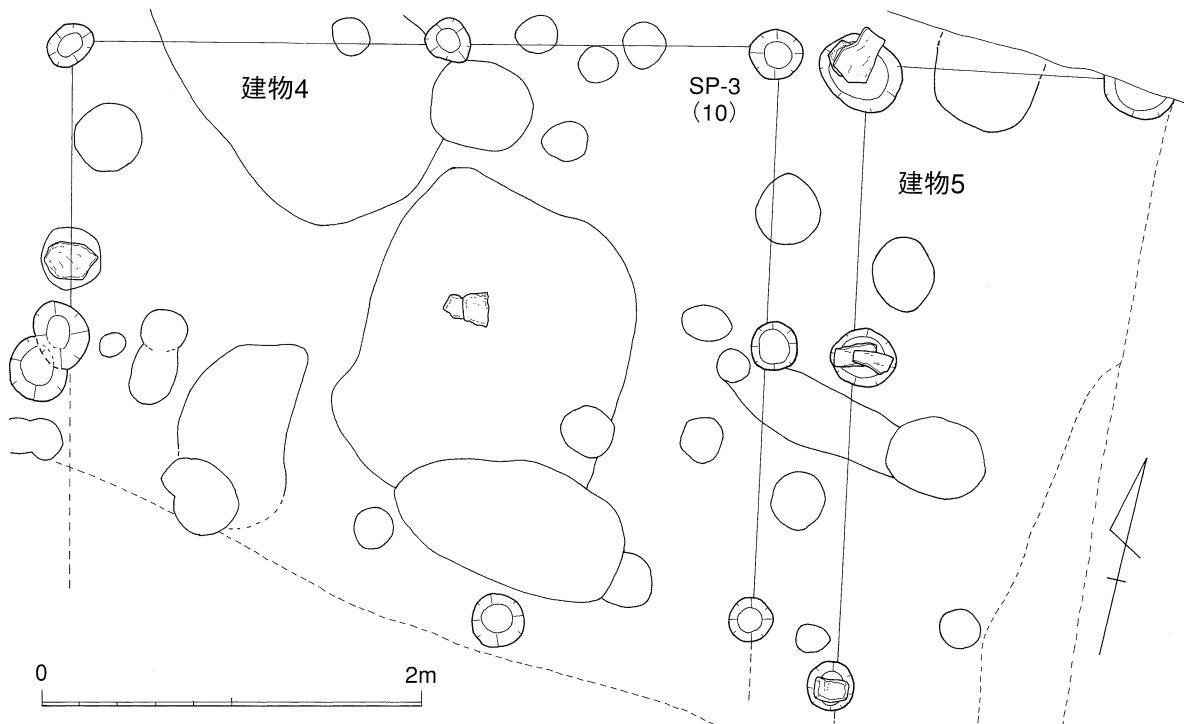
石が調査区西部を中心に検出されており、他にも礎石建物が存在したものと考えられる。

建物2 区画中央付近で検出した総柱の掘立柱建物で、建物1と重複する。建物1と同じく、正確な規模は不明であるが、検出部分から少なくとも南北3間(4.9m)以上×東西2間(4.6m)以上、面積にして22.5m²以上となる。柱穴の間隔は、南北1.5~2.0m、東西2.25mと不均等である。建物の主軸方向はN-2°-Wである。なお、第23図1・2の柱穴出土遺物から、建物2は12世紀末前後と考えられる。

建物2 出土遺物 1の和泉型瓦器碗は器高4.2~4.3cm、口径14.9cm前後をはかる。Ⅲ-2期である。2の土師器大皿は、器高2.3cm、口径15.0cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。

建物3 区画中央で検出した側柱建物で、建物1・2と重複する。建物は東西3間(6.0m)×南北2間(4.5m)、面積にして27m²程度となる。柱穴の間隔は東西1.7~2.25m、南北2.0~2.4mと不均等である。また、建物の南辺では重複する柱穴もあり、柱の付け替えも考えられる。建物の主軸方向はN-84°-Eである。建物1と同じく詳細な時期は確定できない。

建物4 区画北東で検出した、総柱の可能性ある掘立柱建物である。建物の南側は、旧水路で破壊されているが、北辺より北側は入り江となることから、あまり大型の建物になるものとは考えにくい。検出部分から少なくとも南北2間(3.1m)以上×東西2間(3.7m)、面積にして約10m²以上となる。柱穴の間隔は、南北で1.5・1.6m、東西で1.7・2.0mとやや不均等である。また、建物中央付近から根石の可能性ある15cm大の割石が出土しており、総柱建物の可能性が残る。建物の主軸方向は、N-13°-Wとなる。柱穴は検出面から3~5cmと極めて浅く、第1区北部第1面もしくは第2面から掘削された可能性がある。



第26図 建物4・5平面図(1:40)

なお、建物4からは第23図10の瓦質土器羽釜が出土した。

建物4 出土遺物 10は残存部から器高8.1cm以上、口径24.4cm前後をはかる。口縁部は直立し、鏝も水平方向に取り付けられたもので、13世紀前後の所産となる。

建物5 建物4の東側で検出した礎石建物である。建物の大半は調査区外にあるが、北方と東方は入り江となることから、大きな建物になる可能性は低い。検出部分における建物の規模は、南北2間(3.3m)以上×東西1間(1.5m)である。礎石痕の間隔は南北で1.6・1.7m、東西で1.5mで均等な配置となる。建物の主軸方向は、N-13°-Wで、建物4の主軸方向と同じくする。建物の礎石について北西端の1基をみると、直径40cmのピットに15~20cmの割石・自然石3個を敷き、その上に30cm大の割石を置く。この他の礎石も、その状況からほぼ同様の構造であった可能性がある。

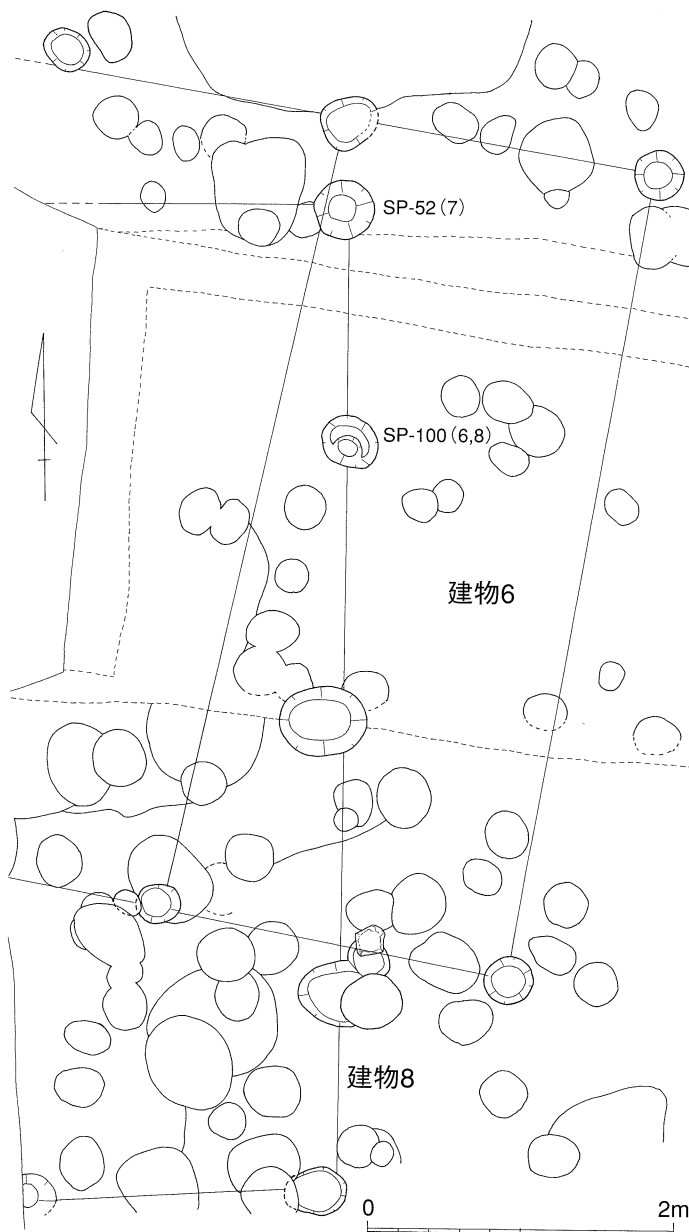
可能性がある。

なお建物5も、建物の主軸方向から建物4と同じ時期が考えられる。

建物6 区画北西付近で検出した、総柱の可能性が考えられる掘立柱建物である。建物の大部分が調査区外にあるが、検出部分から南北3間(5.4m)×東西2間(4.0m)以上をはかり、面積にして21.6m²以上となる。柱穴の間隔は、東西で1.9~2.15m、南北は2.0m前後でやや不均等である。建物の主軸方向は、N-80°-Wである。

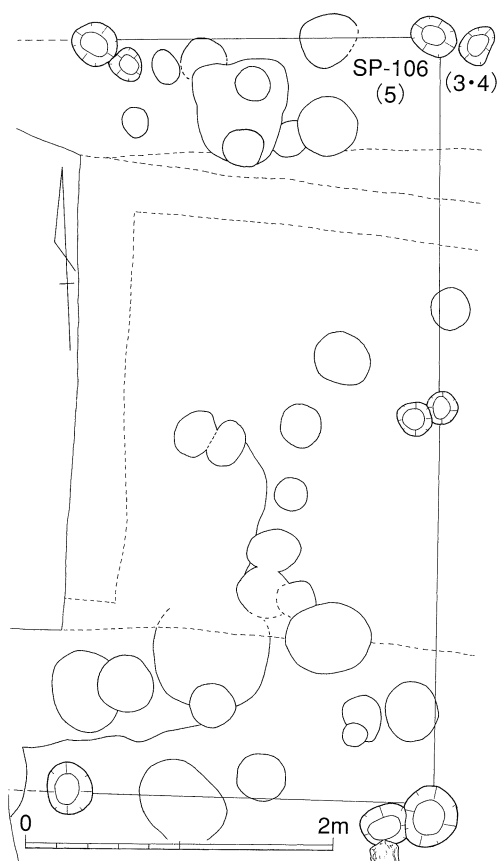
建物6は、遺構の重複関係などから12世紀後半~13世紀初頭の所産と考えられる。

建物7 区画北西付近で検出した掘立柱建物で、建物6・8と重複する。建物6と同様に全体の規模・構造は明確にはできないが、検出部分から南北2間(5.2m)×東西1間(2.3m)以上をはかり、面積にして12.2m²以上の建物となる。柱穴の間隔は、東西で2.3m、南北で2.6mと比較的均等である。建物の主軸方向



第27図 建物6・8平面図(1:50)

3. 調査の成果



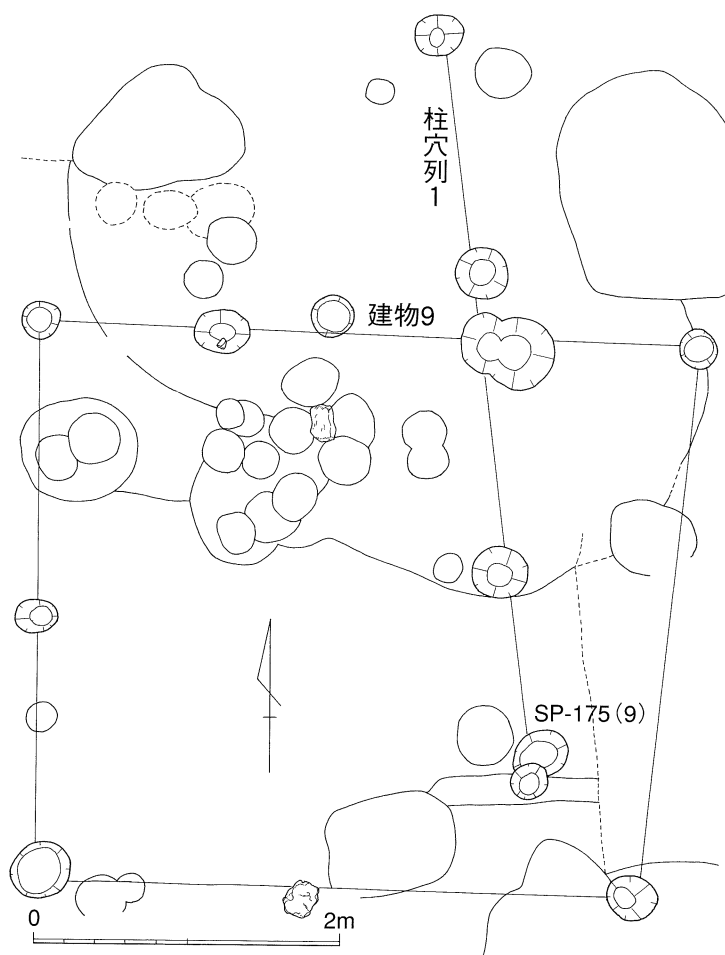
第28図 建物7平面図(1:50)

は $N-87^{\circ}-W$ となる。建物7からは、第23図3～5の遺物が出土し、12世紀後半頃の所産と考えられる。

建物7 出土遺物 3の土師器大皿は、器高2.7～2.8cm、口径14.8cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。4の土師器小皿は、器高1.1cm、口径9.0～9.2cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。5は白磁壺の底部で、高台径7.8cm前後をはかる。四耳壺の可能性もある。体部を打ち欠き、根石に転用されたものと考えられる。

建物8 区画北西付近で検出した掘立柱建物で、建物6・7と重複する。建物6・7と同様に全体の規模・構造は明確にはできないが、検出部分から南北4間(6.5m)×東西1間(1.8m)以上の規模となる。柱穴は、直径40cm前後のものを主体とするが、東辺中央の柱穴は、長軸長60cmと特に大きい。中央とその南北の柱穴間隔は1.8m、さらにその南北は1.3mとなる。建物の主軸方向は、 $N-0^{\circ}$ である。なお、建物8は、出土した第23図6～8から、12世紀末～13世紀初頭前後の所産となる。

建物8 出土遺物 6～8は和泉型瓦器碗である。6は器高4.6cm以上、口径15.4cm前後をはかる。内面に粗雑な圏線状のミガキを、見込みには平行線状の暗文を施す。7は、器高4.3cm以上、口径14.0cm前後をはかる。見込みに連結輪状暗文を施す。8は、高台径5.6cm前後をはかる。外面



第29図 建物9・柱穴列1平面図(1:50)

に赤色塗彩の痕跡が確認できる。これらは和泉型瓦器碗Ⅲ-2期となる。

建物9 区画南東端付近で検出した、側柱の可能性ある掘立柱建物である。建物の東側は削平されているものの、検出部分から東西2間(4.3m)以上×南北2間(3.7m)をはかり、面積にして16m²以上となる。柱穴の間隔は、東西で1.7・2.0m、南北1.7・2.0mと不均等である。建物の主軸方向はN-0°となる。柱穴からは、遺物が出土しなかったため、時期は明確にはできないが、主軸方向から建物8と前後する時期となる可能性がある。

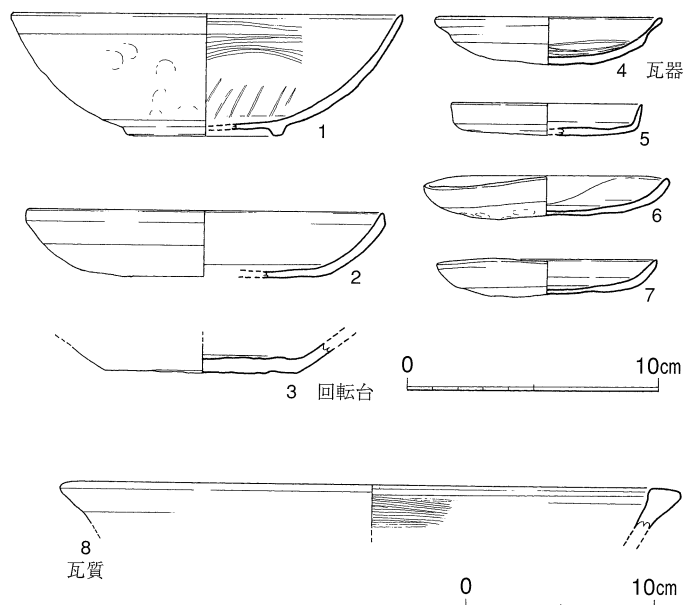
柱穴列1(建物10?) 区画東部で検出した柱穴列で、建物9と重複する。柱間は南北3間(4.8m)で、柵や板塀に伴うものとは考えにくく、建物の一部と推定した方が妥当と考えられる。なお、柱穴列の方向はN-8°-Wとなる。柱穴列1の時期は、出土遺物から13世紀以降と考えられる。

柱穴列1 出土遺物 9の龍泉窯系青磁碗は、口径13.2cm前後に復元したが、残存部は少なく、復元には疑問を残す。

井戸1 区画南東端で検出した素掘りの井戸である。平面は歪な円形を呈し、直径3.0m、深さ1.25mをはかる。井戸1は、上半部が大きく開口するが、中位で犬走り状の段差を有し、段掘り状の断面を呈する。埋土は上下2層に大別でき、上層はブロック土を多く含む人為的な埋め戻し土、下層は植物遺体を多く含む腐植土からなる。埋土の状況から、井戸は機能が停止した後、しばらくの間廃棄土坑として利用されたことが考えられる。ところで、井戸1に井筒などの構造はなく、形態も近世の灌漑用井戸に類似する。よって、井戸が飲料水用のものではなく、別の用途に利用された可能性も少なからず考えられる。

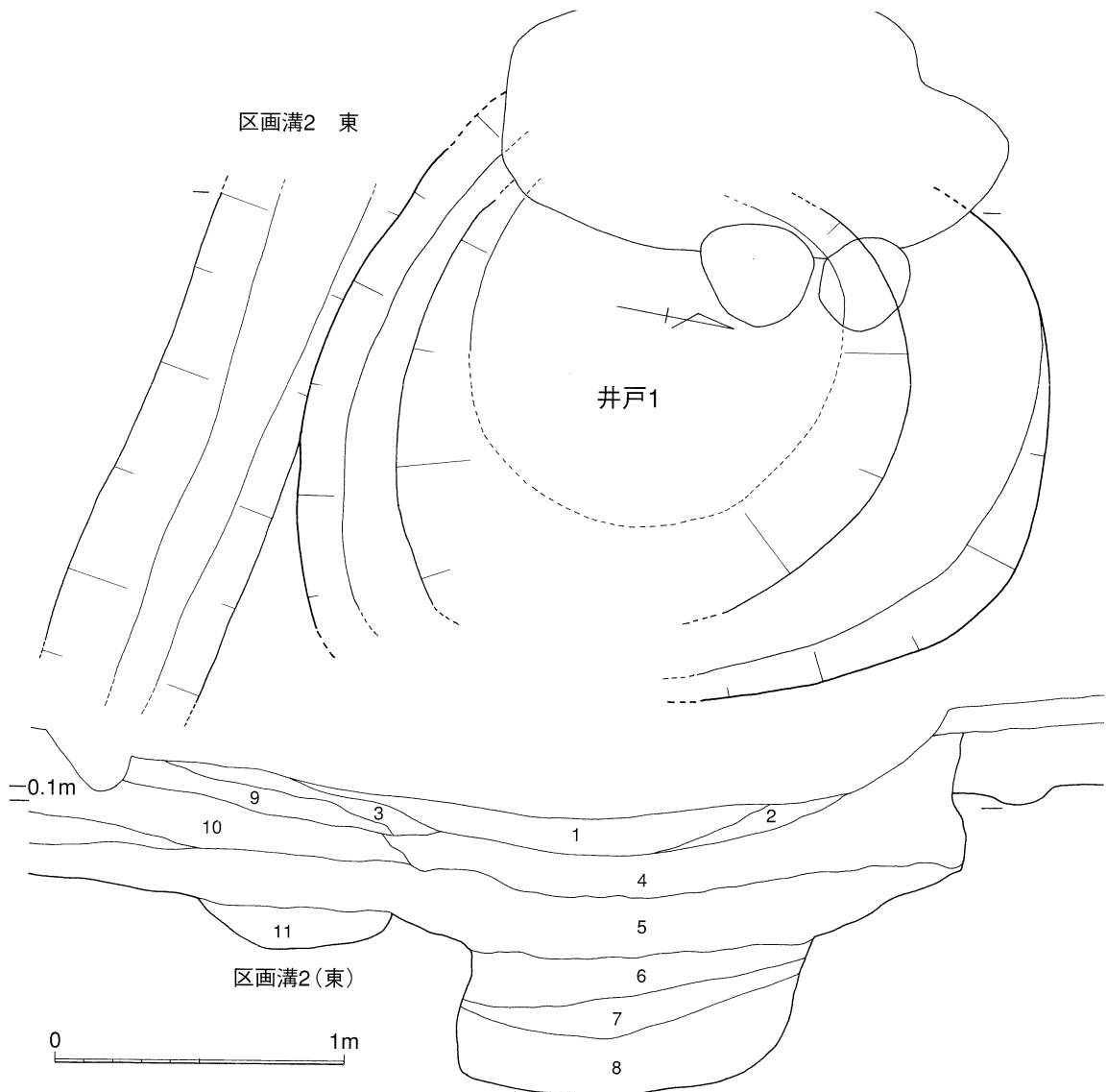
なお、井戸1は、第30図に挙げる遺物から、12世紀前半~中頃の所産と考えられる。

井戸1 出土遺物 1の和泉型瓦器碗は、器高4.8cm、口径15.4cmをはかる。体部外面にはヘラミガキはなく、内面のヘラミガキはやや粗雑で、見込みに平行線状の暗文を施す。高台は断面台形状を呈する。Ⅲ-1期に比定できる。2の土師器大皿は器高2.6cm、口径14.0cmをはかる。口縁端部をややつまみ上げ、面取りを施す。3の回転台土師器杯は、底部径7.8cm前後をはかる。底部切り離しは回転ヘラ切りによる。4の瓦器皿は器高1.9cm、口径9.0~9.2cmをはかる。見込みには連続平行線状暗文が、また口縁部付近は横ナデが施される。5~7は土師



第30図 井戸1 出土遺物(1~7 1:3、8 1:4)

3. 調査の成果



1. におい黄橙色 (10YR6/3) 細粒砂 同色系シルトブロックを極少量含む。
2. におい黄橙色 (10YR6/3) 細粒砂 同色系シルトブロックを多く含む。
におい黄色 (2.5Y6/4) 細～極細粒砂 同系シルトブロック多く含む。
3. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細～中粒砂 炭を少量含む。
褐灰色 (10YR4/1) 均質な中粒砂
4. 黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂 灰白色 (10Y7/1) シルトブロックを含む。
5. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト～極細粒砂 同色系シルトブロックを多く含む。
6. 暗緑灰色 (5GY3/1) シルト～粘土 木材・植物遺体を含む。土器片を含む。
7. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルトと同色系シルトブロック層が交互に堆積する。植物遺体を多く含む。土器中型片を含む。
8. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト～極細粒砂 (腐植土) 層上部に同色系シルトブロックを少量含む。植物遺体・土器小型片などを多く含む。
9. 灰黄褐色 (10YR6/2) 極細粒砂～シルト
10. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細～極細粒砂 炭を多く含む。
11. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト～極細粒砂 同色系シルトブロックを含む。

第31図 井戸1平面・断面図 (1:25)

器小皿である。5は器高1.25cm、口径7.6cmをはかる。端部が直立するもので、一般的なものとは異なる。6は器高1.5～1.8cm、口径9.6～9.8cmをはかる。7は器高1.5cm、口径8.8cmをはかる。7・8はともに、口縁部に1段ナデを施す。8の瓦質土器盤(火鉢)は、口径29.6cm前後をはかるが、復元には検討の余地を残す。

土器集積遺構 区画中央付近で検出した浅い落ち込み状の遺構である。東西3.7m以上、南北3.0mの範囲で、土師器皿を中心に瓦器碗などの供膳具が層厚15～20cmほど堆積する。掘削時の印象として、土より土器の方が多し所感を得た。土坑の掘り形は不明瞭であり、出土状況から範囲を

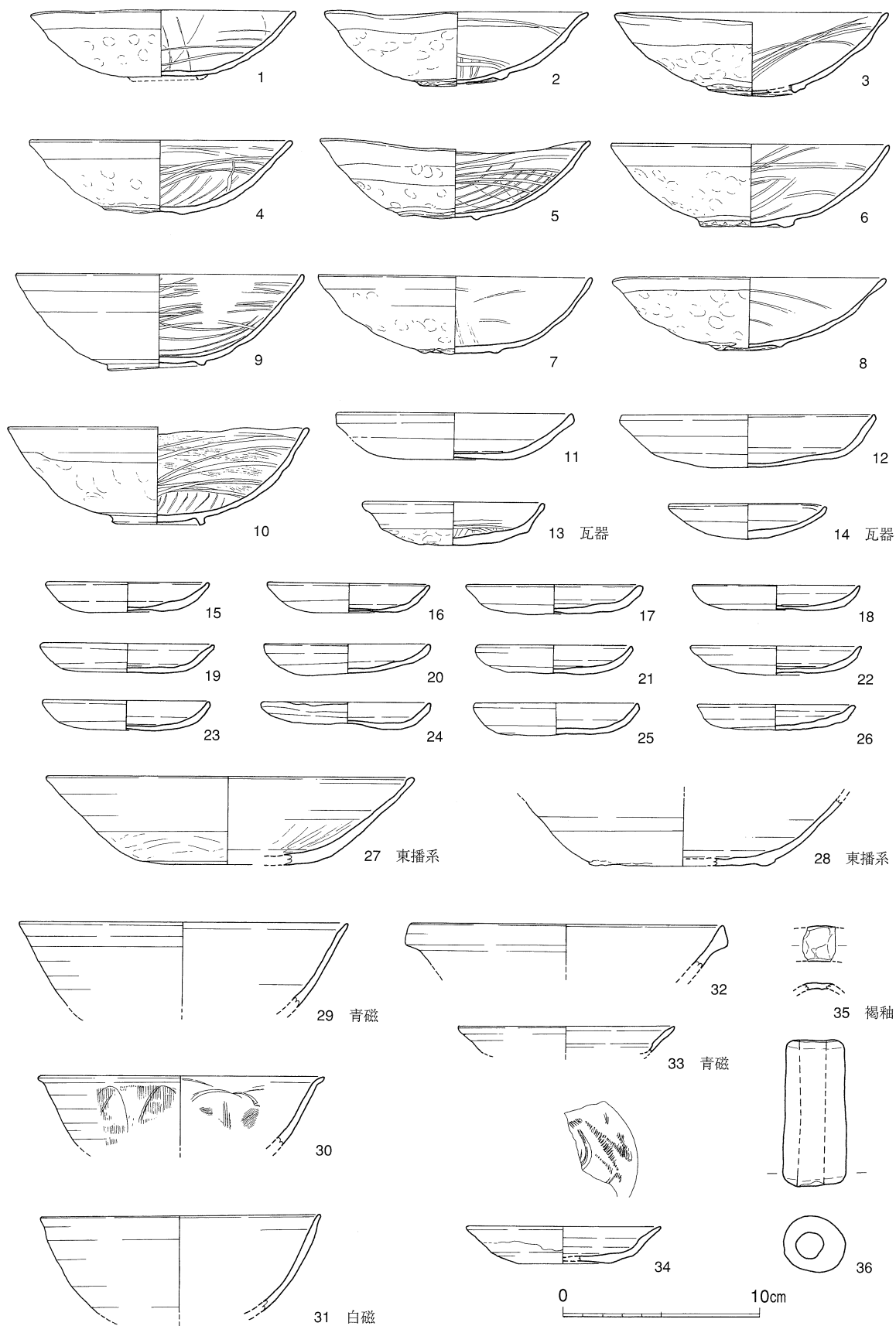
推定しただけにとどまる。壁面断面の状況から、第2層1面からの掘削も考えられるが、判然としない。なお、遺構は、建物が特に集中する区域にあって、また遺物の出土量も遺物収蔵箱10箱を越えるなど傑出している点で極めて特殊であり、単なる廃棄土坑とは異なる性格が推測される。

土器集積遺構 出土遺物 1～10は和泉型瓦器碗である。このうち、1～8の器高は3.7～4.3cm（平均4.0cm）、口径は13.5～14.3cm（平均13.9cm）をはかる。いずれも内面は粗雑な圈線状

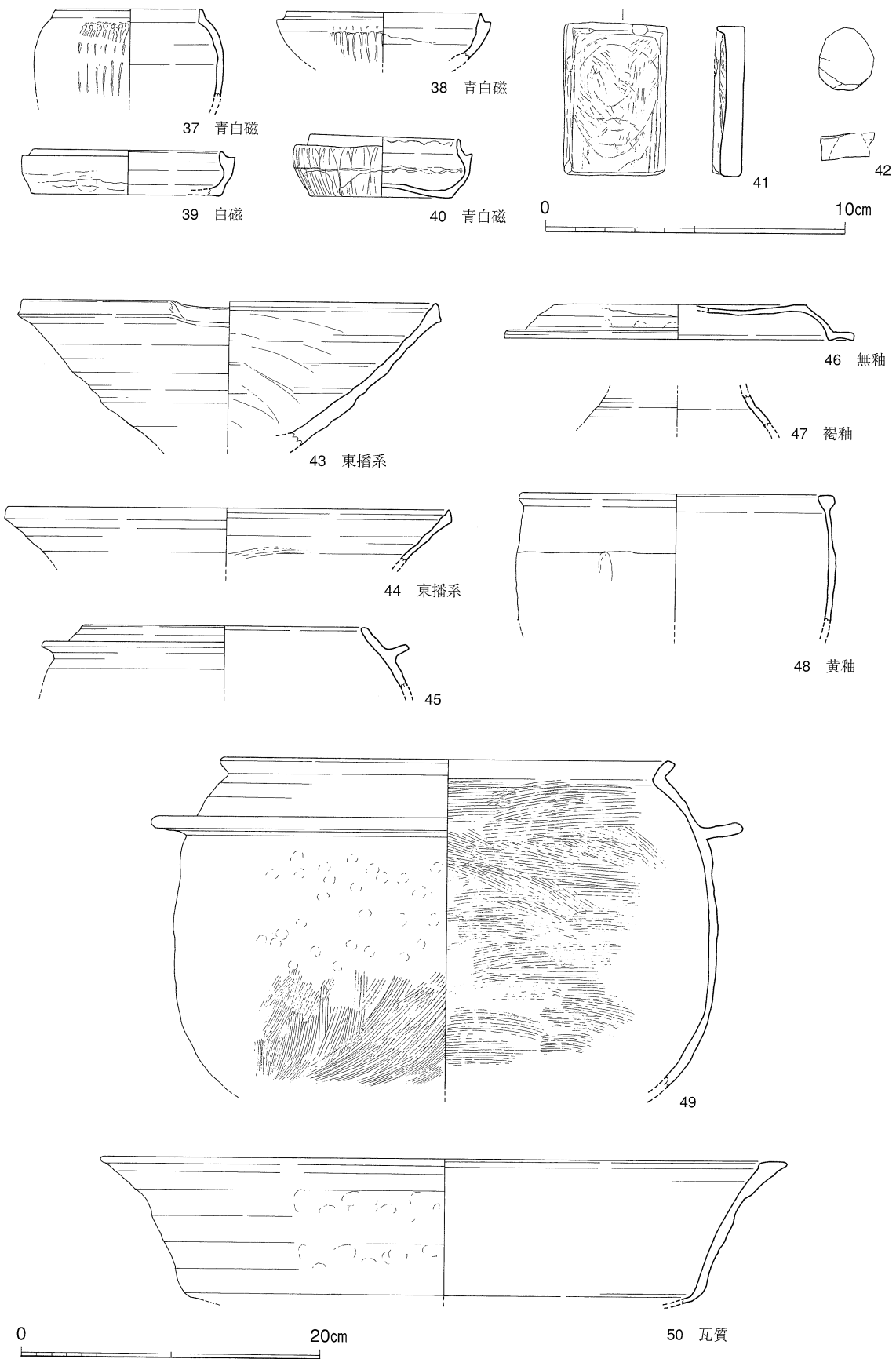


第32図 土器集積遺構遺物出土状況（1：20）

3. 調査の成果



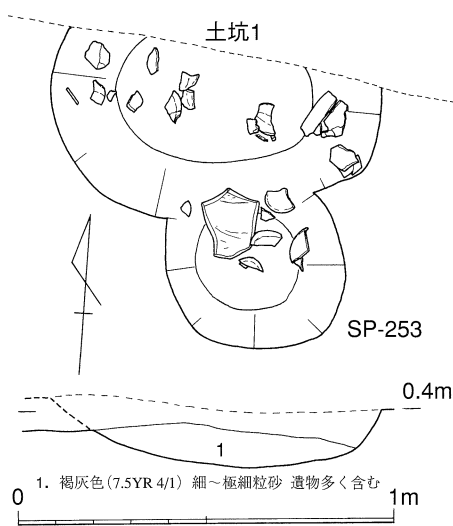
第33図 土器集積遺構 出土遺物1 (1:3)



第34図 土器集積遺構 出土遺物2 (37~42 1:2、43~50 1:4)

3. 調査の成果

のヘラミガキが、見込みに平行線状の暗文が施される。概ねⅢ-3期である。一方、9・10は器高4.9cm前後、口径15.0cm前後をはかる。いずれも、内面にはやや隙間が大きいヘラミガキが、見込みに平行線状の暗文を施され、高台の断面形は台形状を呈する。Ⅲ-1期となることから、下層遺構からの混入品と考えられる。11・12は、土師器大皿である。11は器高2.4cm、口径12.2~13.0cmをはかる。口縁端部は面取りを行う。12は器高2.7cm、口径12.8cmをはかる。口縁端部をややつまみ上げて面取りを行う。13・14は瓦器皿である。13は器高2.3cm、口径9.4~9.5cmをはかる。口縁部付近には横ナデを、見込みに平行線状の暗文を施す。14は器高1.9cm、口径8.0~8.6cmをはかる。内面にナデを施す。15~26の土師器小皿は器高1.3~1.7cm（平均1.5cm）、口径8.0~8.8cm（平均8.5cm）をはかる。15~18は口縁部に1段ナデを、19~22は端部をつまみ上げて側面を面取り、23~26は端部を面取りする。27・28は東播系須恵器碗である。27は器高4.5cm、口径18.8cm前後をはかる。外面下半部は不整方向のナデが施され、底部には回転糸切り痕が残る。28は器高3.5cm以上、底部径9.0cm前後をはかる。外面下半部にはナデが施され、底部には回転糸切り痕が残る。29・30は龍泉窯系青磁碗である。29は無文碗で器高4.3cm以上、口径16.8cm前後をはかる。30は劃花文碗で器高3.6cm以上、口径14.6cm前後をはかる。31・32は白磁碗である。31はV類で器高5.0cm以上、口径14.4cm前後をはかる。32はIV類で、口径14.8cm前後をはかる。33・34は同安窯系青磁皿である。33は口径11.0cm前後を、34は器高1.9cm、口径10.0cm前後をはかる。35は褐釉陶器の把手の破片である。36の土錘は直径3.2cm、全長7.5cmをはかる。37の青白磁小型壺は器高2.9cm以上、口径4.8cm前後をはかる。体部外面に型押しによる縞状の施文がなされる。38~40は合子の身で、38・40は青白磁、39は白磁である。38は器高1.6cm以上、口径6.5cm前後を、39は器高1.5cm、口径7.4cm前後を、40は器高2.0cm、口径5.0cm前後をはかる。41の硯は長さ5.1cm、幅3.5cm、厚さ1.0cmをはかり、携帯用のものと考えられる。42の礫は、直径2.3cm、厚さ0.8cmをはかる。褐釉陶器を母材とする。43・44は東播系須恵器こね鉢である。43は器高9.8cm以上、口径



第35図 土坑1平面・断面図
(1:20)

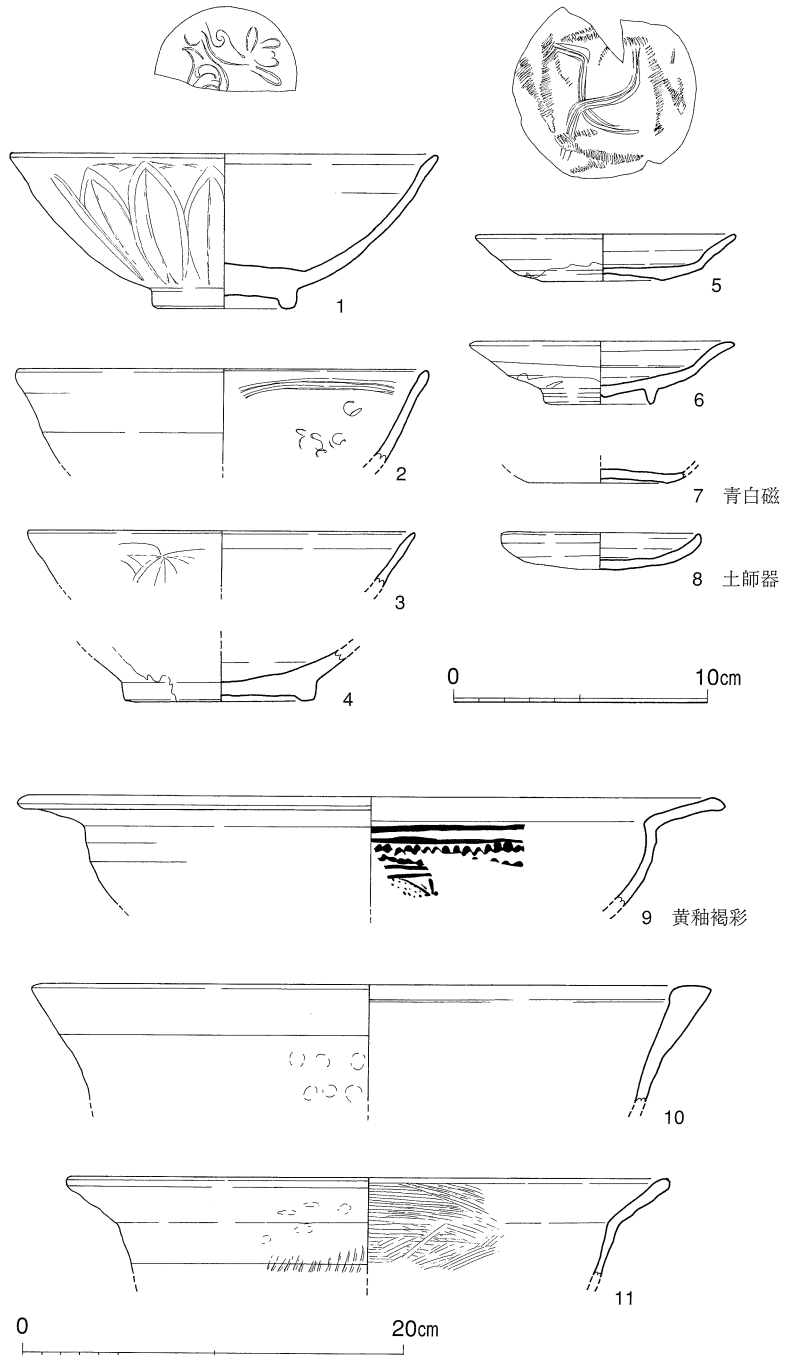
27.6cm前後をはかる。44は口径29.6cm前後をはかる。いずれも端部の上下端をやや拡張し、体部内面は板ナデを施す。45の瓦質土器羽釜は、口径18.4cm前後をはかる。口縁部は内傾し、鏝も上方へ立ち上がり脚付の可能性が高い。46の無釉陶器蓋は器高2.4cm以上、口径23.2cm前後をはかる。大部分は包含層掘削時に出土したが、接合関係から同遺構に含めることにした。47の褐釉陶器壺は、頸部径12.4cm前後をはかるが、細片のため詳細は不明である。48の黄釉陶器鉢は器高8.6cm以上、口径21.0cm前後をはかる。口縁部および外面は無釉で、内面は施釉される。口縁上端に焼き台の痕跡がみられる。側溝掘削時に出土したが区画溝1および当遺構出土遺物との接合関

係が確認されたことから、当遺構の遺物として扱った。49の土師器羽釜は器高22.3cm以上、口径29.6cm前後をはかる。口縁端部は屈曲し、外方に伸びる。内面と外面下半はハケ、外面上半は押圧を施す。50の瓦質土器盤（火鉢）は器高9.8cm以上、口径45.8cm前後をはかる。

土器集積遺構から出土した遺物を見ると、土師器皿が主体となって、瓦器碗・羽釜・東播系須恵器コネ鉢のほか、国内搬入品のほか合子などの青白磁や黄釉陶器鉢や、無釉陶器蓋などの貿易陶磁も少量含む。このほか、釘、小刀などの金属製品も周辺から出土し、その総量は遺物収蔵箱にして10箱以上となる。なお、土器集積遺構は出土遺物から13世紀前半となる。

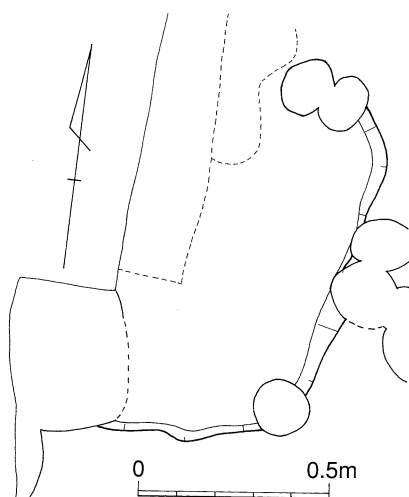
土坑1 区画中央付近で検出した、北部第2層第1面から掘削された土坑である。土坑の北側は旧水路によって破壊されているが、残存する部分から長軸長0.9m、短軸長0.6m、深さ0.2m程度の平面楕円形を呈する土坑に推定できる。土坑埋土には炭を多く含み、中層付近からは多数の貿易陶磁を含むまとまった遺物が出土した。第36図に出土遺物を掲載した。

土坑1 出土遺物 1は龍泉窯系蓮弁文碗で器高6.2cm、口径は16.2cmをはかる。2は龍泉窯系劃花文碗で口径16.2cm前後をはかる。3は龍泉窯系蓮弁文碗の口縁部で、口径は15.4cm前後をはかる。4は白磁Ⅳ類碗の底部で、高台径は7.5cm前後をはかる。5は同安窯系青磁皿で器高1.8～1.9cm、口径10.3cmをはかる。6は白磁Ⅲ類皿で器高2.6cm、



第36図 土坑1 出土遺物 (1～8 1:3、9～11 1:4)

3. 調査の成果



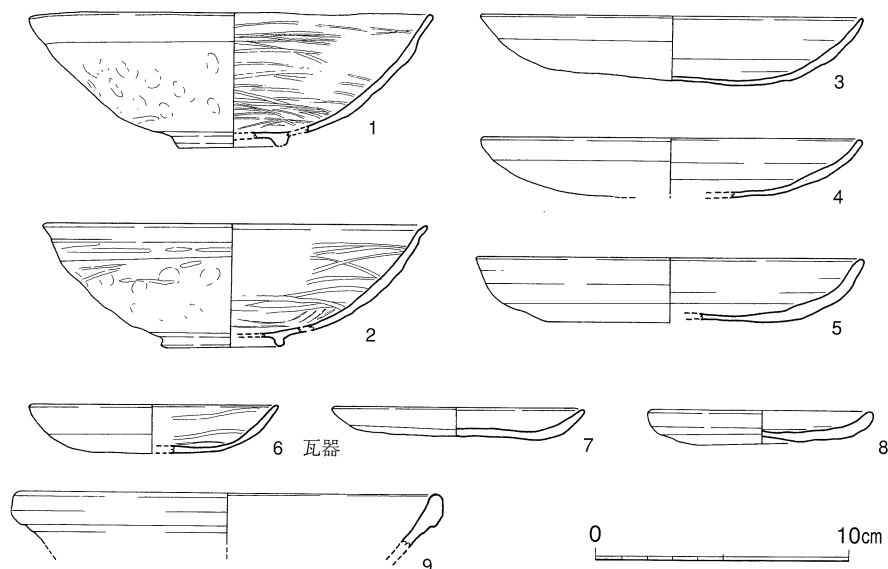
第37図 土坑 2 平面図
(1 : 20)

口径は10.4cmをはかる。7は青白磁皿底部で、底部径は5.4cm前後をはかる。見込みは指ナデの痕跡が認められる。8の土師器小皿は端部を面取りする。器高1.5cm、口径7.9～8.0cmをはかる。9は黄釉陶器盤で、器高5.7cm以上、口径36.2cm前後をはかり、内面は鉄釉で施文される。口縁部上面は、釉を拭き取る。10の瓦質土器盤（火鉢）は口径36.2cm前後をはかる。11の土師器鍋は、口径32.0cm前後をはかる。体部外面にタタキ痕を残す。13世紀後半頃の所産と考えられる。

土坑 2 区画中央付近で検出した、北部第2層第3～4面から掘削された土坑である。平面がややいびつな方形を呈し、1辺2.0m、深さ30cm前後をはかる。遺構埋土は2層程度に区分できる。下層付近から第38図の遺物が出土した。土坑 2

は12世紀後半頃の所産と言える。

土坑 2 出土遺物 1・2は和泉型瓦器碗である。1は器高5.2～5.3cm、口径16.0cmをはかる。内面にやや粗雑なヘラミガキが施される。2は器高4.8cm、口径15.0cmをはかる。外面上半に粗雑なヘラミガキが施される。見込みに平行線状の暗文が施される。1・2ともにやや腰の張った器形となることから、Ⅲ-1期である。3～5は土師器大皿である。3は器高2.5～2.7cm、口径15.0cmをはかる。4は器高2.3cm、口径15.0cm前後をはかる。ともに、口縁部に1段ナデを施す。5は器高2.5cm、口径15.2cmをはかる。口縁部に2段ナデを施す。6の瓦器皿は器高1.9cm、口径9.8cmをはかる。内面に粗雑なヘラミガキを施す。7・8は土師器小皿である。7は器高1.1～1.3cm、口径9.8cmをはかる。8は器高1.4cm、口径9.0cmをはかる。7・8ともに1段ナデを施す。9の白磁Ⅳ類碗は、口径16.4cmをはかる。

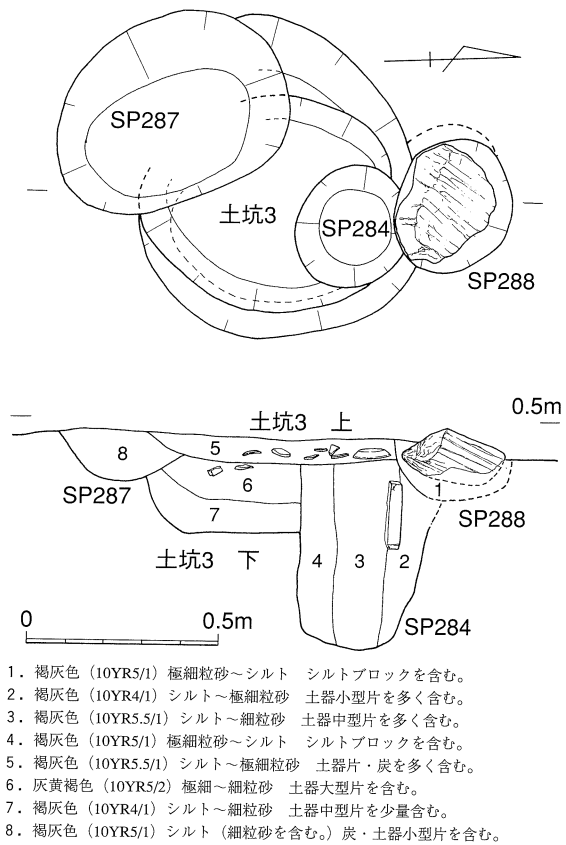


第38図 土坑 2 出土遺物 (1 : 3)

土坑3 土器集積遺構の下から検出した、北部第2層第1～2面の遺構である。柱穴や土坑などが重複しているため、正確な平面形・規模は明確にできないものの、土坑の断面観察および掘削時の所見から長軸長0.7m前後、深さ7cmをはかる、平面楕円形を呈する土坑と考えられる。土坑からは、第40図の遺物が出土したが、土師器皿類の量は極めて多く、土師器集積土坑の一部となる可能性も残る。

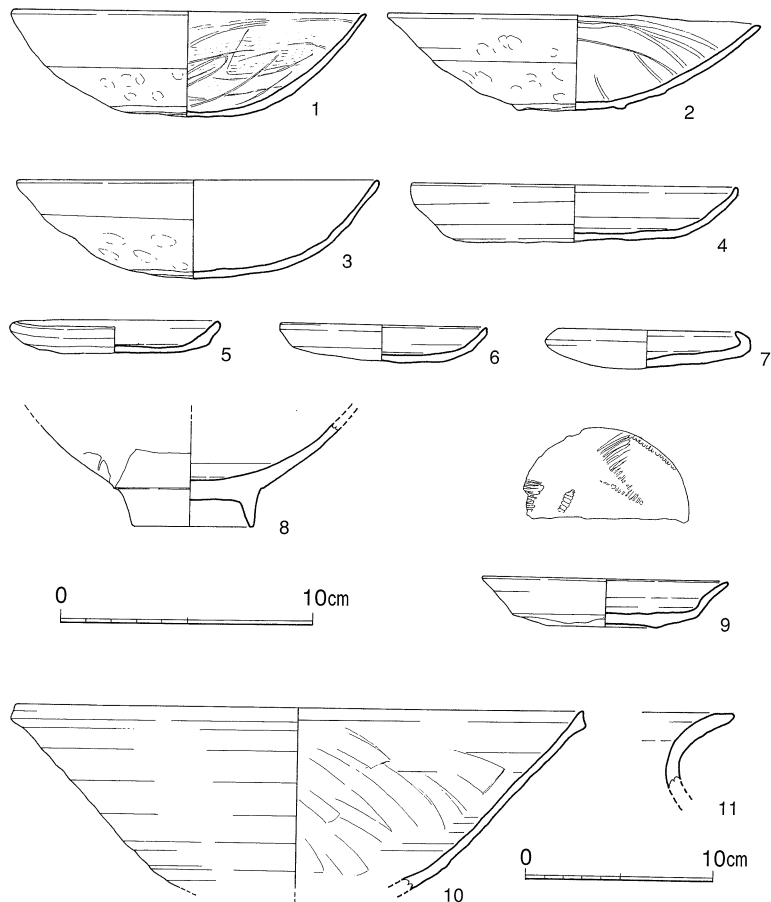
土坑3 出土遺物 1～3の和泉型瓦器碗は、器高3.8～4.2cm（平均4.0cm）、口径14.1～14.8cm（平均14.4cm）をはかる。1・2の見込みには平行線状の暗文が施される。2のみ、高台が断面台形状のものとなるが、ほかは粘土紐を取り付けただけである。Ⅲ-3期となる。4の土師器大皿は、器高2.0～2.3cm、口径13.0～13.6cmをはかる。口縁端部は、つまみ上げ

て側面を面取りする。5・6は土師器小皿である。5は器高1.3cm、口径8.2cm前後をはかる。6は器高1.5cm、口径8.2cmをはかる。いずれも、口縁端部は面取りにする。7は土師器皿で、口縁部が内側に折り込まれ、コースター状となる。器高1.5～1.6cm、体部径8.2cm前後をはかる。8の白磁V類碗は、残存高4.8cm、高台径4.8cm前後をはかる。9の同安窯系青磁皿は器高1.9cm、口径9.9cm前後をはかる。10の東播系須恵器こね鉢は器高9.5cm以上、口径30.0cm前後をはかる。11の常滑焼甕口縁部



1. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂～シルト シルトブロックを含む。
2. 褐灰色 (10YR4/1) シルト～極細粒砂 土器小型片を多く含む。
3. 褐灰色 (10YR5.5/1) シルト～細粒砂 土器中型片を多く含む。
4. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂～シルト シルトブロックを含む。
5. 褐灰色 (10YR5.5/1) シルト～極細粒砂 土器片・炭を多く含む。
6. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂 土器大型片を含む。
7. 褐灰色 (10YR4/1) シルト～細粒砂 土器中型片を少量含む。
8. 褐灰色 (10YR5/1) シルト (細粒砂を含む)。炭・土器小型片を含む。

第39図 土坑3 平面・断面図 (1:20)



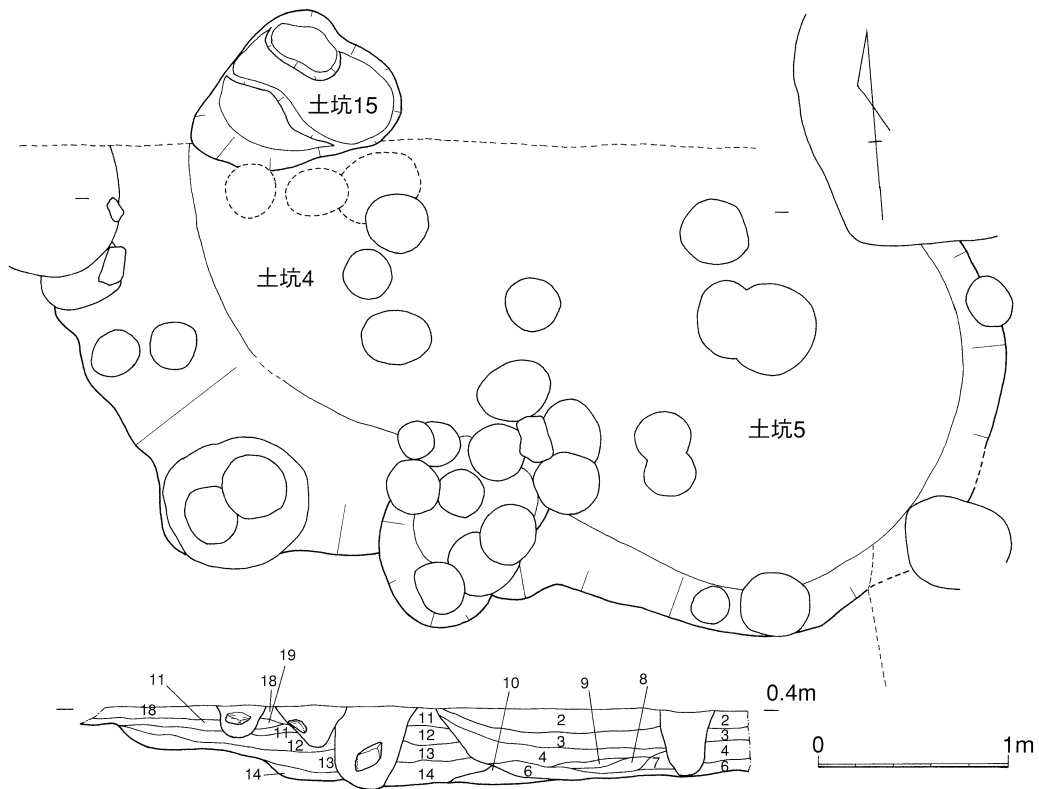
第40図 土坑3 出土遺物 (1～9 1:3、10・11 1:4)

3. 調査の成果

は、口径は復元できなかったが、大型品の可能性がある。

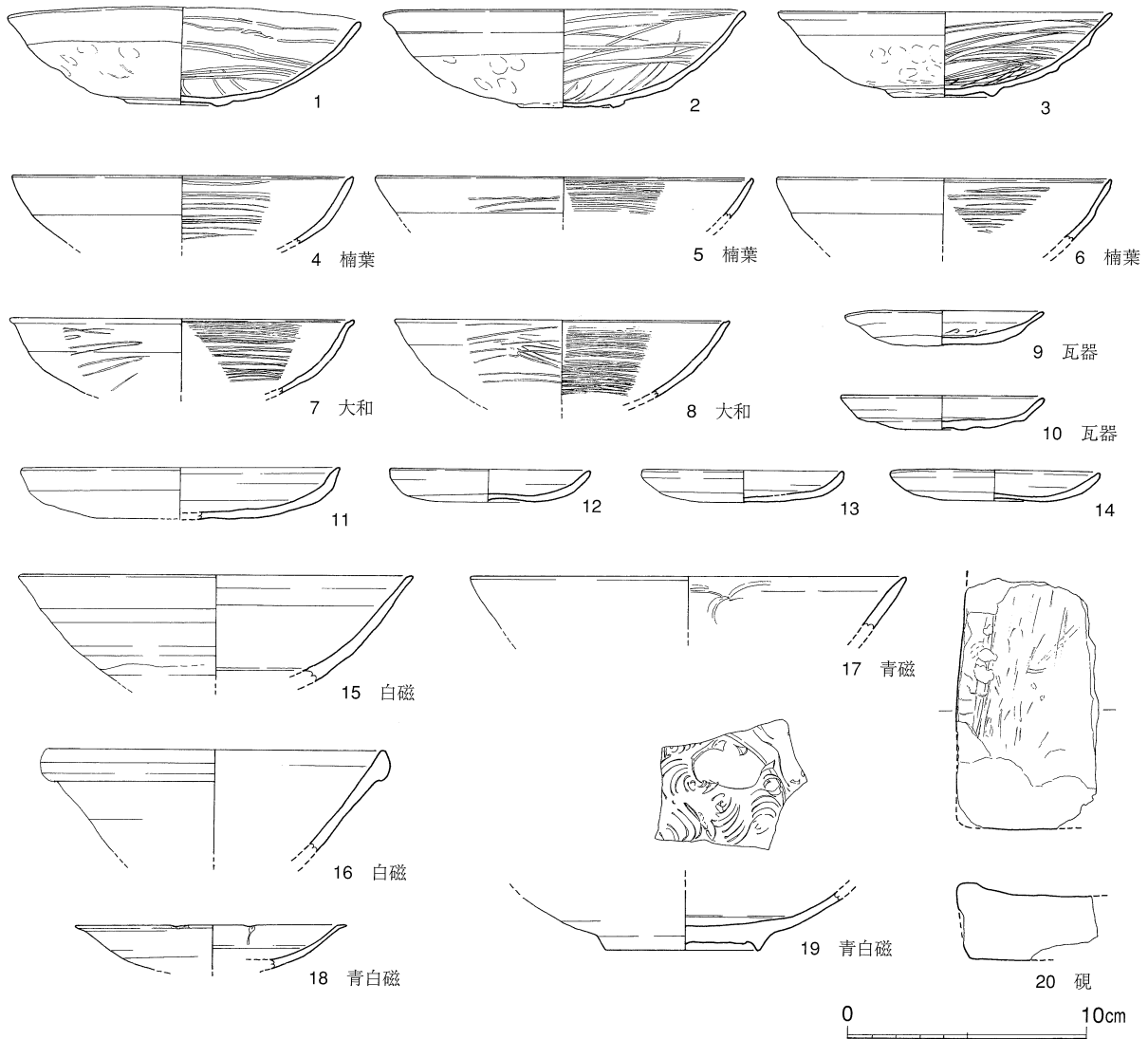
土坑4・5 区画東部で検出した北部第2層第3面の遺構である。土坑4は、土坑5および旧水路によって破壊されているため、正確な規模は不明であるが、検出部分から長軸長2.0m以上、深さ0.4m程度の不整楕円形を呈するものと考えられる。一方、土坑5は、残存部分から長軸長3.1m、短軸長2.5m程度、深さ0.4mをはかる不整楕円形状の土坑となる。土坑4・5はともに上～中層に埋め戻しに伴う人為的な堆積土が認められることなどで共通する。土坑4は上層から、土坑5は下層から比較的まとまった遺物が出土した。

土坑4 出土遺物 1～3の和泉型瓦器碗は器高3.6～4.1cm（平均3.9cm）、口径14.0～15.1cm（平均14.6cm）をはかる。1・2は見込みに平行線状暗文を、3は格子状暗文を施す。いずれも、内面のヘラミガキは粗雑であるが、高台は粘土紐を丁寧に取り付けている。2はⅢ-2期、他はⅢ-3期である。4～6は、楠葉型瓦器碗である。4は口径14.0cm前後をはかり、体部外面のヘラミガキはなく、内面も隙間の大きい粗雑なヘラミガキが施されるにとどまる。5は、口径15.6cm前後をはかる。体部外面には形骸化した分割ヘラミガキが確認できる。内面のヘラミガキは、比較的密である。6は口径14.0cm前後をはかる。体部外面にヘラミガキはなく、内面のヘラ



- | | |
|---|---|
| <p>2. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細粒砂 (中粒砂を含む。) 炭・土器小型片を少量含む。</p> <p>3. 暗黄灰色 (2.5Y4/2) 極細粒砂 (細粒砂を含む。) 土器小型片を含む。</p> <p>4. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト～細粒砂 土器小型片・炭を含む。</p> <p>6. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト～細粒砂 土器小型片・炭を含む。</p> <p>7. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト～極細粒砂 土器片・炭を含む。</p> <p>8. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 極細粒砂 (中粒砂を含む。) 灰白色 (5Y7/1) 粘土～シルトブロックを少量含む。炭・土器小型片を少量含む。</p> <p>9. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト 礫を極少量含む。</p> <p>10. 褐色 (10YR4/6) シルト～極細粒砂 暗黄灰色 (10YR5/2) シルトブロック</p> | <p>を含む。土器小型片を少量含む。</p> <p>11. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細～中粒砂 暗黄灰色 (10YR5/2) シルトブロックを含む。土器・炭を多く含む。</p> <p>12. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト～極細粒砂 黄灰色 (2.5Y6/1) シルトブロックを含む。土器・炭を含む。</p> <p>13. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細～細粒砂 炭・土器小型片を少量含む。</p> <p>14. 暗黄灰色 (2.5Y4/2) 極細～細粒砂 におい黄色 (2.5Y6/4) シルトブロックを含む。炭・土器小型片を極少量含む。</p> <p>18. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細～細粒砂 黄灰色 (2.5Y5/1) シルトブロックを少量含む。炭・土器小型片を少量含む。</p> |
|---|---|

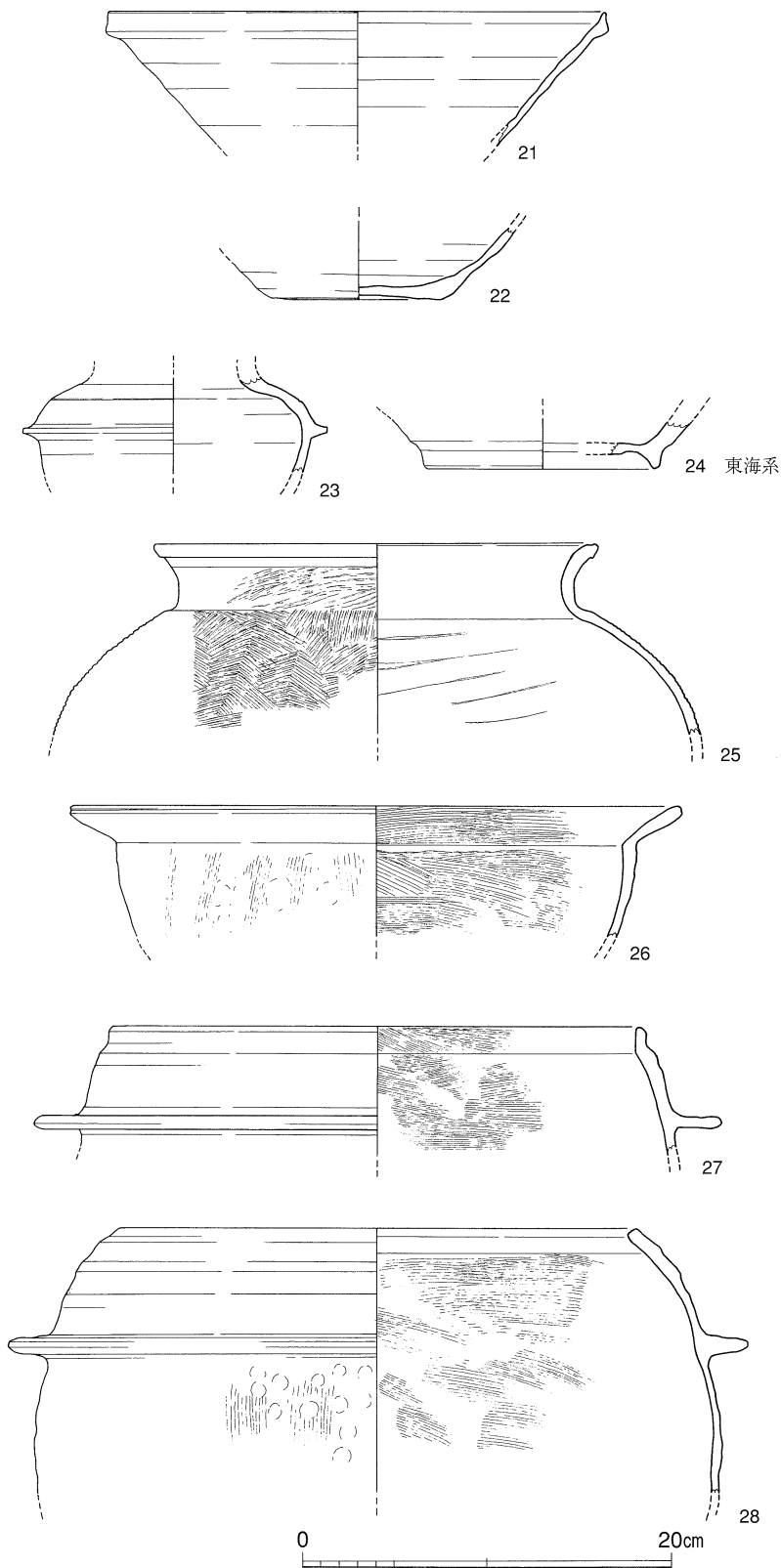
第41図 土坑4・5・15平面・断面図 (1:40)



第42図 土坑4 出土遺物1 (1:3)

ミガキもやや隙間がある。4・6はⅢ-2期、5はⅡ-3期である。7・8は、大和型瓦器碗である。7は、口径14.0cm前後をはかる。8は、口径13.8cm前後をはかる。いずれも体部外面には粗雑な分割ヘラミガキが、内面にはやや隙間のあるヘラミガキが施される。いずれもⅡ-B期で、土坑15からの混入と考えられる。9・10は、瓦器皿である。9は器高1.4~1.5cm、口径8.4cmをはかる。見込みに粗雑なヘラミガキが施される。10は器高1.5~1.6cm、口径8.5cmをはかる。内面はナデを施すだけにとどまる。11の土師器大皿は器高2.0~2.1cm、口径13.2cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。12~14の土師器小皿は器高1.3~1.4cm (平均1.3cm)、口径8.2~8.8cm (平均8.4cm)をはかる。いずれも、口縁部は面取りする。15の白磁碗は残存高4.5cm以上、口径16.0cm前後をはかる。V類と考えられる。16の白磁Ⅳ類碗は、口径14.0cm前後をはかる。17の龍泉窯系劃花文碗は、口径18.0cm前後に復元できるが、検討の余地を残す。18の青白磁皿は器高1.8cm以上、口径11.2cm前後をはかる。口縁端部に輪花状の切り込みを入れ、白堆線が内面に施される。19の

3. 調査の成果



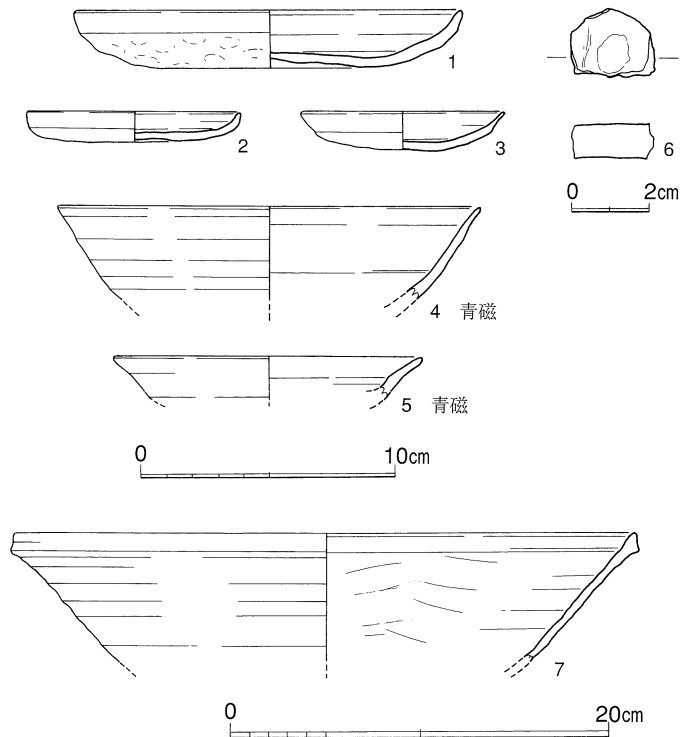
第43図 土坑4 出土遺物2 (1:4)

青白磁盤は高台径6.2cm前後をはかる。博多遺跡群出土の類似品をみると、直径30cm前後の大型品となる。内面に花鳥文の意匠をヘラ状工具で施文する。胎土に不純物を多く含む。20の硯は長さ10.5cm以上、幅6.9cm以上、厚さ3.3cm前後をはかる。原礫面を多く残し、加工は最小限度にとどまる。21・22は東播系須恵器こね鉢である。21は器高7.3m以上、口径27.0cm前後をはかる。22は、底部径9.2cm前後をはかる。23の須恵器壺は、突帯径16.4cm前後をはかる。肩部に突帯を伴う器形は、この時期の東播系須恵器にはあまりみられず、西播地方の可能性が指摘されている。また、土坑15から混入した可能性も考えられる。24の東海系須恵器こね鉢は高台径12.4cm前後をはかる。内面に自然釉がかかる。残存部が少ないため、高台径の復元には検討の余地を残す。25の東播系須恵器甕は、口径24.0cm前後をはかる。体部外面に綾杉状のタタキ痕を残す。26の土師器鍋は、口径32.6cm前後をはかる。外面はナデを、内面は横ハケを施す。27・28は土師器羽釜である。27は口径

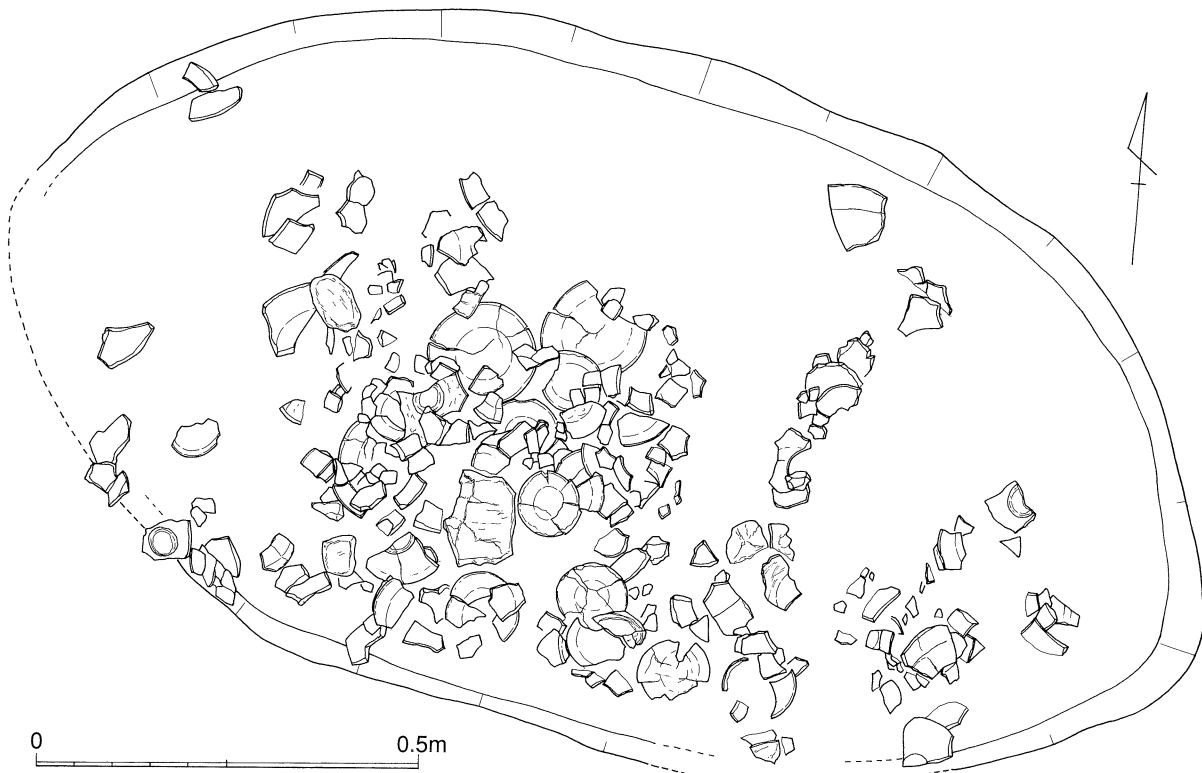
28.6cm前後をはかり、口縁端部は屈曲し直立気味に立ち上がる。28は口径28.0cm前後をはかり、口縁部は内反気味に内傾する。口縁部外面に2段の凹線状のナデを施す。

土坑4は出土遺物から、13世紀前半頃の所産となる。また、土坑5も重複関係から後出するものの、出土遺物の特徴に大きな時期差はない。

土坑5 出土遺物 1の土師器大皿は器高2.3cm、口径15.2cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。2の土師器小皿は器高1.2cm、口径8.2cmをはかる。口縁部は直立する。3の瓦器皿は器高1.5~1.6cm、口径8.2cmをはかる。内面はナデを施すだけにとどまる。4の龍泉窯系青磁碗は、口径

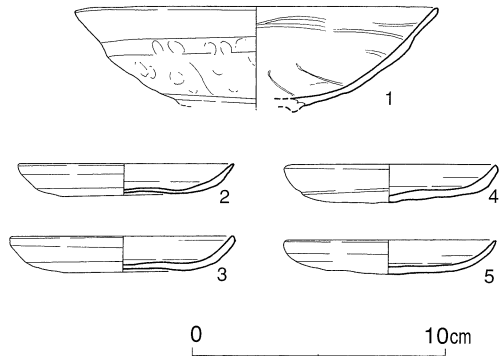


第44図 土坑5 出土遺物
(1~5 1:3、6 1:2、7 1:4)

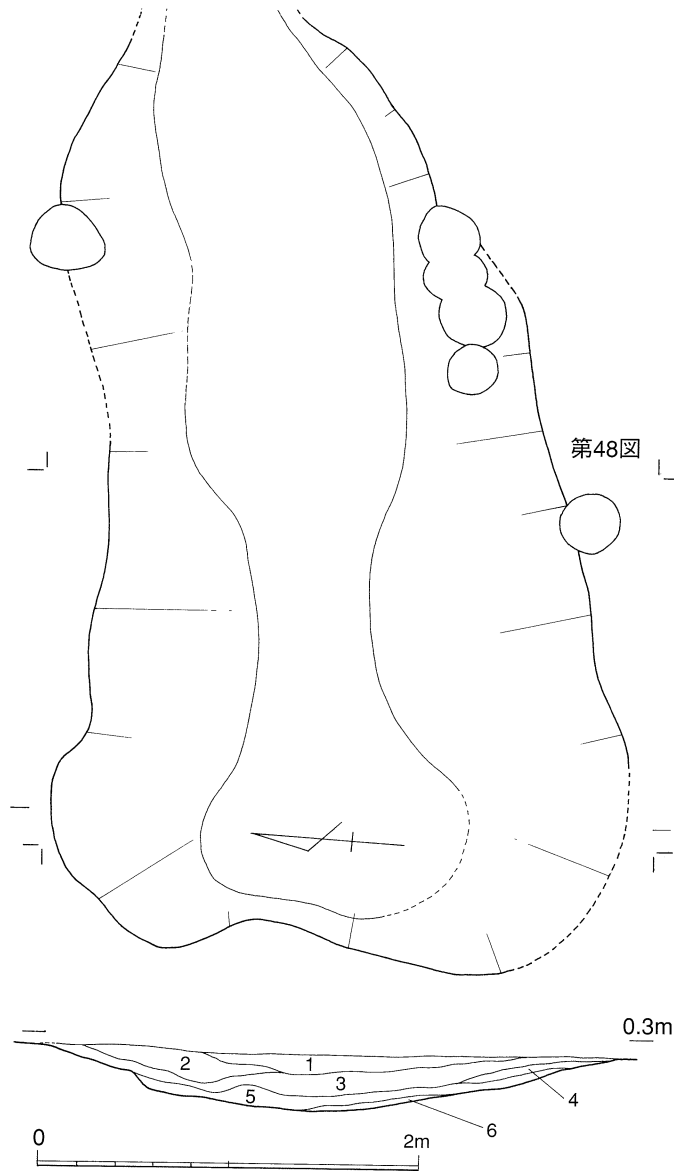


第45図 土坑6 遺物出土状況 (1:10)

3. 調査の成果



第46図 土坑6 出土遺物 (1:3)



1. 暗黄灰色 (2.5Y4/2) 極細粒砂 (中粒砂を含む)。浅黄色 (2.5Y7/4) シルトブロックを含む。炭を少量含む。
2. 暗黄灰色 (2.5Y4/2) シルト～極細粒砂 黄灰色 (2.5Y5/1) シルトブロックを含む。
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 黄灰色 (2.5Y5/1) シルトブロックを含む。焼土・炭・土器大型片を多く含む。特に炭は層下部に密集する。
4. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト～細粒砂 黄灰色 (2.5Y5/1) 土器小型片・炭を含む。
5. 暗黄灰色 (2.5Y5/2) シルト～極細粒砂 (中粒砂を含む)。炭・土器小型片を少量含む。
6. 黒色 (2.5Y2/1) 炭層 土器を少量含む。

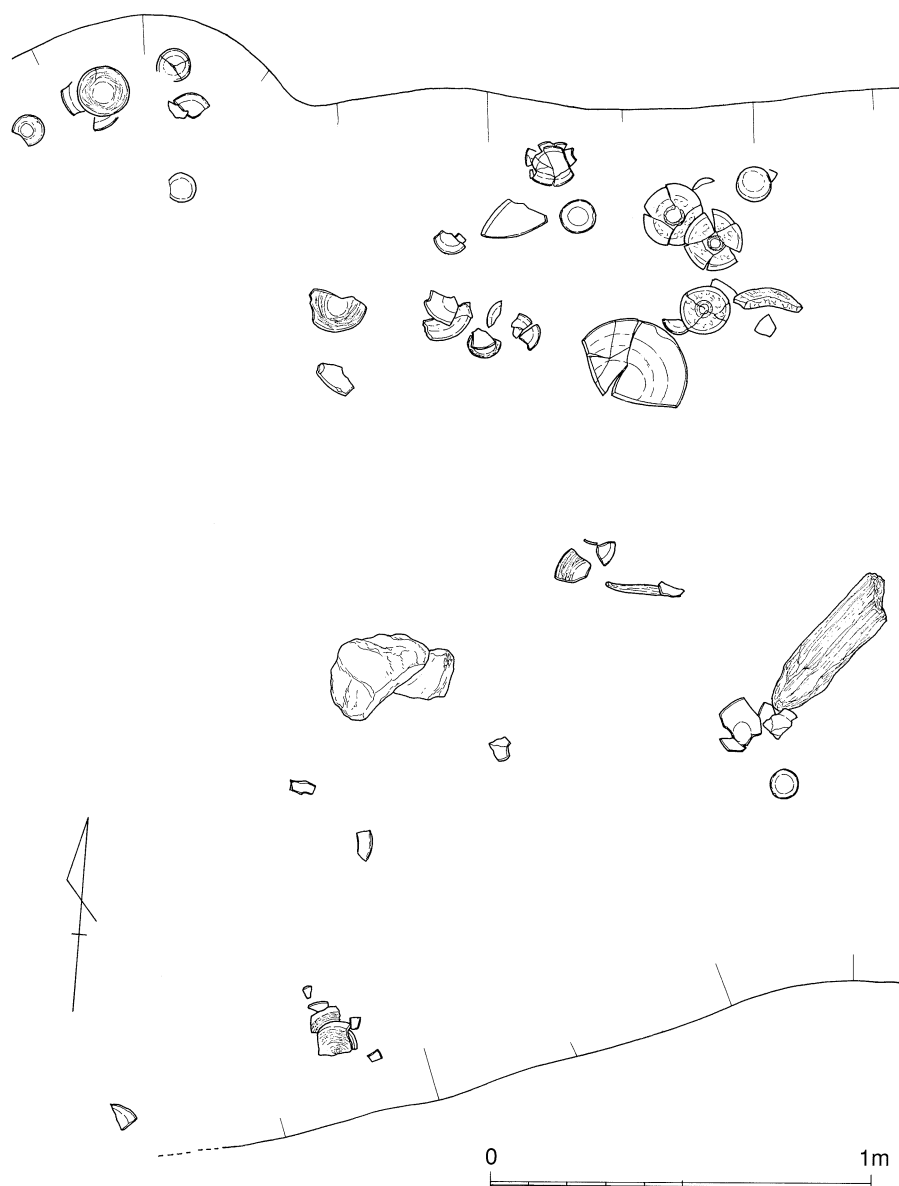
第47図 土坑7 平面・断面図 (1:40)

16.6cm前後をはかる。無文である。5の青磁皿は、口径11.2cm前後をはかる。6の碟は直径1.8～2.0cm、厚さ0.9cmをはかる。7の東播系須恵器こね鉢は、口径33.0cm前後をはかる。内面は密に板ナデを施す。口縁端部の上下端はやや拡張される。

土坑6 区画南東部で検出した、北部第2層第1面の遺構である。長軸長1.7m、短軸長0.95m、深さ0.15mをはかる、平面楕円形状の土坑である。土坑埋土は2層程度に大別でき、このうち上層から土師器皿類を主体とする遺物が出土した。しかし、遺物の残存状態が良くなく実測できたものは第46図に挙げたものだけにとどまる。なお、これら出土遺物から、土坑6は13世紀前半の所産と言える。

土坑6 出土遺物 1の和泉型瓦器碗は、器高4.2cm以上、口径14.4cm前後をはかる。Ⅲ-3期である。2～5は土師器小皿である。器高1.2～1.5cm (平均1.4cm)、口径8.1～9.1cm (平均8.6cm)をはかる。2・4は1段ナデ、3は口縁端面取り、5は不明である。

土坑7 区画南東部で検出した土坑で、建物群2との境界である区画溝1と重複する位置に掘削されている。このため、土坑7は建物群2に伴う遺構、もしくは区画溝と一連の遺構となる可能性が考えられるが、建物群1に伴う遺構として扱うこととした。土坑は長辺5.0m、短辺2.7m、深さ0.4mをはかる、平面隅丸長方形の土坑となる。土坑埋土は3層程

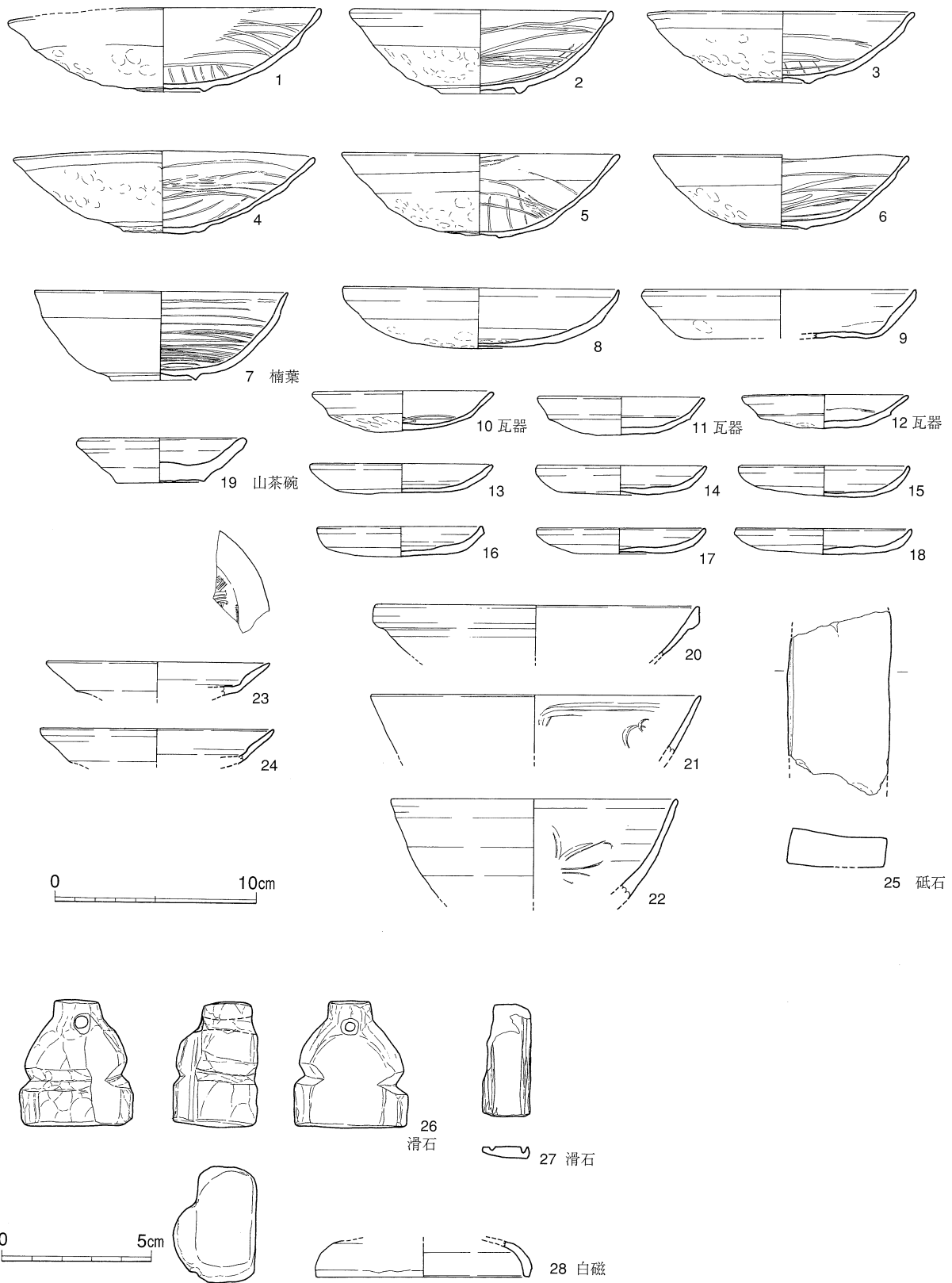


第48図 土坑7遺物出土状況(1:20)

度に区分できる。上層は浅黄色シルトブロックを多く含む整地土で、中層には炭・灰・焼土を多く含む。特に、中層下部からまとまった土器が出土した。また、最下層に炭の堆積がみられるが、焼土を含まないことから、火災に伴うものとは考えにくい。なお、土坑7は第49・50図の遺物から下層は12世紀末～13世紀初頭、中層は13世紀前半と言える。なお、遺物のうち、下層と表記しなかったものは、概ね中層からの出土遺物となる。

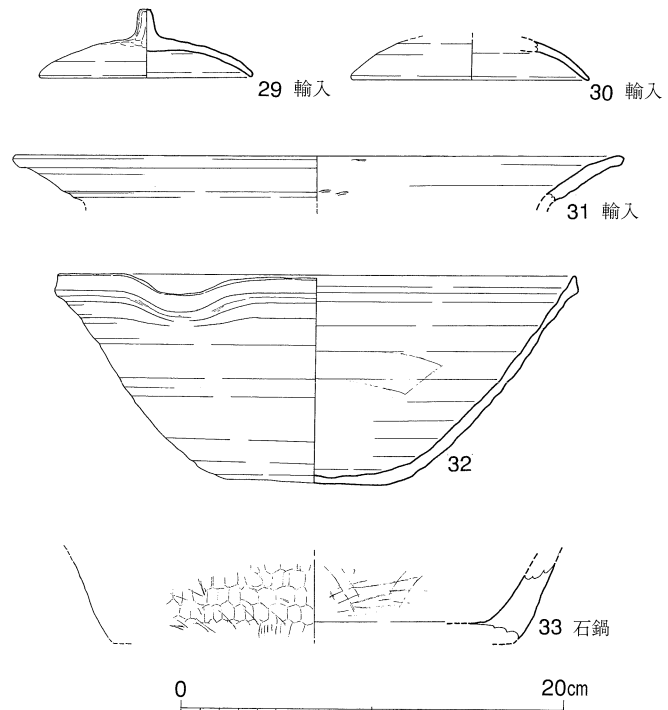
土坑7 出土遺物 1～6は、和泉型瓦器碗である。このうち、1だけが器高4.2cm、口径15.7cmと、一回り大きく、Ⅲ-2期となる。19とともに下層からの出土遺物である。2～6は器高3.6～4.2cm(平均3.9cm)、口径12.8～14.4cm(平均13.6cm)をはかる。いずれも、見込みに平行線状の暗文を施す。Ⅲ-3～Ⅳ-1期である。7の楠葉型瓦器碗は器高4.4cm、口径12.6cmをはかる。外面にヘラミガキはみられず、内面も隙間が大きく、目視できる。見込みに連結輪状暗文を

3. 調査の成果



第49図 土坑7 出土遺物1 (1~25 1:3、26~28 1:2)

施す。Ⅲ-2期と言える。8・9は土師器大皿である。8は器高3.0cm、口径13.8cmをはかる。口縁部を内反気味につまみ上げる。9は器高2.45cm、口径13.6cmをはかる。口縁部をつまみ上げ、側面を面取りする。10~12は瓦器皿で、器高1.7~1.9cm（平均1.8cm）、口径8.3~9.2cm（平均8.7cm）をはかる。10は見込みに連結輪状暗文を施すが、11・12はナデを施すのみにとどまる。13~18は土師器小皿で、器高1.3~1.5cm（平均1.4cm）、口径8.1~9.1cm（平均8.5cm）をはかる。13・16・18は口縁端部を面取りし、14・15は端部をつまみ挙げ、側面を面取る。17は、口縁部に1段ナ

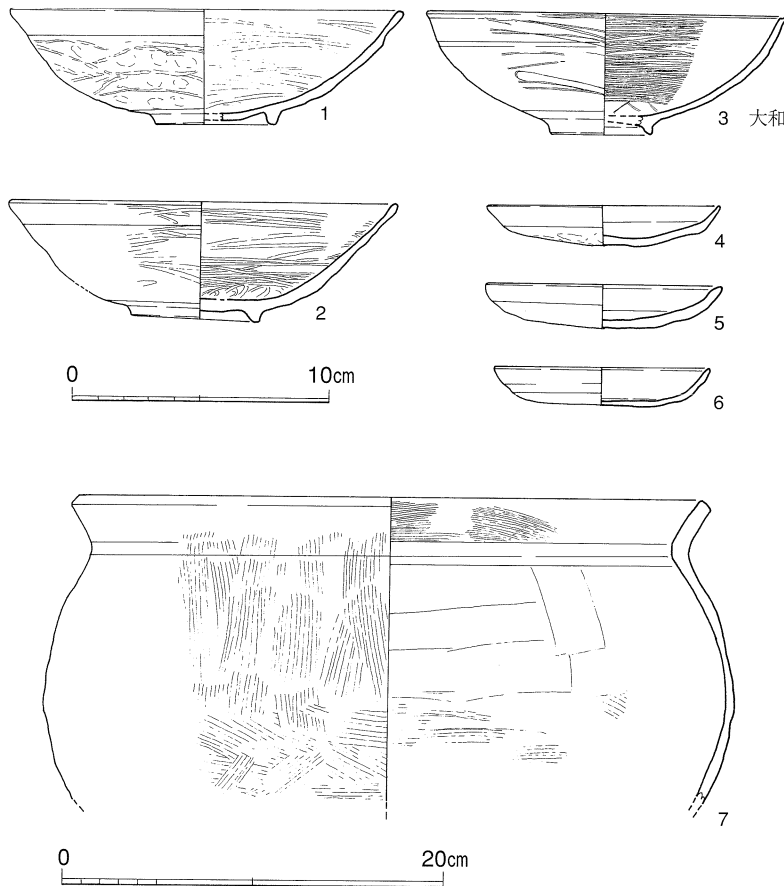


第50図 土坑7 出土遺物2（1：4）

デを施す。19の山皿は器高2.2cm、口径8.5cmをはかる。尾張産V形式と指摘されている。1と共伴する下層遺物である。20の白磁Ⅳ類碗は、口径16.0cm前後をはかる。21・22は龍泉窯系劃花文碗である。21は口径16.4cm前後、22は器高5.0cm以上、口径14.2cm前後をはかる。23・24は同安窯系青磁皿である。23は器高1.65cm以上、口径10.2cm前後、24は器高1.65cm以上、口径11.6cm前後をはかる。25の砥石は全長9.15cm以上、幅5.0cm、厚さ1.8cmをはかる。26の棹秤2次加工品は高さ4.2cm、長軸径3.8cmをはかる。滑石製で、石鍋口縁部を母材とする再加工品である。下層遺物である。27の小型硯は全長3.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmをはかる。滑石製である。28の白磁合子蓋は器高1.2cm以上、口径7.2cm前後をはかる。29の無釉陶器蓋は器高3.7cm、口径11.4cm前後をはかる。赤褐色の胎土を有し、頂部に突起状のつまみがつく。中国製の可能性もあるが、類似品は見られない。30の陶器蓋は、口径12.4cm前後をはかる。須恵器風の砂粒を多く含む胎土の特徴や、29に類似する器形で、国内では類似品は見当らず、産地不明の輸入陶器と考えられる。31は陶器盤の口縁部と考えられる。口径は31.8cm前後に復元できるが、復元には検討の余地を残す。30と同様に器形、胎土から輸入陶器と考えられる。32の東播系須恵器こね鉢は器高11.1cm、口径は27.2cmをはかる。内面に粗雑な板ナデを施し、口縁端部は上下にやや拡張する。33の石鍋底部は底部径21.4cm前後をはかる。破断部に加工痕はない。

土坑15 土坑4直下で検出した第3層上面の遺構である。建物群との関係は明確ではないが、ここでは建物群1に関わる遺構として扱った。遺構は、水路による攪乱部分で確認され、土坑4掘削後、一部を掘削した結果、本来の幅は1.6m前後、深さ0.3m程度の南北に細長い遺構となる。なお、土坑15は第51図の遺物から12世紀中頃の所産と言える。

3. 調査の成果



第51図 土坑 15 出土遺物 (1~6 1:3、7 1:4)

土坑15 出土遺物

1・2は和泉型瓦器碗である。1は器高4.6cm、口径15.3cmをはかる。2は器高4.5~4.7cm、口径15.3cmをはかる。ともに体部外面全体に粗雑なヘラミガキを、内面もやや粗雑なヘラミガキを施す。1の見込みは不明であるが、2はやや密な連続平行線状の暗文を施す。いずれも高台は断面台形状を呈する。Ⅱ-2期である。3の大和型瓦器碗は器高4.7~4.8cm、口径14.2cm前後をはかる。体部外面に粗雑な分割ヘラミガキを、内面には比較的

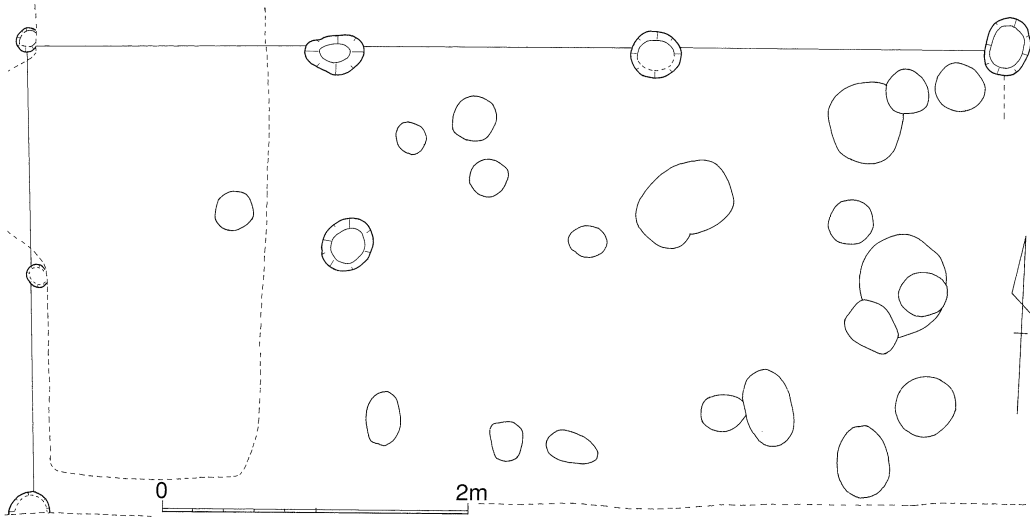
密なヘラミガキが施される。見込みには、連結輪状暗文が施される。Ⅱ-B期と考えられる。4~6は、土師器小皿である。器高1.5~1.75cm(平均1.6cm)、口径9.2~9.3cm(平均9.3cm)をはかる。いずれも口縁部に1段ナデを施す。7の土師器鍋は、器高16.1cm以上、口径32.8cm前後をはかる。体部内面は横方向の板ナデ、外面上半は縦方向のハケ、下半部には横・斜方向のハケを施す。このほか、竈などの遺物も出土した。

イ. 建物群 2

建物群2は、北辺を境界となる区画溝から、約4.5mばかり検出しただけにとどまる。このため、区画の東西幅が17m以上となる以外、区画の規模は明確ではない。また、建物群2は区画溝を界に、建物群1より約30cmほど低くなっている。一方、区画内から多数の柱穴を確認したが、明確に主屋となる建物は復元できなかった。副屋となる可能性が考えられる建物11・12があるものの、確実な復元とは言いにくい。以下、建物群の状況について述べる。

建物11 区画北部で検出した掘立柱建物である。検出部分から少なくとも南北2間(3.0m)以上×東西3間(6.4m)以上、面積にして19.2m²以上となる。柱穴の間隔は、東西で2.0~2.2m、南北で1.5・1.6mと比較的均等と言える。建物の主軸方向はN-86°-Eとなる。

遺物が出土していないため、建物11の時期は明確ではないが、柱穴の深度は5cm未満と浅く、



第52図 建物11平面図 (1:50)

1区南部第2層第1～2面の遺構と考えられる。

建物12 区画北東で検出した、総柱の可能性ある掘立柱建物である。検出部分から南北2間(4.25m)以上×東西3間(6.25m)、面積にして26.6m²以上となる。柱穴の間隔は、東西で2.15～2.25m、南北で2.1・2.2mと比較的均等である。また、柱穴の一部に、根石を伴うものがみられるが、大型の石を配置するものではない。建物の主軸方向はN-75°-Wとなる。

遺物が出土していないため、建物12の時期は明確ではないが、柱穴の深度は5cm未満であり、1区南部第2層第1～2面の遺構と考えられる。

柱穴列2 (建物13?) 区画北東で検出した柱穴列で、掘立柱建物の可能性ある。検出した

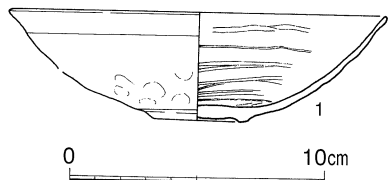


第53図 建物12平面図 (1:50)

3. 調査の成果

柱穴は、直径30cm、深さ25cm前後をはかり、比較的明確な掘り形を有するが、これに対応する南辺・東辺の柱穴は確認できなかった。また、建物とした場合、他の建物と主軸方向がやや異なることから、建物の可能性は考えられるものの、柱穴列として扱った。

柱穴列から想定される建物は、南北1間(2.0m)以上、東西2間(4.2m)で、N-20°-Wを主軸とする。なお、遺構の時期については、第54図のⅢ-3期の和泉型瓦器碗(器高4.1cm・口径13.6~13.8cm)から、13世紀前半と言える。



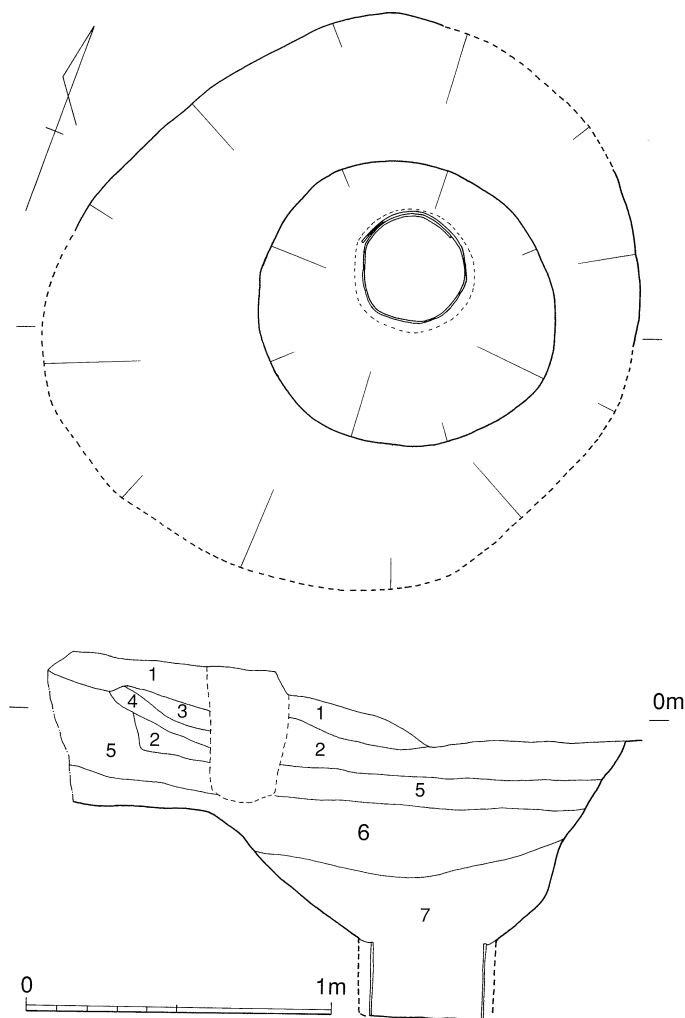
第54図 柱穴列 2 出土遺物 (1:3)

井戸2 区画北東で検出した、曲物を水溜に転用した井戸である。井戸の上面は直径2.0m、深さ1.2mをはかる円形状の平面を呈する。その基底面に、直径35cm、器高25cmの曲物を

1段据えて水溜とする。井戸の上層埋土はブロック土を含まないが、埋戻土と考えられる。また下層には、均質な灰色シルトが堆積する。これら埋土から井戸は機能停止後しばらく放置され、何らかの理由で埋め戻されたものと考えられる。

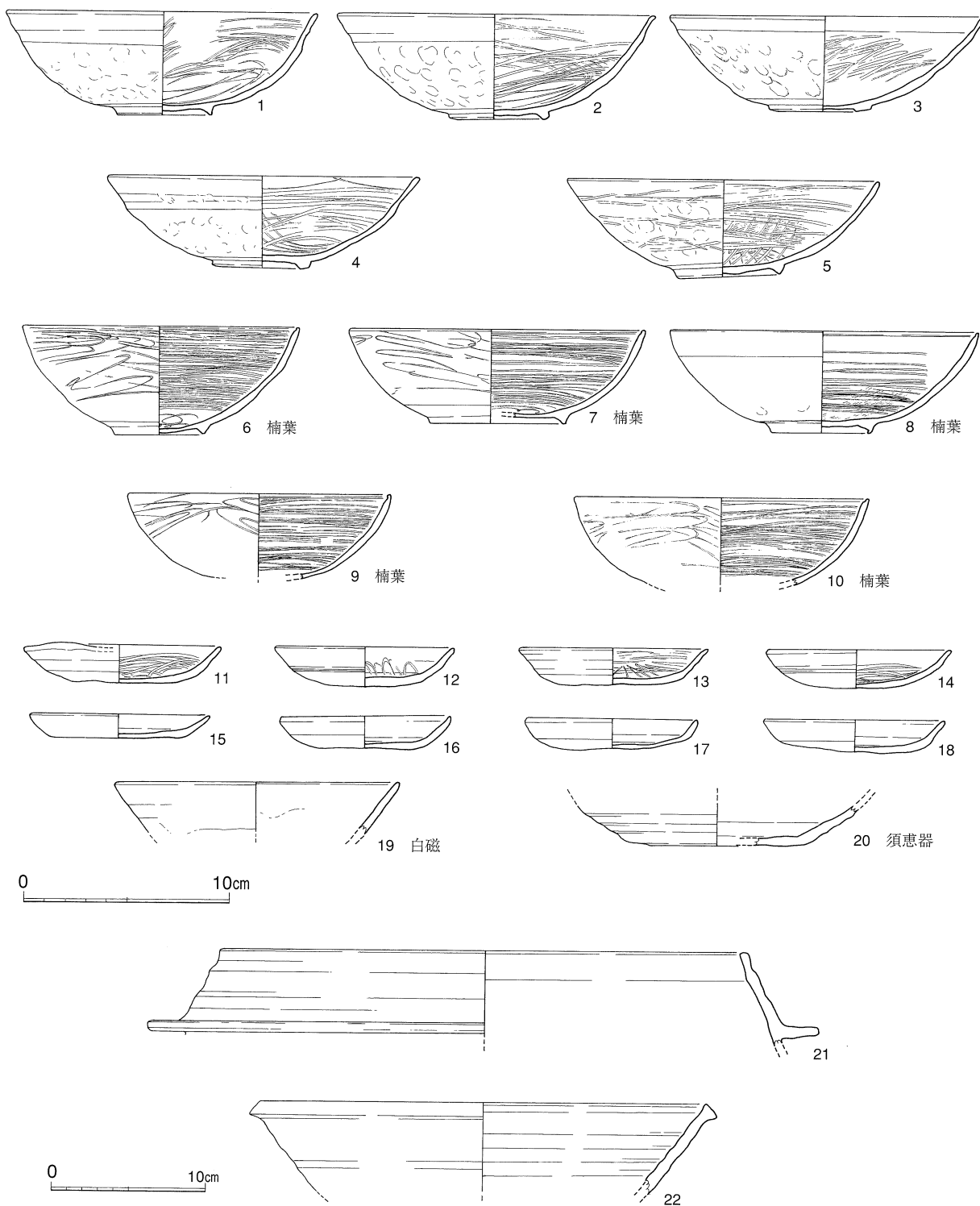
なお、井戸上層下部からは、第56図の遺物が出土した。このうち、瓦器碗をみると、和泉型は概ねⅢ-1期、楠葉型はⅡ-3期でまとまることから、井戸2の埋め戻しは概ね12世紀後半に行われたと言える。

井戸2 出土遺物 1~5は和泉型瓦器碗である。器高4.5~5.1cm(平均4.8cm)、口径15.0~15.4cm(平均15.3cm)をはかる。1~4は体部外面にヘラミガキはなく、内面はやや粗雑なヘラミガキが施される。見込みは、3が不明瞭である以外は平行線状の暗文を施す。Ⅲ-1期である。5は体部外面全体に粗雑なヘラミガキを施し、見込みには平行線状の暗文を施す。Ⅱ-2期である。井



1. 浅黄色 (5Y8/3) シルト
2. オリーブ灰色 (5Y5/1) 細粒砂 瓦器碗完形品などの土器大型片を含む。
3. オリーブ灰色 (5Y5/1) 細粒砂 (中~粗粒砂) 瓦器碗完形品などの土器大型片を含む。
4. 暗青灰色 (5B4/1) 中~粗粒砂 炭を少量含む。土器を含む。
5. 暗青灰色 (5PB4/1) シルト~極細粒砂
6. 灰色 (N4/0) シルト (細粒砂を含む)
7. 黄灰色 (2.5Y4/1) 均質なシルト 自然堆積土

第55図 井戸2平面・断面図 (1:25)



第56図 井戸2 出土遺物 (1~20 1:3、21・22 1:4)

戸機能段階の遺物の可能性もある。6~10は、楠葉型瓦器碗である。6~8は器高4.6~5.2cm (平均4.9cm)、口径13.4~15.4cm (平均14.4cm)をはかる。ただし、口縁部が歪んでいるため、口径の復元は目安にすぎない。8を除いて、体部外面には粗雑な分割ヘラミガキが、内面には隙間が目立つものの比較的密なヘラミガキが施される。また、見込みには連結輪状暗文が施される。

3. 調査の成果

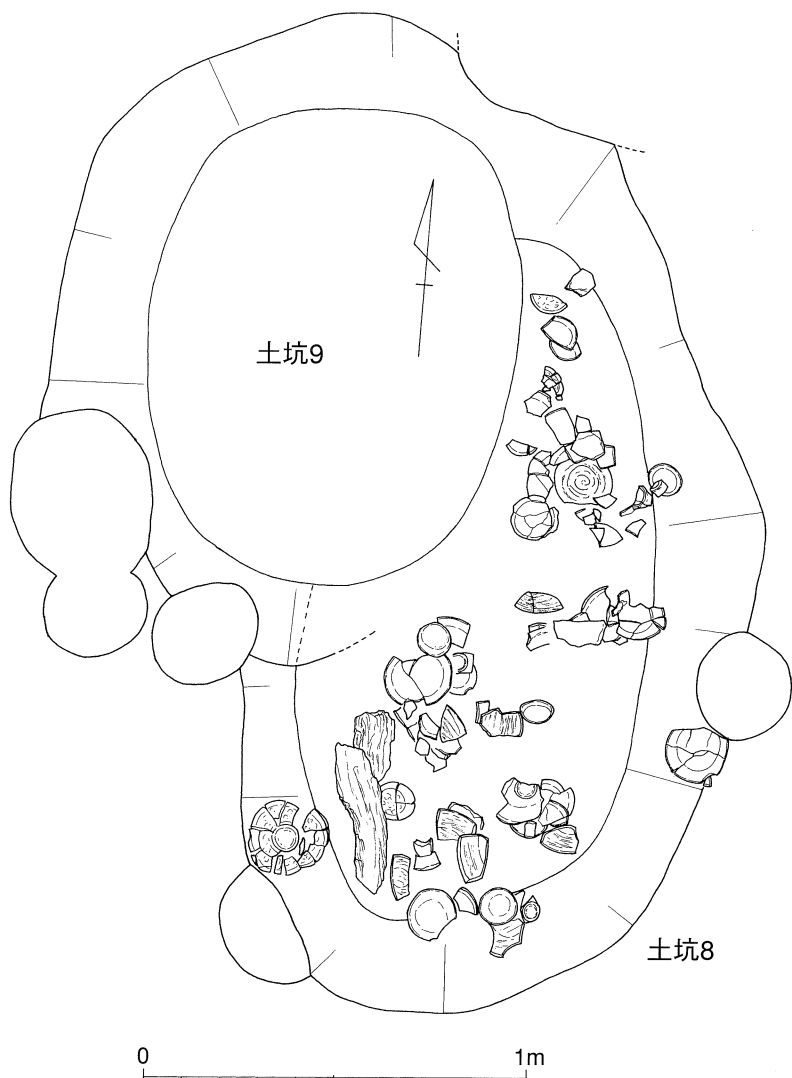
6はⅡ-2期に、7・9・10はⅡ-3期と考えられる。8は外面にヘラミガキはなく、内面も粗雑化しており、見込みに暗文はない。Ⅲ-1期のもので、混入品と考えられる。11~14は瓦器皿で、器高1.8~2.0cm（平均1.9cm）、口径9.1~9.7cm（平均9.4cm）をはかる。11が見込み周辺に不規則にヘラミガキを施す以外は、連続平行線状暗文を施す。15~18は土師器小皿で、器高1.2~1.6cm（平均1.5cm）、口径8.3~8.9cm（平均8.6cm）をはかる。15・17・18は1段ナデ、16は端部をつまみ上げ、側面を面取りする。19の白磁碗は、口径は14.0cm前後をはかる。V類の可能性はある。20の須恵器杯は残存高2.0cm以上、底部径6.8cm前後をはかる。産地は不明である。21の土師器羽釜は、口径34.0cm前後をはかる。口縁端部は屈曲し、やや直立する。22の東播系須恵器こね鉢は、口径29.2cm前後をはかる。口縁端部は上下に拡張する。

土坑8 区画北東部で検出した土坑で、北側は土坑9と重複する。土坑の長軸長は2.45m、短軸長は1.35m、深さ0.25m前後をはかる。土坑埋土は3層に区分できる、このうち、土坑南部では下層から、北部では上層からまとまった遺物が出土している。

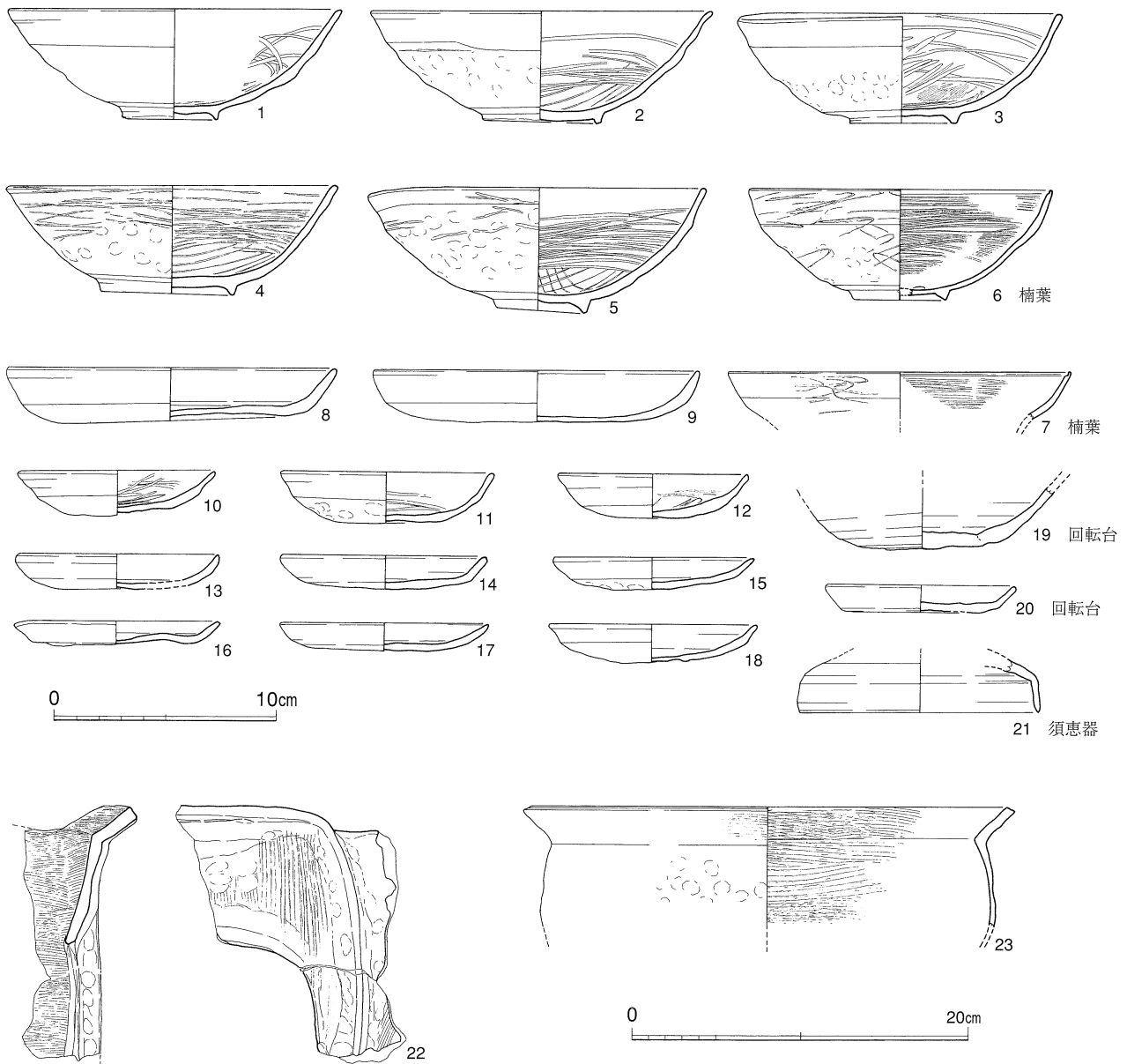
一方、土坑9は、規模・形状ともに土坑8と類似するが、遺物は極少量の土器細片が出土しただけにとどまる。

なお、土坑8は第58図の出土遺物から、12世紀後半の所産となる。

土坑8 出土遺物 1~5は和泉型瓦器碗で、器高は4.9~5.1cm、口径は14.4~15.4cmをはかる。2・4は見込みに平行線状、3は連続平行線状、5は格子状の暗文を施す。1~3は外面にヘラミガキは施されず、Ⅲ-1期である。6、7は楠葉型瓦器碗で、6は器高4.95cm、口径13.6cm前後をはかる。見込みに連結輪状の暗文を、外面に粗雑な分割ヘラミガキを施す。7は口径15.4cm前後をはかり、外面に粗雑な分割ヘラミガキを施す。内面のヘラミガキは隙間が目立つ。Ⅱ-3期と考えられる。8・9は口縁部に1段ナデを施す土師器大皿で、器高2.3cm前後、口径は14.8cm前後をはかる。10~12は瓦器小皿で、それぞれ器高は2.0~



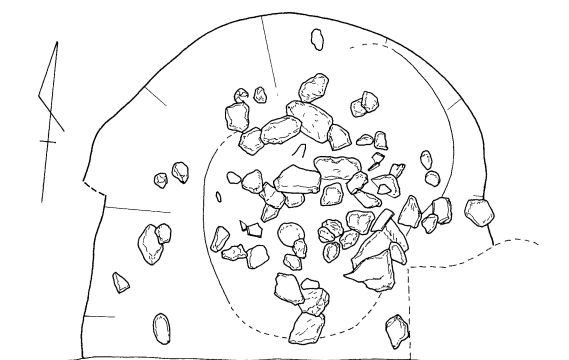
第57図 土坑8・9平面図（1：20）



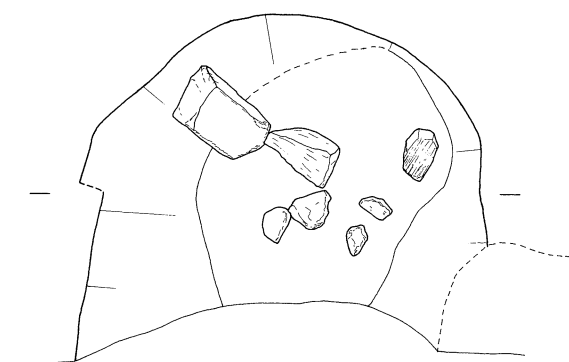
第58図 土坑8 出土遺物（1～21 1：3、22・23 1：4）

2.2cm、口径は8.6～9.8cmとばらつきが大きい。10は見込みに粗雑なヘラミガキを施すだけで明確な暗文はない。11・12は4条ほどの平行線状暗文を施す。13～18は土師器小皿で、それぞれ器高は1.0～1.7cm（平均1.4cm）、口径は8.7～9.4cm（平均9.2cm）をはかる。13は端部をつまみ上げて面取りするが、他は1段ナデである。19の回転台土師器杯は、底部径6.0cm前後をはかり、底部外面は回転ヘラ切りを行った後にナデを施す。20の回転台土師器小皿は器高1.25cm、口径8.8cmをはかる。底部は回転糸切りである。21の須恵器蓋は口径10.6cm前後をはかる。東播系須恵器とも考えられるが、混入品の可能性がある。22は土師器竈で、焚き口の一部が残存する。外面には粗いハケを、内面には丁寧な横ハケを施す。23の土師器鍋は、口径28.2cm前後をはかる。体部内面はハケ、外面は押圧を施す。

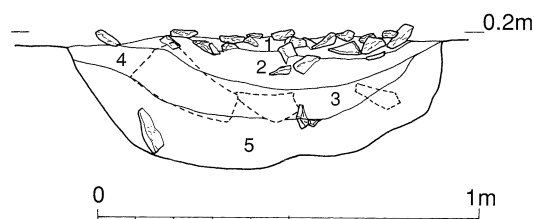
3. 調査の成果



上層



中層



1. 黄灰色 (2.5Y5/1) 極細粒砂 におい黄色 (2.5Y6/8) シルトブロックを少量含む。自然石を極めて多く含む。
2. 黄灰色 (2.5Y5/1) 極細粒砂 におい黄色 (2.5Y6/8) シルトブロックを少量含む。
3. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗～極細粒砂 におい黄橙色 (10YR7/3) シルトブロックを少量含む。割石・自然石を含む。
4. 褐灰色 (7.5YR6/1) 粗～中粒砂 (極細粒砂を含む。) におい黄橙色 (10YR7/3) シルトブロックを多く含む。
5. 灰色 (5Y5/1) 極細粒砂 同色系粗粒砂ブロックを多く含む。

第59図 土坑10平面・断面図 (1:20)

土坑10 調査区南端で検出した土坑である。土坑の南半分は調査区外にあり、全容は明確ではないが、検出部分から直径1.0m前後、深さ0.4mをはかる平面円形状を呈する土坑と考えられる。

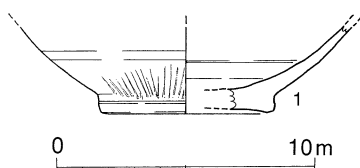
土坑の上層には5～10cm大の自然石が、敷き詰められたような状態で、また土坑北部の下層からは30cm大の割石・自然石が数個出土した。この土坑が、どのような性格の遺構となるのか、まったく明確ではないが、建物群の性格と関わる可能性も残る。

なお、土坑10からは第60図の白磁碗なども出土しているが、南部第2層2面上層から掘削されていることは確認でき、この時期の所産と考えられる。

土坑10 出土遺物 1は白磁IV類碗の底部である。高台径6.2cmをはかり、残存部から器高2.4cm以上となる。遺物の時期幅からみたと、遺構の時期を決定するものと考えにくい。

土坑11 土坑7の西側で検出された土坑である。土坑7は、長軸長3.2m、短軸長2.2m、深さ0.3mをはかる平面楕円形状の土坑である。遺構として、特に目立った特徴はないが、区画溝上に掘削されていることから、一連の遺構となる可能性が残る。

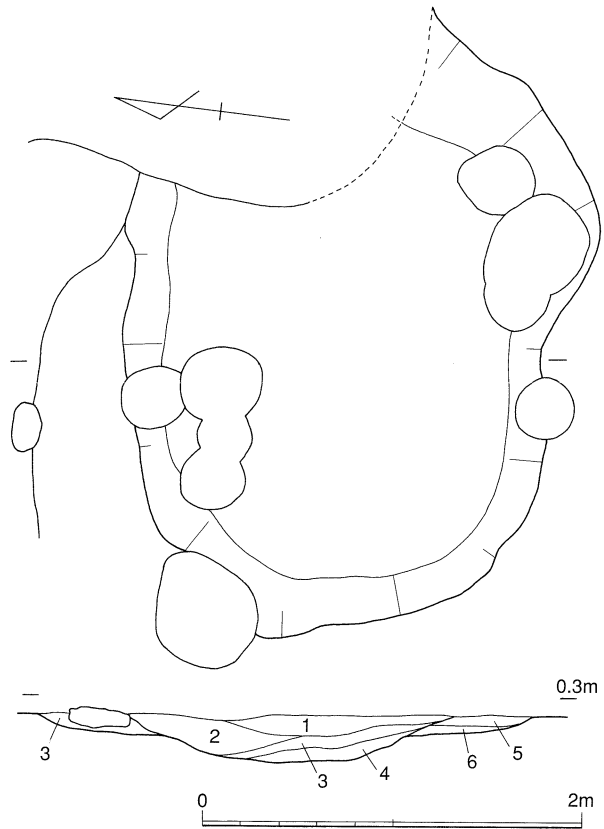
なお、土坑11は第62図に掲載した出土遺物から、13世紀中頃の所産と言える。



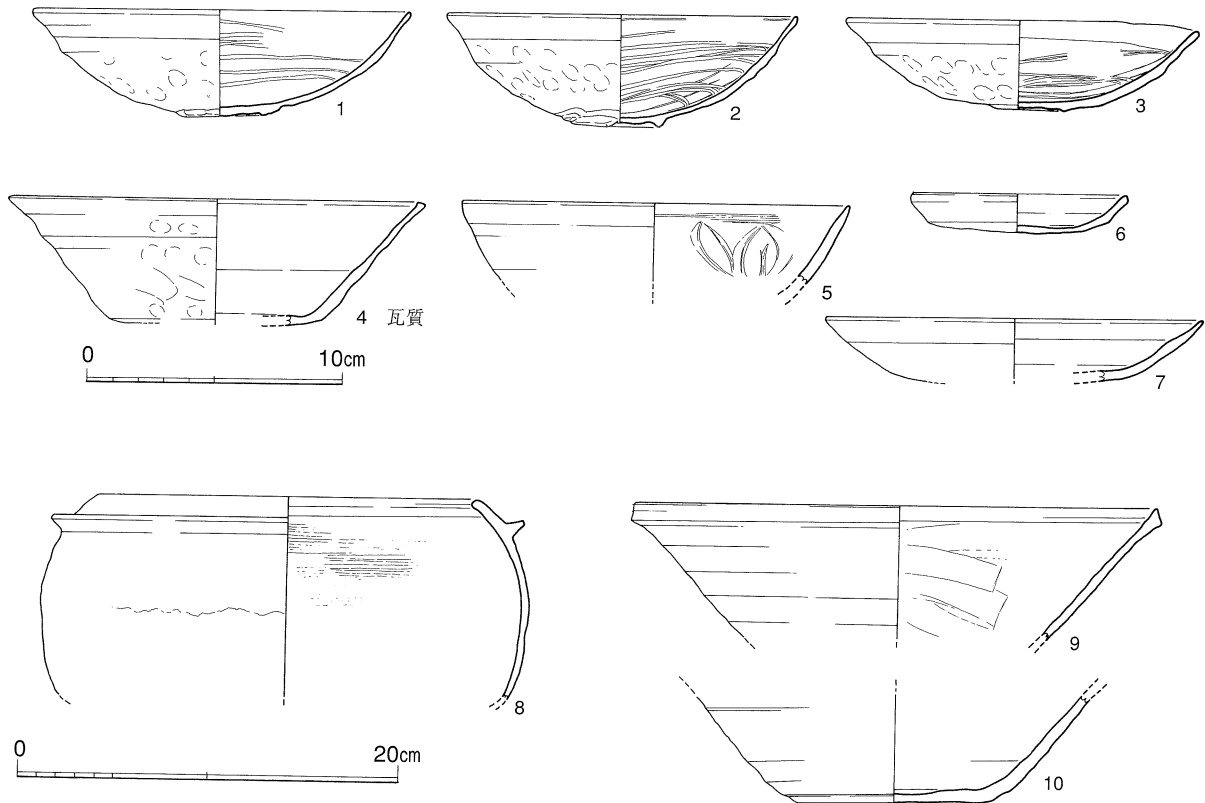
第60図 土坑10出土遺物 (1:3)

土坑11 出土遺物 1～3は和泉型瓦器碗で、それぞれの器高は3.5～4.5cm、口径は13.8～15.2cmとややばらつくが、概ねⅢ～Ⅲ期と見なせる。1の暗文は不明、2は見込みに8条以上の平行線暗文を、3は見込みに3条以上の平行線を暗文として施す。4は瓦質土器小型鉢で器高4.9cm前後、口径は16.4cm前後をはかる。5は龍泉窯系劃花文碗で、口径15.0cm前後をはかる。6の土師器小皿は端部に面取りする。器高1.4～1.6cm、

口径8.6cmをはかる。7は土師器大皿は端部に1段ナデを施す。器高2.4cm、口径は15.0cmをはかる。8の瓦質土器羽釜は、口径20.0cm前後をはかる。9の東播系須恵器こね鉢は、口径27.8cm前後をはかる。体部内面に、粗雑な板ナデを施す。10も東播系須恵器こね鉢で、底部径は10.2cm前後をはかる。



第61図 土坑11平面・断面図 (1:40)

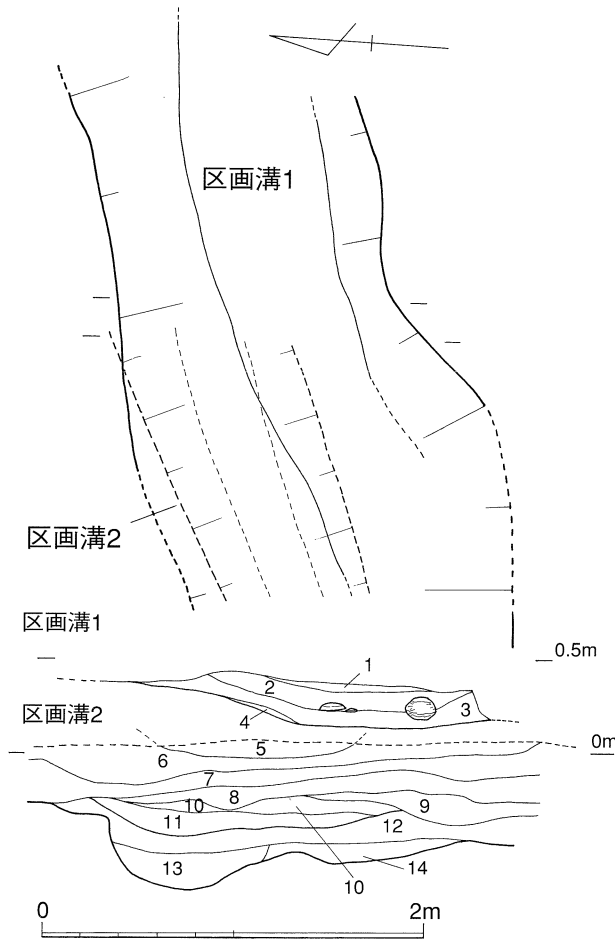


第62図 土坑11 出土遺物 (1~7 1:3、8~10 1:4)

3. 調査の成果

ウ. 区画溝

調査区南北の地形境界上に掘削され、建物群1・2の境界を区切る東西方向に伸びる区画溝を区画溝1・2とし、また建物群2の東辺を区切る区画溝を区画溝3として扱った。いずれの区画溝も調査上の都合から、東西トレンチの状況から判断しただけにとどまる。以下、各区画溝の状況について述べる。



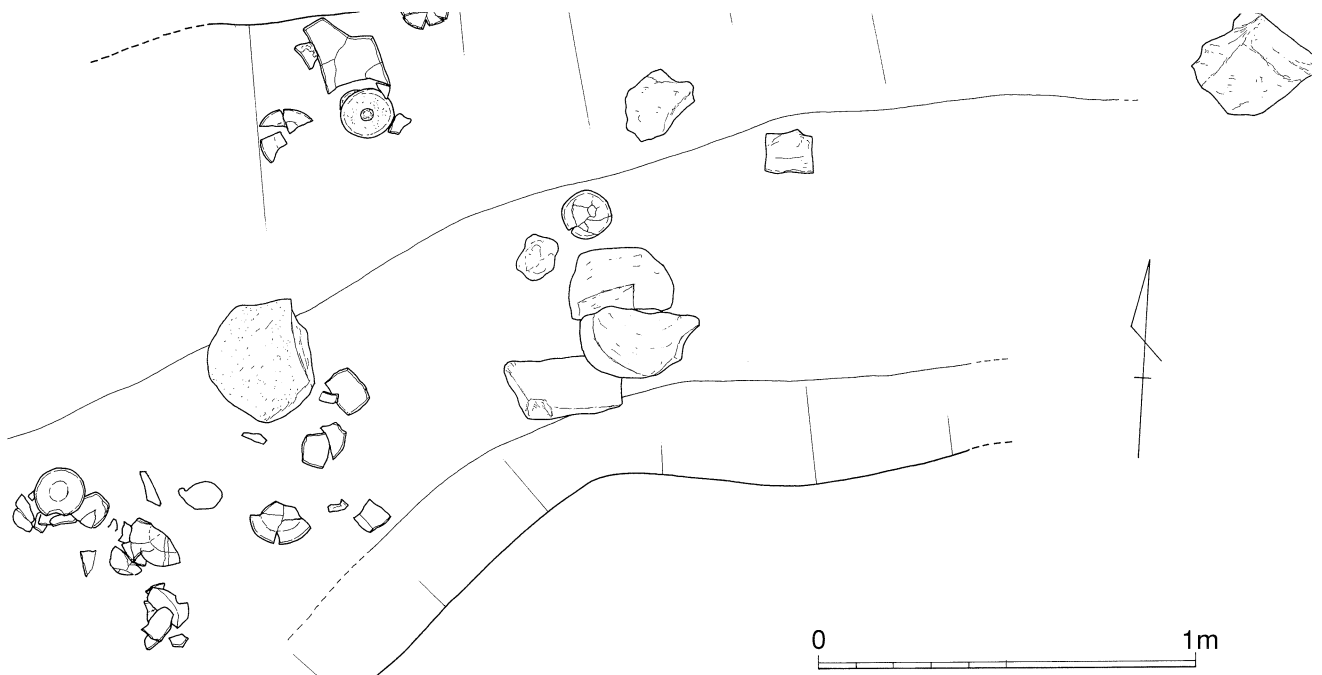
第63図 区画溝1・2平面・断面図 (1 : 40)

区画溝1土層

1. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (細～極細粒砂を含む。) 土器中型片を多く含む。
2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (細～極細粒砂を含む。) 土器大型片・炭を多く含む。灰白色 (10YR8/2) シルトブロックを含む。
3. 明黄褐色 (2.5Y6/4) 細～極細粒砂 同色シルトブロック多く含む。
4. 褐色 (10YR4/1) 均質な中粒砂
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂 炭を含む。

区画溝2土層

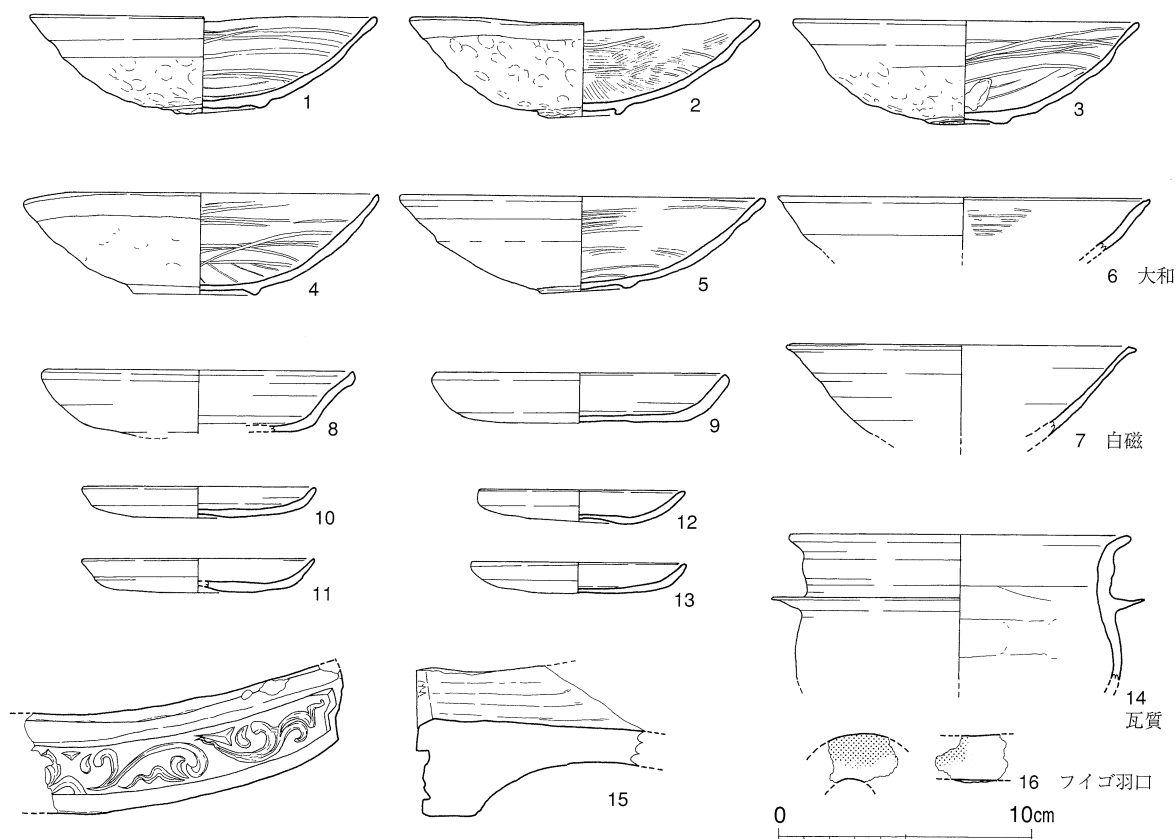
5. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 極細粒砂 炭・土器片を含む。
6. 褐色 (10YR6/1) 極細～細粒砂 土器片を多く含む。
7. 明黄褐色 (10YR7/4) 極細粒砂～灰黄褐色 (10YR5/2) 極細～細粒砂 灰白色 (10Y7/1) シルトブロックを含む。炭を極少量含む。
8. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細粒砂 (細粒砂を含む。) 炭・シルトブロックを極少量含む。
9. 灰黄色 (10YR6/2) 極細粒砂～シルト
10. 黒色 (10YR3/1) 均質な細～極細粒砂 土器片を多く含む。
11. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト～極細粒砂 炭を含む。土器片を含む。
12. 褐色 (10YR4/1) ～暗灰色 (N3/0) シルト
13. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト 土器大型片を多く含む。
14. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト 灰色 (7.5Y5/1) 粘土ブロックを多く含む。土器大型片を多く含む。(区画溝埋土)



第64図 区画溝1遺物出土状況 (1 : 20)

区画溝1・2 建物群1・2の境界を区切る、東西に伸びる区画溝である。区画溝を境に、建物群1・2に約30～45cmほどの高低差があることは、基本層序でも述べたとおりである。このため、この部分では洪水などに伴う土砂の堆積が著しい傾向にあり、区画溝も埋没と掘削を繰り返されたようである。西壁断面の観察により、区画溝は少なくとも3回以上掘削されていることを確認した。このため、区画溝の状況は複雑な様相を示し、明確に遺構として把握できたものは南部第2層2面から掘削された区画溝1と南部第2層6面から掘削された区画溝2の2条に限られる。このうち、区画溝1は幅1.8m以上、深さ0.3mをはかるが、溝の東部と南側の肩部は、上面検出時の掘削などで削平してしまい、全体の状況は確定しにくい。なお、埋土は3層に大別でき、中層からは第65図に挙げる遺物が出土した。

区画溝1 出土遺物 1～5は和泉型瓦器碗で、器高3.6～4.1cm（平均3.8cm）、口径13.8～14.4cm（平均14.0cm）をはかる。2は内面に不整方向のナデ調整を行ったあと、粗雑なヘラミガキを施すが、見込みに暗文はない。また5は、見込みから内面にかけて連続する圏線状のヘラミガキを施す。このほかは、内面に粗雑な圏線状のヘラミガキを施し、見込みに平行線状の暗文を施す。Ⅲ-3期にかけての時期に比定できる。6は大和型瓦器碗で、口径14.8cm前後をはかるが、残存部が少なく、復元には検討の余地を残す。外面にはヘラミガキは確認できず、また内面のヘラミガキを隙間が大きいことから、同時期の共伴遺物になる可能性がある。7の白磁碗は、口径



第65図 区画溝1 出土遺物（1：3）

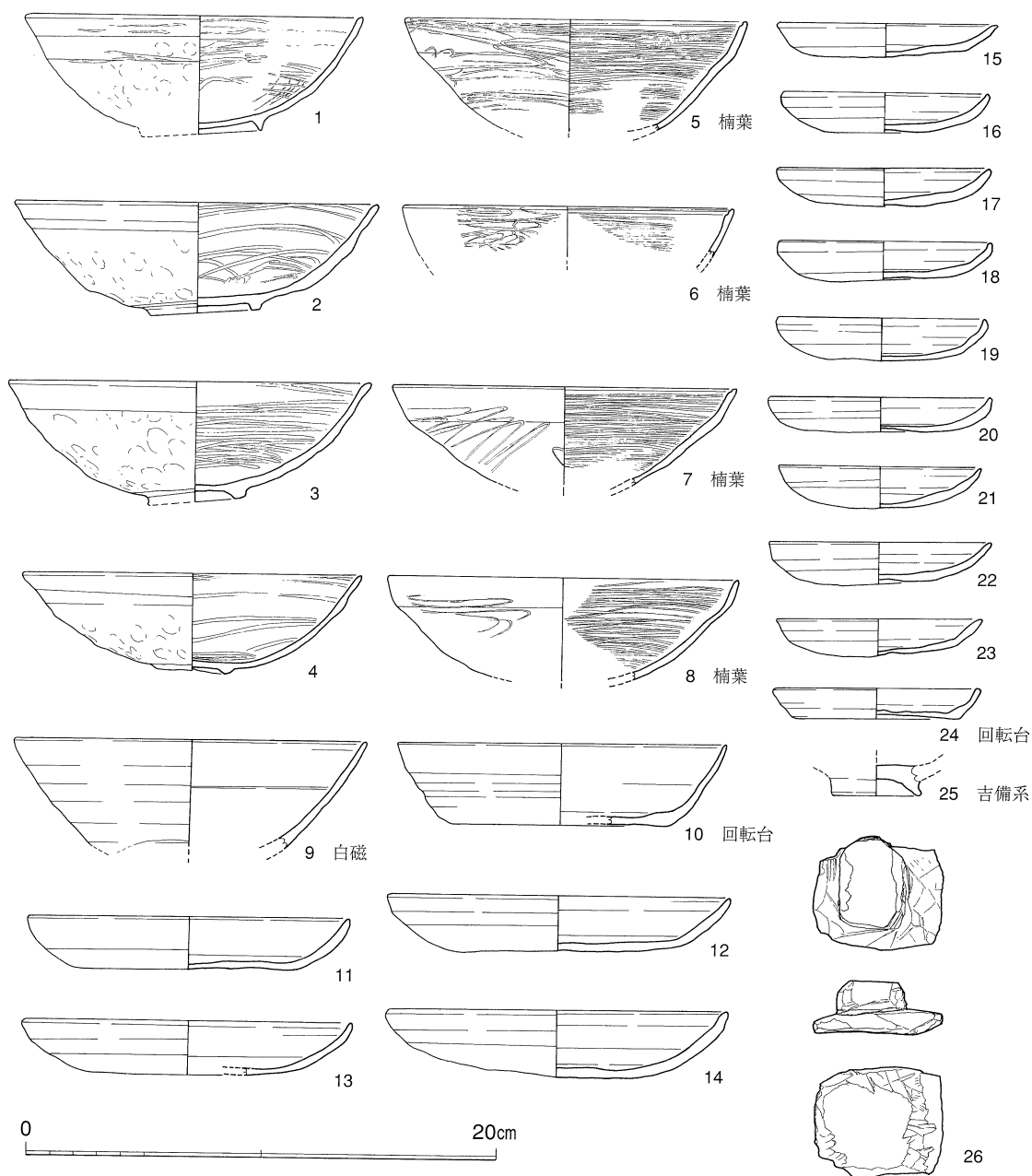
3. 調査の成果

14.0cm前後をはかる。V類と考えられる。8・9は土師器大皿である。8は器高2.4~2.7cm、口径12.3cm前後をはかる。9は器高2.0cm、口径11.4cmをはかる。ともに口縁端部を面取りにする。10~13は土師器小皿で、器高1.1~1.4cm（平均1.3cm）、口径8.2~9.2cm（平均8.7cm）をはかる。いずれも口縁部に1段ナデを施す。14の瓦質土器羽釜は口径13.4cm前後をはかる。器壁外面の調整は丁寧である。精製された胎土を用いる。15の軒平瓦は瓦頭幅12.5cm以上、瓦頭の高さ3.7cm前後、残存長9.0cmをはかる。16のフイゴ羽口片は、直径7.0cm前後になる可能性が考えられる。外面は被熱し赤変しているが、鈹滓等は付着していない。

以上の出土遺物から、区画溝1は13世紀前半の所産と考えられる。出土した遺物のうち、フイゴ羽口の細片に関して、包含層などから鈹滓も出土しており、周辺で鋳物師などの活動が想定される。また、瓦頭についても、その他に縄目タタキを施した平瓦などもあわせて出土していることから、周辺に寺院が存在した可能性が考えられる。

区画溝2は、下層遺構面の確認のため、トレンチを掘削した際に検出した。検出部分は一部に限られるが、区画溝1と同様に東西に伸びること、また区画溝3とつながることが推定される。区画溝2のうち、西トレンチ掘削時に出土したものを第66図に、東トレンチ出土のものを第67図に掲載した。これらの遺物から、区画溝2は12世紀中頃~13世紀初頭と考えられる。

区画溝2西 出土遺物 1~4は和泉型瓦器碗である。1は器高4.9cm、口径14.5cmをはかる。体部外面上半に粗雑なヘラミガキを、見込みには平行線状暗文を施す。碗器形となることから、Ⅱ-3期と考える。2は器高4.5~4.9cm、口径15.0cmをはかる。見込みに煤が付着しているため、暗文は明確ではない。3は器高5.0~5.2cm、口径15.5cmをはかる。見込みに暗文はない。2・3はⅢ-1期である。4は器高4.1~4.3cm、口径14.6cmをはかる。見込みに平行線状暗文を施す。Ⅲ-2期である。5~8は楠葉型瓦器碗である。5は器高4.7cm以上、口径14.6cm前後を、6は口径15.0cm前後をはかる。5・6は体部外面上半にやや粗雑な分割ヘラミガキを、内面はやや隙間があるものの、密なヘラミガキを施す。Ⅱ-1または2期と考えられる。7は器高4.1cm以上、口径14.6cm前後をはかる。8は器高4.3cm以上、口径14.8cm前後をはかる。7・8は体部外面上半に粗雑な分割ヘラミガキを施すだけで、内面のヘラミガキも隙間が目立つ。Ⅱ-2または3期と考える。9の白磁碗は、器高4.7cm以上、口径15.0cmをはかる。10の回転台土師器杯は器高3.5cm、口径14.0cm前後をはかる。底部にナデが施されるが、痕跡から回転ヘラ切りの可能性がある。搬入品である。11~14は土師器大皿である。11は器高2.3cm、口径13.6cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。12~14は器高2.4cm（平均2.4cm）、口径14.2~14.4cm（平均14.4cm）をはかる。いずれも口縁端部を内反気味に直立させて2段ナデを施す。15~23は土師器小皿である。このうち、口縁部に1段ナデを施す15は器高1.5cm、口径9.2~9.5cmをはかる。なお、15の胎土には雲母が含まれており、搬入品の可能性がある。16~19は、口縁端部を内反気味につまみ上げ、側面を面取りするもので、器高1.7cm（平均1.7cm）、口径9.1cm（平均9.1cm）をはかる。20~23は、口縁部に2段ナデを施すもので、器高1.5~1.7cm（平均1.6cm）、口径8.8~9.7cm（平均9.1cm）をはかる。

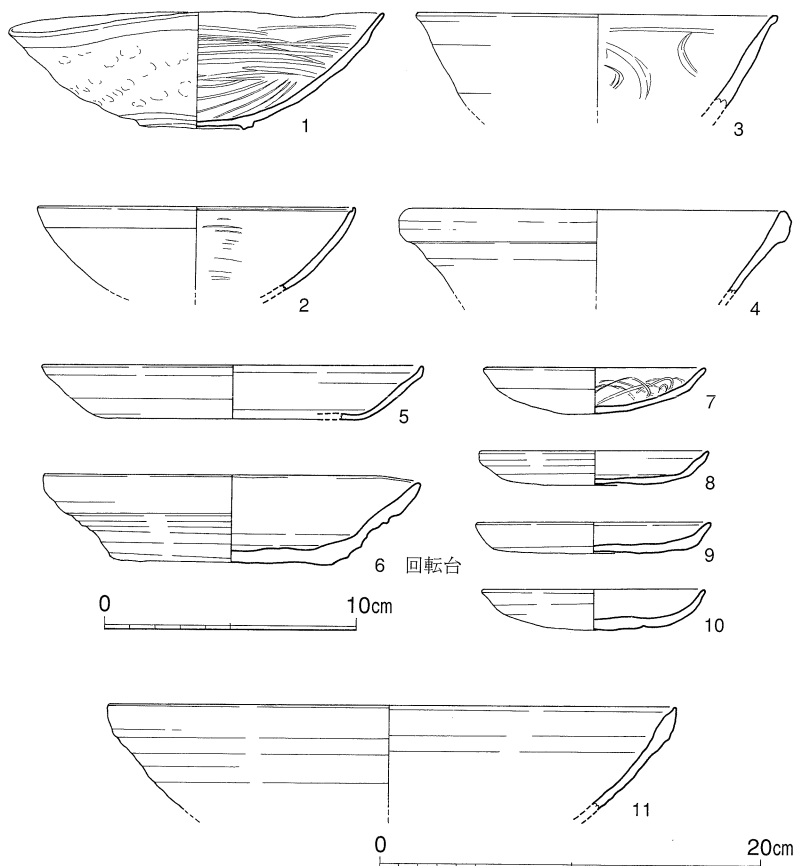


第66図 区画溝2西 出土遺物 (1:3)

なお、20も胎土に雲母を含むことから、搬入品の可能性がある。24の回転台土師器小皿は器高1.4cm、口径8.8cm前後をはかる。底部に回転糸切り痕が残る。瀬戸内以西の搬入品と考えられる。25は吉備系土師器碗の底部である。高台径は3.4~4.0cmをはかる。26はスタンプ未製品である。高さ2.2cm、印面の全長5.5cm前後、幅2.2cmをはかる。滑石製石鍋を原材とする2次加工の未製品である。

区画溝2東 出土遺物 1の和泉型瓦器碗は器高4.0~4.6cm、口径14.6~15.0cmをはかる。見込みに平行線状暗文を施す。Ⅲ-2期である。2の楠葉型瓦器碗は、口径12.6cmをはかる。内外面とも風化し、調整は不明である。3の龍泉窯系劃花文碗は、口径14.2cm前後をはかる。5の土師

3. 調査の成果



第67図 区画溝2東 出土遺物 (1~10 1:3, 11 1:4)

器大皿は、器高2.1cm、口径15.0cm前後をはかる。口縁端部を内反気味につまみ上げるようにナデを施す。胎土は精良で器壁も薄く、京都系の可能性はある。6の回転台土師器杯は、器高3.3~3.5cm、口径15.0cm前後をはかる。底部に回転糸切り痕が残る。体部下半に多段ナデが施される。高知県付近に類例が指摘されている。7の瓦器皿は器高1.8cm、口径8.8cmをはかる。見込みから体部下半に、連結輪状暗文が施される。8~10は土師器小皿である。

8は器高1.45cm、口径9.0cmをはかる。口縁端部を内反気味につまみ上げ、2段ナデを施す。9は器高1.3cm、口径9.4cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。10は器高1.6cm、口径8.75cmをはかる。2段ナデの可能性はある。11の東播系須恵器こね鉢は、口径30.0cm前後をはかる。

区画溝3 調査区南東で検出した建物群2東端を区切る区画溝で、区画溝2に接続する可能性がある。区画溝3は、一部調査区外にあるが、掘削部分の状況から、幅約1.5m、深さ0.45mをはかり、「V」字状の断面形状を呈することが考えられる。区画溝3は3層に大別できるが、いずれも自然堆積土である。なお、区画溝3の中層からは、完形品を含む多量の遺物が出土した。

区画溝3 出土遺物 1~7は和泉型瓦器碗で、器高は4.4~5.0cm、口径14.4~15.4cmをはかり、見込みに平行線状の暗文を施す。6のみ体部外面に粗雑なヘラミガキが施され、Ⅱ-2期となるが、他はすべてⅢ-1期となる。8は内黒の黒色土器碗で、高台径4.0cm前後をはかる。見込みに格子状のような暗文を施す。成形に回転台を用いず、器壁が薄いことから近江の可能性はある。同地域における特徴的なヘラミガキとは異なるため、他地域産の可能性が残る。9は楠葉型瓦器碗で、口径14.0cm前後をはかる。外面に粗雑な分割ヘラミガキを施し、内面のヘラミガキにも隙間が見られることから、Ⅱ-3か2期と考えられる。10~13は土師器大皿である。器高は2.5cm前後、口径は10が13.8cm前後となるほかは、14.5cm前後をはかる。このうち、10は内反気味に口縁端部を立ち上げるように、2段ナデを施す。胎土に雲母の砂粒を含むことから搬入品の可能性が

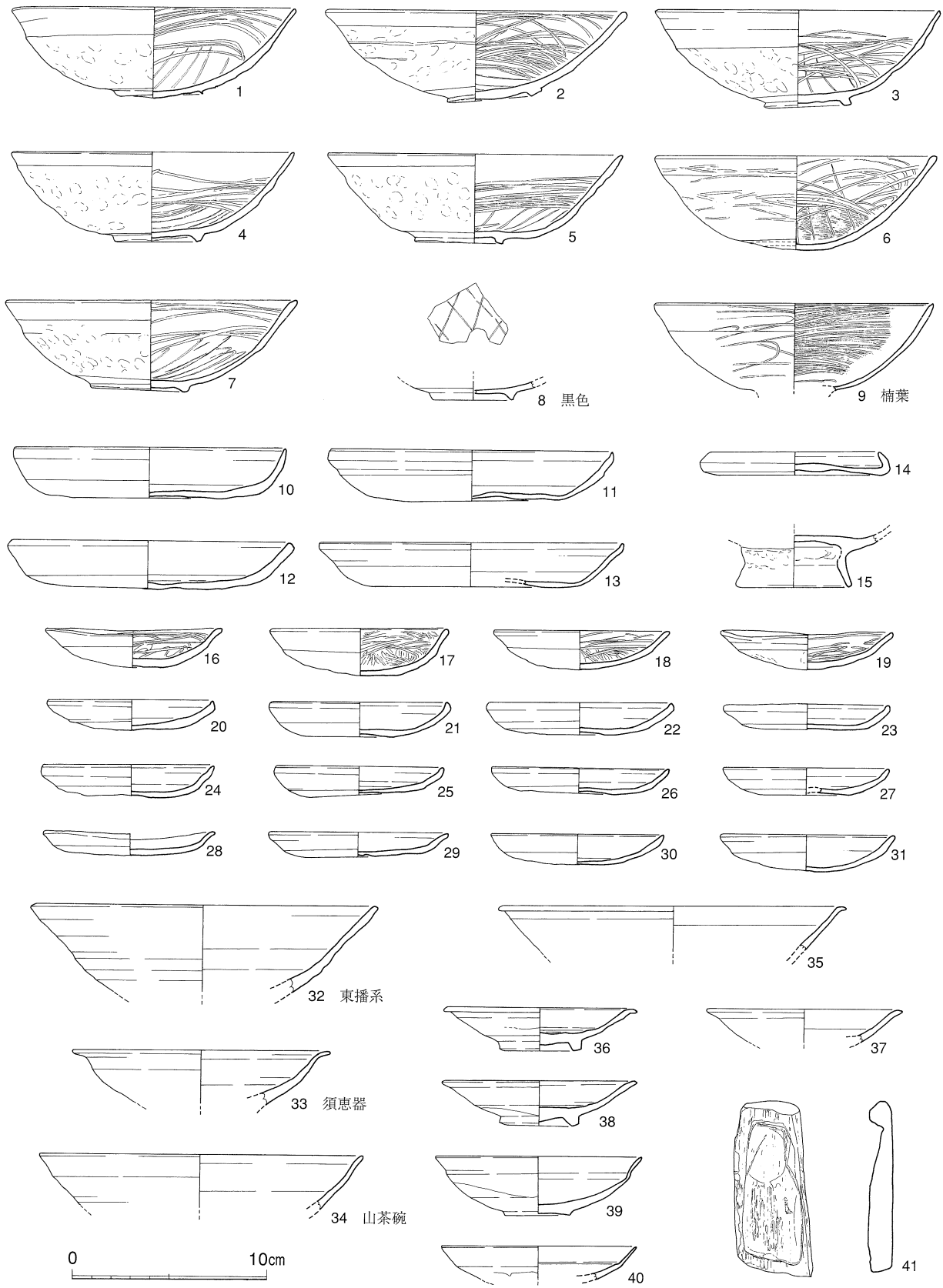
ある。13も灰白色の精良な胎土を用いられ、器壁を薄く仕上げていることから京都産の可能性がある。外面に赤色塗彩の痕跡がある。14はコースター型の皿で、伊野分類Cタイプに属する。器高1.2cm、体部径9.8cmをはかる。15の土師器脚付き皿は、高台径6.0cm前後をはかる。16～19は瓦器小皿で、それぞれの器高は2.0～2.4cm（平均2.1cm）、口径は8.8～9.3cm（平均9.0cm）をはかる。見込みには平行線（17・18）または連結平行線状（16・19）の暗文を施す。20～31は土師器小皿で、20～23は端部をつまみ上げて面取りする。器高1.3～1.8cm（平均1.4cm）をはかる。24～27は口縁端部を内反気味に立ち上げ、側面を面状に成形する。器高1.2～1.6cm（平均1.4cm）、口径は8.6～9.1cm（平均8.8cm）をはかる。28～31は口縁に1段ナデを施す。器高1.2～1.9cm（平均1.5cm）、口径は8.8～9.1cm（平均9.0cm）をはかる。32の東播系須恵器小型鉢は、器高4.5cm以上、口径17.8cm前後をはかる。33の須恵器皿は口径13.2cm前後をはかる。胎土に砂粒を多く含み、既知の須恵器とは異なる。産地は国内と考えるが、詳細は不明である。34は瀬戸系の山茶碗で口縁部から2.8cm以上、口径は16.6cm前後をはかり、端部はやや外反気味に立ち上がる。



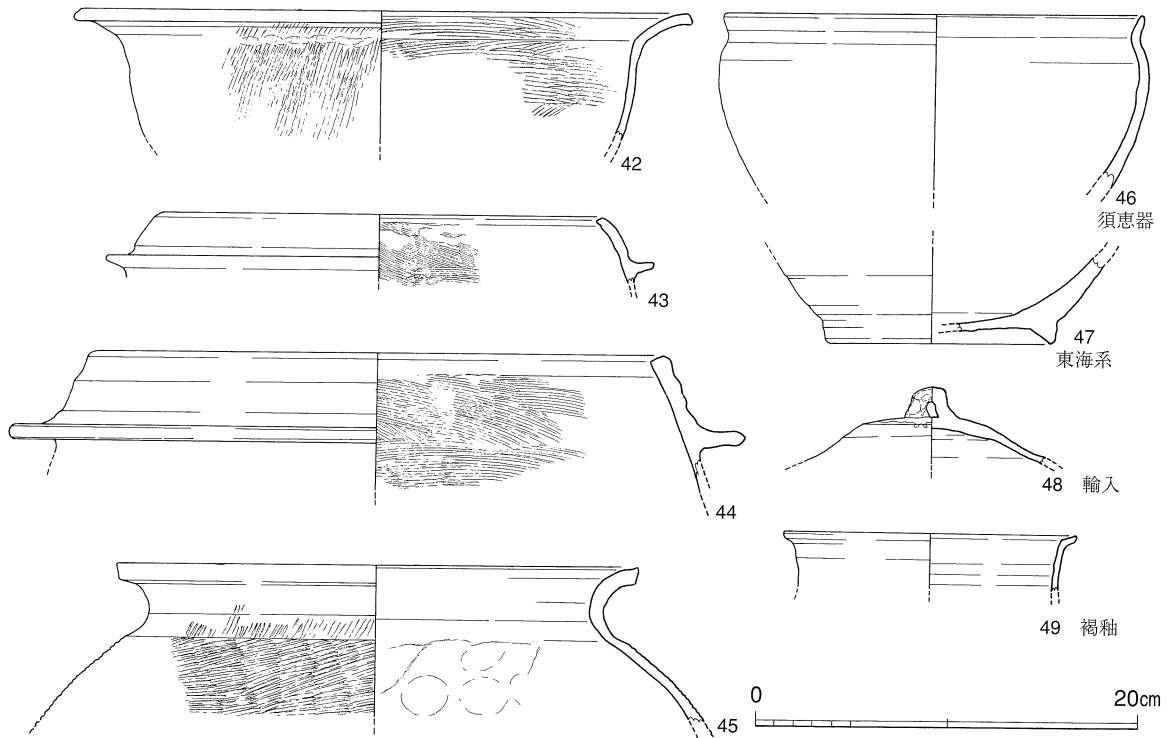
第68図 区画溝3 遺物出土状況（1：20）

胎土は良質で、内面には自然釉がかかる。35は白磁碗で口径は17.8cmをはかる。V類の可能性ある。36～38は白磁皿Ⅲ類で、36は見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。いずれも口径10cm前後、器高2.5cm前後をはかる。39・40は白磁皿V類で、39は器高3.0cm、口径10.6cmをはかる。41の硯は全長9.0cm、幅は4.0cmをはかる。母材となる石材に面取りなどを十分に行わず、簡易な加工に

3. 調査の成果



第69図 区画溝3 出土遺物1 (1:3)



第70図 区画溝3 出土遺物2 (1:4)

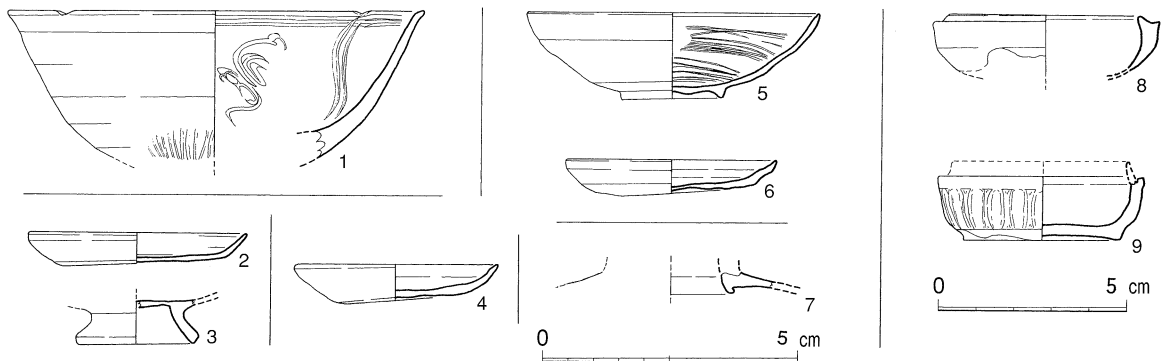
とどまる粗製品である。42の土師器鍋は口径32.2cm前後をはかり、体部内外面に粗いハケを施す。口縁部は外反気味に屈曲し、外面に粗雑な横ナデを施す。43の瓦質土器羽釜は、口径は23.2cm前後をはかる。口縁部は内反気味に立ち上がるもので、脚付きと考えられる。44の土師器羽釜は、口径30.2cm前後をはかる。口縁部は直線的に立ち上がり、ナデにより段を施す。45は東播系須恵器甕で、口径27.4cm前後をはかる。46の須恵器鉢は口径22.0cm前後をはかる。体部から直立し、口縁端部はやや外反する器形を呈する。胎土に中粒砂を多く含み、明らかに東播系須恵器や東海産のものとは異なるが、産地は明確ではない。47は東海系のこね鉢で、高台から4.6cm以上、高台径11.6cm前後をはかる。尾張産と指摘されている。48は陶器の蓋で器高4.1cm以上をはかり、直径20cm程度のもので推定される。天井部を白色釉らしきもので施釉する。貿易陶磁であることは疑いないが、逆U字状に取り付けられたつまみなどの特徴は、類例が知られていないため、産地は不明である。49の褐釉陶器壺口縁部は、口径15.2cm前後をはかる小型品で、水注となる可能性もある。

以上の出土遺物から、区画溝3の中心時期は和泉型Ⅲ-1期となるが、若干Ⅱ-2期に遡る瓦器や古相を示す大皿も含まれることから、溝の機能した時期は12世紀前半～末までの長期におよぶものと考えられる。

エ. その他の遺構について

以上、1区における主要な遺構、遺物について述べたが、このほかにも多数の土坑、柱穴が検出されている。特に柱穴については、今後新たに建物が復元される可能性もあり、時期を検討する上でも必要と考え、掲載することにした。以下、各遺構の出土遺物を第71～73図に掲げた。

3. 調査の成果



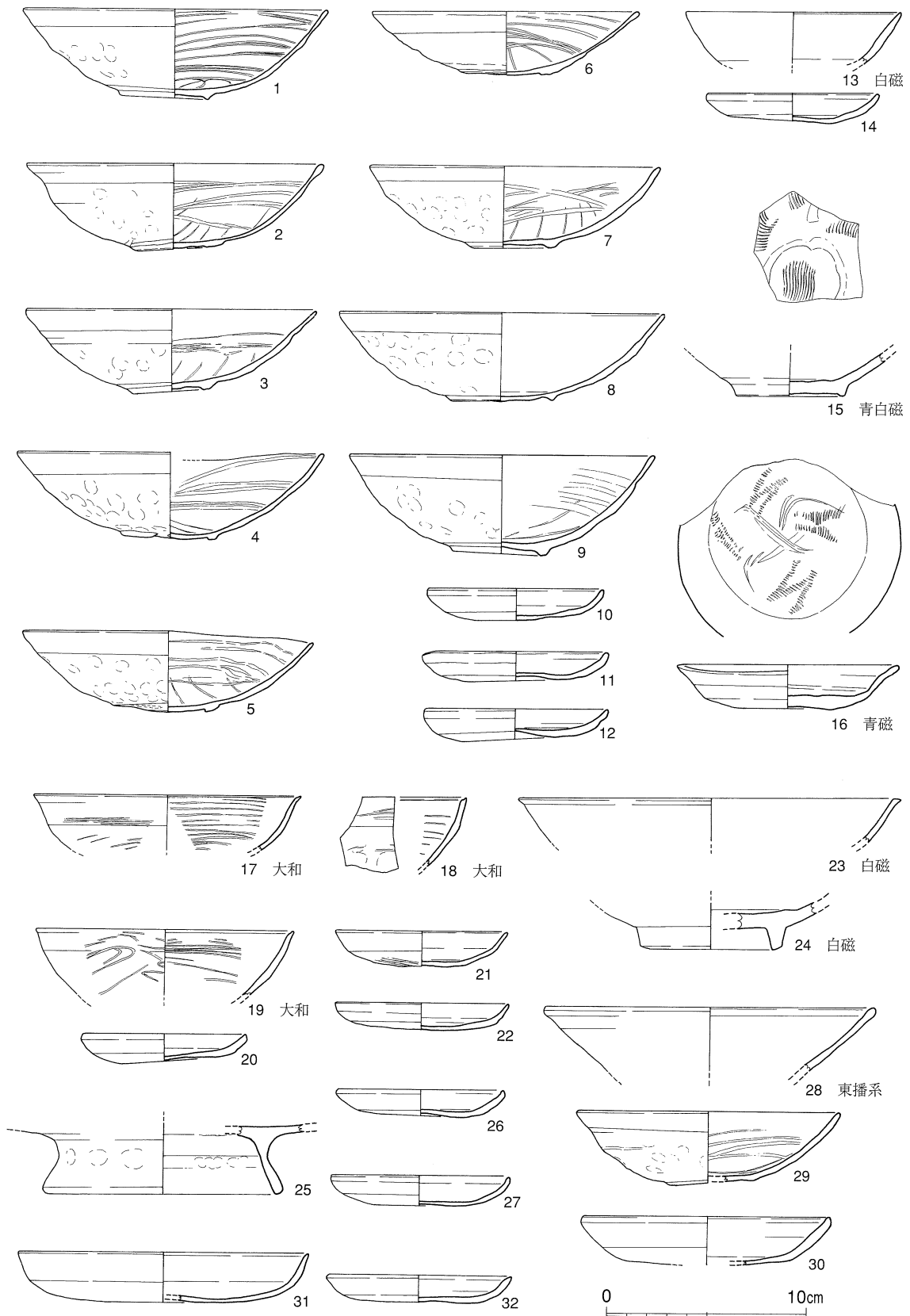
第71図 そのほかの土坑 出土遺物 (1~7 1:3、8・9 1:2)

そのほかの土坑 出土遺物 土坑27から出土した1の龍泉窯系劃花文碗は、器高5.8cm以上、口径16.4cm前後をはかる。2・3は土坑25から出土した。2の土師器小皿は器高1.1~1.3cm、口径9.6cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。3は脚付きの土師器小皿である。残存高1.8cm、高台径4.8cmをはかる。土坑34から出土した4は土師器小皿である。器高1.3~1.6cm、口径9.0cmをはかる。5・6は土坑35から出土した。5の楠葉型瓦器碗は器高3.4cm、口径11.6cm前後をはかる。Ⅲ-3期と考えられる。6の土師器小皿は器高1.2~1.5cm、口径8.1~8.2cmをはかる。内外面とも風化し明確ではないが、口縁端部はつまみ上げ、側面を面取りする。土坑19から出土した7は、施釉陶器小型壺の体部で、頸部との接合部にあたる。頸部径は5.6cm前後をはかり、小型あるいはミニチュア製品である。古瀬戸の可能性はある。土坑33から出土した8の白磁合子身は器高1.5cm以上、口径4.8cm前後をはかる。土坑16から出土した9の青白磁合子身は残存高1.7cm、口径5.4cm前後をはかる。

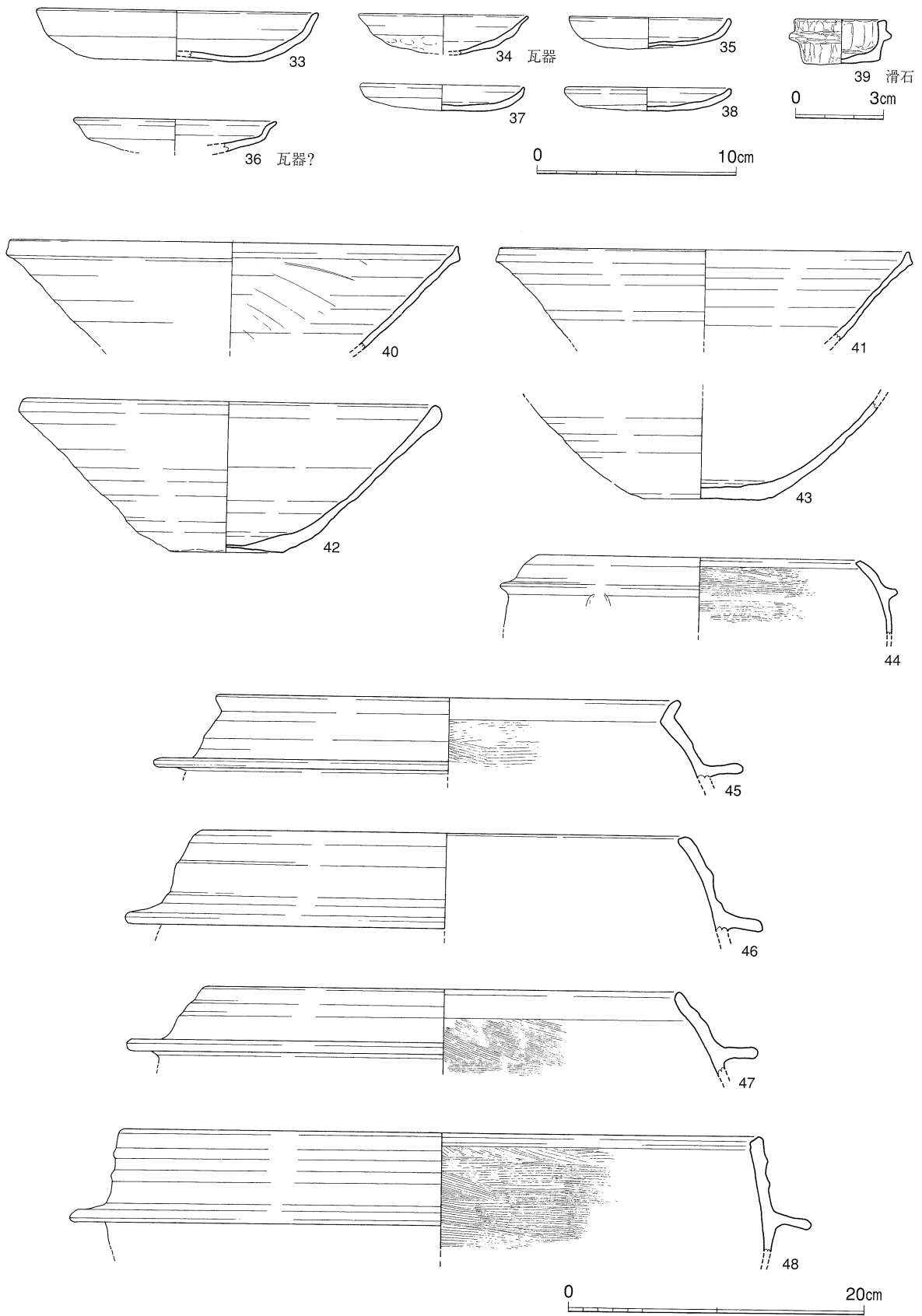
そのほかの柱穴 出土遺物 1~4はS P-347の柱痕部分から重なった状態で出土した和泉型瓦器碗である。器高4.0~4.5cm (平均4.3cm)、口径14.6~15.3cm (平均14.9cm)をはかる。見込みは、1が連結輪状暗文を施す以外、平行線状暗文となる。Ⅲ-2期である。5・46はS P-291から出土した。5の和泉型瓦器碗は器高4.05cm、口径14.4~14.6cmをはかる。見込みに平行線状暗文を施す。Ⅲ-3期である。46の土師器羽釜は口径32.6cm前後をはかる。口縁部は内傾し、外面中位に段をつける。6はS P-234出土の和泉型瓦器碗で、器高3.1~3.2cm、口径13.3cm前後をはかる。見込みに平行線状暗文を施す。Ⅳ-1期である。7・8・48はS P-330から出土した。このうち7・8は和泉型瓦器碗である。7は器高4.1cm、口径14.4cm前後をはかる。見込みに平行線状暗文を施す。口径の復元には検討の余地を残す。Ⅲ-3期と考えられる。8は器高4.5cm、口径16.0cm前後をはかる。風化が著しく、調整等は明確ではない。Ⅲ-1期頃と考えられる。48の土師器羽釜は、口径43.0cm前後をはかるが、口径の復元には検討の余地を残す。口縁部はほぼ直立し、側面に強いナデで、1条の凹線が施される。9~12は、S P-250・251から出土した。9の和泉型瓦器碗は器高4.8~5.0cm、口径15.0cmをはかる。見込みに平行線状暗文を施す。Ⅲ-1期である。10~12は土師器小皿で器高1.4~1.6cm (平均1.5cm)、口径8.7~9.0cm (平均8.9cm)をはかる。いずれも口縁端部をつまみ上げ、側面を面取りする。13・14はS K-43から出土した。遺

構名称は土坑であるが、大型の柱穴である。13は口禿の白磁皿で、口径10.8cm前後をはかる。14の土師器小皿は器高1.2～1.5cm、口径8.8～9.2cmをはかる。口縁端部をつまみ上げ、側面を面取りする。15はS P-213出土の青白磁皿で残存高2.3cm、高台径5.4cm前後をはかる。内面に櫛書き文様を施文する。底部だけが出土したにとどまり、全体は判然としないが、中型品となる可能性が考えられる。16はS P-260出土の同安窯系青磁皿で、器高2.2cm、口径11.0cm前後をはかる。17はS P-144から出土した大和型瓦器碗で、口径13.4cm前後をはかる。外面に粗雑な分割ヘラミガキが、内面のヘラミガキは隙間が大きくなっている。Ⅲ-A（古）期と考えられる。18はS P-1出土の大和型瓦器碗である。器高3.7cm以上となる。外面は分割ヘラミガキが明確ではないが、内面のヘラミガキの隙間は大きい。19・20・47はS P-405から出土した。19の大和型瓦器碗は、口径12.8cm前後をはかるが、歪んでいるため口径の復元には検討の余地を残す。Ⅲ-A（古）期と考えられる。20の土師器小皿は器高1.2～1.6cm、口径8.0～8.2cmをはかる。口縁端部を面取りにする。47の土師器羽釜は、口径32.0cm前後をはかるが、口径の復元には検討の余地を残す。口縁部は内傾するが、端部はやや外反する。21・22はS P-232から出土した土師器小皿である。21は器高1.7cm、口径8.6cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。底部にムシロ痕をとどめる。胎土が異なり、搬入品の可能性がある。22は器高1.4cm、口径8.6～8.8cmをはかる。23はS P-83出土の白磁碗で、口径19.0cm前後である。V類と考えられる。24はS P-337から出土した白磁Ⅳ類碗で、高台径5.2cm前後をはかる。25はS P-85から出土した脚付きの土師器大皿で、残存高3.5cm、高台径11.6cm前後をはかる。26は建物3との関連が考えられるS P-409から出土した土師器小皿で、器高1.2～1.4cm、口径8.2cmをはかる。口縁端部をつまみ上げ、側面を面取りする。27はS P-240出土の土師器小皿である。器高1.5cm、口径8.8～9.0cmをはかる。口縁端部をつまみ上げ、側面を面取りする。28～30・45は、建物1礎石直下のS P-283から出土した。28の東播系須恵器碗は器高3.2cm以上、口径16.4cm前後をはかる。29の和泉型瓦器碗は器高3.6cm、口径13.2cm前後をはかる。見込みに平行線状暗文を施す。Ⅳ-1期である。30の土師器大皿は器高2.4cm、口径12.4cm前後をはかる。口縁端部はややつまみ上げ、面取りをする。45の土師器羽釜は、口径31.2cm前後をはかる。口縁端部が屈曲し、外方へ開く。31・32は、S P-323から出土した。31の土師器大皿は器高2.5cm、口径14.4cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。32の土師器小皿は器高1.4cm、口径9.0cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。33はS P-326出土の土師器大皿で、器高2.6cm、口径14.4cm前後をはかる。口縁部に1段ナデを施す。34はS P-423出土の瓦器皿で器高2.0cm以上、口径は8.6～8.8cmをはかる。35はS P-303出土の土師器小皿で、器高1.6cm、口径8.2cm前後をはかる。口縁端部を面取りにする。36はS P-300出土の土師器小皿で、器高1.0cm以上、口径10.4cm前後をはかる。口縁部には1段ナデを施し、端部は外反する。瓦器皿が被熱したものとなる可能性もあるが、ミガキなどはみられず判断しにくい。37はS P-62から出土した土師器小皿で、器高1.3cm、口径8.2～8.4cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。38はS P-404から出土した土師器小皿で、器高1.2cm、口径8.5～8.6cmをはかる。口縁端部をつまみ上

3. 調査の成果



第72図 そのほかの柱穴 出土遺物1 (1:3)



第73図 そのほかの柱穴 出土遺物 2 (33~38 1 : 3、39 1 : 2、40~48 1 : 4)

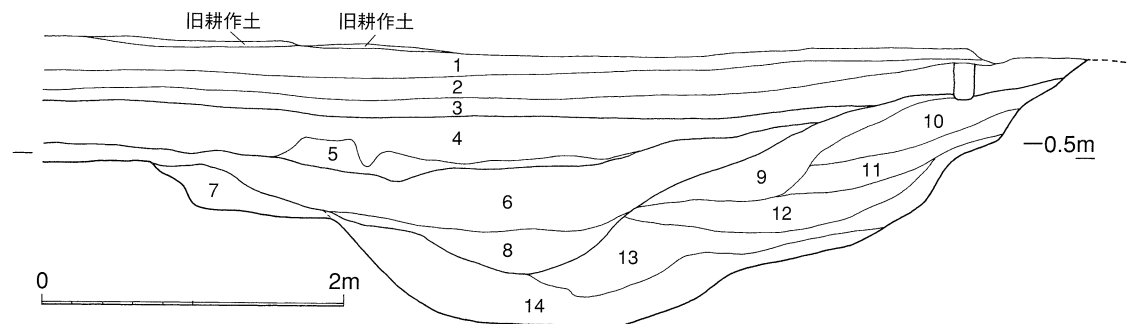
3. 調査の成果

げ、側面を面取りにする。39は、S P-241から出土した石鍋ミニチュア製品で、器高1.4~1.6cm、口径3.1cm前後をはかる。40・41はS P-406から出土した東播系須恵器こね鉢である。40は器高7.2cm以上、口径30.4cm前後をはかる。41は器高6.1cm以上、口径28.0cm前後をはかる。いずれも、内面に板ナデを施す。40は口縁端部上方を拡張し、41は端部上下端をやや拡張する。42はS P-179出土の東播系須恵器こね鉢である。出土状況から、根石代わりに転用されたものと考えられる。器高10.25cm、口径28.0cm前後をはかる。口縁部は、やや玉縁状に肥厚する。43はS P-253出土の東播系須恵器こね鉢である。残存高6.8cm、底部径7.6cm前後をはかる。44はS P-105出土の瓦質土器羽釜で、口径21.9cm前後をはかる。脚付きになる可能性が考えられる。

(3) 2区の調査

2区からは、入り江と水路4条からなる港湾関連遺構を検出した。

入り江 2区における遺構検出面の標高は、1区（北部第2層第2面・標高0.4~5m）から約1mほど低く、平均-0.5mを測る。基本層序で指摘したように2区のはほぼ全域が止水環境にあり、地形的に入り江と判断した。入り江は、第3層と第2層の層厚から水面の標高は-0.2~0.3m、水深0.3~0.4m程度と考えられる。なお、入り江の範囲は（仮称）「庄本村絵図」（江戸時代）における沼地などの記載と中世的な字名の分布から、庄本町2丁目・島江町1丁目付近（字堂の前・段之内の間、また字地蔵田・池の尻の間、地蔵田の東~南辺・西辺、字塚本・新家間の水路沿い）に広がる可能性がある。また、入り江の南方から神崎川・猪名川合流点付近（嶋田・東嶋田・丁田の南方）にかけては先の絵図に水路が示されていないことや、その後の地籍図では字界が不整形で、字名に中洲あるいは微高地に由来する可能性がある「島」のつくものがみられることから、

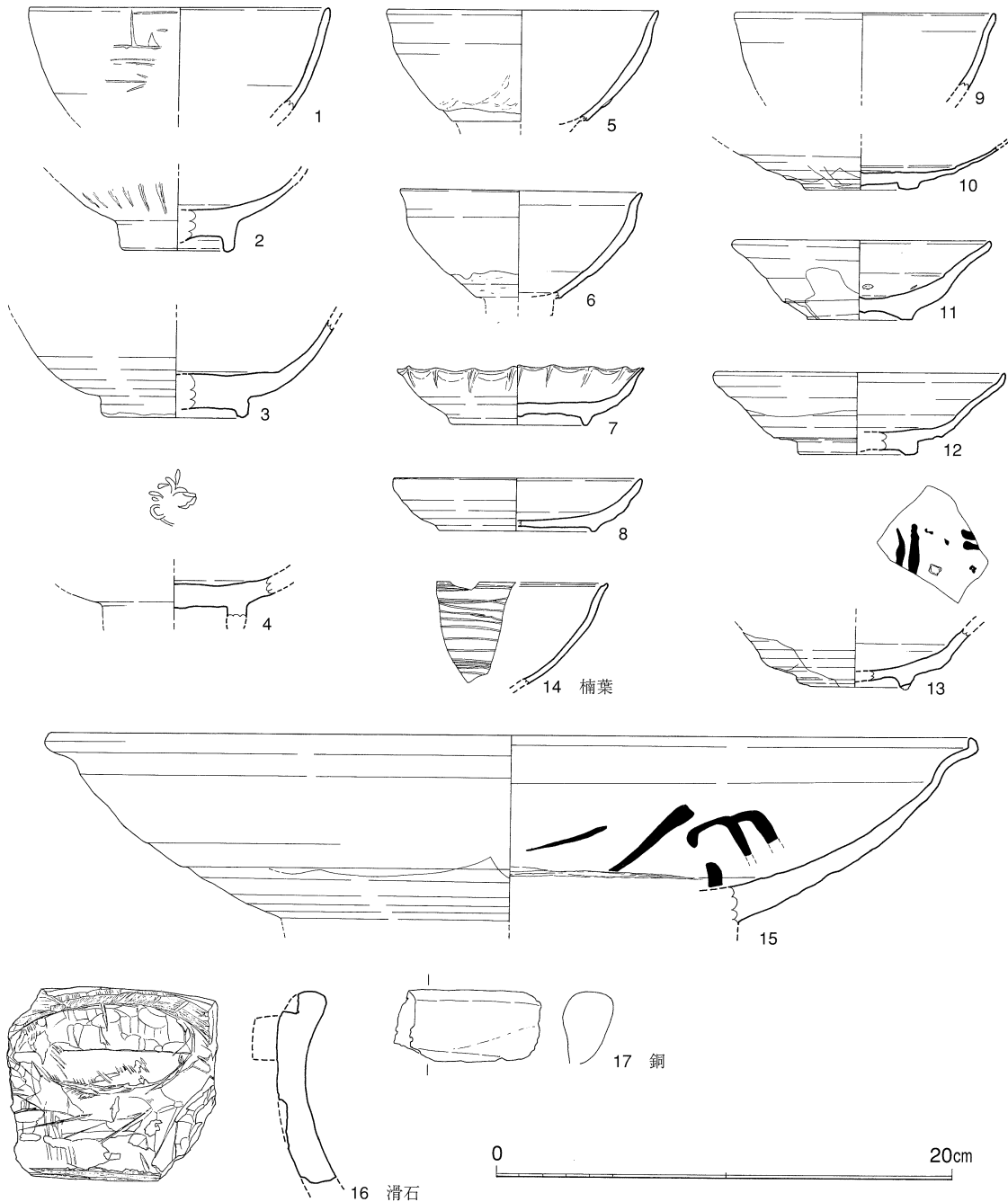


- | | |
|---|---|
| 1. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 極細粒砂 (耕作土) 南側に土器・陶磁器を含む。 | 9. オリーブ灰色 (2.5GY5~6/1) シルト 層南側から灰色 (N4/0) 細~中粒砂が層状に堆積する。層下部に瓦大型片・土器・陶磁器を含む。棲息状態の貝化石を多く含む。 |
| 2. 灰色 (N6/0) シルトに灰色シルトを層状に含む。(耕作土) | 10. 青灰色 (2.5BG6/1) シルト~粘土 同色系極細粒砂が層状に堆積する。 |
| 3. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト (細粒砂を含む。) マンガン等が沈着し、堅緻。(陸化後の耕作土) | 11. 青灰色 (2.5BG5/1) シルト~粘土 同色系極細粒砂が層状に堆積する。 |
| 4. 灰色 (N4~5/0) シルト~粘土ブロック間に同系細粒砂を含む。(埋め立て土) | 12. 暗灰色 (N3/0) 中~細粒砂に同色系シルトブロックを含む。植物遺体・土器・石を含む。 |
| 5. 灰色 (N4/0) 同色系細~中粒砂に同色系シルトブロックを含む。(埋め立て土) | 13. 暗灰色 (N3/0) 中~細粒砂に同色系シルトブロックを多く含む。植物遺体・土器・瓦などを含む。 |
| 6. 灰色 (N4/0) シルト (腐植土) 南側に極細粒砂が層状に堆積する。 | 14. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中~粗粒砂 同色系シルトブロックを極少量含む。石・礫を含む。 |
| 7. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 極細粒砂 同色系シルトブロックを多く含む。 | |
| 8. オリーブ灰色 (2.5GY5~6/1) シルト 層上部に踏み込み状に灰色 (N4/0) 細~中粒砂が堆積する。層下部に瓦大型片・土器・陶磁器を含む。棲息状態の貝化石を含む。 | |

第74図 水路1東壁面断面図 (1:50)

中世前期の段階では、神崎川・猪名川の旧河道の一部が沼沢として名残をとどめ、その周囲に低湿地が点在する景観が予想される。また、庄本南水門周辺に船溜まりがあることから、庄本悪水路が入り江の出入口になる可能性も考えられる。

水路 2区からは4条の水路を確認している。このうち、鎌倉時代に機能した水路は、水路1・3の2条である。なお、水路は第4層上面から掘削されるが、周辺に耕作痕や集落関連遺構が全くなく環境に大きな変化がみられないことから、掘削当初から水面下に存在したものと考えられる。水路の掘削は潮位の干満や、渇水期を選んで行ったことが想定できるが、その実態につ



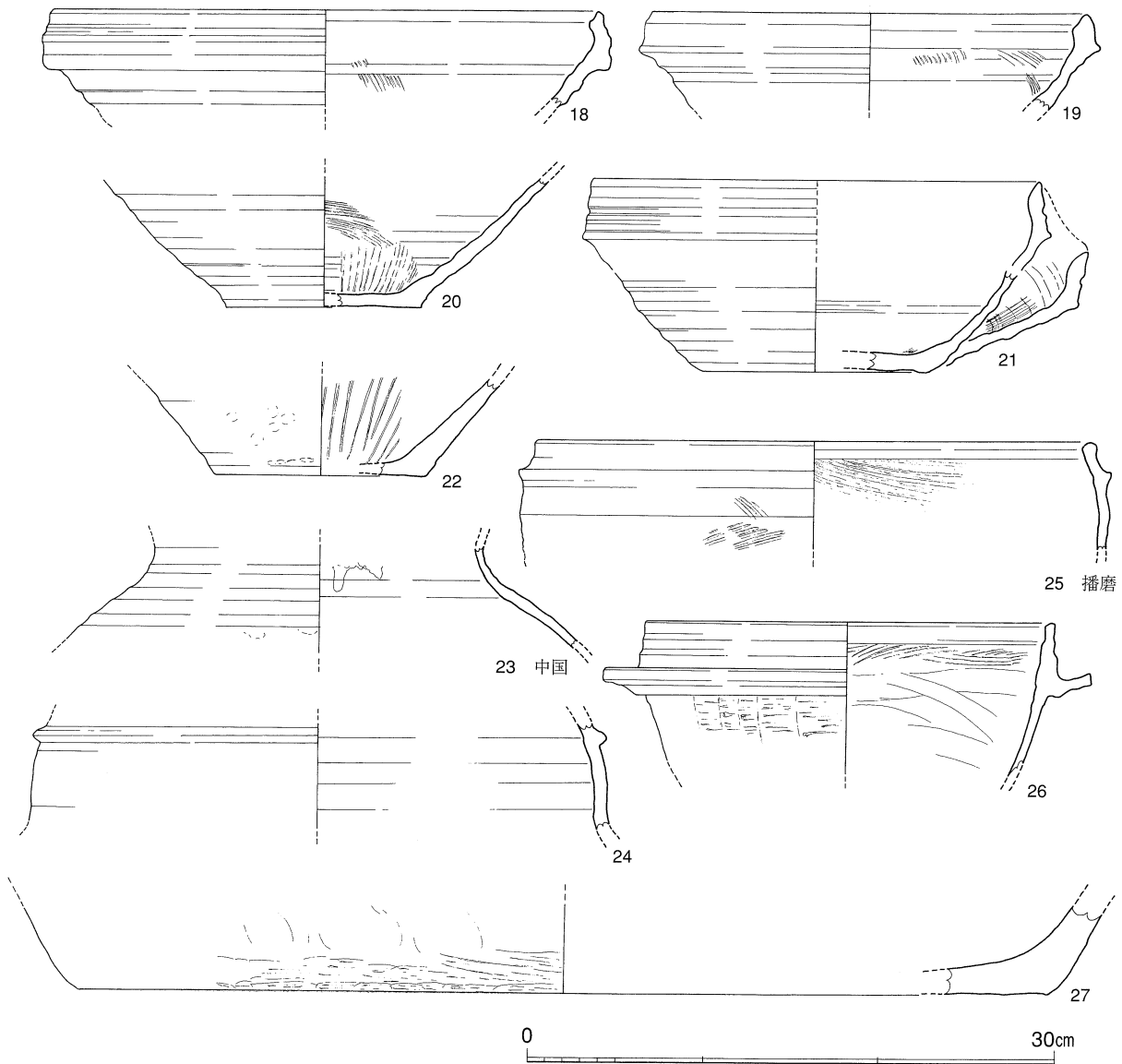
第75図 水路1上～中層 出土遺物1 (1:3)

3. 調査の成果

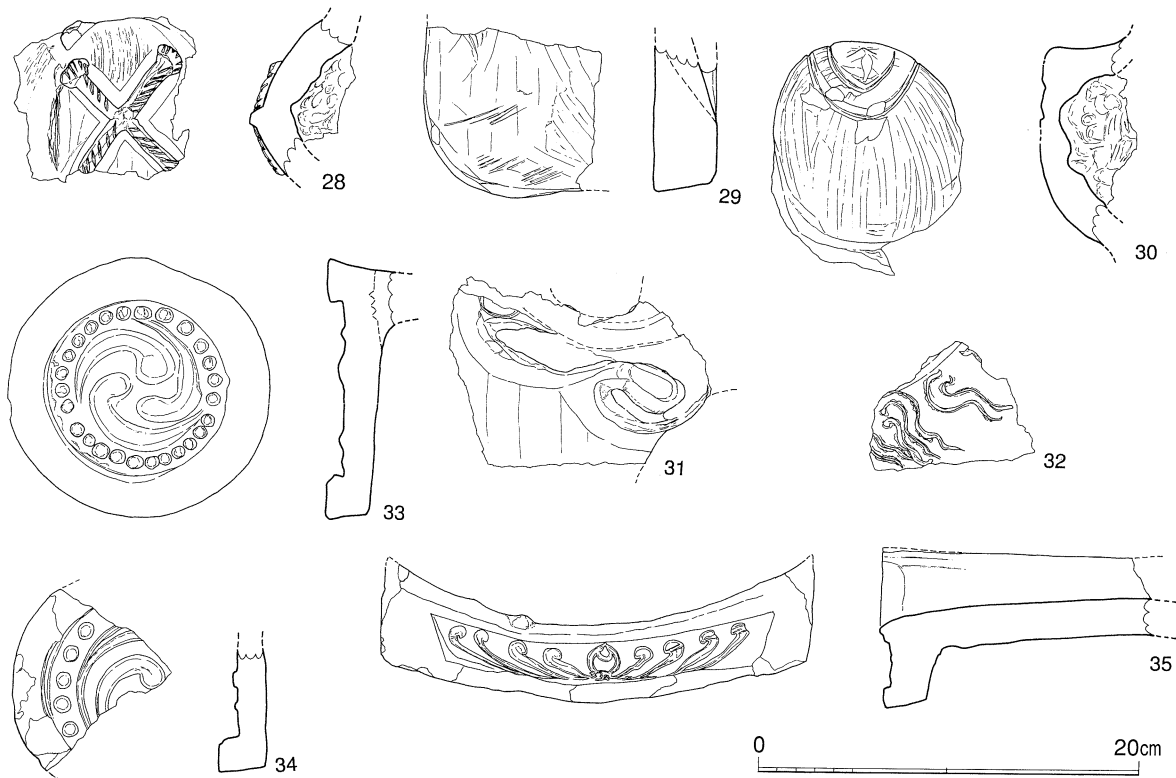
いては明確ではない。

水路1 2区南端で検出した、東西に伸びる水路である。その南側は第1区北側建物群に接し、調査区東端で南方へ屈曲する可能性がある。

水路の幅は約4.0~4.2m、掘削深度0.85m（水深約1.25m）をはかる。水路内の埋土は大別3層に区分されるが、いずれも自然堆積土である。上~中層は入り江内の第3層腐植土と共通し、あまり遺物を含まない。下層も上~中層と大きく変わらないが、水路西端では中層との間に洪水に伴う青灰色シルト層が堆積することから区分できる。上層~中層には遺物を多く含まないものの、下層からは16世紀末~17世紀初め頃の遺物が比較的まとまって出土した。また、最下層は細~中粒砂を主体とし、上~下層とは明確に異なる堆積土となる。水路肩側では中位くらいまで堆積していることから、後世の浚渫により掘り返されたものと考えられる。同層からは中世前期の遺物



第76図 水路1上~中層 出土遺物2 (1:4)



第77図 水路1上～中層 出土遺物3 (1:4)

がまとめて出土したが、完形品などは含まれていなかった。

なお、下層と最下層の間には明確な時期差があることから、鎌倉時代に使用された水路を戦国時代に再利用したことが考えられる。その後、水路の西側が洪水で埋没し、江戸初期にはほぼ廃絶したことが推定される。

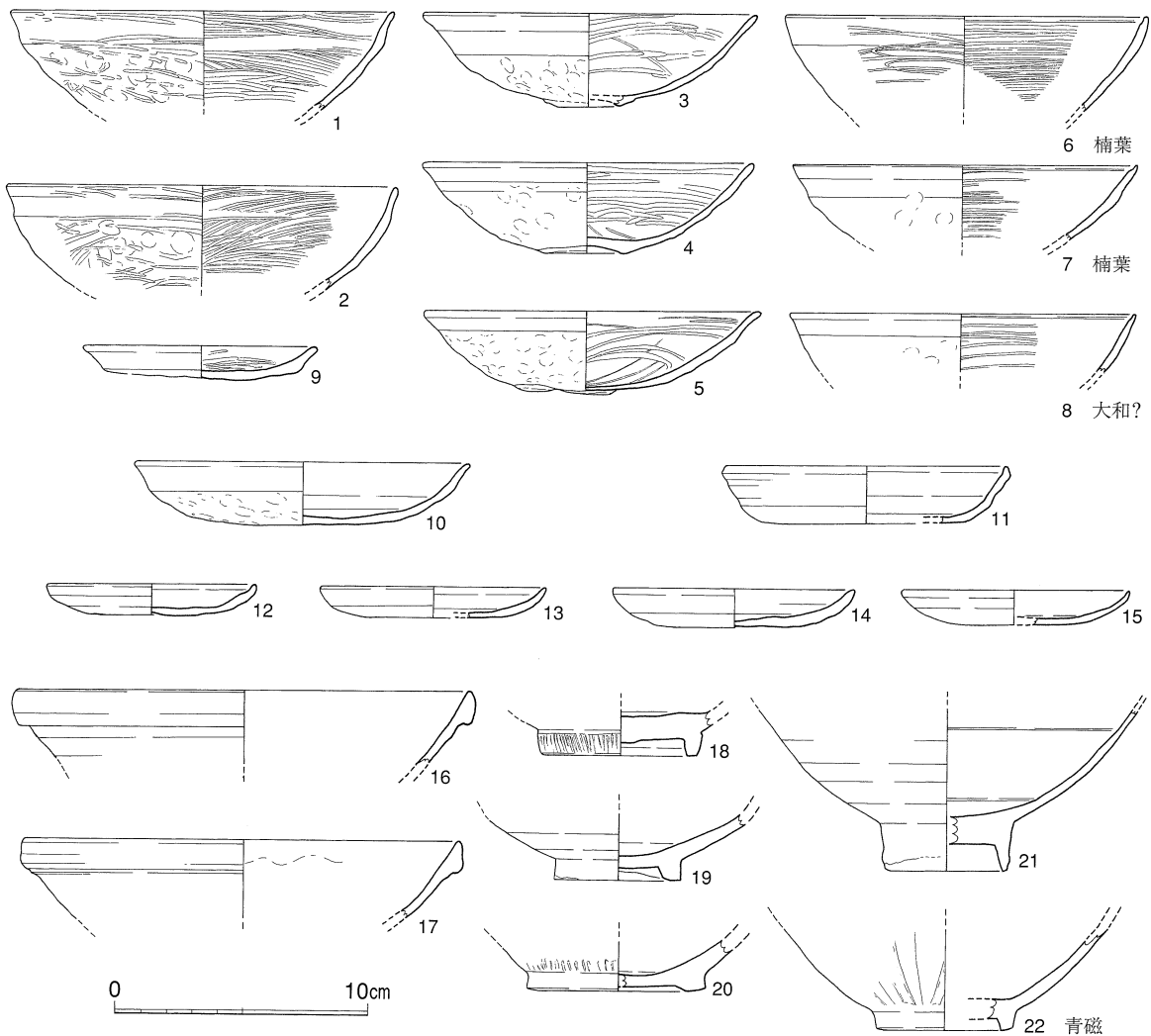
水路1上～中層 出土遺物 1～4は中国製青磁碗である。1は口径13.4cmをはかる。口縁部外面に雷文帯が施される。2の細連弁文碗は、高台径3.3cmをはかる。3は無文で、高台径は6.0cm前後をはかる。4は見込みに草花文を施文するもので、高台径6.4m前後をはかる。内面の風化は著しいため、施文の詳細は十分明確ではない。5・6は瀬戸美濃焼天目茶碗である。5は器高5.9cm以上、口径11.8cm前後をはかり、体部下半まで鉄釉を施す。器壁が薄い。6は器高4.7cm程度、口径10.4cm前後をはかる。胎土は黄灰白色で、土替えを行っている。7の瀬戸美濃焼鉄釉輪花皿は器高2.6cm、口径10.7cmをはかる。8の瀬戸美濃焼灰釉皿は器高2.3cm、口径10.8cm前後をはかる。9の肥前系陶器天目茶碗は、口径11.4cm前後をはかる。内外面ともに鉄釉を施す。10～13は肥前系陶器皿である。10は残存高1.9cm、高台径5.1cm前後をはかる。底部内面に砂目痕3カ所がある。11は器高3.6cm、口径は11.4cm前後をはかる。見込みに胎土目痕4カ所がある。12は器高3.6cm、口径12.8cm前後をはかる。見込みに胎土目痕がある。13は残存高2.7cm、高台径5.0cmをはかる。見込みに胎土目痕がある。14の楠葉型瓦器碗は、残存高4.3cm程度をはかる。体部外面にヘラミガキはなく、内面のヘラミガキは隙間が目立つ。Ⅲ-1期と考えられる。最下層からの混入品である。15の肥前系陶器大皿は残存高8.2cm、口径40.2cm前後をはかる。16のスタン

3. 調査の成果

ブ未製品は横8.5cm程度、縦9.0cm前後をはかる。つまみ部分の成形途中で廃棄したものと考えられる。原礫面から石鍋片の2次加工品である。17は厚さ0.1mm前後の銅板を丸めたもので、用途等は不明である。長さ5.5cm、幅3.3cmをはかる。18～21は備前焼播鉢である。18は口径31.0cm前後をはかり、口縁部側面に2条の凹線を施す。播り目は櫛書きによる。19は口径24.6cm前後をはかり、口縁部側面はナデを施し、口縁下端部がやや突出する。20は残存高7.5cm、底部径11.2cm前後をはかる。櫛書きによる播り目を施す。21は器高11.0cm前後、口径25.4cm前後をはかる。内面は摩耗している。22の丹波焼播鉢は残存高5.7cm、底部径12.0cm前後をはかる。1本書きの播り目である。23の中国製陶器壺は、頸部径20.0cm前後をはかる。器壁は薄く、内外面に褐色釉を施釉する。24の備前焼水屋甕は、頸部？径32.0cm前後をはかる。25の土師器羽釜は器高6.1cm以上、口径31.6cm前後をはかる。播磨型のもので、体部にタタキを施す。鐔は突帯状に退化している。26の瓦質土器羽釜は器高8.7cm、口径23.4cm前後をはかる。体部外面にヘラケズリを施す。27の備前焼大型甕は、底部径56.2cm前後をはかる。底部径の復元には検討の余地を残すが、大型製品となることは明らかである。28～32は、鬼瓦の一部である。破片のため、30が頭部正面の部位となるほかは、それぞれの部位、上下関係などは不明である。意匠上の特徴から、南都系の可能性がある。33・34は巴文の軒丸瓦瓦頭である。33は瓦頭面の直径13.7cm、瓦頭の厚さ1.8cm前後をはかる。35の軒平瓦は瓦頭面の長さ22.8cm、瓦頭面の幅4.2cm前後をはかる。唐草文である。

これら上～下層の出土遺物をみると、最上層付近で10の砂目痕と伴う肥前系陶器皿が出土している以外は、概ね16世紀後半～末の遺物を中心とする。また、青磁碗の中には16世紀以前ものも若干含まれていることから、水路1が再び機能しはじめるのは、16世紀前半くらいまで遡る可能性が考えられる。

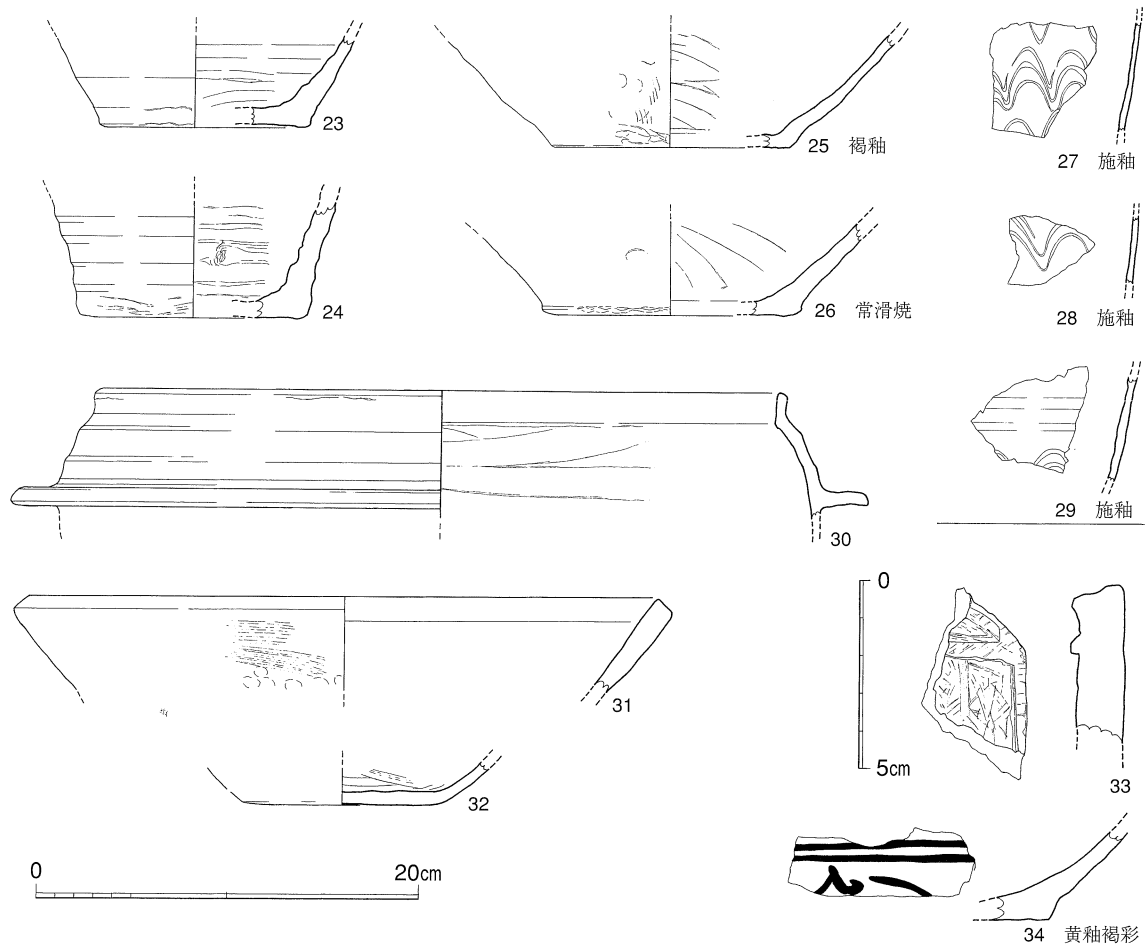
水路1 最下層 出土遺物 1～5は和泉型瓦器碗である。1は器高4.0cm以上、口径15.2cm前後をはかる。2は器高4.1cm以上、口径15.4cm前後をはかる。いずれも、体部外面に粗雑なヘラミガキを施す。Ⅱ-2期である。3～5は器高3.2～3.6cm（平均3.5cm）、口径13.4～13.5cm（平均13.5cm）をはかる。見込みは平行線状の暗文を施す。高台は、粘土紐を巻き付けただけの粗雑なものである。Ⅳ-1期である。6・7は楠葉型瓦器碗である。6は口径14.4cm前後をはかるが、復元には検討の余地を残す。体部外面にやや粗雑な分割ヘラミガキが施されていることから、Ⅱ-2期の可能性がある。7は口径13.6cm前後に復元したが、検討の余地を残す。体部外面にはヘラミガキがなく、内面のヘラミガキにも隙間が目立つことから、Ⅲ-1期もしくは2期と考えられる。8の大和型と考えられる瓦器碗は、口径14.0cm前後をはかる。細片のため、調整は明確ではないが、外面にヘラミガキは施された可能性は乏しい。Ⅲ期と考えられる。9の瓦器皿は器高1.1～1.4cm、口径9.2cm前後をはかる。内面に粗雑なヘラミガキを施す。10・11は土師器大皿である。10は器高2.5cm、口径13.2cmをはかる。口縁部に1段ナデを施す。11は器高2.3cm、口径11.2cm前後をはかる。口縁端部を面取りする。12～15は土師器小皿である。12は器高1.3cm、口径8.2cm前後をはかる。口縁端部をつまみ上げて2段ナデを施す。13は器高1.2cm、口径9.0cm前後を



第78図 水路1最下層 出土遺物1 (1:3)

はかる。14は器高1.6cm、口径9.6cmをはかる。13・14はともに口縁部に1段ナデを施す。15は器高1.4cm、口径9.2cm前後をはかる。口縁端部をつまみ上げて2段ナデを施す。16～18・20は白磁Ⅳ類碗である。16は口径18.0cm前後をはかるが、復元には検討の余地を残す。17は口径17.6cm前後をはかる。18は高台径6.0cm前後、20は高台径7.0cm前後をはかる。19は白磁Ⅱ類?碗で、高台径5.0cm前後をはかる。21の白磁Ⅴ類碗は器高6.6cm以上、高台径5.0cm前後をはかる。22の龍泉窯系連弁文碗は、高台径5.6cm前後をはかる。23・24は、備前焼壺である。23は残存高11.2cm、底部径11.2cm前後をはかる。24は残存高6.2cm、底部径12.0cm前後をはかる。口頸部以上が出土していないため、時期は明確ではない。25は褐釉陶器壺は残存高6.0cm、高台径12.4cm前後をはかる。26の常滑焼甕は残存高5.0cm、底部径13.0cm前後をはかる。27～29は施釉陶器壺体部の破片である。器壁は5mm前後と非常に薄く、胎土には石英砂が多く含まれる。体部外面には、3条単位の波状文を施し、白下地の上から施釉する。釉は暗オリーブ色に発色するが、表面の風化が著しく、波状文は目視しにくい。類例は確認していないが、中国製の大型品となる。30の土師器羽釜は、口径36.0cmをはかる。口縁端部が屈曲し、上方へ立ち上げるもので、口縁部外面に強いナデで段を

3. 調査の成果

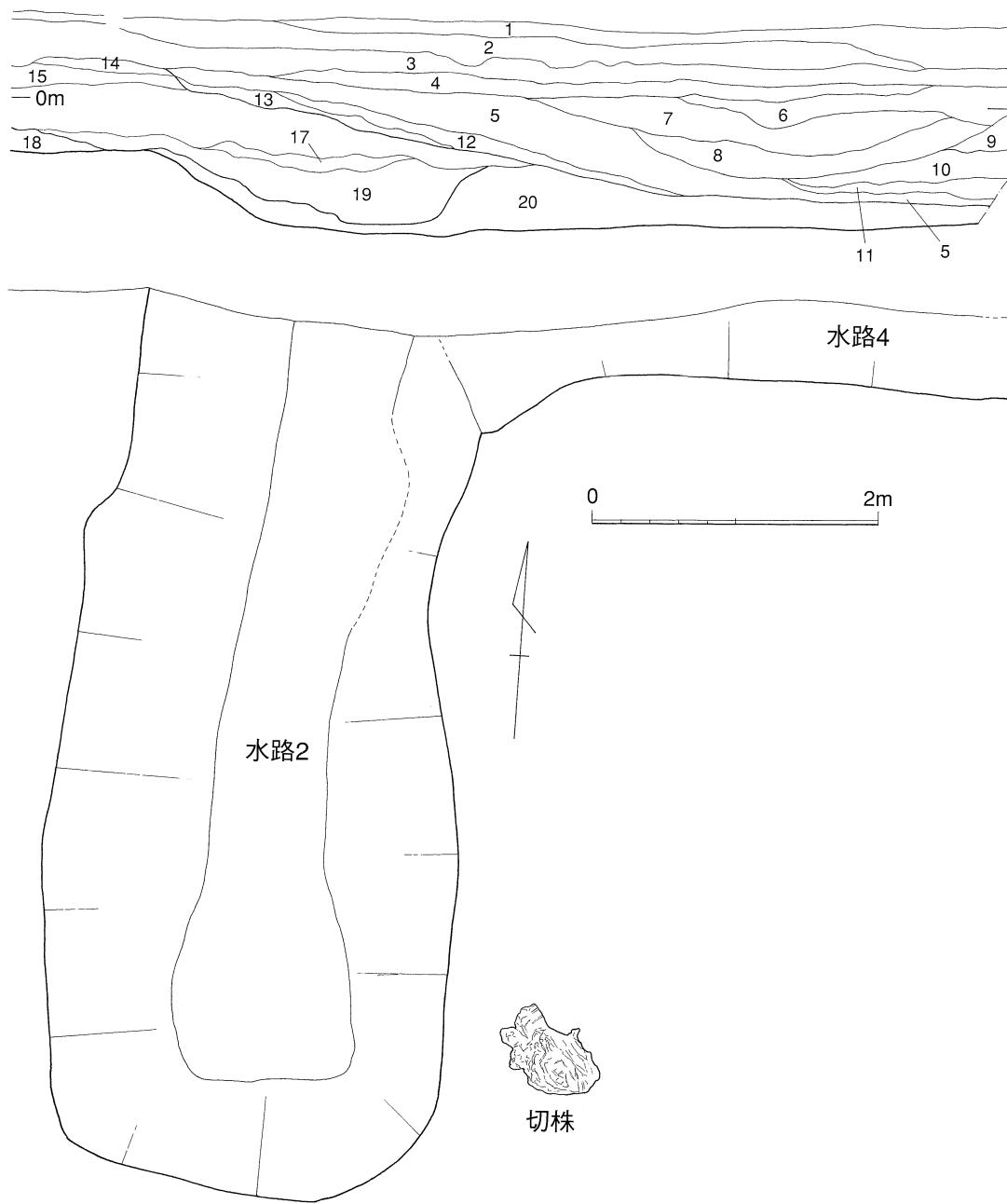


第79図 水路1最下層 出土遺物2 (23~32 1:4、33・34 1:2)

形成する。31の瓦質土器こね鉢は、口径33.0cmをはかる。内外面とも板ナデを施す。32の東播系須恵器こね鉢は、底部径10.0cm前後をはかる。33の硯は長さ5.0cm以上、幅2.7cm、厚さ1.4cm前後をはかる。2室に分かれるタイプで、滑石を母材とする。34の黄釉陶器盤は、残存高2.3cm以上をはかる。外面は露胎し、内面に鉄釉で施文する。

以上、出土遺物のうち、和泉型瓦器碗をみるとⅡ-2期~Ⅳ-1期までの遺物を中心としている。遺物の時期幅は、1区第2層~第3層上面における集落の時期と対応し、それ以後のへそ皿などがみられないことや水路3の廃絶が同時期であることから、水路が一時期使用されなかった可能性もある。また、16世紀の段階では、石塔や柿経の可能性のある経文の一部を墨書した木札、鬼瓦等の瓦類が出土していることから、周辺に寺院が存在した可能性が高い。寺院は、出土した瓦から16世紀後半には建立されていた可能性が考えられる。

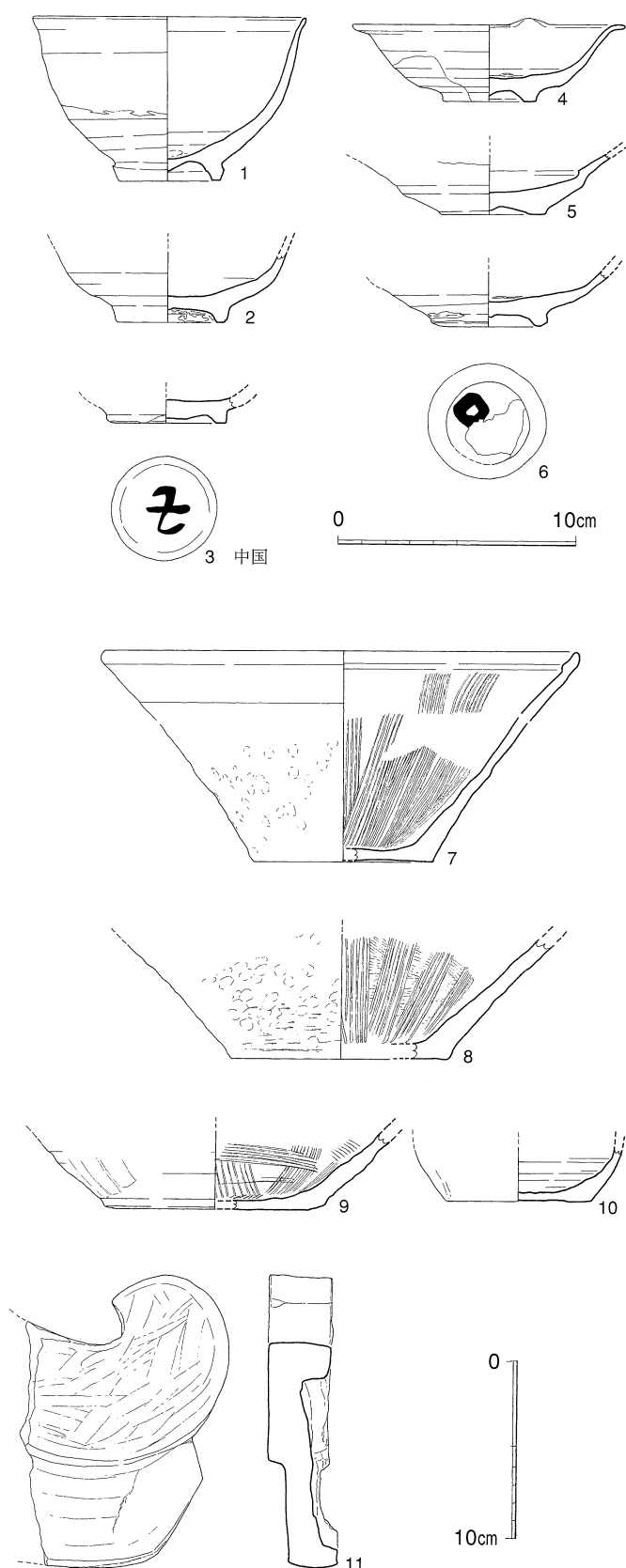
水路2 2区北部で検出された、北方へ伸びる水路である。水路の幅は掘削面で2.5m、水深1.25mである。検出部分における全長は6.2mをはかり、調査区北方で水路4と合流する可能性がある。水路の南側が途絶するのは、通路としての機能を考える上でやや疑問の生じるところであるが、水路4の支線と解釈するならば、回避所あるいは船止めとして機能したと考えることも十分可能であり、問題視するほどの矛盾にはならない。



- | | |
|--|--|
| <p>1. 灰色 (7.5Y4/1) シルト 礫を極少量含む。</p> <p>2. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 細粒砂 石・礫を含む。</p> <p>3. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト～極細粒砂 石・礫・土器・陶磁器を含む。</p> <p>4. 灰色 (7.5Y4/1) シルト～粘土 炭を少量含む。土器・陶磁器・植物遺体などを含む。</p> <p>5. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂～中粒砂が層状に堆積する。土器・陶磁器・植物遺体などを含む。</p> <p>6. 灰色 (10Y5/1) シルト～粘土 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂が層状に堆積する。植物遺体・陶磁器などを少量含む。</p> <p>7. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 極細粒砂～シルト 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 細粒砂が層状に堆積する。植物遺体・陶磁器などを少量含む。</p> <p>8. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細粒砂～シルト 礫～石・植物遺体・木材・土器・陶磁器類などを含む。</p> <p>9. 灰色 (10Y4/1) シルト～極細粒砂 灰色 (10Y6/1) 細粒砂が層状に堆積する。</p> | <p>10. 灰色 (10Y5/1) シルト～粘土</p> <p>11. 灰色 (7.5Y5/1) 極細粒砂 シルトブロックを少量含む。土器小型片を極少量含む。</p> <p>12. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 極細粒砂～シルト 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 細粒砂が層状に堆積する。植物遺体・陶磁器などを少量含む。</p> <p>13. オリーブ灰色 (5GY5/1) 極細粒砂～シルト 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 細粒砂が層状に堆積する。植物遺体・陶磁器などを少量含む。</p> <p>14. 明黄褐色 (2.5Y5/6) 細粒砂 (シルト含む)</p> <p>15. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細～極細粒砂</p> <p>17. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 均質な粘土</p> <p>18. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 極細粒砂～シルト (腐植土) 植物遺体・獣骨などを含む。(入り江堆積土)</p> <p>19. 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト (腐植土) オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂が層状に堆積する。</p> <p>20. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 細粒砂 植物遺体を含む。</p> |
|--|--|

第80図 水路2・4平面・断面図 (1:50)

3. 調査の成果



第81図 水路2 出土遺物
(1~6 1:3、7~11 1:4)

埋土は2層に大別できるが、腐植土となることで共通する。このうち、上層出土遺物は戦国末期～江戸時代前期のやや新しい時期ものに限定される。よって水路2は水路1再掘削後に水路4の拡張として掘削され、入り江埋め立て直前まで機能した可能性がある。

水路2 出土遺物 1・2は肥前系陶器碗である。1は器高6.9cm、口径11.4cmをはかる。2は残存高3.0cm、高台径4.6cm前後をはかる。3の中国製白磁碗は、高台径5.0cm以上をはかる。高台内に「子」のような記号が墨書される。4～6は、肥前系陶器皿である。4は器高3.2cm、口径11.5cmをはかる。見込みに胎土目痕がある。5は残存高2.5cm、高台径4.4cm前後をはかる。目跡は確認できないが、畳付に砂目痕らしき痕跡がある。6は残存高2.4cm、高台径5.0cmをはかる。見込みに砂目痕がある。高台内に「○」状の記号が墨書されている。7・8は丹波焼播鉢である。7は器高17.0cm、口径26.0cm前後をはかる。内面に櫛書き8条の播り目を施す。外面は押圧痕を残す。8は残存高7.8cm、底部径12.4cm前後をはかる。内面に櫛書き5条単位の播り目を施す。外面は押圧痕を残す。9の備前焼播鉢は残存高4.5cm、底部径12.2cm前後をはかる。内面に、櫛書き11条単位の播り目を施す。10の瀬戸美濃焼徳利は、底部径8.0cm前後をはかる。体部外面に鉄釉を施す。底部はケズリ出して蛇ノ目高台とする。11の鬼瓦片は、部位・上下関



第82図 水路3平面・断面図 1:20

係等不明である。水路1上～下層出土の鬼瓦片を同一個体と考えられる。

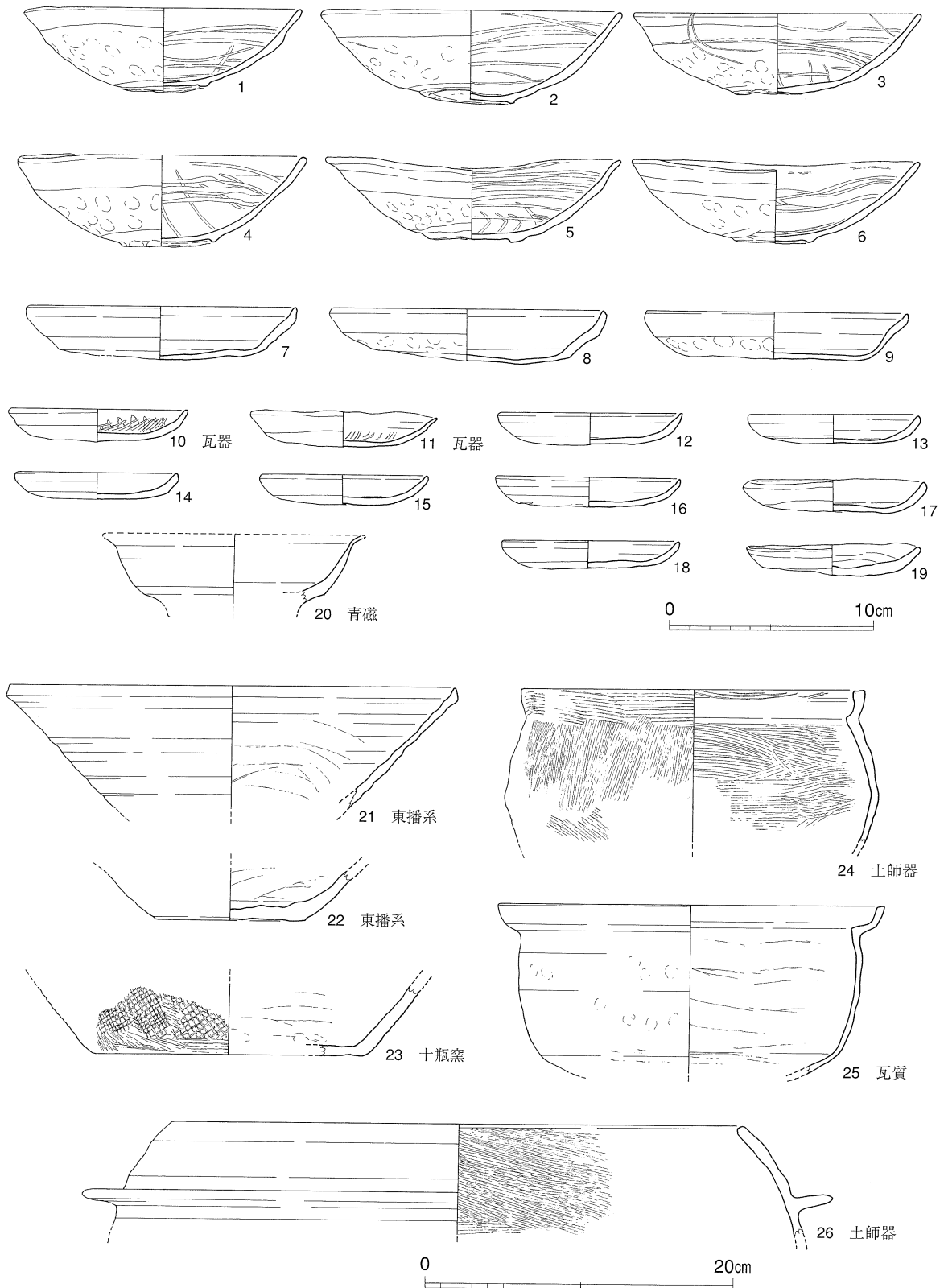
水路3 調査区西端で検出した、北方へ伸びる溝である。遺構の大半は調査区外にあるため、その規模などについては明確ではないが、検出部分から全長7.0m以上、幅1.0m以上、深さ0.7m以上となる。埋土は、3層程度に区分できる。下層は腐植土、中層は洪水などによる水成層で、ともに遺物は含まれない。上層も自然堆積土となるが、多数の遺物を含む。

水路3は、調査区北西の一段高くなったところに掘削されており、水路の西側は集落が立地する微高地となる可能性が考えられる。また、水路3は調査区北西隅で水路4と重複するが、水路4が新しくなることが確認されている。なお、第83図に水路3上層から出土した遺物を掲載した。これらの遺物から、水路3は13世紀前半に廃絶したこ

水路3 土層

1. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細～極細粒砂
2. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂 灰色シルトブロックを多く含む。
3. 褐灰色 (10YR4/1) 極細粒砂 灰色シルトブロックを多く含む。炭・土器を多く含む。
4. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 炭を少量含む。土器を多く含む。
5. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂 シルトブロックを含む。
6. 褐灰色 (10YR6/1) 極細粒砂～シルト
7. 褐灰色 (10YR5/1) シルト～極細粒砂
8. 灰色 (10Y4/1) シルト～極細粒砂
9. 灰色 (10Y4/1) シルト～極細粒砂
10. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト～極細粒砂

3. 調査の成果



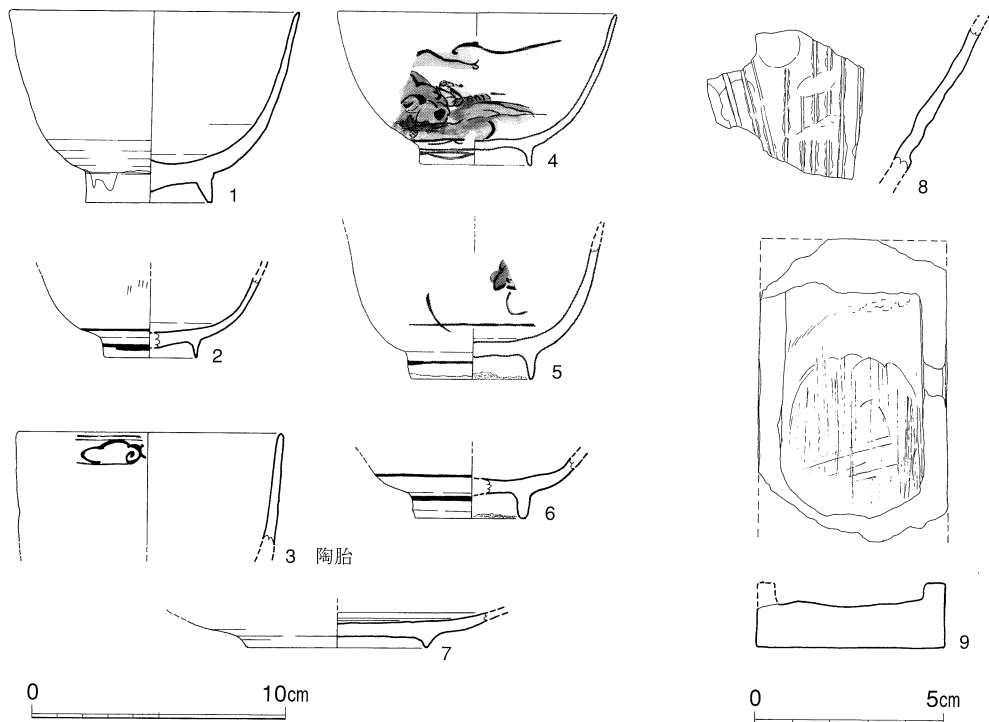
第83図 水路3 出土遺物 (1~20 1:3、21~25 1:4)

とが考えられる。

水路3 出土遺物 1~6 は和泉型瓦器碗で、器高4.0~4.4cm (平均4.1cm)、口径13.8~14.8cm

(平均14.2cm)をはかる。いずれも見込みに平行線状の暗文を施し、高台は粘土紐を巻き付け、軽くナデただけにとどまる。Ⅲ-3期である。7~9は土師器大皿で、器高2.4~2.6cm(平均2.5cm)、口径12.9~13.1cm(平均13.0cm)をはかる。このうち、7・8は端部を面取り、9は端部をつまみ上げ、側面を面取りする。10・11は瓦器皿である。10は器高1.7cm、口径9.0~9.3cm、11は器高1.8cm、口径9.0~9.1cmをはかる。ともに、見込みに格子文状暗文を施す。12~19は土師器小皿で、器高1.3~1.5cm(平均1.4cm)、口径8.1~8.9cm(平均8.5cm)をはかる。口縁端部を面取りするのが主体となるが、12・16・18は口縁端部をつまみ上げ、側面を面取りする。20は龍泉窯系青磁皿で、器高3.3cm以上、口径12.6cm前後をはかる。内外面ともに無文である。21・22は東播系須恵器こね鉢である。21は器高8.1cm以上、口径29.0cm前後をはかる。内面に板ナデを施す。22は、残存高3.4cm、底部径9.2cm前後をはかる。内面には板ナデを施す。23は、十瓶窯の甕である。残存高4.7cm、底部径17.6cm前後をはかる。体部外面に格子目タタキを施すが、底部近くは平行タタキ痕が残る。被熱したのか、胎土は変色しもろくなっている。24の土師器鍋は、残存部から器高10.1cm以上、口径22.6cm前後をはかる。口縁部は内反気味に屈曲して立ち上がり、受部を作る。25の瓦質土器鍋は、器高11.1cm以上、口径25.2cm前後をはかる。口縁部は屈曲して立ち上がり、受部を作る。内面は板ナデを施す。外面には押圧痕が残る。26の土師器羽釜は、口径37.0cm前後をはかる。口縁部は内傾し、側面には強いナデで段が形成する。内面には横ハケが施される。

水路4 調査区北端で検出した、東西に伸びる水路である。水路3を削平し、一部は水路2と重複する。水路4と水路2は、一連のものと考えられる。遺構の大半は調査区外にあるため、その規模などについては明確ではないが、検出部分から南岸側から幅0.6m、深さ0.5m(水深0.9m)



第84図 水路4 出土遺物(1~7 1:3、8・9 1:2)

4. まとめ

以上となる。水路4は、検出範囲が限定されており、規模・構造を明確にしたいが、水路1と同様の機能を有する幹線であった可能性が想定される。水路4は第84図の遺物から、第2層による埋め立て時にはまだ機能し、埋没は17世紀後半以降と判断できる。

水路4 出土遺物 1・2・4～6は、肥前系磁器碗である。1は青磁で器高7.6cm、口径11.4cm前後をはかる。底部から高台付近にかけて露胎する。2・4～6は染付碗である。2は、高台径3.6cm前後をはかる。4は器高6.0cm、口径11.0cm前後をはかる。くらわんか手の初期型となる。5は残存高5.4cm、高台径4.8cmをはかる。畳付け付近は露胎し、砂が付着する。6は高台径4.4cmをはかる。畳付け付近は露胎し、砂が付着する。3の肥前系陶胎染付碗は器高4.5cm以上、口径10.2cm前後をはかる。7の肥前系磁器皿は、高台径7.2cm前後をはかる。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。8は産地不明の播鉢である。細片のため、法量は明確ではない。外面上部は施釉、下半は露胎する。内面は櫛書きで播り目を施して施釉する。器壁は薄く、胎土に砂粒を多く含むことから、中国製の可能性がある。9の硯は縦8.0cm以上、幅5.0cm、厚さ1.7cm前後をはかる。

以上、水路1～4の水深は1m以上で、幅も川船の規模を下回るものではないものと考えられることから、川船の航行には十分であり、これらの水路が岸近くまで川船が接近できるように掘削したものと判断できる。遠浅の入り江内に縦横に掘削された水路を伝い、岸際まで川船が往来したのであろう。中世港湾集落における舟入り江の一角が具体的に示された遺構と言える。

切り株 水路2の東側で出土した切り株である。樹幹の直径は0.4mをはかる。埋め立て土上層面と同じレベルで切り倒されており、斧による切断痕が明確に確認できる。また、樹種の同定は行っていない。樹木は、埋め立て時に伐採されたらしく、その周辺から木片が多数出土した。

4. まとめ

今回の調査では、12世紀前半～13世紀中頃にかけての石鍋再加工を生業とする可能性が高い建物群など集落の一部と、同時期の舟入り江を確認するなど、中世港湾集落遺跡の実態を明らかにする希有の調査となった。その結果、庄本遺跡が椋橋庄中心部で、また港湾集落であることを確定するとともに神崎川・瀬戸内水運の中継点として重要な流通拠点とする文献による推定を裏付け、「河尻」の一角が明らかになった点において、極めて重要な成果を得ることができた。

(1) 第1調査区における遺構の変遷

当調査区において、建物群が展開しはじめるのは和泉型瓦器碗Ⅱ-2期であり、遺跡は12世紀前半に成立する。しかし、椋橋庄の初見は1048年であり、建物群との間に約100年の時期差がある。その差が、調査区が立地する地形によるのか、あるいは荘園支配のあり方と集落形成の実態の格差に起因するものか、明確ではない。今後、砂堆の形成がいち早く進んだであろう椋橋神社側で遺跡範囲が追認されることで、この問題が解消されることを期待したい。

建物群が本格的に展開する12世紀後半になると、建物群1・2が接して展開するように、やや過密状態の集落景観が推測できる。また建物群1の居住者が手工業者となることや礎石建物や廃

棄遺構は、都市的な性格が予想される。一方、遠浅の入り江に掘削された川船専用の水路は、遺跡一帯で活発な流通活動が行われたことが想像できる。当調査区における遺構から、13世紀前半にかけて、「町場」と「舟入り江」を併せ持つ港湾集落の景観が推測される。

しかし、このような状態は13世紀中頃に一転する。1区壁面では、14世紀以降近現代にいたる遺構面が確認されたが、13世紀後半以降に堆積する第1層内の各遺構面に、第2層のような多量の遺物を含む遺構などは確認できず、港湾集落としての特徴は見出しにくい。一方入り江内の水路も、水路3の埋没によって機能が低下し、その後13世紀中頃～16世紀にかけて、集落・入り江の実態は不明瞭となる。このような動向は、尼崎市大物遺跡でも指摘されており、その背景に社会的な変動が予想される。奇しくも承久の変後、内陸の諸集落では大型水路の掘削が行われ、集村化への動きが現れはじめる時期であることとの関連も踏まえる必要がある。

16世紀になると、再び水路1が機能しはじめる。16世紀後半～末頃の遺物に鬼瓦などが含まれていることは、付近に寺院が存在したことを示す。しかし、戦国期になって再び港湾集落が活性化するのも束の間、「慶長年中」には猪名川筋では大型船舶の航行が困難となり、入り江も17世紀初頭に埋め立てられ、そして耕地へと変化する。江戸後期に作図された可能性が考えられる（仮称）『庄本村絵図』に描かれた沼地は、こうした入り江の名残を留めるものと判断される。以後、庄本村は川港を有する農村へと変貌する。

（2）遺物からみた遺跡の性格

調査区において建物群・舟入り江が本格的に展開する12～13世紀前半にかけて、多彩な貿易陶磁、国内各地の搬入品が含まれることが指摘できる。青白磁や施釉陶器の大型器種や国内搬入品、硯の出土数、さらに面積あたりの遺物出土数を、小曾根遺跡などの平野部の集落と比較した場合、その格差は歴然としており、当遺跡が豊島郡における流通拠点として機能したことを示している。一方、同じ流通拠点である大物遺跡と貿易陶磁、国内搬入品の質・量を比較した場合、明らかに同遺跡の方が圧倒的であり、同じ「河尻」内の港湾といっても、立地も含めて外海型の大物遺跡に対する内陸型の椋橋庄という質的な相違点が指摘できる。

また、北側建物群において出土した遺物中に、スタンプ未製品をはじめとする石鍋片が多く含まれていることは特筆される。これらの石鍋片は、破断部に鋸状の切断痕や、石錐による穿孔を有するものが多い。このような破断面を有する破片が一般集落から出土することはなく、石鍋を素材に多様な製品を生産する商工業者が、この建物群に居住したことは明らかと言える。また、スタンプなどの製品が一点もない点で、分業の一端を担う工人であった可能性も想定できるかもしれない。このほか、調査区からは若干の鋳滓も出土しており、鋳物師等の活動も想定でき、檜物座の存在などをあわせて、当遺跡の主要な居住者が商工業者で占められたことが予想される。

（3）地域における遺跡の位置付け

先に椋橋庄を内陸型流通拠点としたが、どのような範囲にその機能を及ぼしたのであろうか。「蔵人所牒案」における檜物座の商業範囲の特徴をみると、面的な商業範囲が椋橋庄以外に河辺郡

4. まとめ

側の橋御園に限られること、また豊島郡側の市庭が豊嶋市だけであることが指摘できる。このことは、日常の活動が河辺郡内における猪名川沿岸の荘園にとどまり、豊島郡との競合をさけたとも解釈できる。確証は欠くものの、檜物座の本拠が河辺郡側にあり、豊島郡側に同様の座が存在したことに、その原因があったのではなかろうか。少なくとも先の史料から、棕橋庄を本拠とした座の商人が一郡内の複数の荘園を日常的な商業範囲にしたと考えることは可能であろう。

このような檜物座の商業範囲を豊島郡側で考えると、棕橋庄の流通範囲は猪名川沿岸の豊嶋庄、利倉庄や市南部の垂水西牧（榎坂郷・六車郷）一帯に及ぶ可能性も想定できる。時期は下るが、備前焼（Ⅳ期）が市南部で散発的に出土する固有の現象は、神崎・猪名川河口域における舟荷の積み替えを前提とした流通状況として説明でき、棕橋庄を中心とする流通網も、このような範囲に及んだのであろう。

一方、商業範囲の対象となった地域において、出土遺物からどのような流通状況が示されるのであろうか。垂水西牧榎坂郷内の小曾根遺跡（第7次調査大型土坑）では防長系土師器碗や山茶碗、フイゴ羽口が、同じく北条遺跡（第6次調査井水遺構）では白磁・褐釉陶器の水注と尾張産山茶碗（Ⅶ型式）、鉦滓などが、穂積遺跡第31次調査では備前焼（Ⅲ～Ⅳ期）や山茶碗、鉢が出土している。これら山茶碗などは商品ではなく、また鉦滓のように商工業者の活動を示す遺物があわせて出土していることは、商工業者の足取りを示すものと解釈できよう。

なお、穂積遺跡例は建物群の概要が不明であるが、他二例は名主層の屋敷に比定できる。しかし、近隣の屋敷でこのような遺物はなく、集落内で商工業者と関係をもった人物は限定されたと考えられる。このような状況は、垂水西牧における流通が市庭だけではなく、名主屋敷を末端とする流通網との複合によって成立していたことを意味する。

棕橋庄中心部は、豊島郡南部域における市庭や、名主屋敷を末端とする網の目のような流通網の中心の一つとして機能したと言えよう。無論、そのほかにも舟入り江の存在が示すように、外海型の大物遺跡を補完する川船基地としての機能や、猪名川水運との関連もあり得たはずである。しかし、これらの問題を考えるだけの資料は乏しく、今後の課題としたい。

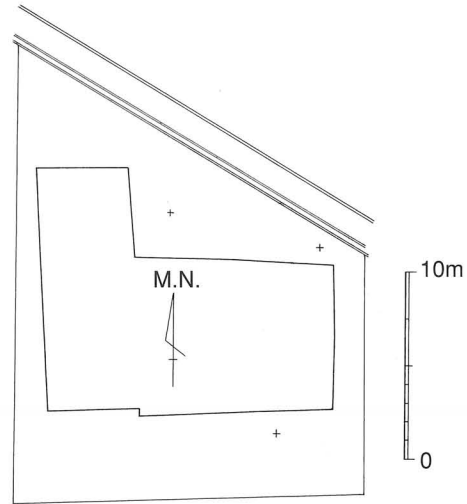
以上、今回の調査で得られた成果と問題点の概略について述べた。将来、当遺跡の調査が進展すれば、鎌倉時代前期政治史に関わる遺跡として、その重要性が増すことは疑いない。しかしその一方で、遺跡範囲については十分に把握されたものとは言い難い上、未だ所在が明確ではない戦国期の城郭、棕橋城の位置確認など課題も多く残されている。よって今後は遺跡内はもとより、その周辺においても開発時には慎重な対応を期す必要があることを提言しておきたい。

最後に今回の調査は、施主・施行業者から多大な協力を得て行われたこと、また獣骨、中世後期～近世遺物、貿易陶磁関係、山茶碗関係の同定、発掘調査および整理作業にあたっては、研究者各位より多くの助言をいただいたことについて、文末ながら記して感謝いたします。

第Ⅲ章 新免遺跡第56次調査

1. 調査の経緯

当該調査地は豊中市玉井町2丁目6・7・8に所在する。建築工事に先だって確認調査を実施したところ、地表下約40cmのところ遺構面を検出した。遺構の損壊は避けられないことが判明し、協議を行った結果、平成14年(2002年)12月24日から平成15年(2003年)2月28日の日程で、164㎡の範囲を対象として発掘調査を行う運びとなった。

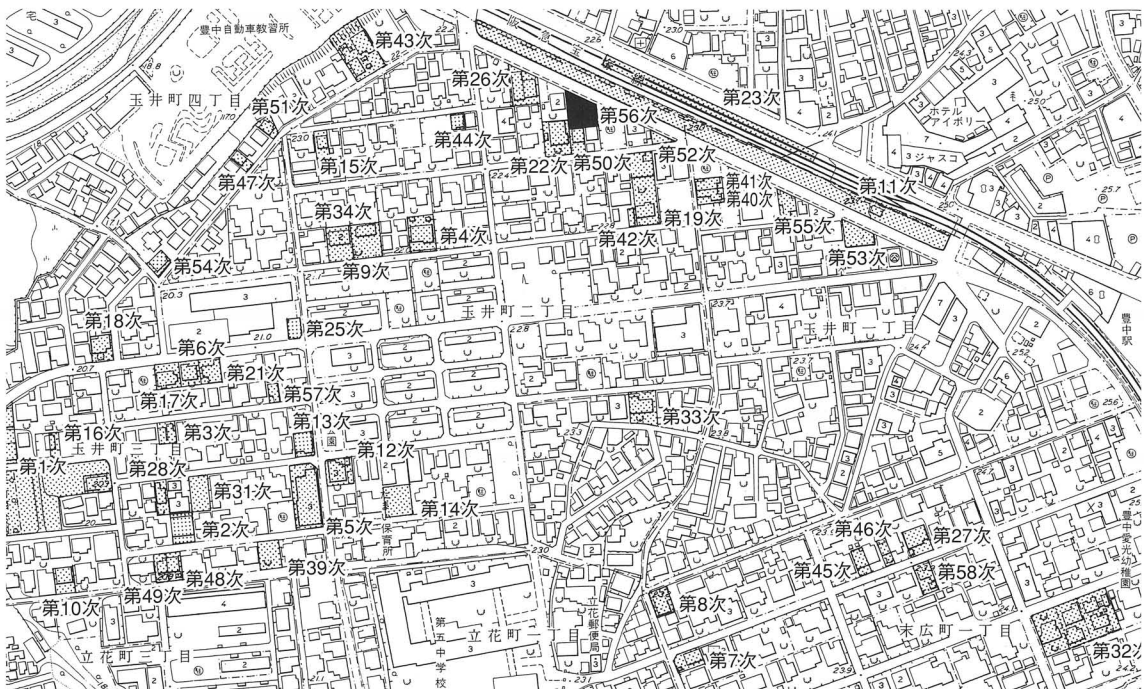


第85図 調査範囲図 (1 : 400)

2. 調査の成果

(1) 地質環境

当該調査地は、千里丘陵西部から南方に派生する台地状の地形、主として千里川の下刻によって形成された平坦な中(～低)位段丘面に位置する。調査区の約100m西側は、急深な段丘崖をへて狭小な低位段丘から千里川河床面へとつらなる。後期旧石器時代以来の生活面はこの中位



第86図 調査地位置図 (1 : 5,000)

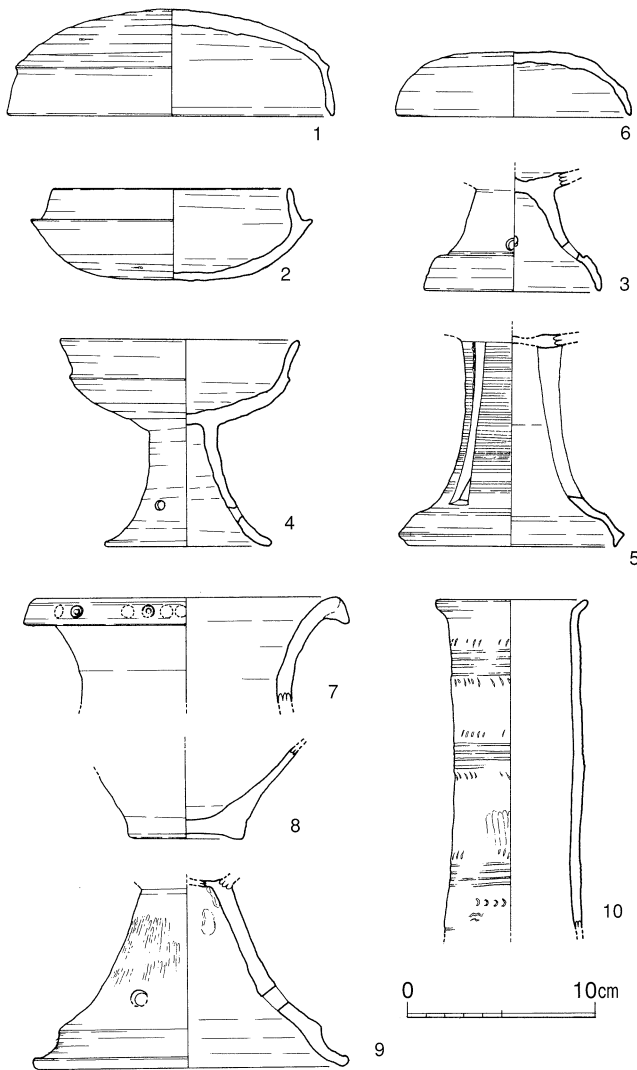
2. 調査の成果

段丘面(洪積層上面)に形成されており、拳大から長径が10cmを超えるような亜角礫を主体とした砂礫層及び酸化して黄橙色を呈するシルト主体の堆積層が基盤となっている。従来はこの基盤層上に存在する黒褐色～褐灰色系のシルト層を遺物包含層として把握してきたが、現在ではそうした遺物包含層は小規模な谷地形や斜面地にわずかながら認められるものの、集落全体を被覆するようなものではなく、概ね判別の困難な遺構埋土どうしの重複が遺物包含層の様相を呈するものと理解されている。また、中世以降の耕地開発などによる削平を受けやすい環境にあり、基盤層上の堆積層を成層的に把握することはより困難な状況にある。当該調査地でも壁面の断面各層相から同様の状況が看取され、遺構の検出は基盤層上で行なった。基盤層上には弥生時代以降の遺構埋土に先行して、黒色系の不定形な輪郭が検出されるが、現時点では樹木の根の痕跡(倒木痕)であろうと考えている。弥生～古墳時代にかけての開発行為によって伐採された可能性が高い。

(2) 検出した遺構と遺物

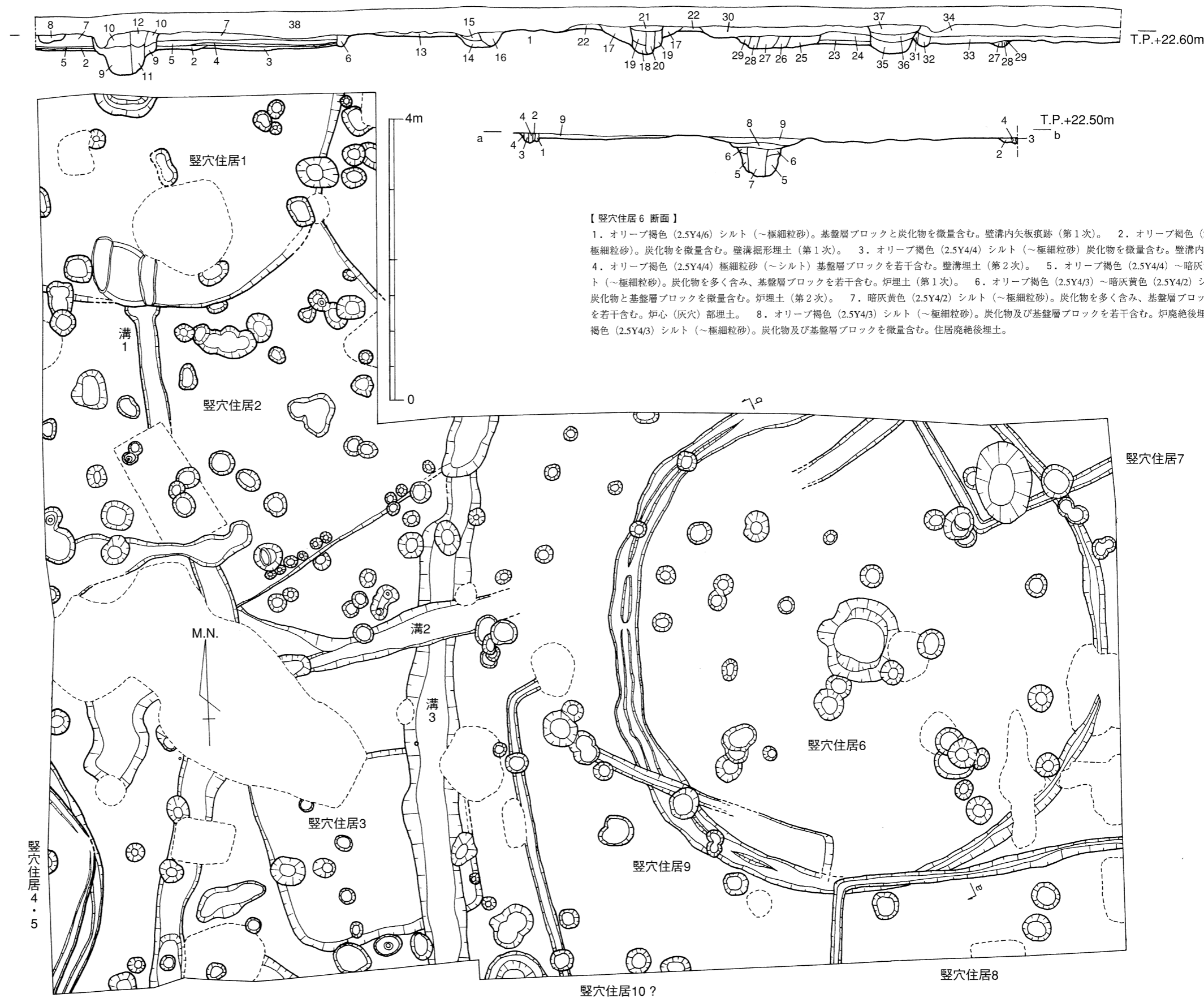
調査区からは、円形住居1棟を含む
 竪穴住居9棟、掘立柱建物を構成する
 と考えられる柱穴群と溝数条、土坑2
 基を検出した。以下、主要な遺構と出
 土遺物について、概要を述べる。

竪穴住居 調査区東部中央で検出さ
 れた竪穴住居6は、大形の円形住居で
 直径約7.5mを測る。竪穴内部の周囲に
 は幅約15cm程度の細い壁溝を巡らせて
 いる。壁溝は2条重複しており、最も
 よく遺存した東部では深さ約40cmを測
 るが、西側の浅い部分では5cm程度し
 かなかった。竪穴基底面には4か所に
 2基ずつ重複して、支柱穴が検出され、
 それぞれが直径約40cm、遺存した深さ
 約40cmを測る。壁溝と支柱穴が各々重
 複していたことから、竪穴住居6では
 最低1回の建て替えが行なわれていた
 ことがわかる。また、竪穴基底面中央
 には上部の直径約1mを測る土坑状の遺
 構が検出されている。上部は浅く広い



第87図 竪穴住居 出土遺物 (1:4)

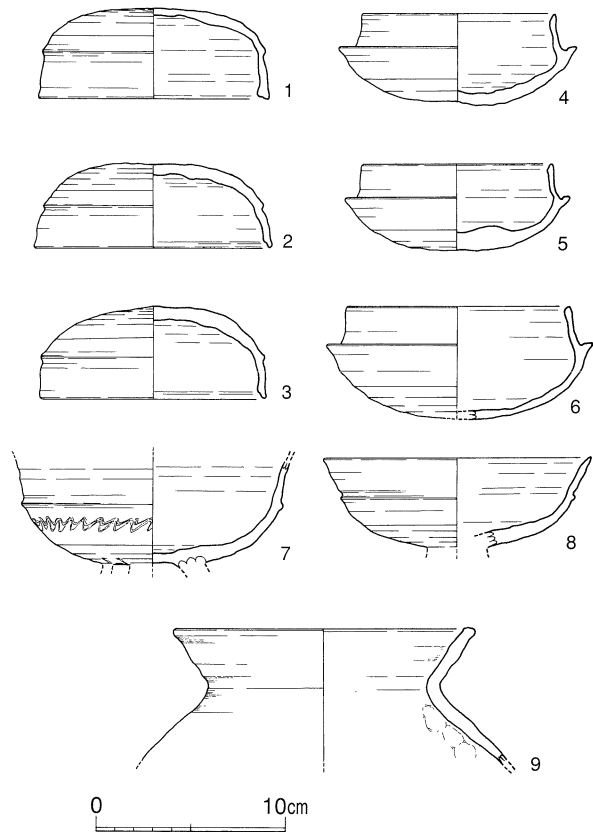
1. 黄色 (2.5Y8/8) シルト (～細粒砂)。φ1～5mmの礫を若干含む。均質で堅緻。下部に砂礫層あり。調査区周辺の基盤層 (洪積層上部)。
 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂)。φ3cm以下の礫を微量含む。炭化物を多く含む。微細な焼土ブロック及び基盤層ブロックを若干含む。竪穴住居1の整地層。
 3. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト (～細粒砂)。φ3cm以下の礫と基盤層ブロックを若干含む。竪穴住居1の整地層。2・3層上面は竪穴住居1の第1次床面。
 4. ぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト (～細粒砂)。焼土ブロック、基盤層ブロック、炭化物の薄層が互層状に含まれる。竪穴住居1の整地層。
 5. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂)。φ5mm以下の礫を若干含む。炭化物を微量含む。東側に基盤層ブロックを多く含む。竪穴住居1の整地層。4・5層上面は竪穴住居1の第2次床面。
 6. 黒褐色 (10YR3/2) 極細粒砂 (～中粒砂)。西側に灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂の微細ブロックを40%程度含む。竪穴住居1の壁溝。
 7. 黒褐色 (10YR3/2) ～灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～細粒砂)。φ3mm以下の礫を若干含む。上半部はやや色調暗い。竪穴住居1の覆土。
 8. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂 (～中粒砂)。φ1cm未満の礫を多く含む。7層ブロックを若干含む。マンガン点状小結核を多く含む。古墳後期以降の溝埋土。
 9. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～極細粒砂)。基盤層微細ブロックを若干含む。炭化物を微量含む。最下部では黒色 (10YR2/1) を呈する。柱穴掘形埋土下層。
 10. 黒褐色 (10YR3/2) シルト (～細粒砂)。φ5mm以下の礫を微量含む。柱穴掘形埋土上層。
 11. 暗褐色 (10YR3/3) シルト (～極細粒砂)。φ2cm程度の礫を微量含む。炭化物を若干含む。比較的均質。柱痕下層。
 12. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～極細粒砂)。柱痕上層。11・12層両側には掘形埋土との間隙に乾痕がみられる。
 13. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂 (～極細粒砂)。竪穴住居2の整地層。東端部は色調暗く、壁溝埋土の可能性あり。
 14. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 極細粒砂 (～シルト)。下半部に基盤層の微細ブロックを15%程度含む。ピット埋土。
 15. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細粒砂 (～シルト)。炭化物を若干含む。溝3埋土。
 16. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。φ1cm以下の礫を若干含む。基盤層ブロックを微量含む。ピット埋土。
 17. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。φ3mm以下の礫と炭化物を微量含む。
 18. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。φ3mm以下の礫と炭化物を若干含む。柱穴掘形埋土下層。
 19. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。φ3mm以下の礫と炭化物を微量含む。柱穴掘形埋土上層。
 20. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。φ5mm程度の礫と炭化物を若干含む。柱痕。
 21. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。炭化物を微量含む。柱穴最終埋土。
 22. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。微細な基盤層ブロックと炭化物を微量含む。基盤層の土壌化部分。
 23. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。炭化物を若干含む。竪穴住居6の整地層。
 24. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。基盤層ブロックを微量含む。竪穴住居6の整地層 (貼床?)。
 25. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。下半部に基盤層ブロックを微量含む。竪穴住居6の壁溝 (第1次) 掘形埋土。(以下25～29層は断面に対して遺構が極端に斜交)。
 26. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。φ3mm程度の礫と基盤層ブロックを微量含む。竪穴住居6の壁溝 (第1次) 矢板痕跡。
 27. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。基盤層ブロックを微量含む。竪穴住居6の壁溝 (第2次) 掘形埋土内側。
 28. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。φ3mm程度の礫と炭化物を微量含む。竪穴住居6の壁溝 (第2次) 矢板痕跡。
 29. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。φ2cm程度の礫と基盤層ブロックを若干含む。竪穴住居6の壁溝 (第2次) 掘形埋土外側。
 30. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト (～極細粒砂)。φ1cm未満の礫と炭化物を若干含む。古墳後期の包含層。
 31. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。竪穴住居7の壁溝掘形埋土。
 32. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。竪穴住居7の壁溝 (矢板痕跡?)。
 33. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。φ5mm前後の礫と炭化物を若干含む。東側に基盤層ブロックを多く含む。竪穴住居7の整地層。
 34. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト (～極細粒砂)。φ1cm程度の礫を若干含む。竪穴住居7の覆土。
 35. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂)。下半部に基盤層ブロックを若干含む (以下34～36層は溝6埋土)。
 36. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト (～極細粒砂)。φ5mm前後の礫と炭化物を若干含む。
 37. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト (～極細粒砂)。φ5mm前後の礫を微量含む。
 38. 現代の盛土・整地土。



【竪穴住居6 断面】
 1. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト (～極細粒砂)。基盤層ブロックと炭化物を微量含む。壁溝内矢板痕跡 (第1次)。
 2. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト (～極細粒砂)。炭化物を微量含む。壁溝掘形埋土 (第1次)。
 3. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト (～極細粒砂) 炭化物を微量含む。壁溝内矢板痕跡 (第2次)。
 4. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細粒砂 (～シルト) 基盤層ブロックを若干含む。壁溝埋土 (第2次)。
 5. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) ～暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (～極細粒砂)。炭化物を多く含む。基盤層ブロックを若干含む。炉埋土 (第1次)。
 6. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) ～暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (～極細粒砂)。炭化物と基盤層ブロックを微量含む。炉埋土 (第2次)。
 7. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (～極細粒砂)。炭化物を多く含む。基盤層ブロック及び焼土ブロックを若干含む。炉心 (灰穴) 部埋土。
 8. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。炭化物及び基盤層ブロックを若干含む。炉廃絶後埋土。
 9. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト (～極細粒砂)。炭化物及び基盤層ブロックを微量含む。住居廃絶後埋土。

第88図 調査区平面・断面図 (1:60)

が、中央部の直径約50cm程度は途中から急激に深く掘削されている。埋土は黒色系のシルトで、焼土及び炭化物を含んでいるため、住居に伴う炉である可能性が高い。周辺の調査でも同様の施設が確認され、灰穴炉であろうとされている。堅穴住居6の床面及び炉からは、弥生中期末～後期初頭の土器が出土しており(第87図7～10)、遺構の形態が示す時期と齟齬はない。その他の堅穴住居はすべて方形で、一辺が約4～5mを測るものと考えられるが、検出位置が調査区の端部にかかるものがほとんどであったこと、著しい削平を受けていたことなどの理由から、正確な規模を把握できた住居はなかった。堅穴住居1ではカマドを伴うが、約50cmの範囲に焼土・炭化物を含むシルト主体の土層が馬蹄形に検出されたの

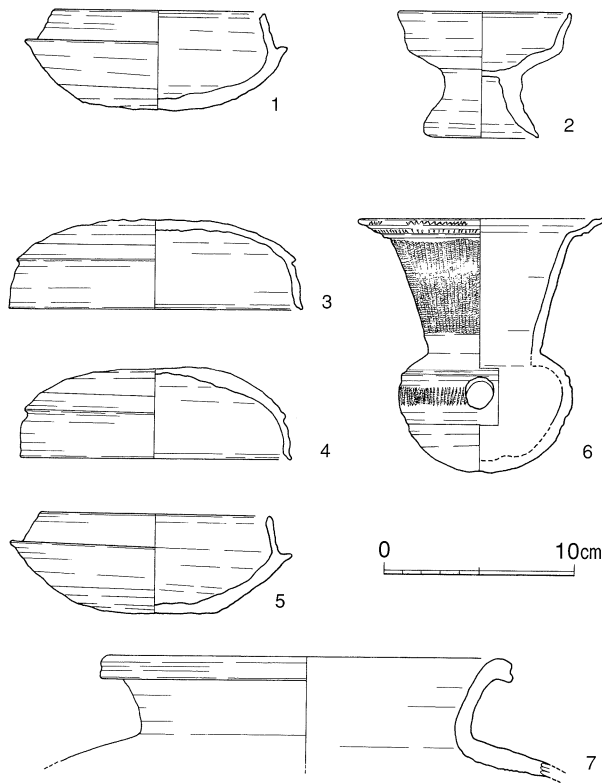


第89図 溝3 出土遺物(1:4)

みで、カマド構造の詳細を明らかにすることはできなかった。堅穴住居4では壁溝が重複していたため、建て替えが行なわれたものと考えられる。方形堅穴住居の時期は出土遺物から概ね6世紀中葉～後半代に帰属するが、堅穴住居1のカマド付近で出土した須恵器(第87図6)が最新相を示す。これらの堅穴住居と重複して掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴群が検出されているが、調査区内では規格を明らかにすることができなかった。

溝2・3 調査区内では数条の溝が検出されているが、すべて6世紀代の所産である。溝3は調査区中央部を南北に貫き、幅約80cm、遺存した深度約30cmを測る。溝の埋土中～上層では一定の間隔をあけて蓋杯を中心とした須恵器(第89図)が出土した。須恵器は田辺編年のTK47(～MT15初を含む?)型式に該当し、調査区内の古墳後期の遺構群では最も古い時期にあたる。周辺の調査では同様の規模・時期をもつ溝が多数検出されており、勾玉・白玉などの祭祀遺物も埋納されている事例が確認されている。古墳後期の集落のうち、5世紀末から6世紀前半の遺構群が一旦解体され集落が再編される段階があり、その際に祭祀行為が行なわれたものと考えられる。当該調査区でも溝3の周辺を中心に白玉が出土しており、同様の状況を示唆している。溝2は溝3に重複して掘られたものであり、出土遺物から堅穴住居と同時期に併存したことが確認されている。ただし、遺物の出土状況は溝3とは明らかに異なり、通常の廃棄行為と

2. 調査の成果



第90図 包含層・溝2 出土遺物（1：4）

捉えられる（第90図3～7）。

土坑 調査区内では大小の土坑が検出されたが、竪穴住居3と重複している土坑が最大の規模である。不定形であるが幅約3mを測る。6世紀後半代の須恵器を中心に遺物が出土しているが、焼成不良や焼け歪みの顕著なものが多く、掘立柱建物に付随する廃棄土坑であろうと考えられる。包含層出土遺物として把握していたものの大半が、この土坑の周辺、または上位で出土し、元来はこの土坑に帰属した遺物であったと考えられる（第90図1～2）。

3. まとめ

当該調査地周辺では、既往の調査を含めて弥生中期から古墳後期にかけ

て、約20棟もの竪穴住居が検出され、新免遺跡内でも住居の密集する地域の一つとして注目される。しかし、建て替えも含めた住居の存続時期については、若干の画期が認められる。第一の画期は弥生終末期～古墳前・中期であり、住居の規模が縮小するとともに遺跡全体を通じて総数も激減する。第二の画期は古墳中期末～後期初頭であり、後期中葉に至って飛躍的に住居数（掘立柱建物を含む）が増加するのと比較して、あまりにも貧弱である。この第一の画期に関しては、弥生終末期以降、河内潟沿岸の流通機構の発達やそれに期を合わせた低湿地への進出が豊中市内でも丘陵地の開発を鈍らせた遠因として理解することができる。また、第二の画期に関しては、北側に隣接する本町遺跡の動向と合わせて勘案すると、古墳後期に千里川上流域に出現する桜井谷窯跡群との密接な関係が影響していることは間違いない。しかしながら、各時期にわたって周辺には墓が検出されず、遺跡西南部で確認されている墓域との関係が明らかではない点や、古墳後期の大規模開発直前に行なわれる祭祀実態など、詳細が明確にされていない事象がまだまだ多く認められる。今後、周辺の調査がさらに進展することにより、これらの課題が解消されることを期待したい。

第IV章 新免遺跡第57次調査

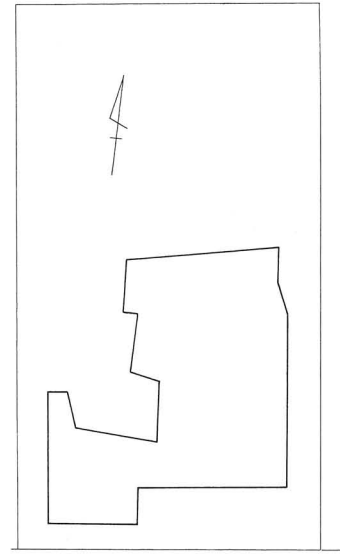
1. 調査の経緯

当調査区は玉井町3丁目13-1に所在する。個人住宅新築に伴い、平成15年（2003年）1月30日に埋蔵文化財発掘の届け出が提出されたのをうけて確認調査を行ったところ、敷地南側で濃密な遺構の分布が、また敷地北側では第2次世界大戦時の爆弾投下による攪乱が推定された。一方、建築業者側もこの結果を受け、地質調査をしたところ、地盤改良が必要と判断し、遺構面の損壊は避けられなくなった。このため、遺構が残存する調査区南側を対象に、3月25日～4月4日に発掘調査を行うこととなった。

2. 調査の成果

(1) 基本層序

調査区では、地表下0.3mのところで段丘堆積層を確認した。また、段丘堆積層の直上から地表まではすべて宅地に伴う造成土となる。このため、遺物包含層などは確認されず、遺構はすべて段丘堆積層上面で確認した。



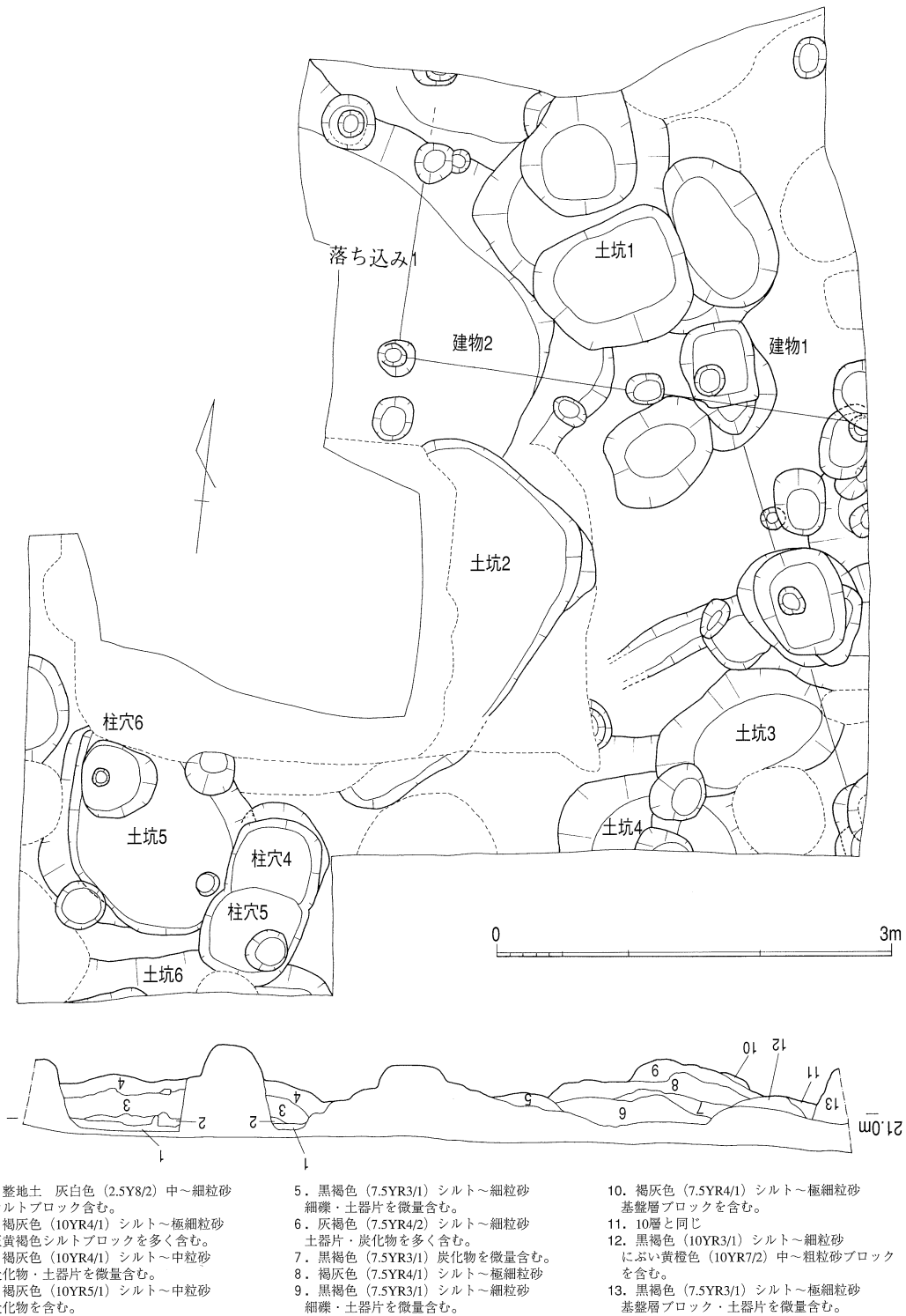
0 5m

第91図 調査範囲図
(1 : 200)



第92図 調査地位置図 (1 : 5,000)

2. 調査の成果

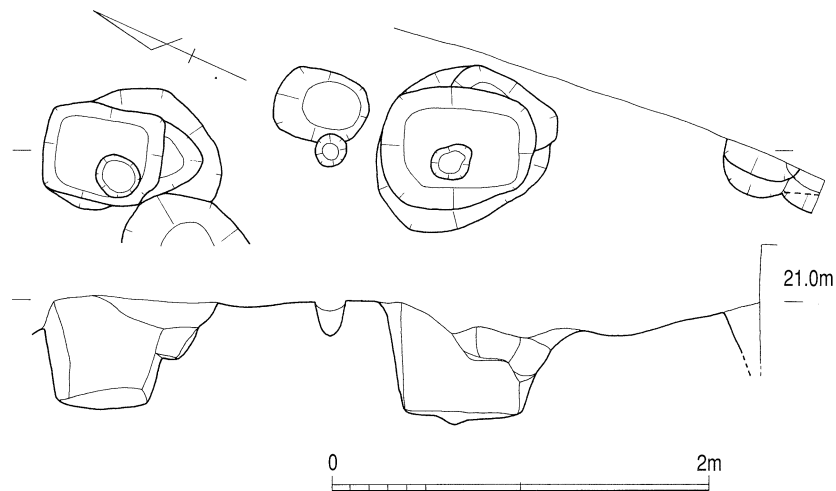


第93図 調査区平面・断面図 (1 : 50)

(2) 検出した遺構と遺物

調査区からは、多数の柱穴、土坑などが検出された。また、調査面積が極めて限定されているにもかかわらず、遺物収蔵箱6箱分におよぶ多量の土器が出土した。以下、主要な遺構について、その詳細を述べることにする。

建物1 調査区南部で検出した、大型の柱穴からなる掘立柱建物である。検出部分が限定されているため、その規模などの詳細は明確にできないが、少なくとも南北主軸の柱間2間(3.5m)以上の建物と考えられる。



第94図 建物1平面・立面図(1:40)

一方、柱穴は検出面上で長軸長0.9mの不整楕円形状を呈するが、下半部から基底面付近にかけては長辺0.7m前後の長方形形状を呈する。柱穴の深さは0.55~0.6mと深く、使用された柱も柱痕から0.4m前後と推定される。また断面の観察から、柱は建物廃絶後にその周囲を掘削して抜き取ったことが予測される。なお、柱芯の間隔は1.75mをはかる。

建物の時期は、柱抜き取り後の堆積土から出土した第97図1・2の須恵器蓋杯がTK85前後となること、また土坑1-1埋土を削平して柱穴が掘削されていることから、建物は6世紀前半~中頃の所産と考えられる。

建物2 調査区北部で検出した東西2間(3.6m)、南北1間(2.2m)以上の側柱建物と考えられる。柱穴の大きさは0.3~0.4mと小型の部類に属し、柱も20cm前後のものを使用している。柱穴から遺物が出土していないため、時期は明確にはできないが、埋土・遺構の重複関係から古墳時代後期以前となる可能性がある。

土坑1 調査区北部で検出した、重複する4つ以上の土坑からなる。

土坑1-1は、長軸長1.2m、短軸長0.7m、深さ0.35mをはかる南北に主軸をとる楕円形状の土坑である。土坑東側から多量の須恵器が出土したが、その多くが焼け歪んだもので、製品として使用に耐えないものや、窯体の破片も含まれていることから、須恵器選別にかかる廃棄土坑となる可能性が考えられる。

第97図3~8・14にあげる遺物が出土した。3~6の杯蓋は、5を除いて口径11.9cm、器高4.6cm前後をはかる。5のみ口径12.6cm、器高4.8cmと新しい様相を呈する。7・8は杯身である。7は口径10.7cm、器高4.6cm前後を、8は口径10.4cm、器高4.95cm前後をはかる。概ねTK47並行と言えるが、MT15に下る遺物も少量含まれる。このほか、韓式系土器甕の破片が1点出土したが、時期が異なることから、包含層または落ち込み1からの混入品と考えられる。

土坑1-2は、長軸長1.2m、短軸長0.95m、深さ0.4mをはかる東西に主軸をとる楕円形状の土坑である。土坑中下層から少量の須恵器片が出土した。

2. 調査の成果

土坑1-3は長軸長1.0m以上、短軸長0.9m、深さ0.5mをはかる南北に主軸方向をとる楕円形状の土坑である。土坑下層付近から、第97図9~13、15・16などの比較的まとまった量の須恵器

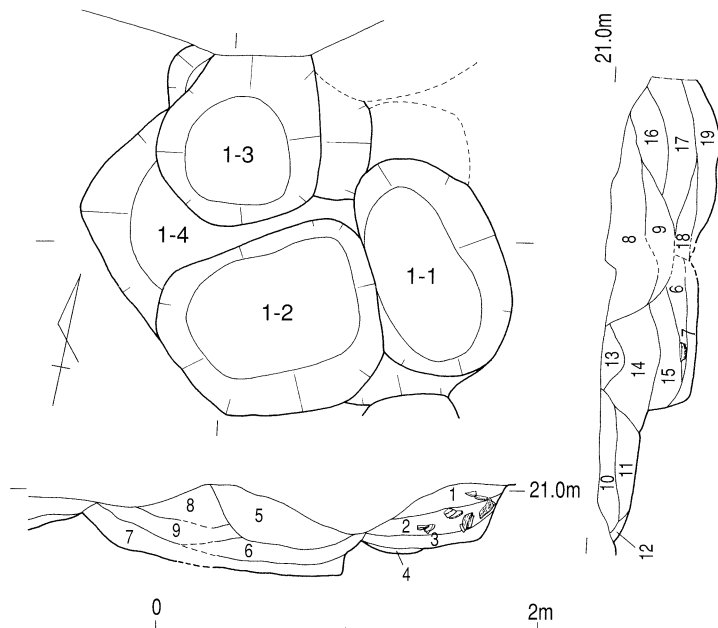
が出土した。

9の杯蓋は口径12.6cm、器高4.55cmをはかる。10の杯身は口径13.3cm、器高5.5cmをはかる。11・12の甕は、口径17.4cm前後をはかる中型品となる。13は口径50cm前後の大型品で、頸部に波状文を施す。これらより、土坑1-3はMT15~TK10の所産となる可能性が考えられる。このほか、混入品ではあるものの縄席文を伴う韓式系土器甕の体部片、土師器甑の底部片が出土している。

土坑1-4は長軸長1.65m以上、短軸長1.15m、深さ0.35mをはかる東西に主軸をとる楕円形状の土坑である。土坑下層付近から、少量の須恵器が出土しただけにとどまる。

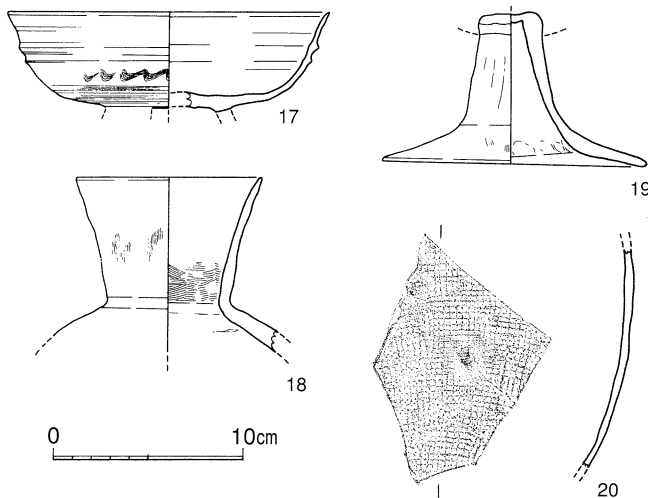
そのほかの遺構 今回の調査

では、建物2棟ほど復元されたが、このほかにも柱穴4~6などのように大型のものがあり、周辺部に建物1ほどではないものの相応の建物が存在するものと考えられる。また、その他の土坑については、弥生時代中期から古墳時代中期の遺物を含むものもあるが、明確なものは古墳時代後期の所産となる。なお、落ち込み1は、古墳時代中期の遺物がまとまることから、時期が遡る可能性が考えられる。

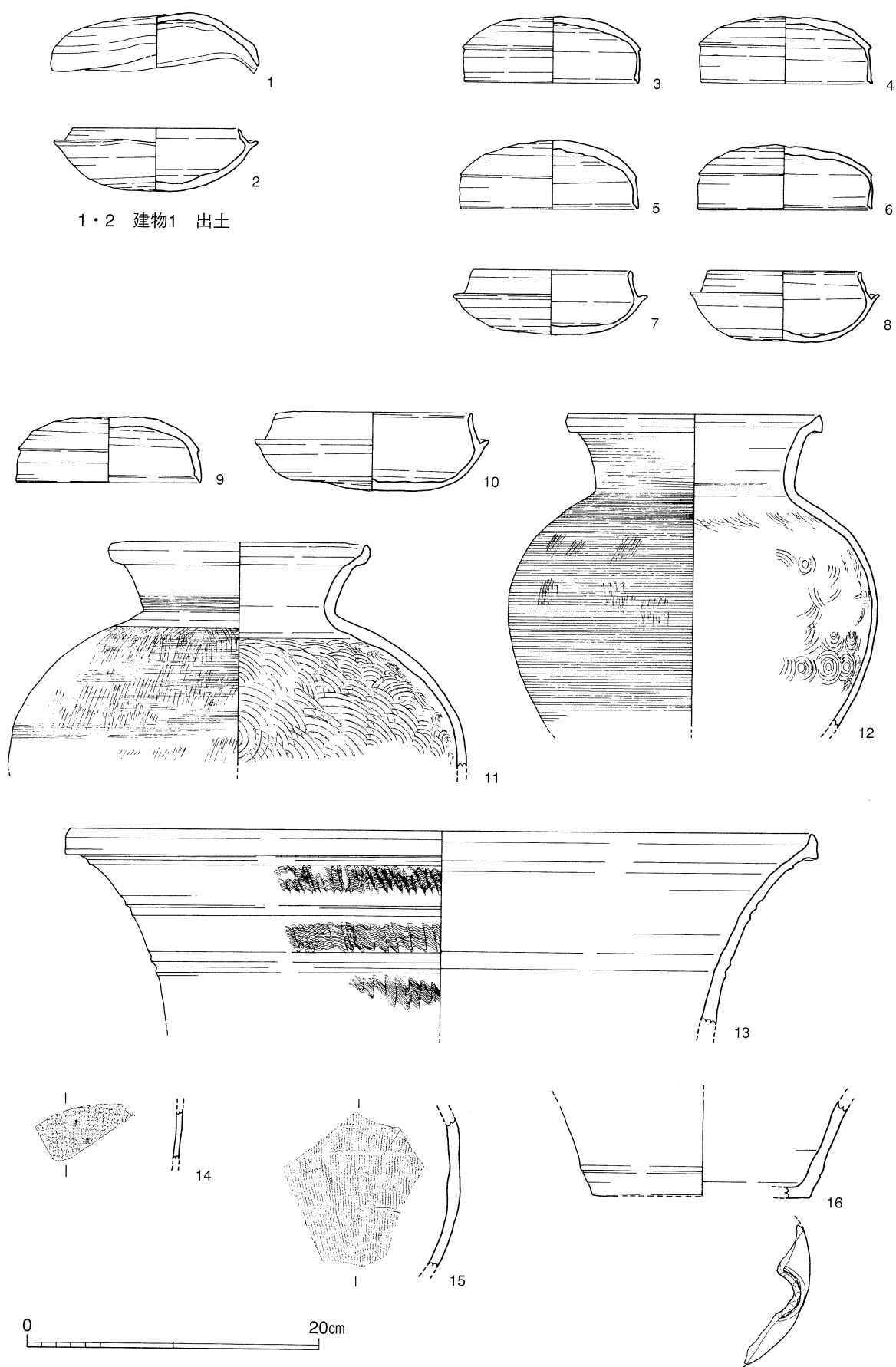


- | | |
|---|---|
| 1. 暗褐色 (7.5YR3/2) 極細~細粒砂 焼土・炭化物を多く含む。土器大型片を多く含む。 | 11. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細~極細粒砂 土器片を微量含む。 |
| 2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 極細~細粒砂 須恵器完形などを多く含む。炭化物・焼土を多く含む。土坑南側で同層位に焼土が集中して堆積する。 | 12. 基盤層ブロックか? [黄灰色 (2.5Y5/1) シルト] |
| 3. 赤灰色 (2.5YR4/1) 細粒砂~シルト 土器片・基盤層ブロックを少量含む。 | 13. 灰褐色 (7.5YR4/2) 極細~細粒砂 土器片を含む。 |
| 4. 基盤層ブロックに褐灰色 (7.5YR4/1) シルトを少量含む。 | 14. 褐灰色 (7.5YR4/1) 極細粒砂 土器大型片を少量含む。 |
| 5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細~粗粒砂 細隙を多く含む。須恵器大型片を多く含む。 | 15. 褐灰色 (7.5YR4/1) 極細粒砂 基盤層ブロックを含む。 |
| 6. 暗赤灰色 (10R3/1) シルト~極細粒砂 基盤層ブロックを含む。須恵器完形などを含む。 | 16. 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 極細粒砂 (細~中粒砂を含む。) 石・土器大型片を含む。 |
| 7. 基盤層ブロックに暗赤灰色 (10R3/1) シルト~極細粒砂を少量含む。 | 17. 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 極細粒砂 (細~中粒砂を含む。) 土器大型片・完形などを含む。 基盤層ブロックを含む。 |
| 8. 暗赤灰色 (10R3/1) シルト~極細粒砂 土器片微量含む。 | 18. 基盤層ブロックに暗赤灰色 (2.5YR3/1) 極細粒砂を含む。 |
| 9. 暗赤灰色 (10R4/1) シルト~極細粒砂 基盤層ブロックを含む。土器を少量含む。 | 19. 基盤層ブロックに暗赤灰色 (2.5YR3/1) 極細粒砂を多く含む。土器細片を含む。 |
| 10. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細~細粒砂 | |

第95図 土坑1平面・断面図 (1:40)



第96図 そのほかの遺構出土遺物 (1:4)



第97図 建物1・土坑1 出土遺物 (1 : 4)

2. 調査の成果

このほかの遺構から出土した遺物については、第96図に掲載した。

17・18は落ち込み1出土のものである。17は高杯杯部で復元径17.0cmをはかる。体部下半に波状文を、脚部には3方向の透孔を施す。杯部は特に焼け歪みが著しい。18は土師器直口壺で、口径9.8cmをはかる。内外面ともに風化が著しく、調整等は明瞭ではない。19・20は土坑5から出土した混入品である。19は土師器高杯脚部、20は韓式系土器甕体部片である。

3. まとめ

今回の調査は、調査面積が限定されたにもかかわらず、建物1や韓式系土器など、当遺跡における古墳時代集落の推移と構造にかかる重要な成果が得られた。以下、建物1を中心に、今回の成果と今後の問題点について概略を述べる。

建物1は検出部分が限定されるため、規模・構造は全く明確ではない。しかし、その柱穴の規模を当該期における一般的な建物のもものと比較すると、一回り大きく、大型建物となる可能性が高い。なお、建物1とほぼ同じ規模の柱穴は、新免遺跡東方に隣接する本町遺跡（第29次調査）においても検出されている。同調査区における建物は、柱間5間以上の庇付き建物で、本体部分は1辺1m前後（柱の直径約30cm）をはかる。その建物の庇部分の柱穴が今回の新免遺跡第57次調査建物1とほぼ同じ規模となる。本町遺跡第29次調査の建物は6世紀後半～8世紀前後にかけての豪族居館の一部と考えられ、今回の建物1の性格を考える上で参考となる。

また、今回の調査では建物1・2以外に建物に復元できた柱穴はなかったものの、柱穴4～6から周辺に古墳時代後期の大型建物群が展開した可能性が想定できる。さらに、これらの建物との直接的な関係は明確ではないものの、土坑1のように出土遺物の中に焼け歪んだものや窯体の一部も含まれていることから、建物1が建築される以前は須恵器選別に関わる場であったことが考えられる。このような立地に建物1が建築されたことを踏まえると、建物1を含む建物群は、当遺跡における須恵器選別の中核的な施設であった可能性も考えられる。

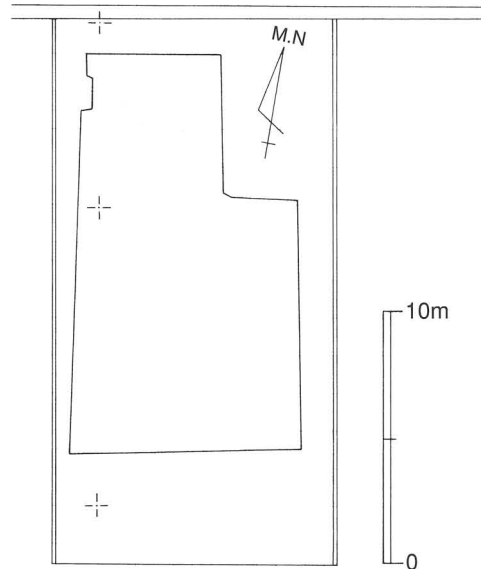
一方、今回古墳時代中期に遡る土師器や韓式系土器が出土したことで、調査区一帯における集落の展開が中期に遡る可能性も指摘できるようになり、須恵器選別にかかる施設の開始時期を含めた再検討も必要となろう。

ところで、今回の調査区付近一帯を、古墳時代の須恵器選別にかかる集落の中心部と考えた場合、先の本町遺跡との関係が問題の一つとして挙げられる。当調査区建物1はTK23段階で終焉する。その一方で、本町遺跡第29次調査の建物は、この時期以降に建設されることが判明しており、中心的施設から居館の移行も想定できる。また、この時期前後から集落が本町第29次調査区周辺にまとまる傾向が認められ、中心部の移動を伴うような集落の再編成があったとも想定しうる。現段階では、遺跡における集落の動向について、十分な検討をしていないため、明確な見通しを述べることはできないが、今後新免遺跡・本町遺跡における集落の推移を考えるときには、このような問題も念頭に置く必要もあろう。

第V章 新免遺跡第58次調査

1. 調査の経緯

調査地は豊中市末広町1丁目73に所在する。平成15年4月23日に提出された埋蔵文化財発掘の届け出に基づいて確認調査を実施したところ、地表下約20cmで溝状遺構を確認した。申請地は個人住宅の建設が予定されており、それに伴う基礎掘削工事の際に遺構の損壊は免れないことが判明したため、協議の結果、本調査を実施することとなった。なお、調査面積は107m²、調査期間は平成15年5月26日～平成15年6月6日であった。

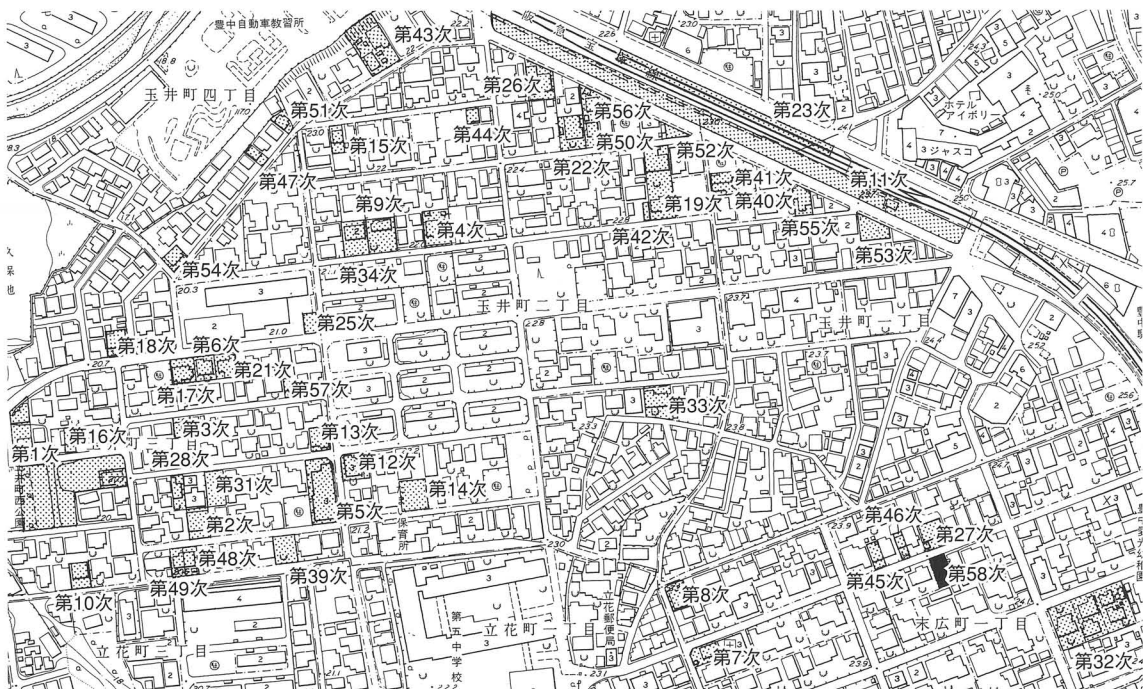


第98図 調査範囲図 (1:300)

2. 調査の概要

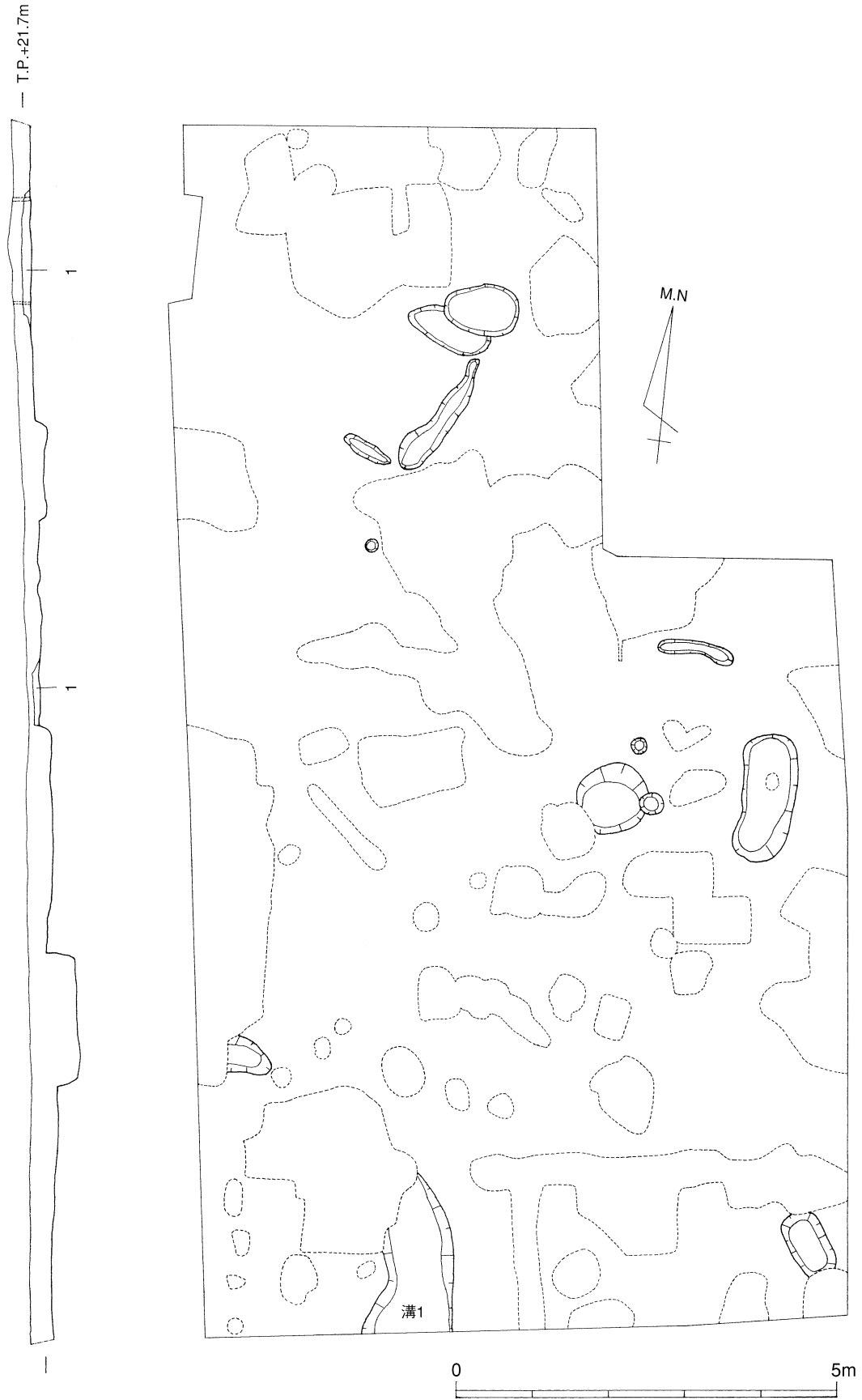
(1) 基本層序

今回の調査地は、基盤層上面までの深度が20cm程度と非常に浅く、旧建物の基礎掘削時の削平が著しかったため、基本層序の残存状況は



第99図 調査地位位置図 (1:5,000)

2. 調査の概要



第100図 調査区平面・断面図 (1 : 80)

極めて劣悪なものであり、その影響は基盤層(灰白色シルト)上面に及ぶものであった。よって、基本層序といえるような堆積状況はみとめられなかった

(2) 検出した遺構と遺物

先述の通り、調査区内は削平が著しくその影響は基盤層上面にまで及ぶものであったが、そのような中でも溝状遺構4条をはじめ、土坑状遺構5基、ピット3基などの遺構が確認されている。以下では、検出された遺構の概要について報告する。

溝 1 調査区南西端部において検出された。検出時の幅は0.85～1.25mをはかる一方で、深度は最深で5cm程度と非常に浅い。これは、溝が後世の削平を受けた結果、基底部付近のみがかるうじて残存したためとみられる。溝はゆるやかに湾曲しながら西側と南側にそれぞれ伸びていき、周回することが考えられる。その場合の推定直径は、内径約5.0m(外径7.4m程度)である。溝の埋土は灰黄褐色シルトの単一層であり、埋土中からの遺物は未確認であった。したがって、溝1の時期については特定できなかった。

その他の溝(溝 2～4) 調査区北半部分において検出されている。幅は0.2～0.5m程度とばらつきがみられるが、深度はいずれも3～5cmに収まる。埋土は褐灰色でしまりの弱い砂質土であり、埋土中に微量ながら陶磁器や瓦器椀、須恵器などの細片が含まれる。これらの小溝は、今回の調査区の北方で実施された第45次、第46次調査で検出された小溝群と、埋土や規模などの特徴が共通していることから、溝2～4もこれらの小溝群と同様に近世以降の耕作にともなった可能性が高い。

土坑(土坑 1～5) 調査区の全域から検出されている。検出時における平面形は円形、楕円形、不整形円形など多少ばらつきがみとめられるが、深度はいずれも3～5cm程度におさまっている。埋土は褐灰色シルトに基盤層ブロックが若干含まれるものである。埋土中から遺物は確認されていない。

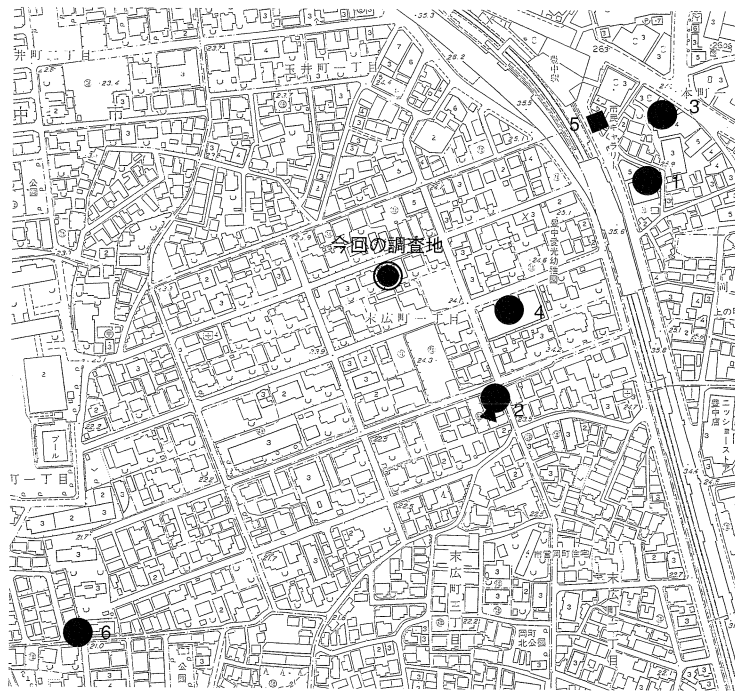
ピット(ピット 1～3) 調査区内では3基確認された。いずれも直径20～30cm内に収まり、深度も土坑と同様に5cm程度であった。埋土は褐灰色シルトに基盤層ブロックが若干含まれるもので、土坑埋土とほぼ共通する。埋土中からの遺物は検出されていない。

出土遺物 今回遺構にともなう遺物はほとんど出土していないが、現代の盛土中から須恵器大甕の体部や杯身の破片、瓦器椀などの破片が出土している。これらの出土によって、調査区およびその周辺においては古墳時代、および中世の遺構が存在する(した)可能性が高いものと言える。

3. まとめ

今回の調査では、遺構の残存状況が悪かったものの一定の成果を収めることができた。特に、今回の調査で検出された溝1は、推定直径が約5m(内径)の円周する溝であることが考えられ、

3. まとめ



第101図 新免古墳群位置図

これまでに新免遺跡において複数の古墳が確認されていることを踏まえると、溝1も古墳の周溝としての可能性が考えられる。そこで、以下では溝1が古墳の周溝である可能性について検討を行なってみたい。ただし、各古墳とも主体部については削平を受けて遺存していないことから、今回は必然的に規模や、周溝埋土の特徴からみた推察にとどまることを断わっておく。なお、古墳の墳丘規模は周溝内径に一致する。

現在のところ、新免遺跡南東部、および山ノ上遺跡一帯において、少なくとも6基の古墳が確認されており(第101図)、今回の調査地はその一角にほぼ相当すると考えて差し支えなかろう。次に、古墳の規模については(第1表)、2号墳、5号墳を除いた円墳の直径は概ね15m前後に収まっている。周溝の幅も、不明な点の多い5号墳を除くと3m以上をはかる。今回の溝1は推定内径が約5mであり、最大の溝幅も1.2m程度に過ぎず、他の古墳と比較してもかなり小規模であることがわかる。続いて埋土の特徴については、溝1にはぶい黄褐色シルトの単一層で、埋土中から遺物は確認されていない。溝1同様に、埋土が単一層である事例は6号墳でみとめられるものの、6号墳は他の古墳と同じく埋土中から埴輪片が多数出土している。

以上の所見から、溝1は群中の古墳と比べて規模が非常に小規模であること、埋土中から古墳にともなう遺物が一切確認されていないことを考慮に入れる限り、古墳周溝である可能性は極めて低いと考えざるを得ない。よって、溝1の総合的な判断については、周辺地域における類例との比較を密にしながら慎重に行っていく必要がある。

No	調査次数	墳形	墳丘規模	周溝幅	出土遺物	溝埋土(上層/下層)	遺物時期
1	新免20次	円墳	直径13m	1.7~2.9m	埴輪・須恵器	黄灰色極細砂~シルト/褐灰色細砂	6世紀前半
2	新免24次	前方後円墳	全長23m	—	埴輪・須恵器	灰白色砂質土/灰黄褐色シルト	6世紀前半
3	新免30次	円墳	直径14m	5.5m	埴輪・須恵器	褐灰色極細砂/黒褐色極細砂~粘土	6世紀前半
4	新免32次	円墳	直径16m	約3m	須恵器	灰黄褐色細砂/灰黄褐色細砂~シルト	6世紀前半
5	新免36次	方墳?	—	約1.6m	埴輪・須恵器	にぶい黄色極細砂/灰黄褐色極細砂~シルト	6世紀前半
6	山ノ上14次	—	—	3.2m以上	埴輪	灰黄褐色粘土(単一層)	6世紀前半
溝1	新免58次	円墳?	円墳?	直径5m	なし	にぶい黄褐色シルト(単一層)	—

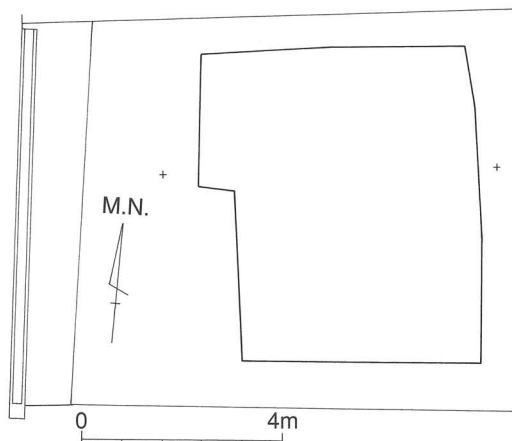
※溝埋土は各調査図面をもとに作成。

第1表 新免古墳群 各古墳の概要

第VI章 本町遺跡第28次調査

1. 調査の経緯

当該調査地は豊中市本町3丁目170の一部に所在する。建築工事に先だって確認調査を実施したところ、地表下約70cmのところ遺構面を検出した。遺構の損壊は避けられないことが判明し、協議を行った結果、平成15年(2003年)9月16日から平成15年(2003年)10月10日の日程で、40m²の範囲を対象として発掘調査を行う運びとなった。



第102図 調査範囲図 (1 : 150)

2. 調査の成果

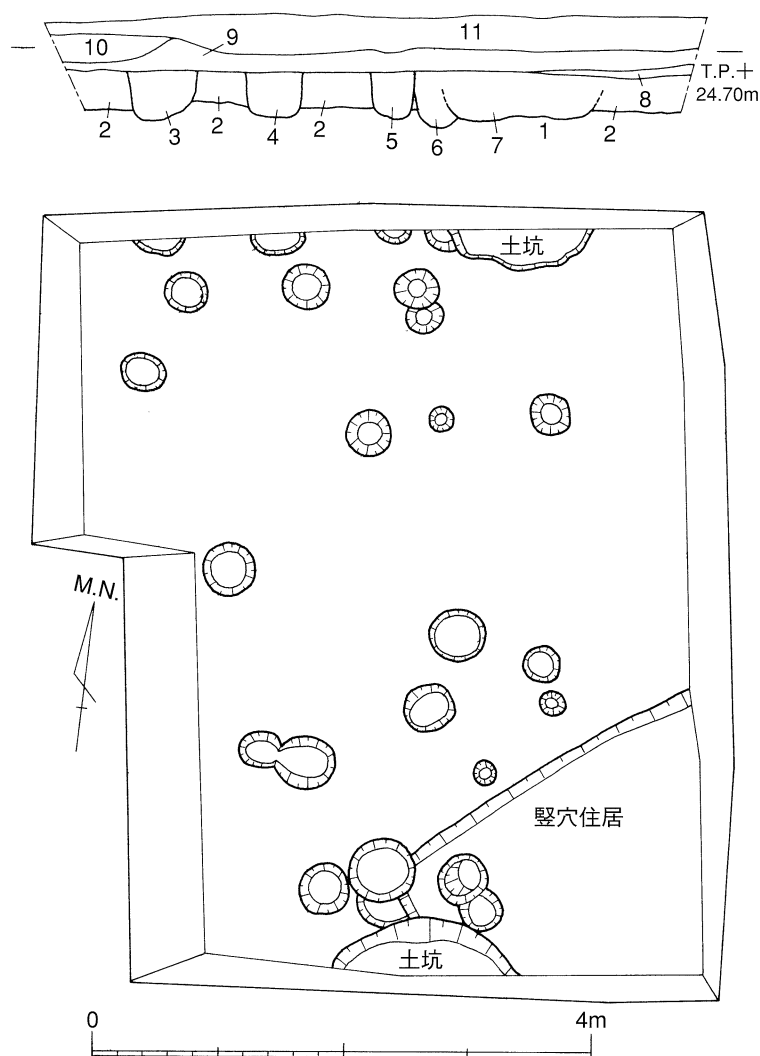
(1) 基本層序

当該調査地は、千里丘陵西部に位置し、千里川左岸の平坦な中位段丘面に立地する。調査区の基盤層はこの段丘堆積層の上部で、亜角～亜円礫を主体とした砂礫層及び黄灰色を呈するシルトの堆積層となっている。基盤層上には黒褐色～褐灰色系のシルト層が若干の遺物を包含し



第103図 調査地位置図 (1 : 5,000)

2. 調査の成果



1. 黄色 (2.5Y8/8) シルト (～極細粒砂)。土壌化し、黒色 (10YR2/1) を呈する部分もある。基盤層。 2. 黒褐色 (10Y2/2) シルト (～極細粒砂)。遺物包含層。 3. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～極細粒砂)。ピット埋土。 4. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (～極細粒砂)。ピット埋土。 5. 黒褐色 (10YR3/2) シルト (～極細粒砂)。ピット埋土。 6. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。ピット埋土。 7. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト。比較的均質。土坑埋土。 8. 暗褐色 (10YR3/3) シルト (～細粒砂)。下位に2層ブロックを若干含む。 9. 2層と4層の混合層。 10. ぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂 (～極細粒砂)。 11. 盛土・整地土 (碎石含む)。

第104図 調査区平面・断面図 (1 : 60)

5mの規模を想定できる。竪穴基底面には主柱穴が重複して検出され、それぞれが直径約30cm、遺存した深さ約20cmを測る。出土遺物から6世紀後半の時期が考えられる。土坑状の遺構は各々性格が不明だが、南側のものは住居より新しく、7世紀代の所産である。

3. まとめ

当該調査地周辺は、既往の調査を含めて古墳後期の竪穴住居・掘立柱建物が密集する地域である。桜井谷窯跡群の消長との有機的な関わりが示唆される地域でもあり、今後、周辺での調査の進展により、古墳後期の集落の実態が明らかになることを期待したい。

て堆積し、断面観察によると、ほとんどの遺構がこの遺物包含層上面より掘削されている。また、調査区の南側では基盤層上に黒褐色系の堆積層があり、現時点では調査地の南側に小規模な谷地形が存在するものと考えている。

(2) 検出した遺構

調査区では方形の竪穴住居1棟と主柱穴、掘立柱建物を構成する柱穴群(約23基)と浅い土坑等を検出した。

竪穴住居は、遺存した深度約20cmを測る。調査区隅で検出されたため全体の規模は把握できなかったが、周辺の事例から一辺約4～

第Ⅶ章 確認調査の成果

確認調査の概要

昨年度1月～3月および今年度4月～12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は、24件を数え、昨年度2件、今年度22件という内訳である。このうち、2件の調査で遺構等が確認されたが、建物の基礎掘削深度が遺構検出面に及ばなかったことなどから、本格的な発掘調査には至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第105図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第2表 確認調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査原因	調査対象面積 (㎡)	遺構の有無	調査後の処置	担当者	備考
1	新免遺跡	立花町1丁目32-6	20030213	個人住宅建設	61.65	無	着工	清水	
2	新免遺跡	立花町1丁目32-6	20030213	個人住宅建設	61.65	無	着工	清水	
3	曾根東遺跡	曾根西町1丁目137-3	20030410	個人住宅建設	45.13	無	着工	橋田	
4	曾根東遺跡	曾根西町1丁目137-2	20030410	個人住宅建設	84.46	無	着工	橋田	
5	岡町北遺跡	岡町北3丁目31	20030410	個人住宅建設	91.92	有	再立会后、着工	橋田	
6	桜井谷窯跡群	上野西3丁目61-14	20030417	個人住宅建設	80.70	未確認	着工	陣内	
7	蛭池北遺跡	蛭池北町3丁目16-5	20030424	個人住宅建設	166.85	無	着工	陣内	
8	小曾根遺跡	北条町1丁目317-6の一部	20030509	個人住宅建設	47.25	未確認	着工	陣内	
9	桜塚古墳群	南桜塚1丁目222-5	20030529	個人住宅建設	89.85	無	着工	服部	
10	本町遺跡	本町3丁目64	20030612	個人住宅建設	116.32	無	着工	橋田	
11	曾根南遺跡	曾根南町2丁目1003-10	20030703	個人住宅建設	35.66	未確認	着工	陣内	
12	桜塚古墳群	南桜塚2丁目68の一部	20030710	個人住宅建設	55.05	無	着工	陣内	
13	桜井谷窯跡群	東豊中町3丁目187-2	20030807	個人住宅建設	85.42	無	着工	陣内	
14	山ノ上遺跡	宝山町81-7,8	20030904	個人住宅建設	75.33	無	着工	清水	
15	少路遺跡	春日町1丁目9-1の一部	20030904	個人住宅建設	47.61	未確認	着工	清水	
16	新免遺跡	末広町1丁目64-1	20030918	個人住宅建設	157.25	無	着工	橋田	
17	鳥田遺跡	庄内栄町1丁目16の一部	20030926	個人住宅建設	80.53	未確認	着工	陣内	
18	小曾根遺跡	北条町1丁目311-1	20031009	個人住宅建設	53.15	未確認	着工	陣内	
19	新免宮山古墳群	本町7丁目36-1	20031009	個人住宅建設	42.57	未確認	着工	陣内	
20	少路遺跡	春日町9-1の一部	20031016	個人住宅建設	84.24	無	着工	橋田	
21	原田遺跡	曾根西町4丁目199の一部	20031016	個人住宅建設	61.54	有	再立会后、慎重工事	橋田	
22	柴原遺跡	柴原町2丁目37-5	20031112	個人住宅建設	44.15	無	着工	清水	
23	山ノ上遺跡	宝山町151の一部、151-2,3	20031218	個人住宅建設	77.84	未確認	着工	陣内	
24	桜塚古墳群	南桜塚3丁目8-3	20031225	個人住宅建設	73.70	無	着工	清水	



第105図 確認調査地点位置図(1:50,000)

2003-01 新免遺跡

調査日：平成15年(2003年)2月13日

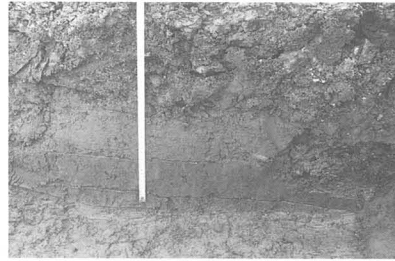
調査場所：豊中市立花町1丁目32-6

調査対象面積：61.65㎡

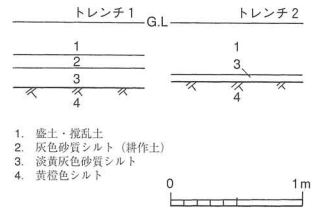
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2でそれぞれ地表下50cm・45cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第106図 トレンチ掘削状況



第107図 トレンチ断面図

2003-02 岡町北遺跡

調査日：平成15年(2003年)2月27日

調査場所：豊中市岡町北2丁目25-2

調査対象面積：56.92㎡

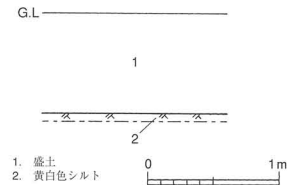
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下76cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第108図 トレンチ掘削状況



第109図 トレンチ断面図

2003-03 曾根東遺跡

調査日：平成15年(2003年)4月10日

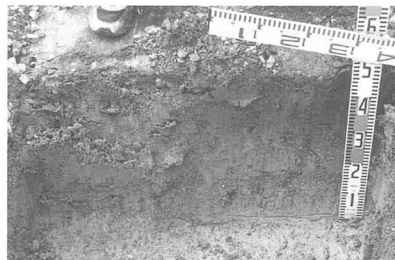
調査場所：豊中市曾根西町1丁目137-3

調査対象面積：45.13㎡

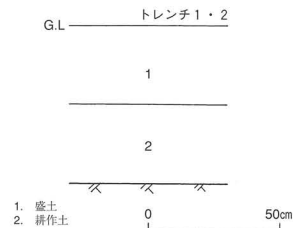
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下60cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第110図 トレンチ掘削状況



第111図 トレンチ断面図

2003-04 曾根東遺跡

調査日：平成15年(2003年)4月10日

調査場所：豊中市曾根西町1丁目137-2

調査対象面積：84.46㎡

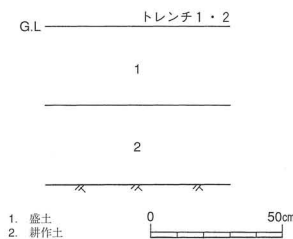
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下60cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第112図 トレンチ掘削状況



第113図 トレンチ断面図

2003-05 岡町北遺跡

調査日：平成15年(2003年)4月10日

調査場所：豊中市岡町北3丁目31

調査対象面積：91.92m²

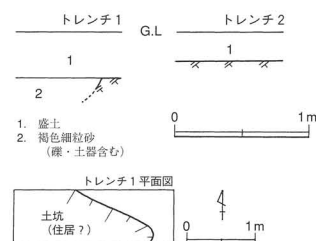
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下35cmにおいて土坑1基を検出した。トレンチ2では、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：掘削深度変更により、再立会の上、着工を指示。



第114図 トレンチ掘削状況



第115図 トレンチ平面・断面図

2003-06 桜井谷窯跡群

調査日：平成15年(2003年)4月17日

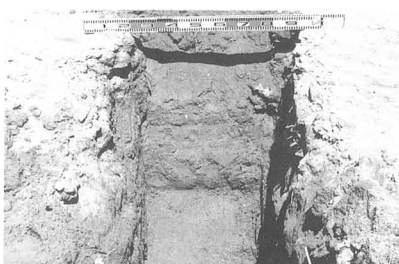
調査場所：豊中市上野西3丁目61-14

調査対象面積：80.70m²

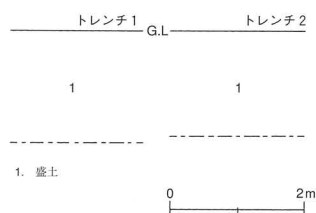
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度(地表下160~170cm)内においては、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第116図 トレンチ掘削状況



第117図 トレンチ断面図

2003-07 蛭池北遺跡

調査日：平成15年(2003年)4月24日

調査場所：豊中市蛭池北町3丁目16-5

調査対象面積：166.85m²

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下45cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第118図 トレンチ掘削状況



第119図 トレンチ断面図

2003-08 小曾根遺跡

調査日：平成15年(2003年)5月9日

調査場所：豊中市北条町1丁目317-6

調査対象面積：47.25m²

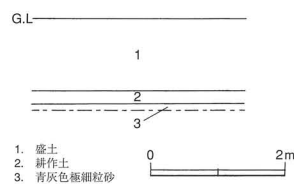
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下140cm)内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第120図 トレンチ掘削状況

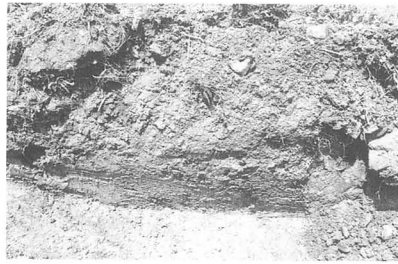


第121図 トレンチ断面図

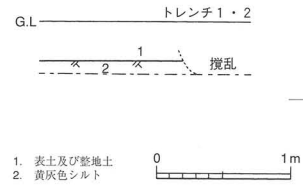
2003-09 桜塚古墳群

調査日：平成15年（2003年）5月29日
 調査場所：豊中市南桜塚1丁目222-5
 調査対象面積：89.85㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下30cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第122図 トレンチ掘削状況

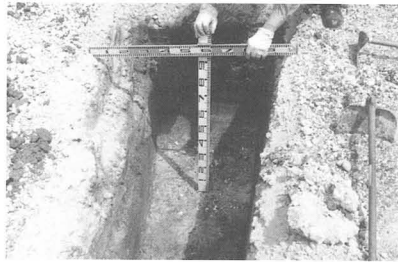


第123図 トレンチ断面図

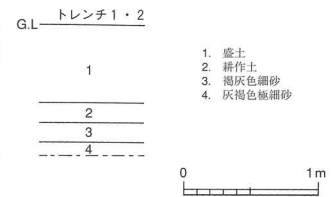
2003-10 本町遺跡

調査日：平成15年（2003年）6月12日
 調査場所：豊中市本町3丁目64
 調査対象面積：116.32㎡

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度（地表下100cm）内においては、遺構・遺物等は確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第124図 トレンチ掘削状況

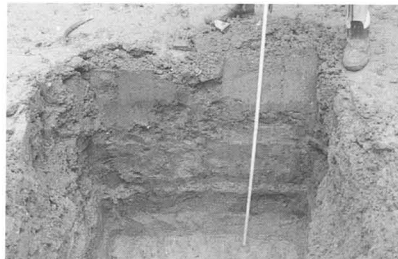


第125図 トレンチ断面図

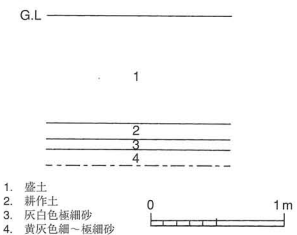
2003-11 曾根南遺跡

調査日：平成15年（2003年）7月3日
 調査場所：豊中市曾根南町2丁目1003-10
 調査対象面積：35.66㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：掘削深度（地表下114cm）内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第126図 トレンチ掘削状況



第127図 トレンチ断面図

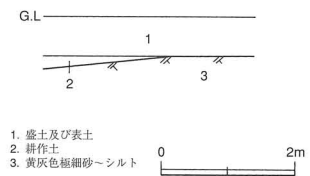
2003-12 桜塚古墳群

調査日：平成15年（2003年）7月10日
 調査場所：豊中市南桜塚2丁目68の一部
 調査対象面積：55.05㎡

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：地表下60～80cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第128図 トレンチ掘削状況



第129図 トレンチ断面図

2003-13 桜井谷窯跡群

調査日：平成15年(2003年)8月7日

調査場所：豊中市東豊中町3丁目187-2

調査対象面積：85.42㎡

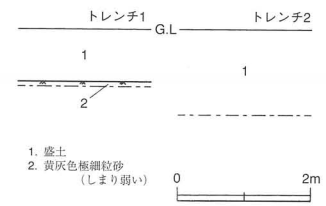
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1では地表下80cmで基盤層を検出、トレンチ2では地表下130cmまで掘削したが、遺構・遺物等確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第130図 トレンチ掘削状況



第131図 トレンチ断面図

2003-14 山ノ上遺跡

調査日：平成15年(2003年)9月4日

調査場所：豊中市宝山町81-7,8

調査対象面積：75.33㎡

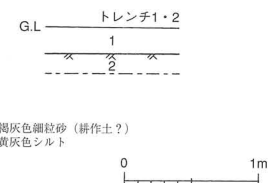
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下20cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第132図 トレンチ掘削状況



第133図 トレンチ断面図

2003-15 曾根南遺跡

調査日：平成15年(2003年)9月4日

調査場所：豊中市春日町1丁目9-1の一部

調査対象面積：47.61㎡

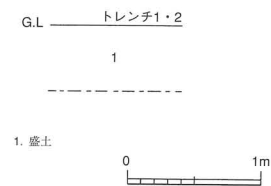
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度(地表下50cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第134図 トレンチ掘削状況



第135図 トレンチ断面図

2003-16 新免遺跡

調査日：平成15年(2003年)9月18日

調査場所：豊中市末広町1丁目64-1

調査対象面積：157.25㎡

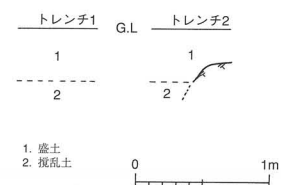
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下40cmまで掘削したものの、既存の建物基礎による破壊が著しく、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第136図 トレンチ掘削状況



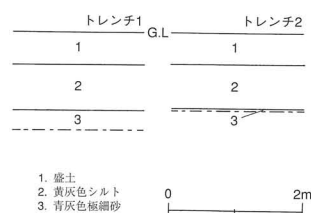
第137図 トレンチ断面図

2003-17 島田遺跡

調査日：平成15年(2003年)9月26日
 調査場所：豊中市庄内栄町1丁目16の一部
 調査対象面積：80.53㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：トレンチ1・2ともに掘削深度(地表下150cm)内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



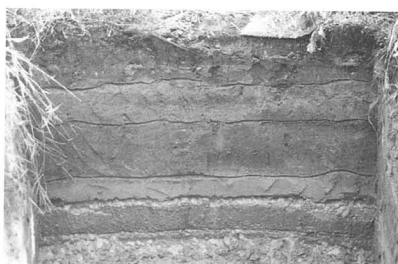
第138図 トレンチ掘削状況



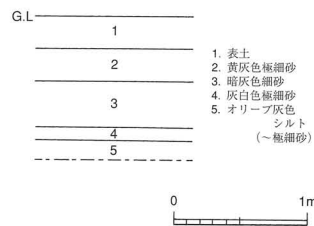
第139図 トレンチ断面図

2003-18 小曾根遺跡

調査日：平成15年(2003年)10月9日
 調査場所：豊中市北条町1丁目311-1
 調査対象面積：53.15㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：掘削深度(地表下110cm)内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第140図 トレンチ掘削状況



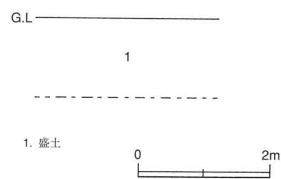
第141図 トレンチ断面図

2003-19 新免宮山古墳群

調査日：平成15年(2003年)10月9日
 調査場所：豊中市本町7丁目36-1
 調査対象面積：42.57㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：掘削深度(地表下120cm)内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



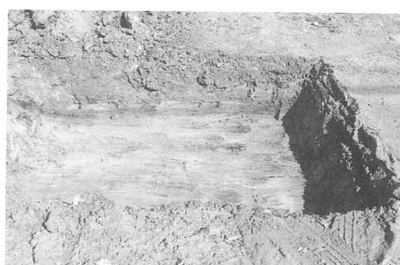
第142図 トレンチ掘削状況



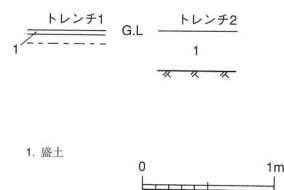
第143図 トレンチ断面図

2003-20 少路遺跡

調査日：平成15年(2003年)10月16日
 調査場所：豊中市春日町1丁目9-1の一部
 調査対象面積：84.24㎡
 調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
 調査の概要：トレンチ1・2でそれぞれ地表下3cm・30cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。
 調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第144図 トレンチ掘削状況



第145図 トレンチ断面図

確認調査 (2003-21~24)

2003-21 原田遺跡

調査日：平成15年(2003年)10月16日

調査場所：豊中市曽根西町4丁目199の一部

調査対象面積：61.54㎡

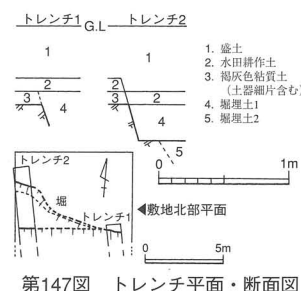
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ1・2ともに地表下50cmにおいて褐灰色粘質土(土器含む)、地表下60cmにおいて原田城(北城)の内堀を検出した。

調査後の処置：基礎掘削は盛土内に収まることから再立会の上、着工を指示。



第146図 トレンチ掘削状況



第147図 トレンチ平面・断面図

2003-22 柴原遺跡

調査日：平成15年(2003年)11月12日

調査場所：豊中市柴原町2丁目37-5

調査対象面積：44.15㎡

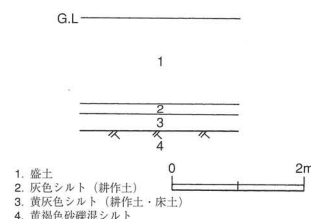
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下170cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第148図 トレンチ掘削状況



第149図 トレンチ断面図

2003-23 山ノ上遺跡

調査日：平成15年(2003年)12月18日

調査場所：豊中市宝山町151の一部,151-2,3

調査対象面積：77.84㎡

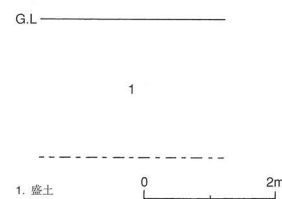
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度(地表下210cm)内においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第150図 トレンチ掘削状況



第151図 トレンチ断面図

2003-24 桜塚古墳群

調査日：平成15年(2003年)12月25日

調査場所：豊中市南桜塚3丁目8-3

調査対象面積：73.70㎡

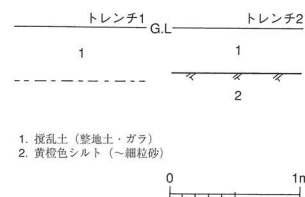
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2において地表下34cmで基盤層を検出したが、トレンチ1とともに遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第152図 トレンチ掘削状況

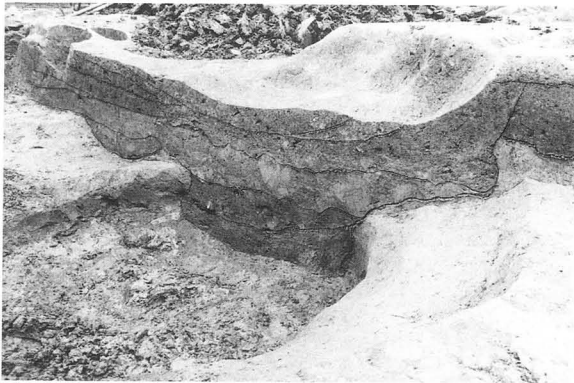


第153図 トレンチ断面図

圖 版



(1) 1区全景 (北から)



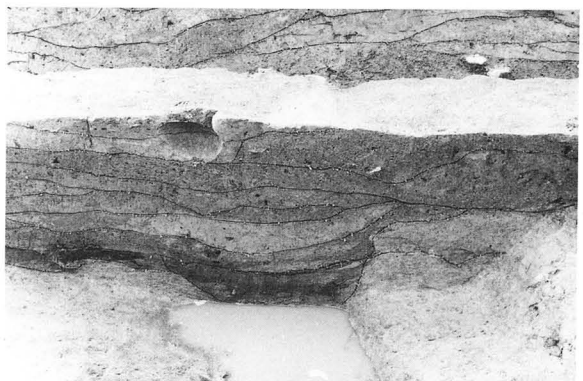
(2) 井戸1断面



(4) 区画溝3 遺物出土状況



(3) 井戸2断面



(5) 区画溝1断面



(1) 土坑6 遺物出土状況



(2) 土坑10断面



(3) 土坑8 遺物出土状況



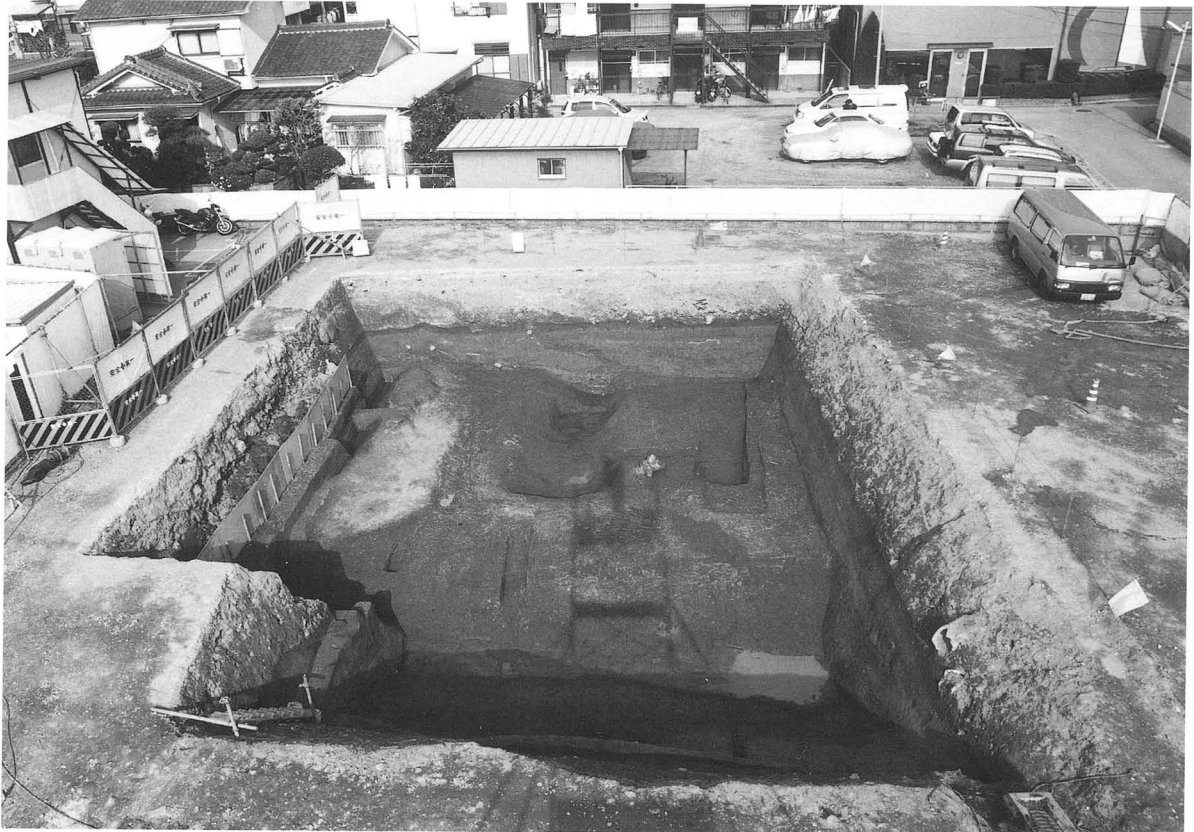
(4) 土坑8 遺物出土状況 (部分)



(1) 土器集積遺構全景 (※遺構内外の河原石は礎石)



(2) 土器集積遺構 (部分)



(1) 2区全景 (南から)



(2) 水路2断面



(1) 水路1全景



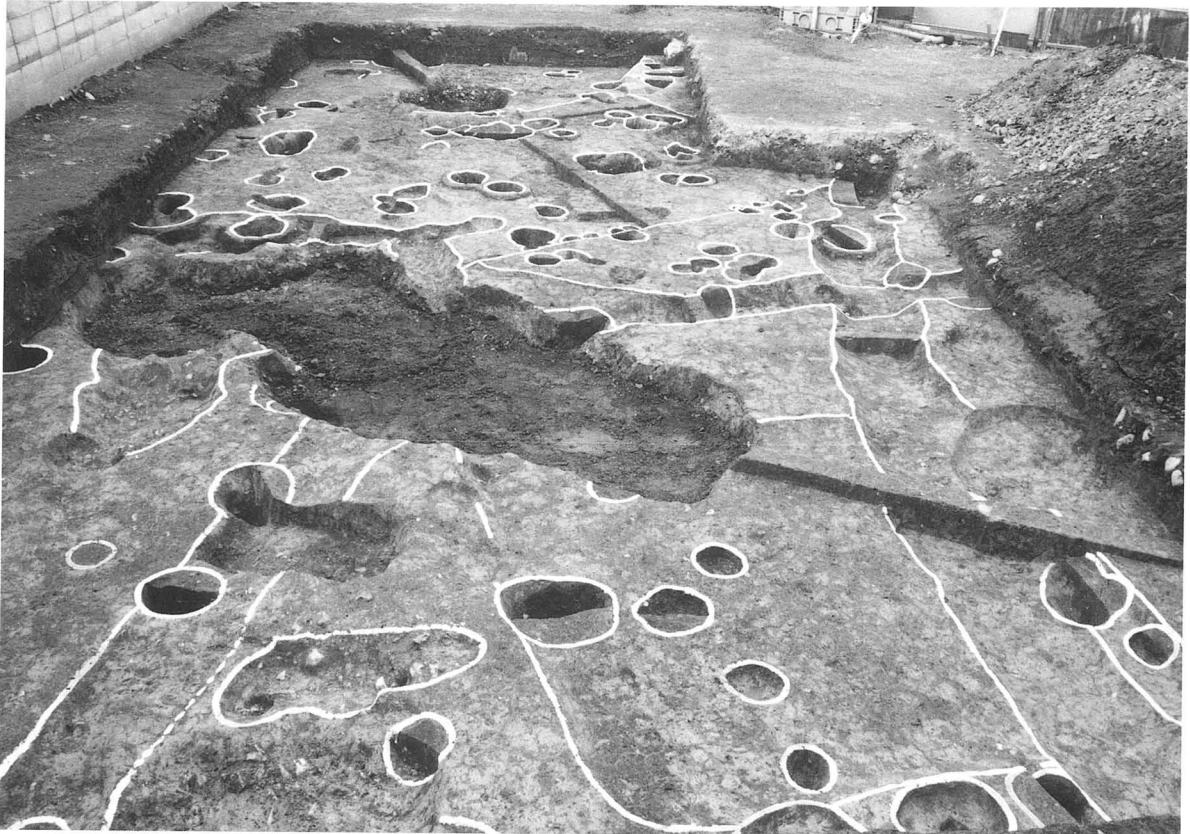
(2) 水路1断面



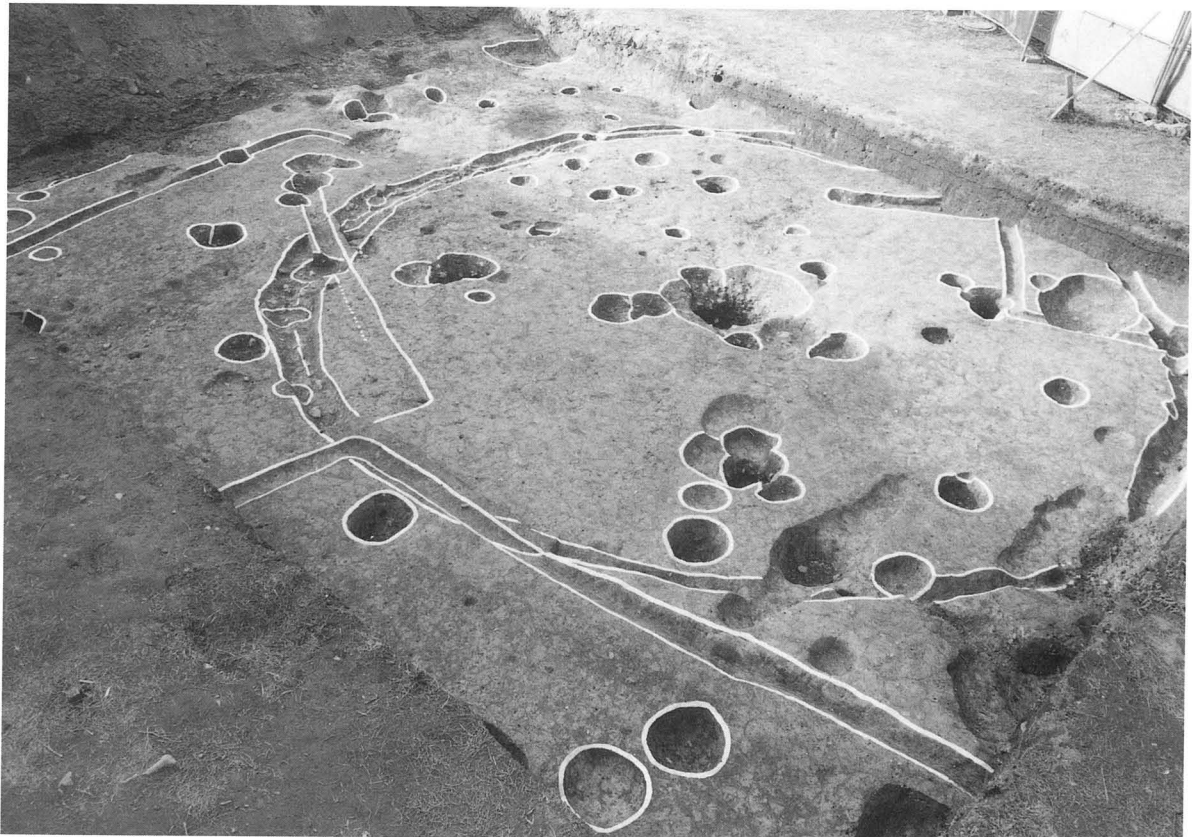
(1) 水路3 遺物出土状況



(2) 水路3 全景



(1) 調査区西半部全景 (南から)



(2) 調査区東半部全景 (南東から)



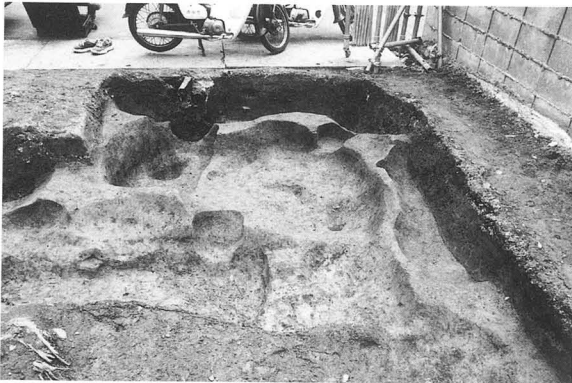
(1) 調査区南壁 断面 (東半部)



(2) 竪穴住居 6 炉跡断面 (東から)



(1) 調査区全景 (北から)



(2) 調査区南部全景



(4) 土坑1-1断面



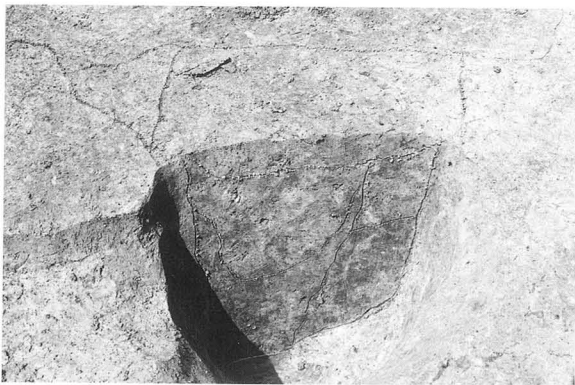
(3) 調査区南部遺構掘削状況



(5) 土坑1-3断面



(1) 建物1全景



(2) 柱穴1断面



(3) 柱穴2断面



(1) 遺構検出状況 (南から)



(2) 溝 1 検出状況 (北東から)